

裏窓



11月号

80円

裏窓

戦慄犯罪特集号

11

昭和二十一年十一月七日 日本国政府検定官検定第三〇三三号 表紙 第一巻第七号昭和二十一年十一月一日発行（毎月一回）日発行

定価80円

IBM 1807

あまとりあ
講談文庫

田之助色ざんげ

座光寺

竜 価二二〇円
千二四円

ある夜は宿下りの御殿女中に買われて執拗な愛慾に溺れ、ある夜は煩悩の犬と化した僧の枕席に侍って痴戯に狂いながらも、その情獄の底から男女愛恋のいのちを吸いとり芸道修業の一筋に生きようとする名女形の姿。その他、愛怨狂い蝶・紅筆いろ地獄・妖艶夜嵐草紙など五篇収録。

あまとりあ
講談文庫

艶石川五右エ門

宇治川

竜 価一〇〇円
千二四円

なにしろニンジツてえのは便利なもんで、ドロンと九字さえ切れば忽ち姿が見えなくなるんだからスカートをまくろうとポケットに手をつっこもうとお望み次第。これを活用？した太陽族の大先輩ミスター・ゴエモン立志伝のおソマツ。その他、珍説弓削道鏡・ちんぴらの助六など十三篇収録。

国際肉
市場

狂い咲く女群

戸山一彦

価二二〇円
千二四円

第一部ニッポン嬢情艶録は米軍基地立川に妖しく乱れ咲く夜の仇花彼女達の生態と狂態を克明に追究した異色ルポ篇!!加えて第二部駐留軍將兵犯罪秘録は終戦当時通訳として活躍した筆者が見聞した、兇悪無惨な駐留軍將兵の犯罪実話集。占領軍という虎の威をかりた彼等の非行を衝く興趣篇発売中!!

旅は異なもの

風流膝栗毛

高橋晋

価一三〇円
千二四円

むずむず旅からはじまって、お次はくすくりにや、り旅、お色気たっぷり練れ練れ旅、湯もじ旅からおい旅に終るとい、日本名物温泉巡りは旅のお話し集!!各地各様の湯場地帯の珍談奇談特談など、エロエロとりまぜて筆のゆくまま気のむくまま読者を御案内しようという珍趣向。目下発売中!!

東京都中野区江古田町1の2302
振替・東京10756(久保書店宛)

株式会社 あまとりあ社

性問題の研究

第一流の執筆陣を網羅した
日本でただ一冊の専門誌!!

第12号 近日発売

特集 “新しい家族計画の動向”

¥ 90
= 8

次の世代の健全な育成は、現代の社会人が、この性の問題に正しい理解を持つかが否かにかかっているのです。

男性手術メ・モ(輸精管結紮手術の方法)……金子栄寿
卵管角手術の実際(女性避妊手術の方法)……安井修平

中絶の影響と失敗の教えるもの……森山 豊

バス・コンの方法例と具体的説明……高口保明
新しい避妊薬研究の動向……青木尚雄

人々は性不満をこのように訴える……古沢嘉夫

山手夫人のバスコン受入れ態度はこうだ……奈良林 祥
戦後十年の家族計画はどのようなになったか……篠崎信男

炭礦の主婦の目指す明るい性生活……藤本正雄

欧米における家族計画の歴史の変遷……寺尾琢磨
不妊症と人工授精……高島達夫
其の他・アンケート・研究記事・探訪記事・調査解説満載

会 われ等かく戦えり (産制普及運動とその苦心談……)

座 談
——加藤シズエ——太田典礼——
——山川菊栄——馬島 憐——
(司会)谷 内 辰 樹——

東京都中野区江古田1の2302 株式会社
振替・東京 10756・TEL (38) 1388・6980

久保書店

一月生れ	お ともね所で飛んだ人に逢って焼けばくいに火がつく事になる。金銭は多少でる様になるが相当に楽しめる。但し懐に注意しないとんだ事になる。へそくりは今月ばれる故注意
二月生れ	や まの神との間はうまく行ってますか?今月はどうも一嵐ありそうな気配がみえる。わずかな金で一寸おさまる故早速しにやる事。大事は小事よりの輸送の通りポケットに注意の事
三月生れ	可 愛い・あの娘からの手紙がくる。苦今からお遊びの手定をなてるのもよいだろう。但し文書の難がある故に手紙の仕来には念を入れる事。費用の捻出は東方の年増に相談してみるべし
四月生れ	つ まらぬきそいは断然ことわる事。安物を買ってベニシリシヨックに気をやまねばならぬ。それより赤色に縁のある月故赤い帽子赤いスカート赤い靴の女にプロポーズしてみる事
五月生れ	間 男見つけた重ねておいて四つ!!の災に逢う故心当りのある人は逃げ路を考えておく事。但し金曜日は無事平安にすごせるから狙うならこの日になす事。大や猫には気をくばるべし
六月生れ	金 は天下の廻り物くよくよしなないこと。たまに彼女に借金を申し込んでみるのもよい。貴方に対する彼女の愛情の度がはかれるというもの。案外とんだ風船敷のお菊になるかもしれぬ
七月生れ	油 断していると急に油揚げをやられる事がある。ねらった彼女には一押し二押し三押しのコッパでがんばる事この月生れはオーバールが誕生石ゆえ彼女に逢う時に身につけていくとよい
八月生れ	失 敗が重なる月ゆえおとなしくしている事。へたな色気を出すと後々までも身にひびくことになる。特に三角形に注意しなければならぬ。一方に偏せず衆を受さなければ災害積出す
九月生れ	チ ヤンスの月。通二無二に進むべし。彼女は貴方のプロポーズを今か今かと持っている。但し今月は黒色に注意。黒ネクタイなどの男がいたならばそれが貴方の恋敵となるであろう
十月生れ	一 歩前進一歩後退の戦法でいくべし。最後の勝利は貴方のものとなる。この道ばかりは一筋でいかぬと心得てあせらずにやる事。三と七の数が吉ゆえこの数の日を上手に利用するとよい
十一月生れ	あ きらめなさいこの色事は。あなたには縁のないもので相手にはチャンスとした人が居る。どうしても譲りきれない時は三年三ヶ月待つとよい相手の男にきつとこの時に隙が出来る
十二月生れ	金 銭には縁があるがどうも女の子がともなわないのが玉に傷。あせってもあきらめてもいけない。ひよっとすると四と九のつく日に思わぬ拾い物があるかもしれぬ。但し年下には注意



生れ月で見る 今月の風流運勢



裏窓 (十一月号) 目次

生れ月で見る今月の風流運勢——夏爐山人 (一三)

オフセット口絵 世界裏窓風流譚……………編集部・編 (一二)

女優のメスで切られた撮影所 女医サマは怖い!!…大鷹五郎 (四六)

江戸川堤 岨られた秋祭……………荻原秀夫 (三八)

美人死体 秋祭りの夜、着がせた美女が行方不明となった! 名刑事の捕縛は犯人を追う!

外人牧師 殺害事件 寝室の怪盗……………瀬戸口寅雄 (三七)

名牧師キヤンベル氏の寝室に侵入した怪盗の兇行!

強殺事件 兇魔の触手……………久木高志 (五三)

立川市に起った外人兵の兇悪犯罪! 恐るべき二人組は如何に暴走したか!

荒川土堤 謎の質札……………瀬木敏郎 (六八)

街娼殺し 荒川土堤に横たわった女の死体! 第二の出演者と云われた男の妖術の兇行!

東西裏窓艶色小咄……………原比露志 (二九)

誌上 防犯映画の夕……………編集部・編 (二三)

表紙 紙・美濃村晃

目次カット・明石三平

裏窓から 覗いたへんてこ日記

青宋居日記……………平野威馬雄 (二七)

挿絵・カット 浜田 稔・中畑春雄・都築繁子

秋吉 樹・古正英男・喜多玲子

道玄坂美容師殺し……………戸部春光 (七六)

愛欲秘譚 信じ切った女に裏切られた果の嫉妬の兇行。柔肌を血に染めて情痴の影は閉ざれる

狂った妖塔……………杉山清詩 (八四)

異色スリラ 推理小説 不気味な妖塔に住む狂った男女。色情性妄想の妹と結婚する偏執狂の兄。そして兇悪のない殺人

賭博にされた女……………富永洋介 (一〇三)

真探偵記 インチキ賭博に引かれた美しい人妻は、その柔肌まで投げ出さねばならなかった!

血まみれの情鬼……………宮下文作 (一一三)

街の淫獣 病室に野を犯されて、血を吐きながら女を搾取する情鬼の末路は悲惨だった。

覗き見た女妖……………前田 勇 (一二二)

異奇夜話 覗き見た女体の豊満な肌は、これはまた妖しげなものが……

邪魔者は消される……………結城 惣 (一三二)

性的犯罪 二組の夫婦と一人の少女が入り乱れてかもし出す不倫の愛憎! そして邪魔者は消されてしまうのだ!

裏窓 随筆 ちゃん友記……………NHK声優 高梨 久 (一七四)

伝奇小説 駿河大納言秘帳……………岩堀泰三 (一八二)

白狼の檻の中に探影のままだけ込まれた由起の運命は?

あなたの名前は人を殺さないか?……………金素道人 (六二)

殺人犯の名前を分析すると罪を犯すのは必然だと云うことが判る。さてあなたの場合は?

帝国海軍桃色暗号解読さる!……………宇佐美正夫 (九八)



本誌独占 公判秘録

『裏窓夫人』殺人事件……………編集部・編

好奇心に悶える思春期青年と、夫に不満を持つ爛熟期の人妻が、一枚の春面をきっかけに織り出した妖しい情痴絵巻の果ての破局。これは戦後の特異な性的犯罪の一つだが、そのデータを余すところなく提出して、その批判は読者に委せる。



日
那
起
す

微笑・苦笑

お色気たっぷり
奇想天外

あまとりあ 講談文庫 愈々登場!

好齊まん遊記
近世毒婦伝
艶説六文銭軍談
情艶おんな絵草紙

水戸黄門を気取った好色老人水戸好齋が子供の助造とお色気求めて諸國歴女試合に及ぶという、現代的なユーモアを交えて贈る異色の珍講談! 目下発売中!

四人の毒婦をとらえて、そのムンムンするなまめかしさと不気味さを生かして語る悪の女群! 江戸末期から現代に至るあわれはかなき日かげの花びらたち! 発売中!

大坂夏・冬の陣といつても、実はお色気大合戦! 天下の助平・好色好みの豪傑がここを先途と関東・関西の二手に別れ、自慢の槍をしいて争うというザン講談集!

之はまた美女揃いの講談集、あまたの美人・毒婦が、艶をきそつて、読者を魅了しようという趣向です! 一説ニヤリ、目尻が下りにはなしになつても責任はもちませんぞ

座間五郎 価一三〇円
西尾富岳 価一三〇円
座間五郎 価一二〇円
神田越山 価一二〇円

くわしい解説付きの図書目録や新刊案内を御希望の方はハガキで御申込み下されば無料でお送りします。



テマヒマ
いらぬ!!



譚 滾 風 容 裏 音

夜釣りは悪い？

なにしろ由美子さんときたら、海岸に流れたクラゲを見て「アラ、温泉マークが泳いでるわ」なんて平気で云うカマトト娘。それが珍しく一日中部屋に閉じこもっているのも、感心した母親がお菓子を持って行くと、母親の方が赫くなるような本を熟読中という調子です。そこで仕方なく「家にはかり居ないで、外の健康な空気を吸っていらつしやい」と、外出を許したところ、夜になつても帰つてきません。「どこまで心配をかける娘だ」



— (日 本) —

と案じていますと、やがて警察から電話で「お宅のお嬢さんを保護している」と知らせてきました。ビックリしてかけつけた母親が「まあ、由美子や、一体どこへ行つていたの？」とキツ問しますと、ケロリとした由美子さん「ママ、あたしは何にもしないわヨ、あんまりい、夜だから、ボーイ・フレンドと夜釣りに行つただけなの。それで、濡れ竿をかついでいたら、お巡りさんにつかまつたのよ」と云いましたとサ。



新聞記事の罪

先日の某紙に、さるバーの若い女給さんが、月のうち一夜だけは異性なしでは過されないという奇病(?)にかかり、夜だけはソツとS駅西口のスマートボール店の前に立つという話があり、これを読んでハリキッタのが花下長兵衛さん。新聞記事の日付から計算してその日に当る夜のこと。会社の重役らしい立派な格幅のよい押出しで、問題の地点へ出向いて行きました。なるほど、それらしい若い女性がいます。「新聞記事にウソはない」と花長さん、それとなく小当りに当たってみると、モジ／＼

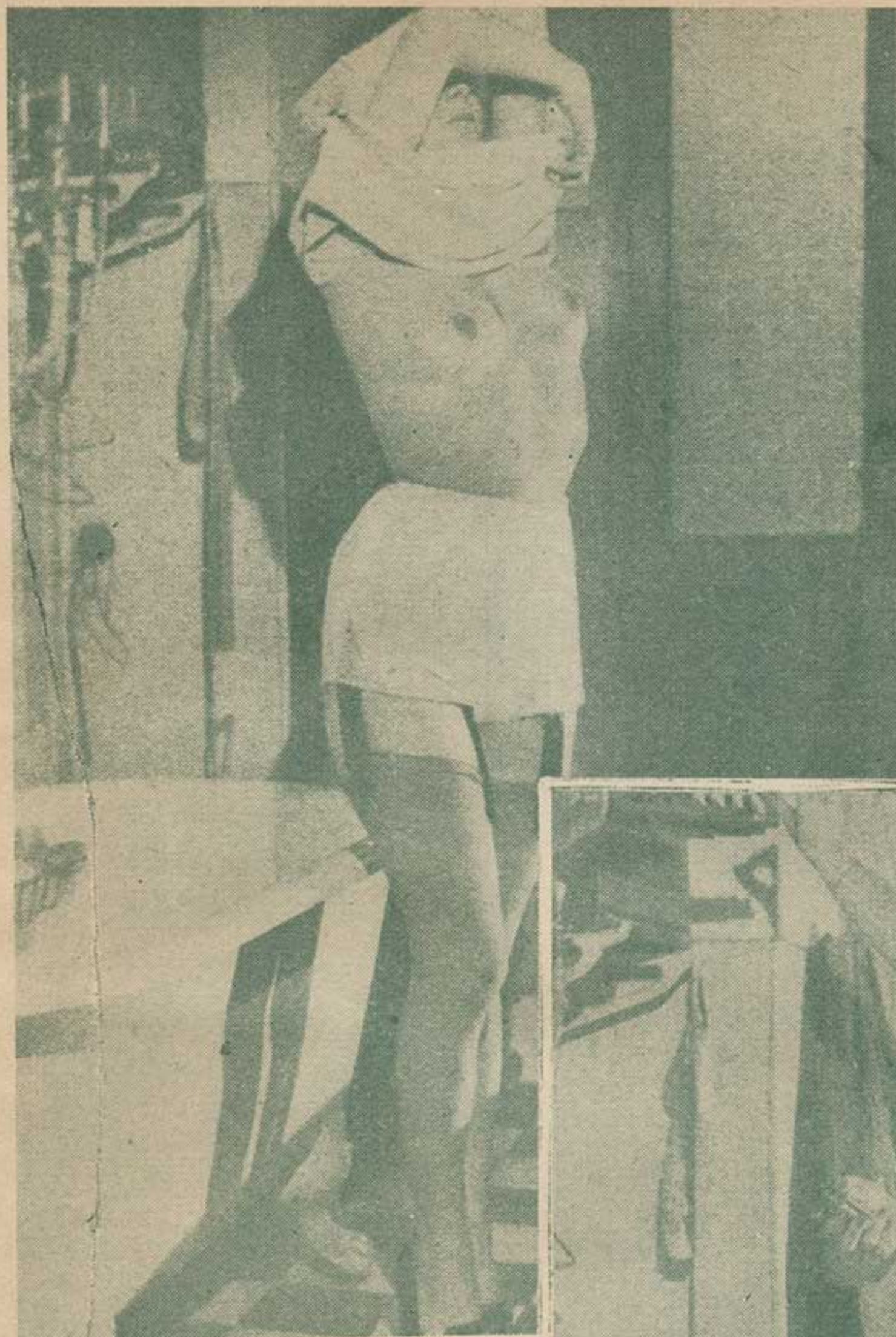


— (日 本) —

するばかり。「いよ／＼本ものだ」と尻込みする彼女を日頃の手腕にもものいわせ、ついにクラゲ・マークへ同行ということになりました。ところが、その女性たるや部屋に入るとうつて変ったツワモノ振りを発揮するので、呆れた花長サン「君はあの新聞記事の女性じやろ?」と念を押してみると、彼女はセ、ラ笑つてこう云いました「あたしもあの新聞を読んだのでやつてきたのよ」

第三の男がいた

風光明媚なヴェスピア火山探勝に遙々と海を越えてやつてきたアメリカの青年実業家、ジャッキイとダニイは、ナボリのホテルに宿を取りました。二人共いづれ劣らぬ好きもの同志。ロビイで知り合つた豊麗なマダムにゾッコン。それ／＼こつそり当りをつけますと美しいマダムは何と思つてか、それ／＼にOK。ジャッキイは十四号室、ダニイは十五号室でと約束をしました。美しいマダムを胸に描きながら夜を待つ兩人。やがてジャッキイ



— (イタリア) —

が出かけようとするマダムの部屋に男の声暫く待つて、もう用事が済んだらうとノックしますと中からマダムの甘つたるい声で「まつてエ、もう少しよ」畜生！出し抜かれたわいと口惜しがるジャッキイ。しかしダニイの方も同じ目に逢わされたのでありました。マダムの相手が、お気に入りのおーイと知らない二人、翌朝互いに顔をつき合わせるなり、同時に「おいッ、ゆうべは、俺を出し抜いて旨くやりやがったな……」

まさに推理的

善良な旦那様ノエル氏を送り出したあと、浮気なレナ夫人はシャル、青年を引ッ張り込んで、これからという段になつたとき、玄関のベルを鳴らす者があります。この時、レナ夫人すこしも騒がず、逃げ支度をするシャル、を押入れに隠して、玄関へ出てみますと、これが何と情夫第二号のモーガン青年。そこで、今日はユックリ二人分愉しもうと情熱をたぎらせた夫人が、モーガンとまたもやもやし、かつたところ、こんどはまさしく帰つてこない筈の旦那サマの靴音。ギョツとしたモーガンがまご／＼して



— (フランス) —

いますと、レナ夫人は落着いて「いゝからピストルを射つて裏口から逃げなさい」といゝますので、青年がその通りにして逃げ出していきました。射撃の音に驚いた旦那に「一体どうしたんだ？」と訊かれたレナ夫人は、ニッコリ笑つて、押入れからシャル青年を出して紹介し「この方が町のグレン隊に追われて逃げて来たので匿まつてあげたのよ。グレン隊はピストルをおどしに射つて、裏口から出してい

つてしまいましたわ……」



アルバイトは辛い

かつては豊かに熟した、しかも気品のある肉体の女性で知られたルーマニアも、今日では鉄のカーテンの中に閉ざれてしまいました。そのため、却つて戦争未亡人などは固苦しい規律に縛られて悶々としているようです。そこに目をつけた苦学生ロジンスキーは利口者で、彼はアルバイトに二人の未亡人のお相手をして学資をかせこうという計画を立てました。何分この道にも修練が大切だと云うので、彼は二人の未亡人に奉仕する前に、いやがる愛人のグリア嬢に、度々お手合せ願つて猛烈な訓練を重ね



— (ルーマニア) —

たのでありました。かくて、二人の未亡人に対する奉仕も月水金、火木土と二つに分けて、学資もタンスマリ入るようになりましたが、その一週間が過ぎて安息の日曜日がやってきた時。いまや安全にグロッキイになつたロジンスキーは、長い溜息を吐いてこゝひとり言を云いました。「あゝ、いざ買ったとなると、女も男と同様だとは気がつかなかつた。こう勝手気まゝに使われたんじや、これ以上身体が持ちそうもないヨ。商売ものは大切にしよう！」



裏窓の季節

今や世は「裏窓」シーズンです。申すまでもなくヒッチコック監督の名作「裏窓」をモジつたものですが、とかく開放的なこの頃、ことにお二人さんは「裏窓」されないようご注意のほどを。

フロリダ海岸に観光を兼ねて泳ぎにやつてきたビル青年とマーク嬢。夕方まで散々泳いでホテルに引上げてきますと、今朝まで空いていた隣室に客が入つた様子。ボーイに聞いてみますと、やはり若い男女のようです。さて、その夜のことです。ご承知のように廊下には別々の入口があつても、



— (アメリカ) —

部屋同士は内部に通じるドアのあることがあります。この場合もそれで、いたずら者のビル君、面白半分にお隣りのアベック連れがどうしているかと、ドアの鍵穴から「裏窓」する気になりました。たやがて、鍵穴から眼を離れたビル君、しきりに頭をひねつて考えて居りますので、モヤ／＼しているマーク嬢が「どうなのヨ、よく見えるの?」と訊きますと、彼氏首をかしげながら申しますには「それがね。おかしいのさ、向うに見えるのは眼玉が一つきりなんだよ?」





編集部……編

小咄色艶東西容裏



ユーモアは権威の失墜が生む滑稽感だと学者は説くが、とりすました美しい女に慾情があり、立派な紳士に痴愚が潜む処が面白い。性^{セックス}を人間の秘事だと考えた処に笑いが湧く。思わぬ処に陥し穴があつて隠くされていた人間性が曝露する。落し咄しと云う所以だ。だから登場人物は何か一本抜けた処があり、似非道德家や音嚙漢や脳足りんの与太郎がいつも主な登場人物たるは東西軌を一にする。人情に国境はない。そのサンプルが以下十四話だ。西洋小噺と江戸小咄の何と似ていることか。





檀那寺へ参り、玄関で案内と声をかけたが、誰も出てこない
ので、勝手口へ廻つて覗いてみると、和尚殿、ねじ鉢巻で俎板
の上に章魚をのせて料理の最中である。こんな場面をみられた
とあつてはさぞ羞しかろうと、も一度、玄関に廻つて大声で呼
わると、やつと取次がでてきた。口上をのべると上れと云うの
で座敷に通じ、和尚も出て挨拶をする。やがてお銚子がで、二
三盃重ねていると、和尚「何しろ何もお肴もなくて恐縮です」
と云う。さつき台所で料理していた処をみているから、こつち
は腹の中でおかしくてならない。いゝ加減に磐若湯が廻つたと
ころで、ちわく／＼と句をわせた。「ねえ、和尚様、もう長い間
おつきあいですから、ひとつお心安く、さつくばらんに願いま
しょう」「いや、それは愚僧の方からもお願いしたい処で……」
「それ、それなら和尚様、ちと水臭いじやありませんか、お匿
しことをなさるなんて」「ハテ何を愚
僧が匿しました?」「おとほけなさる
な、さきほど方丈で、ちと拝見しまし
たが、大層、おたのしみらしく……」
「ほう、御覧しましたか、では是非も
ない、これ／＼お美代や、お心安い方
じや、出てきてお酌でもしなさい」



教会の牧師さんが女中のマリーとお
かしいと云う噂さが村中に伝つてい
るので、教区の僧正が調べにのりこんで
きた。牧師はさてはと心得、ヘマをす
まいと、旨いことを云つてご馳走せめ
で僧正をたらしこみ、腕と口によりを
かけてもてなした。僧正も饞腹く喰べ
ていゝ機嫌になると、村の噂なんてデマか中傷だろうと、すつ
かり神興をすえてしまった。満腹と酔でふう／＼になつた僧正
が、さて町へ帰ろうと立ち上るともうすつかり夜更けて帰える
訳にいかない。是非泊つてゆけと云われるまゝに、明朝早く帰
ることにしたが、さて寝る段になるとベッドが一つしかないか
ら困つた。「どうぞ僧正様、ご遠慮なく、私はこの長椅子で寝
ますから、ベッドでお寝み下さい」「いや、なに、それには及
ばぬテ、これだけ大きなベッドなら二人は樂じや、一緒に寝よ
うや」「とんでもない、勿体なうございます」「いゝからそう
しよう」と結局二人、一緒に寝たが、その翌朝、表の呼鈴が鳴
つて僧正は目をさましたが、その音が鳴り終ると同時に僧正は
尻を強くつねられたのである。ハテと驚くと向うむきに寝てい
た牧師殿曰く「マリーや、早く起きろや、牛乳屋がきたぞ!」



小間使のマリーは客間の壁の油絵の額をかけかえろと云われ梯子をもつてきて、壁にたてかけ、これに上つて主人の命令であれこれと額をかけかえてみせた。下で梯子を押えていた主人が上をみると、マリーはノーズロである。主人は「その絵は面白くない、これをかけてみてくれ」とありつたけの絵をもちだして、いつまでも梯子上のスカート内のヌード鑑賞をつづけていたが、「まあ、これでよからう」とやがて絵をかけさせ、マリーが梯子を片づけにかゝると、「マリーや、有り難うよ、だが、お前さんは少し風通しがよすぎるようだから、これでズロースを購つておはき」と二十フランくれた。廿フラン貰つたマリーは自分達の部屋に帰ると早速この話を朋輩のジャンに話した。するとジャンはスカートを捲り、バツとズロースを脱ぐとそのまゝご主人のまだいる客間にでかけ、「旦那様、どうもこの絵はヘンでございますわ」と梯子をもちだし、それに上つて額に手をかけた。すると主人は案の定、下から見上げていたが「ジャンや、もういゝよ、降りておいで！」しめたとジャンが下りてくると「さあ、ジャンやこゝに二フランあるから剃つておいで！」



ある新婚の夫婦、その交情はひとかたでなく、夜も昼もべた／＼と喰つついているので、これに悩まれたのは下女のなつである。毎晩、主人夫婦の寝所から洩れてくるさざめきやら喃言に眠れぬ位で、何とかして自分にも云い寄つてくれる男はないかと思つていとあるときその細君が泊りがけで里へでかけて行つた。さぞや亭主が寂しかろうと思つていると、友達が二三人やつてきて夜通くまで話しこんで行つた。併しそれも夜が更けるとひやかし乍ら帰つてしまい、主人はそのまゝ、寝所へ引きとつたが、なつは寝られない。あんなに毎晩楽しんでる主人が、一夜でも女なしではいられまいと主人のくるのを待つていたのである。処が、寝所ではロトリとも音がしない。扱は旦那はもうお寝みかと、起き上つて様子をみに自分からでかけて行つた。暗いので廊下の草履にけつまずきコトリと音をさせると目ざとく主人が目をさまし「誰だ？」「はいなつでございます」「なに、なつだと、何しにきた？」くつと詰つたなつ、「あの、もし旦那様が夜中に私のとこへお出でになつても駄目でございますと申し上げに参りました」



ある処に廿四、五歳になる息子があつた。まだ女房をもたず部屋住みの身であつたが、ある晩のこと女をそつと自分の部屋に忍ばせてしつぽりと濡れる手筈を決めた。旨い具合に女を部屋に連れこんで首尾も都合よく運んだが、夜半になつて母親がふと目をさまし、息子の部屋の物音にきづき、息子の部屋へでかけて行つた。「件や変な声がきこえたよ、何か気分でも悪いんじゃないかね」声をかけられた息子は肝をつぶし、布団の中で首をちぢめ「いや、別に気分が悪い訳じゃありませんが、今夜はどうしたか蚤が多くて痒くつて寝られないんです」と答えた。「そうかい、それじゃ別に心配はないんだね、そんならいゝが、変にうなされるような声がしたから、きてみたんだよ、憎い蚤だねえ」とそのまゝ母親は自分の寢所へ戻つていつた。息子はなるべく物音のせぬようにと、それでも充分に堪能し、曉方、まだほの暗いうちに女を帰してしまつた。息子は女を帰してからぐつすりひと眠りして正午過ぎになつて自分の部屋から起きてきた。母親は息子に朝の膳をだし乍ら云つたものである。「可哀いそうに、昨夜の蚤にも朝御飯位は喰べさせてやればいいゝに」



ゲオルグ爺さんの若い妻君の寢室へ彼女の幼な友達のロベルトがときく出入りしていた。ある晩、若い二人がいよいよと云う瀬戸際になつて、爺さんが帰つてきたのでロベルトは裸のまま窓から逃げて屋根へでた。丁度、気分のでていた若い妻君の阿那つぽい寝乱れ姿をみた爺さんは、ちよいと味な気分になり、そのまゝベッドに潜りこんだが、屋根にでゝいる裸のロベルトは、他人に発見したら一大事だし、寒いことも寒いので、屋根につきでゝいた煙突に目をつけ、これに入つて外へでようと考えた。処が間の悪いことに、この煙突は爺さん夫婦お楽しみの部屋に通じていたのだから堪らない。溜つた煤で真ツ黒になつてその場へ転げ落ちてしまつた。妻君はこれを見るとあつと布団を引冠つてしまつたが、爺さんは驚かない。「おゝロベルトだな、今頃どうした？ きつとどこかの妻君といゝことをしてるところを捕りかけて逃げてきたんだな、若い中はよくあることさ、それ、そこにタオルがある、それで身体を拭きな、そしたら、ベッドの下にお前さんのによく似た着物がある筈だ、それを着てそつと帰えりな、女房はよく寝てるから目をさまさぬようにな！」



学校から帰ってきたボールはママから新しい家庭教師を紹介された。「ボールやマドモアゼル・イヴオンヌが、これからあなたの勉強の世話をみんなして下さるから、ご挨拶するんですよ!」ところが、ボールはじつとイヴオンヌ嬢の顔をみていて手を出そうとしないどころか、ママの後にかくれて後ずさりするのだった。「どうしたと云うの、ボール、人みしりするなんてお前らしくもないよ、あゝ、先生があんまりお若くてお綺麗なんではにかんでいるんだね」「坊っちゃん、いらつしやい、先生と仲よくしましょう」イヴオンヌが機嫌をとるようにそう云ったが、ボールは依然として彼女に近づかうとしなかった。「変な子ねえ!」とママは仕方なしに、ボールを子供部屋につれて行つて、ゆつくりお説教をしてやろうと考えた。「一体、どうして、お前は、先生にご挨拶をしないんだね」「だつてママ、僕、あの先生怖いんだよ」「怖いつて? まさか、とつて喰うつて厭じやアあるまいし」「ううん、僕、殺されるかも知れないもの」「あらどうして?」「でもね、ママ、今朝ね、あの、パパとパパのお部屋で喧嘩してたんだよ、死ぬとか殺すとか云いながら」



十歳ばかりの子供と七つばかりの子供の兄弟がいた。あるとき、母親がお墓参りに出かけようと、朝から髪を結つたり、お化粧をして、着物をきかえてみると、兄貴の方が、それをじつとみていて「お母さんも普段はあんまりよくないが、そうして、着物をきておめかしをしていると満更でもないな」とやつた。「お母さんがお墓にきたときは、もつと若くて綺麗だったんだゾ」と弟も乳母からきいた話をしだした。母親は讀められているのにやにやし乍らきいていたが、「俺らも大きくなったらお母さんみたいな綺麗なお嬢さんを貰うんだ」「俺らはもつともつと綺麗なお嬢さんを貰うんだ」と互いに云い張つて騒々しい。奥で昼寝をしていた親父、うるさいので顔をだし「お前達、何を騒いでいるんだ!」と怒鳴ると、兄が「ねえ、お父つさん、こうしてみるとお母さんもなか／＼美人じゃないか、お父つさんも嬉しいだろう!」「何を云う、餓鬼の癖に、黙つておとなしくしておいで!」親父が一喝喰らわせると、傍にいた弟の曰く、「なあ、気をつけなよ、やたらに主のあるものごとをとかやかく云うでない、お母さんにはご亭主がいるんだから!」



客舎で有名な男、女房に死なれた後、女は欲しいが、物入りを惜んで女郎買にもゆかず、専ら五人組ですましている、ある夜、蚊遣りの煙りの中から死んだ女房が現れてきて「お懐しうございます」と云い「その後、貴方様はよくも私に操を立て後入もお買いにならずお一人で辛抱、さぞやご不便でございましたよう、今夜はそのお礼に参りました、充分にサービス致しますわ」と云うので、その男大喜びで早速に床をのべ「早くおいで」と招くと、女房は悩まし気に後れ毛を掻き上げながら「実は申し遅れましたが、貴方様は私の棺の中に六文銭を入れて下さらなかったのです、三途の川が渡れず、鬼どもに付け届けもできず辛い思いを致しました。帰えりにはほんの少しのお小遣を持たして下さいませ」と云う。これをきくと、亭主解きかけた帯を結び直し「何だ貴様は枕金を稼ぎにで、きたのか？」と大喝する。女房は「いゝえ、これがお嫌なら帰えます」と早くも消えかゝるので男あわて、その消えかゝった女の裾をつかみ「まあ待て」女房それを振り払つて「いゝえ、もう結構ですわ、相変らずの客なご気性、私はまだ他に一二軒あてがございますから！」



客ちで欲の深い夫婦の妻君が妊娠して予定日になり、陣痛は起つたが、五六時間経つても一向に赤ん坊の生れる様子がない。亭主はウロチヨロしているばかりで埒があかず困つていゝ、産婆がハタと小膝を叩き「いゝことがある、ひよつとしたらこれできくかも知れない」と云いだした。「どんなことか？」と尋ねると「いゝから金貨を一枚お貸し下さい」「金貨だつて？」「さよう、金貨です、併し、すめばすぐお返ししますから」と云うのでしぶく大事に蔵つてある金貨を奥の手文庫からもちだしてきて産婆に渡すと、産婆はそれを受けとつて子供の生れてくる辺りでチャリン、チャリンと鳴らしている。「一体、何の厭勝（えんしょう）なのか」ときくと「お宅のお子さんなら、きつとこの音で、みえよう」と云う。一同固睡をのんでいると、聴て小つちやな片手がヌーツとでゝきて産婆のもつている金貨を掴んだ。「それッ」と意気込んでいると、その手はすぐその金貨をそこに投げだしてまたひつこんでしまった。「おかしいこと」と産婆が落ちた金貨を拾い上げて掌にのせて眺めていたが、やつと気がつき産婆「これではいけませんわ、これは贋金貨ですもの！」



脳味噌の斤量不足で評判のテオドルが嫁さんを貰うと云うので隣近所はその噂でもら切った。「あの馬鹿がどうして初夜を過すだろうか」「嫁さんは突き殺されやしないか、馬鹿の何とやら云うぜ!」だから親の方も気が気でない。「一度よく仲にあの話を話しておいてやれや」と父親に云われた母親は、婚礼の前日と云う押し迫つてから、テオドルを納屋の傍に呼びつけ「なあ、テオや、お前は婚礼の意味を知っているかな、嫁さんと云うのはたゞ台所や畑で働らせる下女とは違ふのじゃぞ、可愛がつてやるんじや」「お母さん、そりや知つてるよ」「知つてゐるつて云うが怪しいもんだぞ、どうして、可愛がるだ?」「菓子やるよ、人形でも購うべえか」「だから云わぬこつちやない、お前は知らないんじや、いゝか、男と女の身体には違つたところがあるじやろ、な、判るか」「うん」「そら牝犬と牡犬をよく往来で見るじやろが」「あ、お母さん、判つたよ、安心しな」併し母親は心配がいよく式をあげた翌る日嫁に様子をきいてみた。「え、一寸と変つてゐるだね、あの人、私のお尻の匂いをかいで四つん遍いで壁に片足あげておしっこしなすつたでなあ!」



人の良い与太郎の女房は、亭主には過ぎた小股の切れ上つたい、女、亭主の人のいゝのを幸いとちよく近所の若い者を呼びこんでつまみ食をしてゐると云う噂だつた。知らぬは亭主ばかりなりで、始めのうちは与太郎も知らなかつたが、世の中にはお節介な奴がいるもので、彼に耳打ちして女房に気をつけろと教えた者がいる。ある日、出先から急に忘れ物にきがついて家へ帰つてみると、玄関の格子があいてゐる。ふと下をみるとそこにみなれない男の草履がある。扱は噂さ通りかと、腹の中が煮えくり返る思いで足音を忍ばせて奥へ入ると、四畳半で女房が見知らぬ男と乳繰り合つてゐたから堪らない。「ワアーツ」と大声をあげてそこへ躍りこんだ。驚いたのはいきなり奇声を浴せられた二人、サツと横へ離れたが、馬鹿の与太郎が何を仕でかすか判らない。顔青さめてぶる／＼震えているばかり、すると仁王立ちになつた与太郎「この馬鹿野郎!」と怒鳴つたがすぐ後がつゝかず、やがて「何て不用心なことをするんだ、格子もあけつ放して……それに俺だからいゝようなもの、何だつて人様にみられて羞しいような真似をしていやがるんだ!」



村の分限者の親娘が花のお江戸見物に馬にのつてでかけた。とある街道の山路にさしかゝつた処で、倶梨伽羅紋々の山賊達に出逢い「やい、身ぐるみのこらず置いてゆけ」と持金から衣類に馬までを盗られてしまった。幸か不幸か娘があんまり美人でないので、裸になつた娘までかつがれるようなことはなかつたが、裸でポツンと残された二人、どうしたらよいか途法にくれてしまった。「これからさき、どうしたらいいか、馬はなし、金はなし、困つたぞ」と親父が嘆くと、娘の方は案外しつかりして「お父つさん、まあ命に別状ないし、私の身体も無事なんだから災難とあきらめようや、それに心配しないでいい、の」と云う訳は、さつき少しお金をかくしておいたから！」「なに金をどこにかくしたんだ？」「いややお父つさん、どこだつていいじゃないの、そんなこと、羞しくつて云えないわ、いゝところよ」娘がちよつと赤い顔をしたので親父も「うむ、そうか、でかしたぞ、娘！」と膝を叩き「旨いところを思いついたもんだな、だが、こんなことだつたら、お前のお母さんもつれてくりやアよかつたな、そしたら馬だつて盗られないですんだかも知れないぜ！」



セーヌ河の水泳大会にマルセーユを代表して出場したマーセルが、日頃の自慢を裏切つて郷党一同の期待も空しく、スタートは見事にトップだつたがまだコースの真中にも達しない頃に、一人に抜かれ、二人に抜かれして、ついにビリになると云う不甲斐なさ、おまけに途中で棄権してしまつたから、応援にきた連中は納らない。「どうしたんだ、マーセル」と血の気が多い南国気質であわや鉄拳の雨が降りそうな雲行きとなつた。すると、マーセルまことに申訳ないと云つた格好で「弁解する訳じゃないんだが泳ぎながらね、ふいと故郷のことを思つたんだよ、マルセーユの美しい自然をね、どうしても負けられんとね、そうすると君達の顔が目に浮んださ、それはいいが、女房の奴の顔まででくるんだ、僕のために亢奮した顔が、これがいけなかつたんだ。忽ち、僕は僕のある部分がヘンになつたのを感じたんだよ、どうしても駄目なんだ、もうそうなると川の底につかえて泳げないんだ」「じゃア背泳でやればいいじゃないか、マーセル！」「いや滅相な、仰向けになつてみる、セーヌ河には橋があるじゃないかね……」

裏

窓

十一月号

戦慄犯罪特集



第一卷・第十二号



暗着らしい花模様の着物の裾が。無惨にまくれあがり

ふくよかな下股が、開いたままの姿で娘は死んでいた……

萩原 秀夫

朝靄に包まれた美人死体

その前夜は、善養寺の秋祭で、賑やかな笛や太鼓の音と、老幼男女のざねめきが、夜の更けるのも知らず、東京の東端、小岩の町をわつしよ、わつしよいのお祭気分に包んでいた。

小岩と云えば、東京都内と云うものゝ、町のやゝ中央を、千葉街道が南北に走り、町の東端を、帯のようにゆるやかに流れる江戸川を越えれば、お隣りの千葉県という地形上、都会の喧騒から遠のいた、静かな町だった。むかしは、江戸川の堤に沿った、一帯の田畑だった跡を遺し、いまでも、土堤のあたりや、町のところどころに、野菜畑が、宅地と宅地の間を結んでいる。

田園都市を思わせるような、そんな静かな小岩の町も、年に一度の秋祭ともなれば、若



い娘はあでやかに粧い、若者もこざつぱりしたイナセな恰好で、夜更けまで踊り狂い、赤々と燃えるかぎり火が、夜空を明るく照らしていた。

そんな、気狂いじみた祭の夜が明けた、昭和二十二年の十月一日の朝だつた。

江戸川の流れば、まだ朝靄のなかに眠っているように、静かに、白の水煙をあげていた。昨夜の賑いが、まるで嘘のように、しんと静寂のなかに、息をひそめている早朝である。

「深い霧だな」

眩きながら、土堤の西方にあたる、菜畑の畔道に姿を現わしたのは、近かくに住む、内田某と云う若い百姓だつた。

内田は毎朝、起きぬけに畑を見廻るのが習慣になつていた。昨夜は、祭の酒で、したゝか酔つて、いつもよりはすこし遅い見廻りだつたが、それでも、まだ近所の人達は、寝心地のいい、朝の眠りをむさぼっているらしく、朝靄のなかには、誰一人として人影もなかった。

内田は畔道から菜畑のなかへ足を踏込んだ。あちらこちらに、驚慌らされた形跡があるのだ。

「しようがねえ奴等だ。こんなところで、悪ふざけしやがつたのか！」

彼は誰云うとなく呟いて、チェットと、舌打をした。昨夜、祭からはぐれた町内の若い者が暗闇を幸いと、菜畑で飛んだ濡れ場を演じたものと睨んだのである。

「ひでえ奴等だ！」

憤つとしながら、倒れた菜をおつたて、丁寧に土をならして、だんだん奥へと踏込んだときである。

「おや？」

どきりつとした。

内田のとながつた眼が急に、恐怖、に一変した。彼は息をとめ、脅えた眼で、前方を見すえたのである。そして——あッ！ と叫んだ。彼の顔面は蒼白となり、頑丈な肩まで、微かにふるえた。

さんざんに荒された菜畑のどまん中に——若い娘が、仰向けに死んでいるのだ！

晴着らしい花模様の着物の裾が、無惨にまくれあがり、ふくよかな下股が、開いたまゝ、むきだしになつている。白足袋も、そして、可愛い膝小僧まで、泥ンこにまみれ、帯がだらりと、畑の泥の上にのびている。

齒を喰いしばつて、睨みつけるように、半

眼をひらいたまゝの両眼を見たとき——。

「うわッ！」

内田はうしろも見ずに、横つ飛びに、菜畑を飛びだした。

朝靄にしつとりと包れた若い女の死体は、こうして、最寄の派出所から、所轄小岩警察署へ報告されたのである。

頸部の爪の跡

ちようどその日、宿直明けだつた私が、洗面をすませて、階下の事務室へ、挨拶に行こうと、電話室のわきにさしかゝつたときであつた。

「えッ？ コロシ？ 殺人事件ですつて！」
夜間の電話掛は、制服の宿直員が輪番に担当する。その制服の音が、が鳴りたてるように、ドアの外へひびいてきたのだ。

私はどきんと胸を衝かれる思いがした。殺人なら、こつちのお客さんだ。電話室へ飛びこむと、ものも云わず、制服員の耳から、受話器をひつ外し、耳にあてがつた。

——現場は、管内小岩町二丁目二二〇×番地先……畑のなかです。ハア、届出人と一緒に、休憩員が直ちに現場保存のため急行しました。

派出所員の若々しい声が、びんびんと受話器につたわる。メモをとり終つて、司法主任の部屋へ駈込んだ。

「主任！ 殺人です」

ドアをあけるなり、私はかなり亢奮して、大きな声で叫んだ。

「聞いたよ。電話室の君の声が筒抜けだ。いま、電話室へ行こうとしたところだ」

主任は落着いた物腰で、帽子の頤紐をかけた。その眼は、すっかり事件発生に慌てきつて、いる部下の私を、無言のうちに、たしなめていたようだ。私は赤面しながら、額の汗を拭つた。

司法主任は事件発生を電話で官舎の署長に報告するとともに、警視庁捜査一課、東京地方検察庁へ連絡する。

間もなく、署長が追取刀で出署した。宿直明けの署内は、急にものものしい空気に包まれ、管下の各派出所には、非常警戒の指令が飛び、刑事全員に、非常出勤の命令が下される。

やがて、署長以下十数名の私服を乗せた自動車現場へ急行し、いよいよ検視だ。

司法主任が死体に止みよつた。

片膝をつき、右手で死体の顔を持ち上げ、

両眼をじつと見る。眼球結膜下に、ちようど蚤に刺されたあとのような出血点が、はつきり現れている。

窒息死体に特有の溢血点だ！

「他殺死体ですな」

と主任は、かたわらの署長を仰ぐ。

「うむ。窒息死のようだが——首を絞めたあとはどうか？」

「脛部の向つて左側に、爪痕と認められる傷があります。扼殺です」

窒息死の場合、脛部には必ず索溝か、爪痕、或は表皮の剝落が残る。索溝と云うのは水平か、或は斜上方にかけて、くびれたように、紫色をおびたどす黒い溝のことで、水平ならば絞殺、斜上方に走っている場合は、溢死による場合に生ずる外部所見だ。

このほかに、窒息死が、他の死体と異なる、外部所見と云えば、

A、他の原因によつて死亡した場合より、

死体の冷却が遅い。

B、死斑の発生が遅い、

C、死後強直が早く現われる

D、腐敗しやすい

等をあげることが出来るが、とくに、絶対的要件は、眼瞼又は眼球結膜下に溢血点が現

われることである、

司法主任が、死体をひと目見て、他殺と判断したのも、この溢血点と、脛部に滲み出ている、爪痕を認めたからであつた。

警察医の検案により、死体には暴行を受けた跡があり、死後六時間、乃至八時間を経過していることが断定された。

しかし、死体や、現場附近一帯をくまなく捜査したが、被害者がどこの何者であるか、身許を割る材斯は何一つとして浮び上らなかつた。

先ず被害者の身許を害らなければならぬ。私達刑事は、現場をあとに街へ飛出して行つた。

——人絹花模様の嗜着姿の十七、八才の娘それが目標だ。

そしてその日の午頃には、同僚の一人が見事被害者の身許を洗いあげた。

獸心への挑戦

被害者が、江戸川区小岩町二ノ三五六番地雑貨商嘉助の長女松原嘉子当十九年らしいと聞込んできたのは、浦辺刑事だつた。

彼は司法主任から、被害者の身許調査を命ぜられると、いち早く、附近の米の配給所へ

駆けこんだのである。

殺された娘が、晴着姿である以上、きつと昨夜の秋祭に出てきた、近所の娘にちがいないと睨んだのである。被害者の身許を害ると云つても、手当たりバッタリに、雲を掴むような聞込みは、なかなか成果はあがらないものだ。浦辺刑事がするどい感を働かせて、米の配給所へ眼をつけたのは大手柄だった。

いまになつて考えると、こゝへ行けば、町内の人頭が洩らさず登録されているのだから、そこで調べるのが、手取り早いように当然のことのように思われるが——私も、多くの刑事も、管内を野良犬のようにほつつき歩るき、糞眼面目に、

「こういう人絹の晴着を着た、十八、九のキレイな娘さんを知りませんか？」

と聞き廻つていたことを想起すれば、何でもないと思われる浦辺刑事の感は、当時の状況下ではたしかに賞せられるべき聞込であつた。

彼は二、三の配給所で刻明に米穀台帳を調べあげ、ついに、被害者に該当する娘を探しだすと、その娘の家へ駆けつけた。

「はあ、嘉子という十九になる娘は、たしかに家の娘ですがね」

父親の嘉助は、不意の刑事の訪問に、ひどく慌てたらしく、顔色まで蒼い。

「たゞいま居りますでしようか？」

今朝、江戸川堤のそばで、死体となつて発見された娘が、こちらの娘さんと似ているので——とは切出せない。もしも、嘉子という娘が、家に居てピンピンしていたとなると、大事な娘にケチをつけたとあつて、刑事がひどく怨まれる場合がすくなくない。

だから、浦辺刑事も、気は急ぐが、廻りくどく、聞込も慎重をきわめる。

「あの、刑事さん」

と嘉助が、ハツとしたように、膝を乗りだした。眼のいろが血走つてきた、

（こいつは尋常ごとではないぞ！）

ピンときた。

その予感が適中した。

「娘は昨夜祭に出たまふ、今朝になつても帰らないのですが——もしや？ 娘に何かありましたんでしうか」

語尾がふるえている。

「帰らない？ 親戚へでも泊つたんですかな」

「いえ。そんな親類は近かくにはございませんし——実は、家の者も心配して、今朝から手わけして、あの娘の友達のところや心当り

を探したんですが——いまだに、わからないんです」

浦辺刑事は、すつかりおろ／＼している嘉助を伴つて捜査本部へ帰つてきた。

ちようと、私たちが、被害者の身許調査も空しく、消然と手ブラで引あげてきたところであつた。

すでに、死体の解剖のため、T大法医学部へ運ばれたあとで、本部の机上には、被害者の悲しい死出の晴着となつた着衣だけが、空蟬の世の哀れさを漂わせて置いてあつた。

ドアをあけて、部屋へ一步入つた嘉助が、この晴着を見るなり、

「あッ！」

と叫んで、その場に棒立ちになつた。

見憶えのある愛娘の晴着なのだ！

「あなたの娘さんの着物に相違ありませんね？」

沈痛な面もちで司法主任が念を押した。

「は、はい。たしかに……娘は、娘は一体どこに居るのですか？！」

刑事の仕事で、一番嫌な場面は、この首実驗と云うべき光景である。

肉親の情愛が、こんな冷酷に弄ばれることは他にあるまい。一瞬本部のなかには重苦しい

空気に包まれ、誰も面を伏せ、しーんとしてしまう。

その陰鬱な静寂のなかに、嘉助の慟哭が、人々の肺腑をえぐるのだった。

私はその場に居たゝまれず、廊下へ出た。

浦辺刑事までが、蒼い顔で出てきた。

「被害者はわかつたものゝ、辛いなあ」

浦辺刑事はちゆんと鼻をすゝつた。

人一倍感情家の彼は、嘉助の取乱した姿にすつかり同情して、眼をしばたゝかせているのだ。

「被害者がわかれば、供養の道もつくさ。親爺さんを慰めてやるにも、一刻も早く、犯人の奴をふん掴まえてやることだ」

私は浦辺刑事の肩を叩いて、元気づけてやつた。

「ひでえ野郎だ！ あんなキレイな娘さんを手籠めにした上、絞め殺すなんて！」

浦辺刑事が歯ぎしりをした。その両眼にはたつたいままでの愁いの底に沈んでいた悲しみのいろが消え、憎悪をこめた怒りを燃やしていた。

私も同じ念いだつた。

憎い！ 犯人が憎い！ 若い娘を凌辱し、その尊い生命を、まるでシャモの首をひねる

ように、雑作もなく奪つた獸心の男——犯人に対する怒りが、私の全身の血をおのゝかせた。

こうして、私の捜査がはじまつた。

暗夜の抱擁

捜査方針の第一は、被害者松原嘉子の素行調査に重点が置かれた。

現場の模様から、被害者が暴行を受けた際さほどの抵抗の跡が認められなかつたことゝ、着衣の乱れがすくなかつたという二点から、犯人は嘉子と面識あるものか、或は愛人関係ではないかという疑惑が、先ず捜査本部の主動的意見となつたのである。

とくに、死体の帯の間にはさまつていた、布製の紙入れのなかには、数枚の百円札がそのまゝになつていたし、腕時計も強奪されていないという状況は、犯行の動機が、物盗りでないことを、はつきりと肯定していた。

推理の焦点が、被害者の異性との交友関係に注がれるのも、当然のことだつたかも知れない。

数班に分けられた刑事が、八方へ飛んで、嘉子の素行を洗つた。その結果、捜査本部にもたらされた報告によると……。

嘉子の父松原嘉助は、居住地で戦前から雜貨商を営み、町内でも評判の実直者で、生計も中流以上で、他人から怨みを受けるような人物ではない。

（怨恨から、その相手の子を殺して、怨みを晴らすという手も、殺人事件には屢々あつた事例である）

嘉子は小岩国民学校高等科を卒業すると、お茶の水にあるタイピスト学校に学び、同校卒業後、近かくの小岩郵便局の事務員として雇われ、真面目に勤務していた。

性温順、明朗な近代型女性で、上司同僚間の評判もよく、異性との交友は絶無と云つていゝくらいで、局のなかでも、男子事務員とは、仕事のほかは、滅多に冗談も交したことがないと云う。

いわば、典型的のもの堅い娘ということでは、嘉子の素行調査は終つたのである。

しかし——犯行の手受から推定すれば、その動機が痴情か、怨恨によるもの以外には考えられぬ。

一、嘉子に恋慕する男があつて、その求愛を拒絶され暴行扼殺したか？

二、嘉子に何等かの怨みを抱く者の行為？
捜査方針は依然として、この二つの疑惑を

解くため、執拗な聞込捜査を続行していた。

私は現場附近の家をあたり、兇行時間と思われる、午後十一時前後に、附近で、若い男女の話声を聞いた者があるかどうか、しらみ潰しに聞いて歩いた。

もし聞きつけた者があれば——その話の模様で、喧嘩していたか、男に荷められていたのか——その内容の一端でもわかると考えたのである。会話の内容によつて、痴情か怨恨のどちらかに、はつきりと区分されるからだ。

だが、この予想は見事に覆えられた。賑やかな祭の夜であれば、ひっきりなしに暗い道を行く若い男女のうち、どれが嘉子だったか、わからぬというのである。

「そんなに、アベックが多かつたのかね？」

「それは旦那。年に一回の祭りでさ。ふだんは口喧しい親でも、箱入娘に晴着を着せて、宵のうちから外へ出してくれますからね。その千載一遇の夜ですもの。若え男と腕を組んで、夜つびてお愉しみというわけで」

そこは、現場と一丁と離れぬ、しもた家の家で、四十前後の主人が、ずばずばと、こつあの話に乗ってくれた。

「お宅では、あの晩、何時頃おやすみになり

ました」

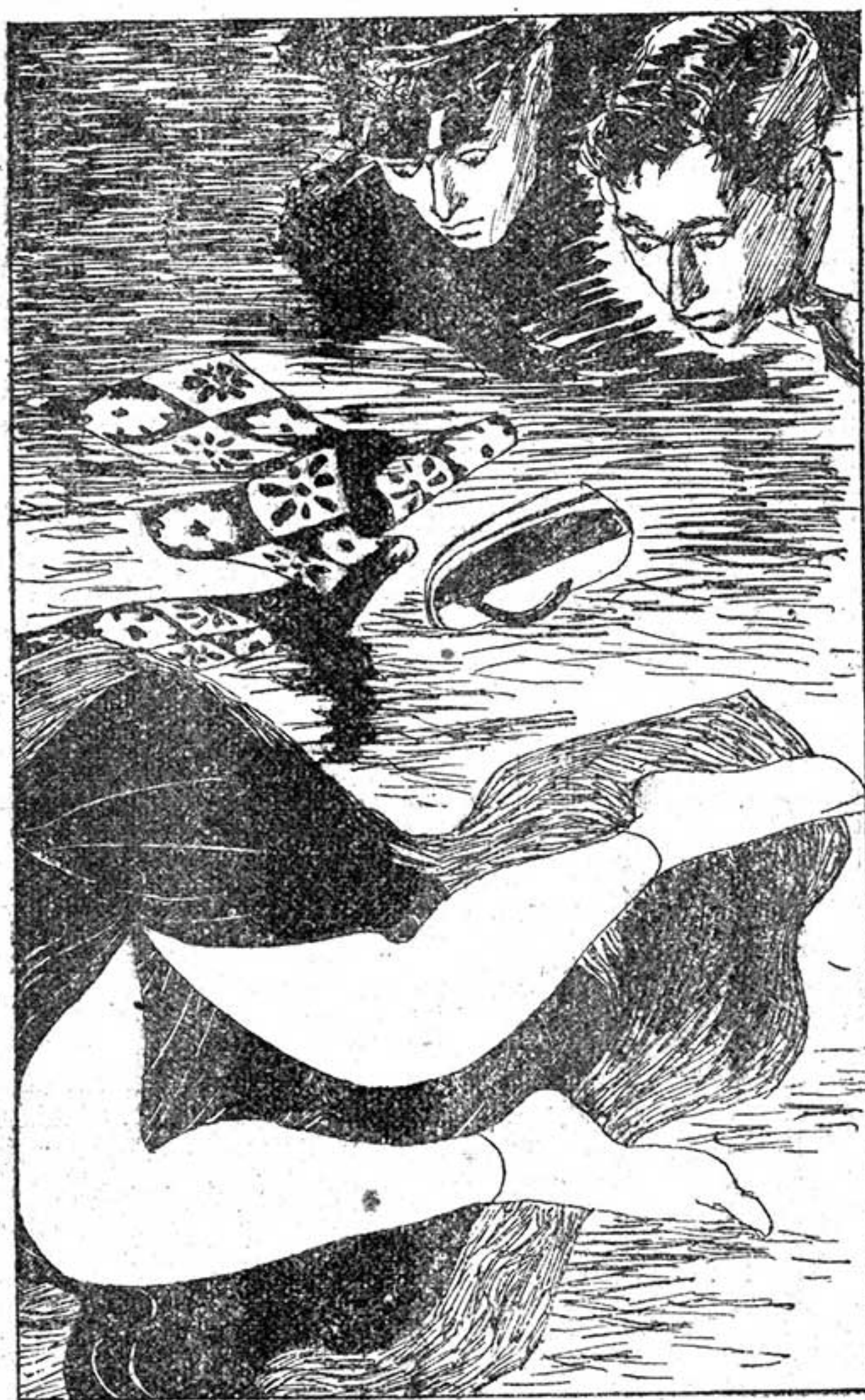
「僕が善養寺から帰つたのが十一時ちよつと過ぎで、そのときは、家内も子供も。みんな睡ておりましたよ」

「十一時頃？ その帰途、若い娘を見かけませんでしたか」

「実はね、旦那。これは、あの殺された娘さんとは違うでしょ がね。凄いところを見ちやつたんですよ」

主人はゴクリと唾を呑んだ。

「どつちも、若え男と女でしたがね。暗い道ばたで、男が女を抱いて——ええ、立つたままですがね、チュツと、あの外国の活動写真でやるキッスというやつを真演しているんですよ。鑢ばびつくりして、思わず、唸つちまつたんですが、それが、先方にわかつたんです。男がすつかり慌てゝ、女を抱いたまま、横の畑の方へ行つちまつたんで——年甲



妻もなく、よけいな邪魔をしたと後悔して、それからすぐ家へ帰ったんですが——暗いなかで、白いものが、ポーと見えたときは、胆を潰しましたよ」

「男の方は白い服を着ていたのかね？」

「さあ？ シャツだったかも知れませんがね。」

娘は着物でしたよ」

時刻から推して、この男女こそ、嘉子と犯人であつたかも知れない。

すると、唯一人で家を出た筈の嘉子が、帰りは男と一緒にたつたとすれば、この男とどこで逢っているか？ また、この男が何者か——当夜の嘉子の足取りをとつて、この疑問の男を探しださなければならぬと思つた。

私は嘉子の友人達——とくに、幼友達をわざわざ訪ねた。お祭の夜などは、とくに、幼友達と逢つて、懐旧談に華を咲かせるものだ。私の狙いはズバリ的中した、嘉子の幼友達である管内上篠崎町大神桃子(19)から、私は意外な聞込を掴むことが出来た。

祭に来た男

「あたしが、境内ではじめて嘉子さんに逢つたのは午後八時半頃だつたと思います。久しぶりで逢いしたので、三十分ぐらいお話を

していましたが、ちようどそこへ、(すこしハニカミながら——)あたしの男友達が出来て余興を見ようと誘つたものですから、嘉子さんは気をきかして「またお逢いしましょうね」とさつさと、人混みのなかへ行つてしまつたのです。余興場へ行つたのですが、あまり面白くもなく、それに、お友達の知合がたくさん寄つてきたので、あたしは一人でこっそりそこから逃げだしてしまつたのです。そして、しばらくしてから、また嘉子さんにお逢いしたのです」

「それは何時頃でしたか？」

「もう十時に近かつたと思います。境内はやはり、人波でこつた返えして居りましたわ。あとからあとからと、参詣にくる人達で、足を踏まれたり、肩を小突かれたりするので、立話もできないので、二人で境内のわきの、暗い木蔭へ参りました。また、いろいろと、子供の頃の話や、現在のお勤めの様子などを語り合っているうちに、嘉子さんが、先刻の男の方、どなた？ と聞くので、ボーイフレンドよと、笑つて答えると、あなたは子供の頃もそうだつたけど、男の方を、何んとも思わないのね、て仰有るのです。だからあたし——だつて、男も女も、同じ人間ですもの、

ちつとも怖がることはないでしょう？

「あなたは勇気があつていいわ。あたしなんかとても駄目。今夜だつてとても怖いような気もするのよ。」

「あら？ どうして。どなたか、来ていらつしやるの？」

「わからないんだけど……此の間から、あたしに、ヘンなことを云う男のひとがいるんですもの。」

「ヘンなことつて？ 申込？」

「そうなのよ。お友達だけの関係でいゝから、是非一緒に、どこかへ遊びに行こうなんて……」

「そんなの平チャラよ。男つて、みんなそんな科白を用いるのよ。それで、その男どこのひと？ 知つている男？」

「あたしははじめてなんだけど——あたし達と同じ小学校出身で、いまお茶の水附近の紙屋さんの店員をしているんですつて、あたしが、タイピスト学校へ通つているのを知つていて、その頃から、あたしが好きだつたんですつて。」

「相当なもんね。ずいぶん手がこんでいるけど、かまいやしないわ。一緒に遊んでやるぐらい……そのかわり、ジャン／＼と馳



走させて、お土産をうんとせしめて、二度と甘つチョイことを云えないように、とつちめてやるというわ。

あたしは嘉子さんの脅えた気持ちを引立てるつもりで、そんな乱暴なことまで云てあげたのですが、その夜の嘉子さんは、お祭に来ながら、バカらしいぐらい心配顔でしたわ。今夜の祭りを知っているから、きつとその男も来ていると思つて、それで内心びくびくで警戒していたんですわ。ねえ刑事さん、その紙屋の店員で男、怪しいと思いませんか？」

素人の推理もゆるがせには出来ない。しかも、異性関係のない、評判のもの堅い娘に、たゞ一人現われた男性であり、さらに、前々から、嘉子に執拗に迫っていた男と聞いては、刑事の私すら、この聞込に関心を持たぬ筈がない。私はすぐにお茶の水へ飛んだ。省線をお茶の水駅で降りて、聖橋通りの広い舗道に面したビルに

ある博水堂紙店を先づ訪れた、管内の業者から、お茶の水で紙屋と云えば、博水堂という老舗があるから、そこで聞けば、神田辺の紙屋はすぐわかりますと云われたからであつた。

とにかく、最つ先に乗りこんだ博水堂にはめざす「小岩出身の店員」は居ないことがわかり。そこで聞いたリストを頼りに、小川町から駿河台へかけて、雑魚のような小規模の紙屋に至るまで、総緘めに洗つた。

おそらく、十数軒目だつたろう。明治大学の横手にある、重松商店という、和紙専門の店で、ついに「小岩出身の店員」を探しあてたのである。

白井某という二十三才の男だつた。その男の眼を見たとき——私はすくなくらず失望した。それは犯罪を犯し、罪に脅える者の眼でなかつたからである。

「君は松原嘉子という女を知つてゐるね？」

「はい知つております」

「恋愛関係だつたんだね？」

「いゝえ。僕はあの女が好きでしたが、あの女は、恋愛なんていうものを、全然否定して僕のことなんか、何とも考えてくれないんです。あの女が、あんな悲惨な目にあうのだつ

たら——僕は強引に、あの女のお父さんに話して、結婚を申込むべきだったと、いま考えても、残念でなりません」

「君はあの夜——祭りの夜。小岩へ行つたのかね？」

「前の日に、電話で嘉子さんに、行つてもいいかと聞いたたら、困ると断られたので、行くのを止めました」

「その夜は何処に居たかね？」

「刑事さん。僕を疑っているのですね。もつとも、疑われても仕方ありませんが——僕はあの夜、こちらの御主人のお伴をして、神田日活館へ映画を見に行つていたので」

キツパリと云う。こつちが、たじたじとなるくらいだ。その潔白を証明するためにも、私は店の主人という男に逢つて、白井と映画へ行つた事実をたしかめた。主人は、たしかに参りましたと不在証明を証言した

事件は迷宮か

私の捜査もそうだったが——本部員の誰の捜査も、徒らに無駄骨を折されるだけで、事件の光明となる金的の聞込は、一つとして獲られぬまゝに、十月は過ぎ、十一月に入つてしまつた。

「こいつはいよく迷宮かな？」

そんな囁きが、刑事達にひそ／＼と囁かれはじめた。

こうした本部の最後のあがきを嘲笑するかのうちに、十一月に入つて間もなく、嘉子の殺害現場附近において、管内に住む後藤清子(26)という女事務員が、深夜友人宅からの帰途、後方から躍りかゝつた男に首を絞められて、暴行された、という事件が起きた。幸いと云うか、頸を絞めた力が弱かつたので、死には至らなかつたが、昏睡状態に陥つたところを、ズロースを引裂かれて、姦淫されてしつたのである。

「暗くて、顔はよくわかりませんでした、が、ピカッと、眼鏡が光つて——それに、たしか年も十六、七ぐらいの少年のような気がしました——」清子は取調の刑事に陳述した。扼殺し、暴行する——この手口は嘉子のそれとびつたり一致する！本部は俄かに活気づいた。いま、で、嘉子の身辺を中心として掘り上げられていた捜査網は、後藤清子事件によつて、甚しい転換を余儀なくされたと云わなければならぬ。

十月十二日——私は秋風たちこめる江戸川の土堤下で——草むらにしがみこんで、お

かしな恰好をしている、一人の少年を発見した。私は少年に気づかれぬように、腰をかゞめ、じつと、その動静を見守つた。

少年は軽るく両眼を閉じ、しきりに右手を動かしている。そして。荒い吐息と、ぴくぴくけいれんするかのよう動いている肩の様子から——私はハツとした。

その瞬間、私の脳裡にすどく閃めいたのは、事件解決の光明であるところの——十六七才の少年痴漢。という犯人の幼影である。

私はウムも云わせず、少年を本部へ連行した。名は西田行一当十七年。

刑事部屋に連行された西田少年は、並入る刑事連中を前に、ニヤ／＼笑いながら、「とう／＼捕つちやつた」

と無邪気？に云い、驚くべき犯行のかず／＼を、ぬけ／＼と自供したときには、検挙者の私でさえ、たじ／＼となるほどだった。

意外、西田少年こそ嘉子殺しの犯人であり後藤清子を襲つたほか、暴行一件、暴行傷害一件、暴行未遂二件という、大人顔負けの犯行を自供するに至つた。

(おわり)

殺人事件
外人牧師

寢室の怪盗

瀬戸口寅雄

飯み屋の酌婦にいれあげた彼は遂に外人牧師を殺害するに至った……無知な男は女の為に自制心を失っていた。



やい金を出せ

「おはなッ！ おはなッ！」

鋭い叫びに、はつと眼を覚ました女中平はな（一八）が、頭をもたげると、

「おはな——」

と、微かに、夫人の呻くような声が消えて行つた。はなは、突嗟に起上つて、寝巻をきちんと着直すと、女中部屋を出て、主人夫妻の寢室に這入つて行つた。主人夫妻の寢室は、二階になつて居るので、はなは、階段をバタ／＼上つたが、寢室の扉は開けッ放しになつてゐる。

ひよいと、寢室を覗いたはなは、

「あッ！」

と、叫んで、その場にたちすくんでしまつた。主人キヤムブル牧師夫人レージーさんの胸に、風呂敷で覆面した大男が、手にしていた刃を、ぐさと突刺したのだ。

「きやッ！」

哀れ、レージー夫人は崩れるように打倒れ

てしまった。愕然としたはなが引返さんとした一刹那、

「待てッ。動くと、命がねえぞ！」

にらみを利かせたダミ声に、はなは廊下に突立つたまゝ、ぶる／＼震えていた。

「逃げようたつて、逃がしはしねえんだ、中へ入れッ。入らねえと、俺の方から出かけるぞ！」

「……」

血だらけになつた短刀をぶら下げた大男である。云うことを利かぬと、何をされるかわからない。はなは恐る恐る寢室へ這入つて行つた。ベットも、壁も、じゆうたんも、血だらけになつている。その血の海の中に、レージー夫人が打倒れている。

「おい、てめえ、女中か」

「はい」

「ぶる／＼震えるな、女中の命まで取ろうたア、云わねえ。だが、てめえの態度次第じゃ、この血刀が、てめえの胸板を突破つてしまうぞ」

「何でも言うことは聞きます。どうか生命だけは救けて下さい」

「あ、救けてやるよ、てめえの主人はぎや／＼騒ぐから殺してしまつた。雉子も鳴かず

ば、撃たれもすまいつてやつだ」

声は低いが、一語々々力がこもつていた。

はなはべこ／＼と頭を下げた。今まで気がつかなくつたが、レージー夫人から一間ほど離れた寢台の下に、主人キヤムベル牧師が、ナイトガウンを紅に染めて、打倒れているのが眼に入つた。夫妻共、殺害されてしまつてゐる。

（妾も殺される——）

そんな予感がして、はなは、いよ／＼震えてきた。

強盗との問答

「やい、てめえなんぞに、殺生な真似はしねえよ。てめえ、金持つてるだろう。持つてたら出せ！」

「はい」

「はいッて、返事ばかりしねえで、早く、さつさと出さねえか。出さぬと、生命がねえぞ！」

「出します。出しますけど、此処にはありません」

「どこにあるんだ！」

「階下の女中部屋です。私はそこで寝て居ります」

「よし、行こう。階下の女中部屋へ」

「はい」

はなは先に立つて、階段を降りた。女中部屋へ這入ると、机の抽斗の中から、財布を取り出し中味を調べていたがその中からお札を一二枚、つかんで差出そうとすると、

「止さねえか、そんなシミミッタれた金なんぞ受取れるか。やい、てめえ出さねえのか」

いきなり寝巻着の衿で、咽喉元を締めつけられた。

「どうだ、全部出してしまえッ！」

「いえ、み、みんな差上げます。どうか、離して下さい」

「よし、皆出せ！」

「は、出します——」

はなは押入れを開け、トランクの中から囊口をつかんで、差出した。

「そうか、どうせ、女中の身分じゃ、大したことはあるめえ……。主人の金は、どこにあるんだ！」

「御主人は、ふだん、お金は銀行へお預けになつて、御手元にはお置きになりません。あればお二階のお部屋ですが、たぶん、ありませんでしょう」

「そうか、嘘じやねえだろうな」

「本当です」

「そうか、仕方がねえ。てめえの命はたすけてやる、その代り、すぐに訴えるんじやねえぞ、いいか。明日になつてから訴えるんだ、もし、すぐ訴えようと、引返して来て、た、つ切つちまうぞ」

「……」

ちびみあがつて居るはなの鼻ッ先に血だらけの短刀を突付け、二三回打振つて、

「ふん！」

と、覆面をしやくると、裏口から風のように、立去つてしまつた。

人殺しだーッ

女中平はなの訴えによつて、わが国の避暑地として知られ、冬はスキー客で賑わう軽井沢は、果然、大騒ぎとなつた。

時は、大正五年七月十六日午前四時すぎ、被害者はダブルユー・エーデン・キヤムベル牧師とレージー夫人の二人、女中はなは幸いにして、金を強奪されただけで、一命をたすかつた。これが大正初期、一世を風靡した宣教師殺しの惨劇である。

急報によつて、軽井沢分署は佐藤豊助署長が、非番巡査の召集を命じると共に、部下を

引連れて、被害現場に駆けつける。何しろ、極東第一の避暑地として有名な土地であり、外国人の避暑客が多かつたためか、事故のないのが、軽井沢の自慢であつた。

従つて、いつもは、警察官の配備も極めて手薄で、平はなが、

「大変です。御主人御夫妻が……」

と、訴え出た時はわずか、六名の警官が当直していたにすぎなかつた。だから人殺しと云う兇悪犯罪が突発すると、佐藤署長らが狼狽したのも、無理がない。

キヤムベル牧師夫妻は、軽井沢の離れ山の二階建、瀟洒な貸別荘に避暑していた。キヤムベル牧師は、脾腹を深く刺されたのが致命傷、レージー夫人は胸部の刺傷で悶絶していた。

佐藤署長は、直ちに、長野県警察部検察庁に電話を持つて報告し、非番巡査の集合するのを待つた。午前五時頃富田警部補から、

「非番巡査、全員集合しました」

との報告がもたらされた。

「兇行のあつたのが、午前二時三〇分前後と推定されるから、犯人が兇行現場を立去つてから、二時間余り経過している。この深夜では、乗物はないし徒歩では、いくら走つても

知れている。ひよつとすると、未だ、この軽井沢をウロ付いて居るかも知れん。要所要所に手配し、犯人検挙に万全を期してもらいたい」

佐藤署長は、集合した全署員に命令を下し、女中平はなの申立による、

「犯人は、年の頃三十すぎ位、黒の詰襟服麻裏草履を穿いた、背の高い、一見労働者風の男——」

と云うのを目印に、もの／＼しい非常線が張られた。夏の短夜はすが／＼しく明けはなれ、急を聞いた消防団員や、青年団員が、
「それは大変だ、軽井沢の面目に関る一大事だ！」

と、軽井沢分署に集つてくる。朝になつて長野地方検察庁から片山検事、長野県警察部から県警察部長、永田保安課長等の一行が到着する。すぐに死体の検証、現場の検証が行われる。

一方、非常線を張つた警官隊からは、何の報告もない。それらしい者は、一人も通らないと云うのだ。

「山だ、山伝いに逃げたに相違ない」

「よし、山を搜索しろ！」

隣接町村の消防団員も召集された。そして

警察官と消防団員を打つて一丸とした大捜索隊は碓氷峠を中心として大々的な山狩りを決行したのである。

からりと晴れた空、その空の彼方には、地上の騒動を他所に浅間連山の偉容がくつきり望みされるのであった。

唯一の証拠

兇刃に斃れたキヤムベル牧師夫妻は、東京の麻布に自邸がある。レージー夫人には、三年ほど前に結婚し、結婚した翌年、夫妻相たずさえて、来日したものである。

七月になつて、軽井沢の貸別荘に避暑していたのであったが、キヤムベル牧師は近々のうちに、本国に帰つて来ることになつていたので、その夜は、夢のような高原の夜景に見惚れながら、夜の更けるのも知らないで、楽しい語らいに耽つていた。

英和女学校の教師であり、ピアノに堪能なレージー夫人は、チャーレスゾーノ作『夜の調べ』を歌いながら、ピアノを弾いていた。

その美しい旋律が静寂な夜気の中に、流れているのを、幾人も幾人の人が聞いたと云う。

そうした平和な、幸福な語らいの後夫妻は

就寝したのであったが、突如、楽園の平和は破られた。

「やい、起ろ！」

荒々しい声に、キヤムベル牧師が眼を覚すと、枕許に、黒いものが突立つていた。覆面した大男で、手にはぴかり、短刀をぶらさげていた。

「あッ、泥棒ッ」

気丈なキヤムベル牧師は、ベットから跳ね起ると、矢庭に賊に組付き、手にした兇器をもぎ取ろうとした。賊はキヤムベルの牧師をふりはらい、

「畜生ッ、酒落臭え！」

と、怒号するが早いか、力まかせに突いて来た。除け損じて脾腹を深々と突刺され、

「う、うーッ」

と、倒れると、そのまゝ、息を引取つてしまった。

物音に眼を覚したレージー夫人は、この有様に、

「あれッ！」

と一声、悲鳴をあげると、頭からスッポリ毛布を引被つてしまった。だが、キヤムベル牧師を突刺した賊は、血を見て狂う猛獣の如く、レージー夫人の毛布を、いきなりひん

めくつた。

「やい、起るんだ」

「あッ、はな、おはなッ」

「汝ッ」

夫人が逃げようとするところを、たつた一突きに胸先を刺してしまった。まことに、鬼畜にまさる、惨虐な犯行であつた。警察当局はもとより、軽井沢町民があげて、この兇悪犯人逮捕にふるい立つたのは、当然のことであつたろう。

当時、軽井沢の町には、町民を除き大勢の避暑客が滞在していた。軽井沢分署の調べによると、外人客が六百五十余人、公侯伯子男の各階級有爵者が十二名、一般日本人避暑客五百余人となつて居る、八月に向つて、毎月増加の一途を辿つていたと云う。

惨劇突発の現場が、軽井沢と云う特殊な土地であり、被害者が外人避暑客のキヤムベル牧師夫妻と云うので、警察当局は云うまでもなく、町民一同が躍氣になつて、密林から密林へ、凹凹地から凹凹地へと搜索をつづけて行つた。

が、犯人らしいものは、発見することが出来なかつた。その日が暮れて、捜査第二日目になつた。刑事たちの焦燥は、目に見えて、き

びしくなつて来る。三日、県下各警察署から選抜された二十九名の刑事が、軽井沢分署に到着する。いずれも、腕に覚えの敏腕刑事ばかりだ。捜査本部にあてられた軽井沢分署は、俄かに活況を呈して来る。隣接の各警察署にあつても、キヤムベル牧師夫妻殺しの、犯人捜査に対する専任刑事を選抜し、日夜活動をつづけたので、いきおい、この事件は犯人検挙について、捜査本部をはじめ各警察署が相競うと云う結果を招来してしまつた。

捜査開始四日目の朝、一刑事によつて、有力な証拠がもたされた。それは麻裏草履の片ッ方で、裏口の叢の中に落ちていたと云うのだ。

そこで、叢から発見された麻裏草履の出所について、捜査当局の活動が開始された。何処の店で、誰に売ったか、判れば、もうしめたものである。何とかして、出所を突止めたものと刑事たちは八方に飛び、隣接各署の専任刑事も、その線に沿つて、捜査をはじめた。

すると七月二十一日になつて、長野県南佐久郡栄村高富所在の島田荒物店で、七月はじめに売つたものであると云うことが明らかになつた。買い主を調べると、十余日も前のこ

とであり店の者の記憶も薄らいでいたが、背の高い、風采のよくない男であつたと云うことだけは判つたのであ、キヤムベル牧師夫妻を殺害した犯人と同一人であると言ふことが推定され、捜査本部は俄かに活氣付いてきた。

色めき立つた捜査本部も、島田荒物店で、背の高い、風采のよくない男が買つて行つたと云うだけでは、雲をつかむような話であつた。刑事たちは、勢いよく取組んで行つては見たものの、どこへ逃げ失せたか、皆目わからぬ相手を探すのだから、はたと、行悩んでしまつた。

碓氷峠を中心に

南佐久郡内で麻裏草履を買つた男が軽井沢で事件を起して居るのだから、南佐久郡栄村と軽井沢の、この線をウロ付いて居る者に相違ないと、聞き込みその他、足を棒にしての捜査がつけられた。が、犯人の行方は杳として知れず、何一つ、手掛

りを得ることは出来なかつた。空しく、月日が過ぎて行く。

捜査本部の首脳部は、ようやく、焦燥にかけられ出した。佐藤軽井沢分署長の心痛は、ハタの見る眼にも、気の毒なくらいであつた。



こそ泥一つ無かつた軽井沢のことであり、犯人の検挙がおくれ、ともすれば、迷宮入りの噂まで伝つていたので、

「警察は何をして居るんだ！ 人殺しの犯人を捕えられないで、それで、治安を維持出来るかッ」

「警察の無能！」

非難の声が起り、投書がつゞいた。これでは、警察の威信にも関るし、是が非でも、犯人をあげねばならぬ。佐藤署長以下、切齒扼腕して一気に、事件を解決しようと焦つた。

今日も今日とて、署長室の机にもたれた佐藤署長が、山積する投書に眼を通しながら、

「悪運の強い奴だ！」

と呟いて居ると、コツ／＼／＼、扉をノックする音、

「這入り給へ！」

佐藤署長の言葉に、一人の刑事が這入つて来た。田辺刑事であつた。

「署長殿ッ、つかめました」

「なにつかんだ？」

「はい、事件の端緒です」

「ふうむ事件の端緒を——」

「はい、充分に調査をすゝめました結果、ようやく、端緒をつかむことが出来たのです」

「うむ、そうか」

思わず、佐藤署長が、乗り出して来る。田辺刑事も、感激に、身体をうち震わせていた。

「そ、その端緒というのは？」

「はい、私が宿屋を洗つて居りますと岩村田町にある清水万次と云う、小さな旅館に、犯人とそつくりの服装をした男が、六月十八日の夜宿泊したことが判りました。身長五尺七八寸、着衣は黒の詰襟服、小さな風呂敷を持つて居る外、他には何一つ、所持品がなかつたと云うことでございます」

「ふむ、それから」

シラミ潰し

「宿帳には、栃木県那須郡珂村大字小川一三七川上腫、三十歳と記してありました。清水万次方に泊つたのはその夜一晩だけだつたそうですが、主人夫婦や女中の話によると一癖も二癖もありそうな男だつたそうです。そこで、この男を突止めてやろうと、附近一帯をシラミ潰しに調べて歩きましたところ、おかしな事に、宿屋を出た翌日から六月三十日まで中佐郡の池田竜之助方に雇われ、養蚕の手伝いをした後、同家から暇を取つて、南佐久

郡方面へ立去つた事実が判明しました」

「なるほど、それで麻裏草履を南佐久郡内の荒物屋で買った謎が解けた、それからどうなつたかね」

「私はもう一息だと思つて、麻裏草履を売つたと云う、栄村の島田荒物店を中心に、捜査をつづけて行きましたが同一人物が高富の木賃宿小西喜三郎方へ七月四日から八日までの五日間泊り込み、養蚕で猫の手も借りたいような農家を、あそこに一日、こゝに一日と臨時手伝いに雇われ、稼いだ金は片ッ端から居酒屋などで飲んでしまい、小西方を出て行く時は一文もなくなり、

『これを低当において行くから、貸しておいてくれ』

と、白鞘の短刀を置いて、何処ともなく立去つてしまい、小西方でも当惑はしたが、相手の男が、気味悪い者だつたので、泣寝入りしていた。すると、同月の十四日になつて、ぶらり、小西方へ現れ、勘定を払つた上、低当に置いた短刀を引取り、ふたゝび、何処かへ、姿を消してしまつたと云うのです」

「田辺君、キヤムベル牧師夫妻が殺害されたのは、七月十六日の夜だし、時期的に見ても犯人と推定される。田辺君が、どうやら殊

「歟者らしいぞ」

「は、私も犯人は、川上と云う男に相違ないと睨んだのですが、一応署長殿に報告した上、御意見を拝聴してからでも、大丈夫だと思ひまして……」

「ありがとう。だが、事は寸刻を争う場合だ、臨機の処置を取つて、どんどんやつてくれ給え」

「署長殿、これからすぐに、栃木県へ出発したいと思ひます。宿帳に記載してあつた栃木県那須郡珂村大字小川一三七に行き、川上腫

となる人物を洗つてあわよくば、犯人に捕縄を——」

「うん、よく云つてくれた。さんぐに飛廻つて、疲れて居るだろうが、もう一つ、頑張つてくれ給え。何んなら、応援を出そうか」

「いえ、大丈夫です、万が一、手に余るようでしたらあちらで応援を依頼しますからでは署長殿！」

「御苦労です。しつかり頼みます」

佐藤署長に見送られて、軽井沢分署を後に

した田辺刑事は、碓氷峠の彼方栃木県下へ潜入して行くのだつた。

追跡する刑事

川上腫は本名で、栃木県那須郡那珂村大字人小川に実在の人物だつた。近隣の人々について、探つて見ると、六月はじめから不在、二三日前帰つて来たが、素行のよくない男であることがわかつた。

「間違ひなく犯人だ！」

勇躍した田辺刑事は、嚴重に身支度すると、川上の家に踏込んだ。

「御免下さい！」

用心深く、土間に立つて、案内を乞うと、老婆が出て来た。

「どちらさんだね」

「は、川上君の友人ですが腫君は在宅でしょうか」

「あ、腫ですかいあれも困つた男でね、一昨日帰つたと思つたら、家に居つたことはねえんですよ」

「えッ、すると、どこかへ出かけたのですか？」

「あ、帰りませんでね……」

「どこへ行つたんです。遠方でしょうか」



「なにネ、あの極道者だ、町の小料理屋の女に迷っているで、あそこで、酒でも飲んでい

るだ——」

「あ、そ、そうですか」

「あんたも瞳のお友達なら、大した道楽者じやろう。親御さんが可哀想だ、あんまり極道しなざるなよ」

「はい、ありがとうございます。町の料理屋と云うと、どこか——」

「ワシは外に出ねえから、よく分らねえが、近所の人たちの話では、町の料理屋の女と、大分熱くなつて居るッて噂だ、何ちゆう料理屋か、ワシは分ねえんです。だがの、あなたさまの元気で、探して見たら、分るですやろ。何軒もある料理屋でねえし、一軒々々歩いて見たつて、大した事はあんめえ——」

「そうですか、いや、どうもお邪魔しました、失礼します」

「氣をつけて、行きなされ」

老婆と別れた田辺刑事は、町に急いで行つた。町と云つても、山村のことであり、那珂村役場のあるところに一流れ、商店や旅館、料理屋などが、並んで居るにすぎない。

だが、すぐ近くに那須温泉を控えて、その影響を受けてか、旅館や料理屋は、草深い山

村には珍らしく、設備がと、のつていよう

だつた。

田辺刑事は、太陽が西山に没するのを待つて、料理屋の門を潜つた。この村には、料理屋と名の付くものは、三軒しかなかった。『ことぶき亭』と云う、二階建の家だつた。

「いらつしやい」

もうすつかり、夜の装いをこらした女たちが、媚をふくんで、出迎えるのへ、

「内儀さん、居るかね」

「え、あんたは？」

「知合だ、奥だね」

「ええ」

田辺刑事は、奥六畳の唐紙を開けて

「ごめんなさい」

「あら、あなたは？」

「一寸失敬——」

唐紙を閉めきつて、女将の前に座つた。び

つくりして、危く、声をたてようとする女将

に、

「警察の者ですが、一寸お願いしたいことがあつてネ……」

「まあ、サツの旦那もお人が悪いんですね、

出しぬけに這入つてこられるんですもの、び

つくりするじやありませんか、何か、御用な

んですか」

「あ、一寸聞きたいことがあるんだ、こゝへ

川上と云う男は来て居ないかね」

「川上ッて、瞳さんの事ですか」

「あ、その川上だ、来て居るんだね一昨日の晩から——」

「おや、よく御存じですね、一昨日からずつと、居つづけなんです、かおるッて娘と、昔からの馴染で——」

「すると、今居るんだね」

「居ります、二階の座敷に——」

「そうか、では一寸失敬！」

「案内しましょうか」

「他の部屋に、客がおるかね」

「い、え」

「それなら大丈夫だ」

田辺刑事は、足音を忍ばせて、階段を上つた。シーンとしている。話声一つ聞えない。

「しまった」

不吉な予感、田辺刑事が座敷を片ッ端から開けッ放し、一番奥の座敷に踏込むと、敷つぱなした夜具の中には、人の姿がなく、枕許に空っぽのお銚子が、四、五本、わびしく転んでいた。

殊勲の捕縄

「女将、女将ッ」

「はい」

女将が飛んで来て、田辺刑事の言葉を聞いてびつくりする。

「どうも、変だ／＼と思つていたんですよ、二人手に手を取つて、ずら／＼ちまつたんですね」

「いつ頃まで、此処に居たんだ！」

「いつ頃までつて、ホンの、今の先までいたんですよ、旦那がお出になつたんで、逃げたんじゃないませんか」

「そうか、一寸前まで居たとすれば、そう遠く、行くまい、ようし——」

田辺刑事が階下へ降りると、早くもそれと知つた女たちが、同僚かおるの身を案じて探し廻つていたと見え、

「警察の旦那、裏です、裏の方へ逃げ出した音がしましたよッ」

「なに、裏へ——」

裏は田圃になつて居る。

田辺刑事が裏手へ飛び出した時、月明りの彼方に入影が二つ、

「おう、あれだッ。待てッ」

田辺刑事は脱兎のように駆け出した。こゝまで追い詰めて、逃亡されたのでは、長い間の苦心も、水の泡だ。夢中で走つた田圃は、山へつゞいていく。山中へ逃げ込まれたら、それこそ大変だ。

必死になつて追いつたが、足の速い男は、山中に姿を消し、逃げおくれた女を、田辺刑事が取押えた。

所轄署に出頭した田辺刑事は、佐藤軽井沢分署長に電話で報告すると同時に、栃木県警察部の応援を求めて、山中逃げ込んだ川上瞳逮捕の大搜索を開始した。

一方、田辺刑事は田圃のはずれで取押えた料亭『ことぶき』の酌婦かおること西崎とみ（二四）を取調べると彼女は涙ながらに、軽井沢事件は自分と一緒にいるための犯行である事をのべた。

かおるの涙ながらの物語りによつて川上瞳の犯行はいよ／＼明白になつた。

多分に自殺の恐れがあるので、長野県警察部は、全力を挙げて、川上瞳検挙の大搜索を行つた。

十日経ち二十日すぎた。宝積寺駅から汽車に乗り、東京方面へ潜入した形跡があるので警視庁当局に対して、通報された。こゝに警

視庁捜査課の活動するところとなり、旅僧に変装した彼は、浅草千束町、神奈川県川崎町、横須賀市と、知人や友人を頼つて逃げ廻つて居ることを突止められた。

そこで警視庁刑事部の伊藤、大塚両刑事と軽井沢から追跡して来た田辺刑事のために神奈川県橋樹郡田島村渡田に住む高田井清次郎方に立廻つたところを、先廻りして待ちうける三刑事のために大格闘の末逮捕されてしまつた。

『ことぶき亭』を逃げ出してから月余即ち、九月二十一日深夜のことであつた。逮捕された川上は、犯行一切をスラ／＼自白、強盗殺人の大罪により一二審共死刑、ついに大正六年十一月末市ヶ谷刑務所に於いて、絞首台上の露と消えた。

犯罪の裏に女あり、つゝしむべきは情事である。田辺刑事殊勲の捕物として、賞讃された事件。

（終）

女優のメスで切開された撮影所



にメスをあてたもので、彼女はレッキとした女医さんであることも変つてゐる。

マネシタ・ノイローゼ

撮影所というところは、夜が明けてみたら新語が生れていたといつた、それほど新語の好きな世界である「書きますわヨ」も忽ち流行したが、最近では「マネシタ・ノイローゼ」なんていうのが生れ、課長以上は「書きますわヨ」時代でノイローゼだというのですが、そつくりそのまんま「マネシタ」とは申しない、ちよいとヒネつてある。

「マネシタですよ、下は下ですナ、ここに原因があるんだから」なんていつの場合でも、男女間の紛騷は、ヘソから下が最大の原因を形成している、ヘソから上が原因したという事件は聞いたことがない。

「どうも書かれそうで心配してゐるんだよ」
「バーや料亭で男性達の会話にこんなのが表われているそうだ。」

さて、撮影所のマネシタをノイローゼにしてしまつた河上敬子の「女だけの部室」というのは、女

☆ 森赫子の「女優」は新派の世界にメスを当て、自分の裸身をもとに、世間の注目をあびた。

そして、芸界では「あらつ書きますわヨ」なんて合言葉が流行して手を握られた、ストリップパーが「書きますわヨ」と睨み、睨まれた男性がニヤリとしたといった光景が多くなつてきた。

流石に年増の女優さんは「かきますわヨ」といつた言葉のニュー・アンスを持つ、一種異妖な味にテるらしく、あんまり口にしない。なんせ「カキヤ」なる女性が出現している裏街道も社会にはある

この「カキヤ」は勿論文字の方縁がないテクニクだけのお話である

「カキますわヨ!!」
の音階に迫力はないけれど、こいつた男女愛欲の一駒の如き様相が察しられる。

「かいてもらいたいねえ、頼むよ」なんて申す男性は、文字の方でない行為を暗示していうのである。

いづれにしても、奇妙な流行語が登場してきたものである「かきますわヨ」はなにも芸界ばかりじゃない、堅気の社会の女性もしき

りに口にしてゐる。

いづれにしても「書きますわヨ」の内容も、愛欲の職場メモで「根に深いものはない」といつてゐる人もあるけれど、織田作之助未亡人が「マダム」を書き銀座の夜に集る男女の愛欲を「書きますわヨ」である。書いてゐる人が、その場に居合せたことと、文章なんて書いたことがない人達だから、スバツといふ切点面白いという見方もある。

「書きますわヨ」の異色は数々あるが、元日活の女優の河上敬子が書いた「女だけの部室」は撮影所



医さんの随筆であつて、撮影所のお話は「女優ABC」のなかにちよいと出てくるだけ。

ただ、今まで女優さんの本も数々出版されたけれど、あからさまに女優の性欲に觸れたのは、同じ女優さんである彼女がはじめてである。

昔から、撮影所というところは、噂の発生しやすいところで又、噂になりやすい面白い話の山積みしているところ、怪文書といつた具合の物なら、やたらとお目にかかれる世界である、まつたく、閨房の隣りに寝ていた奴が書いたのかと思うくらいに詳しい怪文書もありますからな。

会社の事や、思想関係、金品着服みたいな怪文書は、人気がないけれど、ベットの下に潜つていた

のではないか式の怪文書だと流石に大変な人気。

女優Y子の同期生が書いた怪文書などは同性愛ですつかり呆然としている間にY子に主役をとられ主役をとつたY子は著者であるC子を振り向きもしない。

Y子の同性愛ぶりをC子が、こ

と細かく、細大洩さず書きとめた怪文書がガリ版で表われてびつくりしたことがある。

あれなんぞは、金を出して買ひ取つた奴までいたんだから、書きますわヨ、は、なにも昨日今日の出来事ではない。

ただ世間に本として売り出したのは今回がはじめてである。そして、女医さん女優の眼にうつた撮影所という点が風変わりである。書いてある内容は、別段びつくりするほどのことではない。

医者の眼にうつた 愛欲

撮影所の掃除婦は、撮影所の裏窓を眺めている、彼女が掃除婦の話にも一応耳を傾ける価値があるというのも故なしとしない。

「ちよくちよく水洗便所がつまつちまうんで私達が竹の棒でついつて掃除をするけれど、管の中から、コンドームやズロースが、あとから、あとからたくさんでてくるんだからねえ」

「いやになつちやうよ……」てな事も起つてくるから、彼女もびつくりしているけれど、医学的に「人の多い撮影所の一隅で、この事実のいくつかが現に起つてい

い。

それに、演技課長という俳優には絶対な権力を持つ地位だから、余程、人間がしつかりしていないと、とんだ穴を掘つてしまう。

据え膳の前に坐つたような気分になつた松崎氏は、大部屋の女優さんにつぎからつぎと肉体の提供を求めたという。

そして、意外な配役がふり当てられ

「あれも、つまり人身御供といつたもんさ」

と、仲間内で噂されていた。据え膳に理屈はない、ただ喰つただけの意味を大部屋女優が計算したりしていたといつた喰い違いもある。

「昔からいろいろとあるけれど、それは仕事とは無関係なもんですよ」

と云う向きもあるから、女優側の意識過剰ということになる。

スカートにのびた手

河上敬子は文中で、「女優といえども「女」である証拠に、撮影所食堂の一角に集つて浮世討論会がはじまつた……」

その中で、浮世討論会の一人が

「松崎さんには困ったわ」と語り出した。演技課長の家は、テレビは勿論、電気洗濯機やら贈答品が家の中に山になつてゐる、贈り物の金高で役が振られる。何千円台の贈物ではとつても駄目だ。

日活が再開して間もなく、その困らされたC子は、松崎氏他二、三人と赤坂のナイト・クラブに踊りに出かけた。その帰途、車の中で、

「マリリン・モンローは下着をつけていないそうだけれど、君はどうなの？」

と、だんだんスカートのびた手を変なところに迷いこんできたそうである。

大きな声を出しては、いかにも大人気ない、そうかといつて黙つてゐると、グングン手が伸びてくる。

そのあげく「知つてゐる家があるから寄つてゆこう」とサカサクラゲに引つ張り込みながら、

「必ずいい役をつけてやるからね……」

殺し文句である。ダイヤを買つてやるよとバーの女給に囁くのと同意語である。

大部屋スターにとつては「いい

役」という言葉はダイヤ以上に光り輝いてゐる。しかし、C子は身をひるがえして逃亡した。その背中に「おぼえていろよ!!」という声が飛んだ。

そして、C子は他のプロデューサーに「こんどは軽い役で使つてあげるよ」といわれ、どうやら、決定しかかると、松崎氏の手でサツと配役面から消されてしまう。

「心中未遂事件で、誠になつていい気味だわ」

C子ばかりじゃない、何人かの大部屋スターが快哉を叫んでゐるといつた調子である。

心中に追いこまれた秀才

大部屋スターに快哉を叫ばしめた、心中未遂事件の発端は、やつぱり「秀才も腎虚には勝てん」といつた医学的なものである。

相手の芳川千鶴は照明係をやつてゐる亭主がゐる。いわば、役からんだ三角関係で、しかも人の目につくといつた二人の振舞い、

「あれじゃ、いくらなんでもまずいだろう?」

注告した人もあつたが、上げ潮に乗つた松崎氏は耳をかさない。

「良人がゐることなんかは、二人

の間の障害にはならなかつたんですからねえ」

これは、明瞭に戀愛であるという人も多い。

「戀愛ならば、河上さんがいうように、なんでもかんでも撮影所という大きな運河に吞まれた女優といういい方は当りませんネ」

なのである。それはそれとして、世間並みに申せば御乱行で、古くから、松崎氏の人柄を知る人には「クリスチャンの奥さんを持つて、真面目一方の彼が、どうしてあんなつたか、まつたく不思議だ」というがやつぱり女優の生殺与奪の権を握つた、地位のなせる技である。

腎虚の虚脱感もあつたらうが、一説によると松崎氏を日活が抜いたのは、彼の親分格にあたるO氏を抜きたかつた。

しかし、いきなりO氏にぶつかつても駄目だろうというので彼の方が先に抜かれた。

いわば、当て馬の役目である。そして、O氏の方は依然として動く気配がない。そこへ、南田洋子が大映から引き抜くように松崎氏は命令を受けた。

ところが、彼にはそれだけの手腕がない、彼に実力なしとみて、日活幹部が直接南田にぶつかり抜いてしまつた、彼の株はガクンと落ちたのは、他の会社でも同様、特にこの社界では激しい。

ヤケになつた彼は酒と女の泥沼に落ちた。

「河上君は、だから、撮影所にメスを当てたが、ここまでは見ていないようですね」

と、いつてゐる人もある、無理な話かもしれない。

とどのつまり、心中事件となつた。

普通なら、会社や仲間うちがヒタ隠しに隠すところだが、逆である。悪業をあばかれて解職のチャンスを与えられ、女優の敵として消滅してしまつた。

「自分の店の商品を喰つて、商売が繁昌した例はないよ」

撮影所に昔から伝わる格言である。

メス持つ手にもぶる

河上女医先生は後日、テレビ・スターに転向した芳川千鶴に再会した。

「今から考えてみると、撮影所時代が一番楽しかつたわ、セリフを

一言か二言いえば、それで少くとも一万円は貰えたでしょう、それに毎月が保証されていたし、今は、一万円のお金を取る為には大変よ……」

その寂しい後姿に、女医先生も感傷的になつたろう。花の命は短かくて、というが彼女の美貌なるが故にかえつて不幸な十字架を背負つた。

心中も恩義のあつた松崎さんに同情し引きづられたのだろう。

メス持つ手にもぶるといつた心境である。所詮人生とは一瞬の愛欲の激しさで、結局は寂しいもの。

映画界には、そういった実例がたくさん枕をならべて横たわつて

いる。寂しいといえ、箱根ロケが雨で中止となり、東京へ帰ることになつたするとY子が川上女医先生に「お金貸して下さい、家に帰ればあるのよ、でも二等車に乗つて帰りたいの、じゃないと、みつともないでしょう」

川上敬子にいはせると、私があるで金のなる木を持つてると思つてゐるのだから、私の経済に重大な脅威である。しかも十人の金儲を受け持つに至る。ちやんと



返済する人は半分もない、その点男性の方がキチンと返済してくれる。彼女自身も他のニューフェイス同様、月給七千円、ロケ手当が一日百八十円。無理もないお話を、彼女は女医さんの収入があつた為にタカられたのだろう。

「貸し借りは無神経なのはこの世界の処世術かもしれない」と、彼女はいつてゐる。貸し借りの中に貞操まで入つたりするところがあるのだから「無神経」というものは必要悪みたいなものかもしれない。

利口な女はスターになれぬ？
とにかく、彼女は、映画女優という眼で映画女優にメスをあてた。普通なら返す刀で己れを切る。

ところだが、彼女ほどの女性になると、大抵の男は及び腰になる。女優としての彼女、あんなりお客様に印象に残つてゐない。山村聰演出主演の「沙羅の花の峠」に初出演しているが「本格的に注射器を扱えたからよ」なんて声もある。

「太陽の季節」にも出演しているが彼女の存在に気のついた人はいない。

「利口な女性にはスターになれませんよ」と云う人がいるが、そうかも知れない。嘗て東大出の秀才といわれた中村明は、スターの人気を位持出来なかつた。

映画界にメスをあてた彼女は、目下博士號の為に勉強中で、ラジオ・ドクター、新聞の医療相談まで受け持ち、著書の中で、「足のウラの性感」「処女の価値」「一歳から五十歳までの性欲論」「子宮無用論」では女性から妊娠を除いて男女同様にせよ、といった無邪気なことをいつてゐる。

「映画女優というより、やつぱり

お医者さんですよ」と、いう声の方が多いが彼女も「書きましたわヨ」で、日活を去つたが、東映他三社から契約を申し込んできている。

頭のいい女優さんは恐い、特に最近の若い女優さんは恐れられている。

やることにハッキリして、オトナ共の意表を突いてくる。前田通子が裸を売り物にして、今年の一夏で女を上げてしまつたのなんぞは、考えれば、あまりにも素朴なお話かもしれない。

「しかし、その恐るべき女優さんをどうして契約しようと引つ張るのだらうね？」

なぞと不思議がることは一つもなさそうである。何故なら、彼女の名前は、インテリ人種に鳴り響いてしまつた。今度こそ、ポスターに彼女の名前を堂々と刷り出して損をしないであらう。

そうすると、メスをあてた彼女が、又、利用されるということになる。

利用されるくらいでなければ、映画スターにはなれない。

演技の方はそれからである。

太陽スターの石原慎太郎も「柄



で芝居?」をやつて成功したよう
だ、そして、彼も撮影所にメスを
あてている。

「大部屋のヌシみたいな男が、大
きな顔をするなとすごんだ……」
と、いつたようなお話から、や
つぱり妙な世界だといつてゐる。

「昔は、撮影所内の出来事は、特
種な場所だからという目で、スタ
ーが見てくれていたもんですがね
え」

古い脇役さんが解せないといつ
た面持ちでこう語つていたが、今
は逆で、「一般の常識とまるで違
いすぎる」と云ふことで、「書き
ますわヨ」になりつつある。

「勇敢ですね、昔はそんなことを
書いたら、どこでも鼻つまみにな
つたもんですよ、やつぱり時代で
すナ」

自虐の時代である、
まづ、自分を斬つて見
せなければ、お客さん
は成程といつてくれな
い。

「書きますわヨ、で、
書いたら、必ずや旋風
を起すであろう女優さ
んもたくさんいるのに
ねえ……」

そういう人は、なかなか書き
ますわヨになつてこない。
「阿呆らしいからだろう、他の方
でかきますわよなんてやつてんだ
ろう……」

洒落たかきますわよ旋風の方に
鞍変えしてゐるらしい。

撮影所は重体か?

腕の下の毛を房々と、なびかせ
て、なんとなく人気スターになつ
てしまつたフランス婦りの異色女
優谷洋子が。

「撮影所というところはライオン
やトラのいるジャングルです」

と、真青になつて憤慨し、さつ
さと帰佛してしまつた。来た時に
比べて、ひどく後味の悪い帰り方
で、気にしている連中も相当にい
る。

彼女の場合は、別にスカートの
裾の方がどうしたという訳ではな
い、まともに、日本の撮影所とい
うところに正面からぶつかつて、
「ジャングル」だと決めこみ、恐
いところであると声明を発表した
までのこと。

「ちよいと、純情すぎるようなと
ころがあるけれど、彼女も、書き
ますわヨぐらいに軽くイナしてお
いた方が洒落気があつて、又くる
時に樂だつたらうにねえ……」

口でいうより書いた方が、どう
やら当今では歩があるらしい。

大体、彼女の場合はローラン・
ルサーフルというフランス映画の
俳優の旦那様が一緒だから、色事
とは無関係。

むしろ、ドライな方面の金銭的
な問題で、「裸足の青春」に谷洋
子の方は役で出演したが、亭主の
ルサーフルの方は「まあ、お付き
合い」といつた軽い調子で、出演
して貰つたが「たとえ、ワン・カ
ットしか出演しなくとも、俳優の
場合なら、ちゃんと出演料を請求
できる」

と、高額な一本分のギャラを要
求してきたので話がこぢれてしま
つたらしい。

「あやふやでいい加減な日本の映
画界……」

と、彼女は憤慨しているが、日
本流に申せば、森繁久彌がちよい
と、スタッフの顔を立てて、無料
出演をするとか、お付き合いが相
当に重くみられる映画界である。

「彼女はフランス流にきたからネ」
セーヌの仇花は、お金の方面で
は、腕毛房々どころの騒ぎじゃな
い。

「更にどうも、しつかりしたもん
で、あれを多少は見習わなくちゃ
いけませんかもしれないナ」
と、申している俳優さんも少く
ない。いづれにしても、彼女の方
は「日本の撮影所はジャングル」
だときめつけて行つてしまつた。

「腕毛のジャングルばかりに気を
とられてゐる間に、こちがトラや
ライオンにされちやつたよ……」

近頃の若い女性の、しつかりさ
加減というものは、セーヌの仇花
どころの騒ぎじゃない。世間の裏
も表も心得えた玄人達をアツとい
わせるような、正面攻撃を平然と
やつてのける。

「あの顔で、そんなことをいうと
は、ちよつと想像がつせませんね」
暇さえあれば、亭主のルサーフ

ルとムーチョムーチョの愛の囁きをやつている小柄のこの女性が、俄然ヒラキ直つて凄み、さつさつと日本の撮影所に愛想をつかして帰つてしまふあたり。

いわゆる苦勞人なんていわれてゐる女優さんには出来ない芸当でしょうね。

まつたくその通りで、この社界では若勞して一人立ちになつた女優さんというものはみんな、ジャングルの中でしんまりと溫和しくしている。

「あれほど、自我の強い山田五十鈴や田中絹代の兩女史どさえ、ずいぶんひどい仕打ちをされたことがあつたそうだけれど、面と向つて騒ぎ廻つたことがない」

いつだつたか、飯田蝶子女史が嘆いていた。

「今時の若い女優さんは、ちよいとどうかと思うことが多いわネ。樂屋風呂で先輩後輩の順がなくなつたのは仕方がないとしてもサ、お湯の中から入つてくる人を見てゐると、十人のうち九人までがメーキヤップを落さないで、いきなり湯船に入つちやう、そうした人のほとんども、下湯をかけて入らないんだから……」

下湯とは、女優ばかりじゃない、女が風呂に入っている時の常識である。

お下につけ湯をして入るくらの女らしは欲しいもので、蝶子女史自身が女性に失望してゐるといつた鹽梅である。

「いうことだけはいうからね」世代の違いもあるだろうし、どつちが正しいという点もつけにくいけれども。

昔の女優さんてものは、いじらしいくらいに純情だつたから純情すぎて、女優になると転落してしまつた人も少くない。

そこへいくと、最近の女優さんは、スターになると、まづ、映画機構の不滿を堂々と発表する。

岸恵子が「泥沼」といつたことがある、そして有馬稲子、久我美子とにじんくらぶを作つて独立した。

「切角、育て上げたのにねえ」と誰かが云つたがここにも、育てる側と育つた側の悲劇がある。

スターの独立は、目立っている。独立出来ないようなスターでは、スターとして値打ちがないような氣配さえある。

「スターを育てる張り合いがまつ

たくありませんねえ」

というスカウトも少くない。そうかといつて独立しようという氣慨のあるくらいの素質でなければモノにはならない。

「美貌の暴力」と「書きますわヨ」とは正反對の立場で嘆いてゐる人も少くない。

「書きますわヨ」なんて反抗的な立場をとらないで、「撮影所にいる」ということで、充分に資格になるのよ」と、つつましくも大膽に仰言ひまして、ちやん、と後々の生活を考へてゐる連中も少くないが……

河上女医先生に、いわせると、「ミスKだつたT子さんは金持ちの息子と近く結婚する。T子さんは希望に胸ふくらませてゐるが、結婚とはやりなあしのきかない実演だけに、I子さんのようにならなければよいがと思う」

I子さんは十カ月前に美しさを見染められて結婚はしたものの、もう離婚してしまつた。男がドーラン化粧に化かされたのか、虛榮心を満足させるために女優をめたつたのか破綻は案外そんなところにあるのだ。

女優といわれる女たちの大半は

こうし生涯をたどる。それを知つてか知らずか、今日もニューフェイスの応募者がワンサと押しかけた」

玉のロシから転落した女優さんは数限りがない。

「女医としての彼女の役目は、二年の撮影所生活で終つたようである。」

彼女が他の会社と契約するかどうか、大い興味がありますね」

と、いつてゐる人も相当にゐる。下手をすればメスを持つた彼女でさえ、いつ、他人のメスで「書かれますわヨ」にならないとも保証は出来ない。

現代はどこも、みんなジャングルなのであらう。無防備都市とニツク・ネームを貰つた女優さんもある。

オープン・シティで開けばなしである。しかも、結構、幸福そうに暮してゐる。メスは振方どらにもなる。医者がみんな幸福とは限らない。

ダンサー
強姦殺人事件

兇魔の觸手

久木高志
秋吉 巒・画



MP 出動!

連日異常な酷暑が続いて、その夜は十一時近くなつても、微風さえ感じられなかった。扇風機は暑苦しく、廻つていたが、蒸し暑い熱風を送り出すだけであつた。

T市の團陸軍師團司令部跡に設けられた米軍憲兵司令部では、夜間勤務のMPはみんなパトロールに出払つて、デスク勤務軍曹のジャンは、ぼんやりと故郷のセント・ルイスの町のことを思い浮べていた。

ふいにけたましく電話のベルが鳴つた。受話機を取ると、先方は日本語で何やらわめいている。

「チョットマッテネ」ジャンは、部屋中に轟くような声で、奴鳴つた。

「ヘイ、ジョージ、テレフォン（電話）」やがて、二世のジョージ、山村軍曹が、眠そうな顔をして、部屋から出て来て、受話器を取りあげた。

「フム、フム、フム」

ジョージの顔は、段々、真顔になつていつた。

「よろしい。ではすぐ出掛ける」

電話を切つたジョージは、ジャンに、

「ダンサー二人と男二人が、国府駅附近の林の中の道でジープに乗つた三人組に襲われたんだ。一人のダンサーは、駅まで逃げて来て、駅員に助けを求めた。この電話は、T市の中央駅のRTO（鉄道輸送事務所）からだ。すぐ附近地区パトロール中のジープに、現場に急行するよう連絡頼む」

ジャンは、背後の棚に設置してある短波無線電話機にスイッチを入れて、

「ハロー、ハロー」

とパトロール中MPを呼び出し始めた。

ジョージは、ジャンのデスクの横においてある革サックに納めた拳銃を取り上げて、肩に掛けた。

そこへ田山巡查部長が食堂から戻つて来た。田山部長は、T市の中央警察署から渉外連絡掛として憲兵司令部に派遣されているのである。

「田山さん、また事件勃発だ。一緒に行きましょう」

MPは、事件が勃発すると、司令部勤務の

渉外係警官が日本人通訳を連れて行くのが慣例だった。

「また、例のが出ましたか。すぐお伴します」

田山部長は、オフィスの隅の自席に脱ぎ捨てておいた上衣を着、警棒を腰に吊した。そして、オフィスの前の広場においてある車に乗近んだジョージの後を追つた。

「少しぶつ飛ばすから、よく掴つていて下さいよ」

ジョージに云われて、部長は、助手席にしっかりと坐り直した。

ゲート（営門）を出ると、すぐ前は、堤々たる国道が、一直線に国府駅の方へ走つていった。ジープは、みるみるうちに速力を増してメーターの針は、七、八十哩辺りを往復していった。

「ジョージさん、これで深夜に女を襲う事件は、六回目ですわ。みんな同一犯人らしいですね」

と田山部長が云うと、

「今度も例の三人組の仕業でしょう」

とジョージが答えた。

終戦の翌年だったが、P市の周辺では、ここ一カ月の間に、米兵三人組の兇悪犯罪が連

続的に起つていた。

郊外のK村では、新婚若夫婦の家が襲われ金品を強奪され、郊外飛行場の引込線の所では、十七、八才のパンパン娘が殺され、深夜の国道ではアメリカの民間人の自動車^{シイリアン}が襲われた。MPは、警邏の回数を増し、三人組の逮捕に躍起となつたが、大小の犯行は依然として続けられていた。

惨澹たる現場

T市を通り抜けると、部落と田畑が続く淋しい国道で、十分ばかり走ると、国府駅の前^{シイリアン}の道に出た。

ジープは、駅の構内に突つ込むようにして停車した。

田山部長は、車から飛び降りて、駅員室の方へ駆けて行つた。

やがて部長は、涼しそうな水色のワンピースを着た廿歳前後の美しいダンサーを伴つて戻つて来た。背の高い、脚の恰好の好い女性だった。

「ジョージさん、この人と友達の三人が、三人組に襲われたんです。女の友達は、林の奥の方へ連れて行かれたといひます」
「じやすぐ、現場へ行こう」

ジョーシは車を廻した。

部長は、駅員に被害者を托して、車に飛び乗った。

車は、駅前からすぐ横に折れて、やつとジョーシが通れぬ狭い道を走つていった。やがて前方に、黒々とした林が現われた。三百メートル先まで明るいヘッド・ライトは、暗い林の中を真昼のように明るくした。林の真中頃には、左右に開けた空地があつた。

「ジョーシさん、ここですよ」

ジョーシは車を空地に乗り入れて、車を停めた。暗い林の奥まで、光りが届いて、フラッシュ、ライト（懐中電気）も不要な位である。

二人は、どん／＼林の奥へ入つて行つた。林の真中頃に稍開けた草地があつて四辺の草叢がめちや／＼に踏み躪られたままだつた。

そして一本の松の木の下に、ピンク色の服をまとつた死体が、道路に向つて平行に仰向けに倒れていた。下半身は露出して、両脚を揃えて伸ばし、両手を頭の方にあげて、絶息している。頸部には、強い絞頸の跡があり、顔面は、口から噴き出た血で、真赤だつた。

恥部には激しい抵抗を物語る裂傷のあとがあつた。

附近には、被害者のハンドバックやハンケチ、桃色の引裂かれたパンティなどが散乱していた。

被害者は、真正面から襲われ首を絞められ絞殺後に暴行を加えられた模様だつた。

ハンドバックの中の金銭はじめ腕時計、頸飾りなどは無くなつていた。

犯行後間もないと見えて、死体はまだ生温かつた。生気を失つた女の派手な化粧顔が、物の哀れを唆つていた。

ジョーシも、田山部長も、凄惨な光景に圧倒されて、無言の儘、現場附近を猟犬のように嗅ぎ廻つて、証拠物件を求めた。

ところが、犯人の手掛りとなるような遺留品は、何一つ発見されなかつた。

そこへパトロールのジムとマックの車が到着した。

それから卅分程して、T市の警察署から、捜査官の一行が到着した。

直ちに現場写真が撮られ、被害者の死体はT市の医科大学に送られて解剖に付されることになつた。

ジョーシは現場をジムとマックに任せて、

一先ず国府駅に戻り、被害者を連れて、憲兵司令部に帰つた。

被害者には、気の毒だつたが、事情を聴取して、一刻も早く兇悪犯人を逮捕しなければならぬ。ジョーシは社会の治安を乱す兇悪犯罪は、アメリカ人だろうが、日本人だろうが、徹底的に絶滅しなければならぬ人道の敵だと堅く信じていた。

麗人ダンサー

いま、ジョーシの前に腰掛けて陳述している山本さち枝（廿三歳）は、日本の女性には珍らしく大柄で、外人に好まれるタイプだつた。色が白くつて皮膚は弾力があり、半円形の濃い眉、高い鼻、締まつた格好のいい赤い唇、こんもり盛り上つた胸の二つの円丘、ふくよかな腰から股の線、ふさ／＼した黒い髪は、南国の情熱的な女性を思わせた。

さて、さち枝の陳述に、次のようなものだつた――。

美貌で理智的なさち枝は、働いている国府ダンスホールでも、チケッツの売上げは、いつも一二を争つていた。

さち枝は、東京の有名な女学校の専門部を出た才媛だつたが、戦争中に死んだ陸軍大佐

の父の恩給は停止され、たつた一人の弟は南方で戦死し、病身の母を抱えて生活に苦しみ終戦後、近所の人が国府ダンスホールの支配人を知っていたので、その縁で働きに出たのだった。

専門部で習った正式の英語が役に立ち、美貌と才智は、忽ちアメリカの兵隊の間に評判になつていた。

殺された高橋君江(廿一歳)は、群馬田舎から出てT市の軍需工場に働いていたが、終戦直前の一空襲で、工場が焼け、暫らく、ぶら／＼していた。そこへ国府に進駐軍専門のダンスホールが出来、ダンサーを募集している話を聞き応募したのだった。背の低い、田舎丸出しの風采だったが、イブニングをまとい、あちら風の化粧を覚えると、どうやら、板に、附いてきた。ぶつきら棒の性格だったが、さち枝に親しんで、いつも帰りは一緒だった。

さて事件の起つた当日は、さち枝も、君江もいつものようにホールに出勤して、十一時の閉場まで何事も無かつた。唯、君江が、附属のバアで客に飲まされたお酒に酔つて、ホールが仕舞うと、ダンサー部屋に戻つて横になつていた。

「君江さん、気分どう」

さち枝が尋ねると、

「もういいの。そろ／＼帰り仕度をしなければ遅くなるでしょう」

ダンサーやバンドの連中は、潮が引くように先に、帰つてしまつて、広い建物の中は静かだつた。

「最終電車まで、まだ大分あるけれど、無理しないで、明日の朝までこゝに休んでいたら」

さち枝がそう云うと、君江は、

「そうね」

と云つてゐる所に、バンドの佐々木と大山の二人が姿を現わした。若い方の佐々木が云つた。

「君江ちゃん、どうだい帰れるかい。さち枝さんと二人切りでは、帰りが危いと思つて待つていたんだ」

「どうも有難う。悪いわねえ」

そう云つて君江は、起き上つた。

さち枝は、君枝が帰るために着更えた服の胸の所が汚れているのを、眼ざとく見附けて、

「あらッ、あんたの服汚れてるわ」

「さつき、トイレに行つて少し、吐いたせい

よ」

「じゃ、私の着更えがあるから、それお着なさいな」

さち枝は、自分のロッカーから、派手なクリムソン色の服を持つて来た。

君江は、それを着換えてから、四人で、ホールを出た。

月の無い美しい星ばかり輝いている夜だつた。

そよとも風は無かつた。

ホールを出ると、附近はT川に沿うた遊園地で、街灯も輝き、淋しくなかつたが、土産物店や飲食店などの建ち並ぶ一廓を過ぎると、田畑の間を広い新道が国府駅の方へ通じていた。

四人は、暗いけれど、慣れた近道を歩いて行つた。その方が、数町ばかり近いのである。「ホールで往復のバスを運転するとか云つてたけど、何時になるのかしら」

さち枝の言葉を受けて、佐々木が、「ガソリンの配給が仲々貰えないので、困つて支配人が云つてましたよ」

「早く実現しないかなあ」

とさち枝がつぶやいた。

いつもの事だけど、夜道の遠さは、僅か十

七八分のことだつたが、車が無いのは不便だつた。

林の中の淋しい道に差し掛ろうとする頃四人の背後に、背の高い三つの悪魔の影が、怖ろしい爪牙を隠して、近寄つて来ていたのである。

跳梁する悪魔

いつたい終戦になつて、一せいに内地に進駐したアメリカ兵は、ニューギニア・フィリッピン、沖縄等幾多の戦場で、日本兵と日兵戦を交えた連中で、その頑強さを知つていたから、大概の兵隊は、日本人を畏怖していた。中には例外的に、兇暴な兵隊がいたが、それはどこの国の軍隊にもいる極少数の命知らずの我武者羅な乱暴者だつた。

また、戦争が終つて本国に帰る帰還兵の代りに、戦争の経験のない新兵が補充されて来たが、こんな連中は、戦争が終つたのに召集解除されないで、遙々、海を渡つて極東に送られたことに不満をもつて、暇さえあれば、酒と女に耽溺した。そして日本人の強さを知らず、全く怖い物知らずだつた。

T市の郊外には、航空部隊の外に、工兵隊があつたが、そこに配属されている黒人兵に

は、悍猛な兵隊が多くて、いつもよく事件を起した。黒人兵には、飲んだくれが多く、すぐ女のことで喧嘩口論を始め、MPから鼻つまみになつていた。

だが、戦場で赫々たる武動を立て、胸に殊勲章を示すリボンを附けている連中の中には、メキシコ国境に近い鉱山町出身の暴れ者が多かつた。戦場の勇士は、平和な社会の不法者というわけである。

類は友を呼ぶ。T市駐在の工兵部隊、高射砲部隊、それから空軍部隊を通じて、暴れん坊は、街のパンパン宿や酒場、ダンスホール等で、お互に知り合い、そうして隊伍を組んでT市や近在の町村を荒し廻つた。

仲間同志の喧嘩は、いつも女の奪い合いから始まつた。白人は黒人と対立し、パンパンも白と黒の両派に分れた。

顔や身体に銃傷やナイフ傷があつて、腕には、鬨やハート（心臓）の刺青をしたアメリカのあんちゃん兵隊が、夜の世界に君臨していたのである。

さて事件の起つた当夜、国府ダンスホールで、散々飲み且つ踊つた三人組は、まだ、何か満されない心持でホールを出た。

「ヘイ・ジョー、あそこに素適なガールがい

るぜ」

仲間が注意したので、車を運転していた大男が、ヘッドライトの光を向けると、男女四人連の姿が林に向う道を足早に歩く姿が、はつきり光芒の中に浮び出た。

「よおし、追つかける」

大男は、そう云つて、車を戻して狭い道に乗り入れた。

前方を歩いている男女四人は、林の中の道で、ジープをやり過すため、道端に避けた。

大男は、林の中の空地で車を停めると、車から飛び降りた。後の二人も続いた。

急に停車した異様なジープに驚いた女たちは、男たちの背後に隠れた。

若い復員兵の佐々木は云つた。

「もしもの事があつたら、大山さん、あんた二人を連れて駅に逃げて下さい」

古い軍楽隊出の大山は、こつくり點頭いた。

杞憂は事実となつた。

三人の背の高い男は、四人に近附くと、佐々木と大山に向つて、鋭いストレイトで掛つて来た。

敏捷な佐々木は、相手の一撃を外すと、体当りで、大男を倒して、次の男に向つた。

「大山さん、逃げろ」

林間の血闘

佐々木は、胸を狙つて来た男の腕の逆を取つて、ひるんだ所を足で腰を思い切り蹴飛ばした。

それから大山と組み合つた三番目の男の喉輪を改めた。

「ぐうッ」

変な呻き声を出して、男は、大山を掴んだ手を離した。

「大山さん、今だ。早く」

大山は、二人の女の手を掴んで駆け出した。

その背後を、地面から起き上つた大男が追つた。

佐々木は、猛犬のように、大男の背後に飛び附いた。

二人は、畑の中で、転げ廻つて乱闘となつた。

腰に佐々木の一撃を受けて倒れた二番目の男は、尻のポケットから拳銃を取出すと、その台尻で、いきなり佐々木の後頭部を撲りつけた。

「あッ」

と叫んで佐々木は、畑の中にうずくまつた。

跳ね起きた大男と共に、二番目の男は、逃げて行く三人の男女の黒い影を追跡した。

息せき切つて走る三人に、林の出口で追ひ



附いた大男は、君江の肩を鷲掴みした。

「大山さん、助けて」

大山は、さち枝の手を離して、大男に向つたが、突き飛ばされて、立ち直る所を、拳闘の手で、頭といわず、胸といわず、滅茶々にパンチを加えられ、地面に転がつて仕舞つた。

さち枝ひとり、狂気のように、遠くに見える駅の灯目掛けて走つた。

やがて二人の悪魔は、脅えて立つ君江の身体を抱き上げて、元来た道に引き返した。

「助けて」

君江は、絶叫したが申妻はなかつた。

手足をばた／＼させたが、鷹に捕えられた小雀同然だつた。

兇暴な血に狂つた悪魔は、草叢をがさ／＼させながら、林の奥へ奥へと入つて行く。

やがて、君江の身体は、どすんと柔い草の上に放り出された。

最後の悲鳴を挙げた君江の口の中に、男たちは、ハンケチらしいものを押し込めた。

それつきり、君江の声は聞えなくなつた。

……

それから何分かして、二人の男の影が林の奥から出て来て、ジープに近付き、ヘッドライトを点けた。

二人は、佐々木に首を締められてぐつたり

倒れている仲間を車に抱き入れ、エンジンを始動させて、その場を何処ともなく元来た道を引き返していった。

畑に倒れた佐々木が、意識を取り戻した時後頭分が激しく痛んだ。

それでも、起き上つて駅の方の道を、蹣跚とたどつて行くと、林を出た所に、大山が道端に転がつていた。

佐々木は、大山を助け起し、駅の方に歩いていった。

「残念だ。残念だ」

佐々木は、痛む傷に顔をしかめながら、連呼した。

「まあ、大変な血よ。すぐお医者様に行かなければ」

駅についた二人の姿を見たさち枝は叫んだ。

投げた網

惨劇の一夜を殆んど眠らないで、さち枝の陳述書を取り、それをタイプに叩いたジョーシは、翌朝八時になると出勤した捜査将校のロビンス中尉に会った。

中尉は、ジョーシの詳細な報告を聞いたが中尉の命令で、この事件の捜査を担当するこ

とになった。

「とにかく、日本の警察とも協力して捜査するんだね。犯人は、スペイン系らしいから、徹底的に洗うんだ。それに三人組がジープを使つたのは今度が始めてだ。ジープを使つた連中から調べ上げれば、案外、早いかも知れん」

中尉は、参考にといつて、ジョーシに、机の上に載つてゐる屍体検案書と現場写真を渡した。

「まあ、一生懸命やり給へ。甘く行くと、君はプロモーション（昇進）出来るよ。現実の犯罪は、探偵小説の謎解きとは、大分勝手が違う。君の名探偵振りを期待するよ」

ジョーシが、探偵小説の愛読者なのを知つてゐる中尉は、笑い乍ら云つた。部隊のスペシャル、サービス（娯楽班）の貸出文庫の探偵小説を全部読破し、次々に新刊本を漁るのが、ジョーシの唯一の楽しみだつた。

「精々、シャロック・ホームズやフィロ・ヴァンス張りてやつてみます」

ジョーシは、冗談を交えて答えた。

ジョーシに取つて始めての大事事件だつた。今までは、窃盗とか服務紀律違反、交通事故、パンパン検査、闇物資取締のようなありふれ

た事件ばかりだつた。

（大いにやるぞ。平和な社会秩序を乱す人道の敵をやつつけるんだ）

ふと、ジョーシの眼前には、頬に真珠のような涙を流した美貌のさち枝の顔が浮んだ。（可愛想に。君にあげるプレゼントは、兇悪犯人の逮捕が一番だ）

やがてジョーシは、事件の当夜ジープを使つた人名のリストを作り上げ、十二時前後に各部隊の営門（ゲート）を出入した人物を調べ上げた。

医科学からは、死体の解剖所見書や被害者の衣類、所持品に就いての詳細な鑑定書が手許に届けられた。

殺された君江の持つていたハンケチ、洋服下着類から検出された犯人の血液型はO型であつた。死因は、強姦致死によるものと推定されていた。

更に、国府ダンスホールに行つて、当夜負傷した佐々木、大山の両名から、陳述を聴取した。

その晩は、暗夜であつたため、残念ながら、犯人の人相は、はつきりと、認められなかつた。

それから、さち枝とナンバーワンをいつも

争つた水島アンナにも会つて、いろいろ事情を聞いた。アンナは、毒々しい化粧と真赤なドレスを着た毒蛾のような感じの女だった。事件が起つてから三日目に、ジョージは、最初の手懸りをつかんだ。

T市の警察の協力で、全市と附近町村の西洋洗濯屋、飲食店、土産物店、古着商などに血痕附着のような疑わしい兵隊の衣類が出た時には、即刻、警察署か憲兵司令部に報告するようにと特別品触が廻つていた。もちろん、殺された君江の持つていた腕時計や頸飾りも記載されていた。

最初の吉報をもたらしてくれたのは、伊藤刑事であつた。

血染めのズボン

T警察署の伊藤刑事は、背は低かつたが、精悍な顔をした好青年で、ジョージと仲がよく、英語の勉強で分らない所があると、よくジョージの所に来ては質問した。

その日は、朝から暑かつたが伊藤刑事を迎えたジョージは、刑事の話を聞くと、一緒にジープでキャンプを飛出した。

行先は、T市の下町にある盛り場近くの旭クリーニング店である。

店の主人は、腕にMPの腕章を附けたジョージの姿を見ると、一瞬、ギョツとしたらし



いが、連れの伊藤刑事の説明で、話が分つたと見えて奥から、兵隊のズボンを持つて来た。「昨日の夕方、七時頃でしょうか、シャツや

靴下と一緒に、このズボンを持つて来たんです。お馴染みの兵隊さんでエディと云います」

昨日の夕方と云えば、犯行のあつた翌日のことである。ジョージの眼は光つた。

「人相はどんな男だね」

「額に傷があつて、眼が鋭くて鼻が高く、細長い顔ですが、色は黒いです」

「部隊は」

「さあ、そこまでは知りません」

「その男から煙草やチョコレート買ったことがあるかね」

主人は恐縮して、

「いいえ、それは……」

伊藤刑事は、ズボンを改めていたが、MPボタンの側の、二カ所ばかり薄黒い血痕の跡を示して、

「ジョージさん、これですよ」

「エディさんが持つて来た時、それを見附けた職人が、これ何ですかと聞いたら、兵隊さんは『パンパンガール、メンジーズ、オーケー』と云つたので、メンスの血だと分つて、大笑いしたそうです」

ジョージと伊藤刑事は、すぐズボンを持つて医科大学に廻り、血痕の分析試験を依頼した。

殺された君江の血液型とこの血痕の血液型が一致したら、犯人着用のズボンと云う推定も成り立つわけである。

ジョージは、犯行当夜にジープを使つたエディという名前の兵隊を調べ上げたが、工兵部隊に一人、歩兵部隊と空軍部隊に一人宛あつた。工兵部隊のは軍曹で、他は将校だつた。

そこで工兵部隊のエディ軍曹の素行調査と当夜のアリバイから調べ始めた。

ジョージは、兵籍簿に帖附されているエディ軍曹の写真を復写して、それを持つて、伊藤刑事と一緒に、市内の飲食店街、パンパン街、芸者街を丹念に歩き廻つた。

犯罪捜査の成功は、足をまめに使つて歩き廻ることにある。

T市の中央駅附近には、マーケット街があり、そこには映画館が三つと芝居小屋が一つあつた。これは夜の女王たちの溜り場で、数百名に上る闇の女たちが集つていた。

その中の女たちから、エディ軍曹のことを聞き出すのは容易なことではなかつた。

やつと卅一日目に、エディを知っているパールという女の子を掴まえた。

「これはエディだよ。国府ダンスホールのアンナを張つていゝという話だつたが、今は知

らない」

そこでアンナを調べることにした。

真犯人

ジョージと伊藤刑事は、国府ダンスホールに急行して、ダンサーのアンナを取調べた。

アンナは、ジョージの質問にも、化粧の手を休めず、傲然としていた。

「忙しいから、ここで失礼しますわ。エディと云つたつて、沢山いますわよ。エンジニア

コト（工兵）にも、ATC（空輸隊）にも、エア、コー（航空隊）にも。MPの中にもエディがいますわ」

ジョージは、愚弄された感じで、早々にパールを引き揚げた。

「これで捜査の糸が切れましたが、最後の追い込み、エディを尾行しましょう」

伊藤刑事の提案で、毎日、夕方になると、工兵隊のゲート（衛門）に頭張つていゝエディ

の車の後を附けたが、相手を見失つたりして、目的を仲々達しなかつた。だが、五日目に、やつと成功した。

エディは、新しい女を、郊外の人里離れた所に囲つて出入には警戒していた。

或る朝女一人が寝ている所を襲つて、調べ

上げると、マリ子と呼ぶ女の持物の中に、殺された君江の腕時計と頸飾りがあつた。

「エディは」

「いつも夕方来て、夜遅く帰りますが、土曜日は午後からずうつと泊り込みで来ます」

これで証拠物件は完全に揃つたわけである。

ズボンに附いていた血痕は、B型の君江のそれと同じだつた。

ジョージが、ロビンソン中尉に報告すると、「うん、仲々手際が冴えて来たね。すぐ逮捕状を出そう」

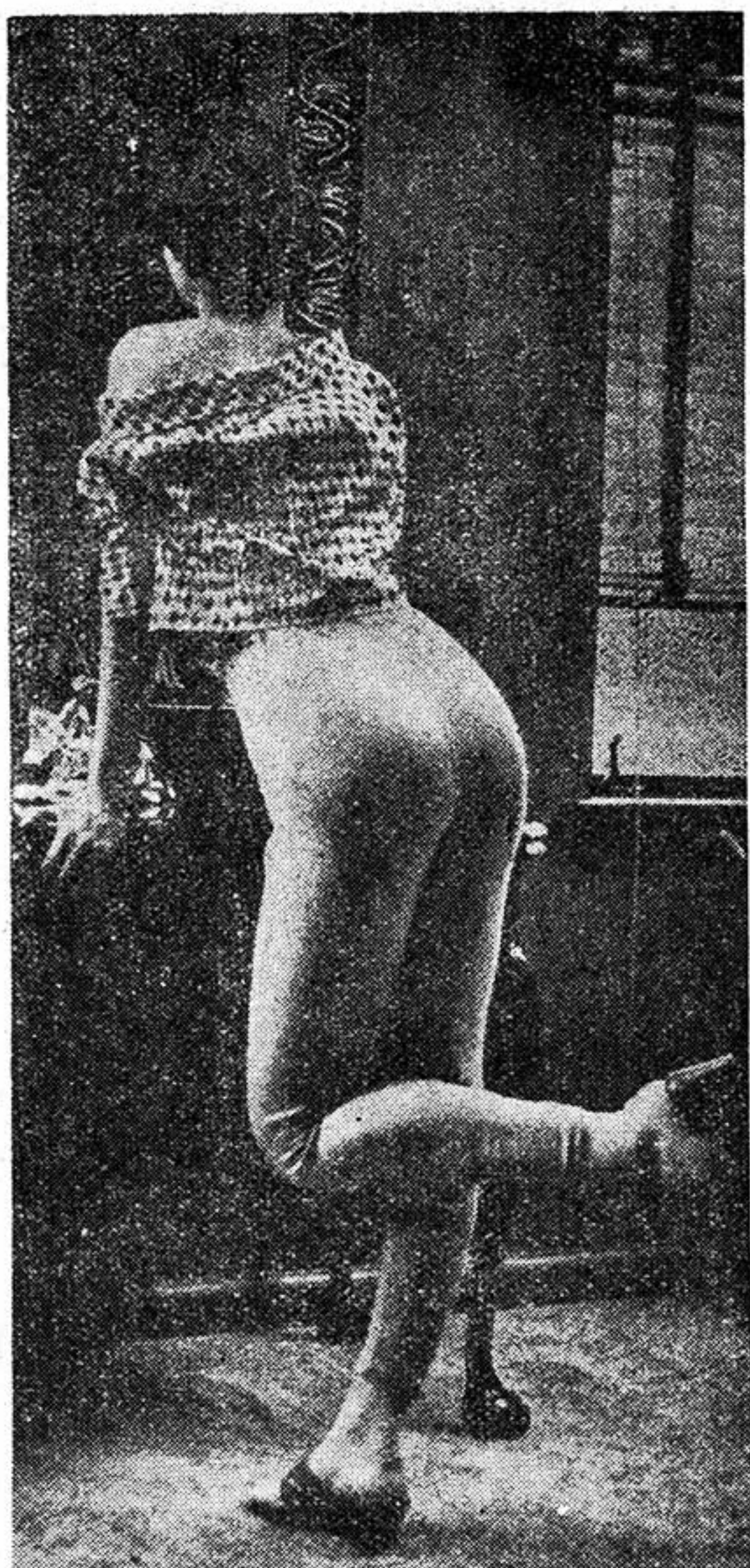
かくて工兵隊のエディ軍曹は、逮捕され、憲兵司令部に送られた。

エディの自白で、共犯のハリイ、ビルも逮捕された。

軍事裁判では、エディとビルは強姦致死罪として終身刑を、ハリイは共犯として重労働十年を宣告された。

裁判が終ると、証人として出廷した山本さち枝と佐々木は、忌わしい記憶の町を離れ、東京に新しい職を求めて去つた。大山だけは、相不変、国府ダンスホールでドラムを叩いている。

貴方の名前は何を殺さないか！



人間の人生は複雑極まるものであるが、その複雑極まる人間のすべてを姓名によつて判断するのであるから、その方法もまた複雑である。しかし、その人の性格吉凶禍福は姓名の字劃によくあらわれるものであるから、ここでは字劃によつて分析してゆく。

さてその方法は、まず姓名の字の劃数を五

つに分解して、その一つ／＼の字劃の吉凶を論ずるのである。これを五運分析という。即ち、姓名を、祖運、主運、初運、総運、補運の五つに分けるのである。

祖運——姓の総数でこれに凶数があつても判断せず。

犯罪人と姓名

姓名は人格の表徴であり、姓名なき存在は許されない。「人は一代名は末代」と言われる如く、名の大切な事は今さら論ずるまでもない事で、この姓名にはその人の性格及び

その一代の吉凶が昭魔鏡にあらわれるが如く明瞭に照し出されるのである。

こゝに最近おこつた所の猟奇事件に関係した人々の姓名を分析して、如何なる原因によつてこれらの惨事が生れたかを調べてみるのも一興であろう。

人 道 素 金

主運——姓の下の一文字と名の上の一文字との合計数で、運命や性格を代表する重要数である。

初運——名前の総数で、幼年時代の運命と境遇の安否をあらわす。

総運——姓名の総数で、全生涯の運命をあらわす。

補運——総運の数から主運の数を除いたもので、主運に非常に影響をあたえる重要な数で、主運を補い、配偶者の状態や外部関係の問題をあらわす。

徳 15
田 5
球 12
— 1
33 (16)
総運 補運

吉 6
田 5
茂 8
— 19 (6)
総運 補運

さて、数の吉凶は下段にある通りであるが、大体において主運の部位に二、四、九、十、十二、十四、十九、二十、二十二、二十六、三十四の数があれば、その凶災ははかり

しれないものがあるのである。妻子との生別死別、孤独逆境、非命、遭難、短命等の凶事に陥り易いのである。

新宿の娘殺し、

新宿柏木の娘殺しの事件は、まだ耳新しい猟奇事件として都民の目をみはらしたのであるが、犯人は案外に早く検挙された。事件というのは、九月の十九日の夜に、柏木三丁目の米屋の床下から妙な臭気がただようのを不審に思つた下宿中の学生が、その床下を掘りおこすと、女の死体が発見されたのである。そして翌日早くも警察はその米屋に元下宿していた青年を犯人として検挙したのである。

この犯人である若い青年(二〇)は、佐賀県に生れ、父は医師をしていたというから相当の家庭に生れたのであるが、将来の名優を夢みて、青山学院、俳優学校を、転々とうつり、検挙された時は焼鳥キャバレーのボーイをしていたのである。

一方殺された女は、福島の子で、幼い時に両親を失い他人の家で育てられ来た薄幸な身上であるが、十五才の時に妊娠をしたという一寸珍しい素行の女である。

その上、この二人の出会いが、実にアブレ

数		理		の		吉		凶	
1	吉	福徳円活、名譽向上、安泰。							
2	凶	不安、分離、動揺、非力。							
3	吉	健康長寿、智能明敏。							
4	凶	破壊、逆運、困苦。							
5	吉	和合、完全、富貴、榮達。							
6	吉	盛大、福祿、安泰。							
7	吉	独立、權威、発展。							
8	吉	進取、発達、強固。							
9	凶	不如意、不具、遭難、災害、刑罰。							
10	凶	非業短命、遭難、病弱、刑罰、災害。							
11	吉	平和、穩健、着実、富貴繁榮。							
12	凶	孤独、逆境、困難、遭難。							
13	吉	活気、明朗、智慧、充滿。							
14	凶	孤独、浮沈、辛惨、危難。							
15	吉	順調、繁榮、名声、福祿。							
16	吉	隆盛、繁榮、優雅、度量。							
17	吉	強固、權威、発展。							
18	吉	智謀、權力、発達。							
19	凶	病弱、不具、短命、離別、非業。							
20	凶	分裂、破壊、病難、逆境、遭難。							
21	吉	独立、発展、尊敬、富貴、名譽。							

らしいのである。即ち、六月に、犯人は新宿に遊びに行き、夜の十時頃に新宿駅前でこの女に声をかけられて、その晩に二人は温泉宿にしけこんだというのであるから、太陽族の資格は充分である。女の方から声をかけ、その後、自分の勤めている他人の家（女中として住み込む）に男を引っぱりこんだ為に、勤め先からひまを出されたというのである。さて、この犯人と殺された女の名前を分析してみよう。

犯人 吉 6) 11
田 5) 16
健 11) 27
次 6)
郎 10) 38(22

被害者 長 8) 18
浦 10) 17
芳 7) 13
江 6) 31(14

犯人である、吉田健次郎の姓名を分析すると、実によくその性格行動が、あらわれている。主運の16は順調優雅で穏やか吉数、総運数も同じく温厚な吉数で芸能の方面に伸びる暗示の数意である。これが彼をして、将来は俳優たらんと夢みた原因であろう。そして、この38は意あつて力の足りないうらみの数、

大志をいだきながら大成しない数意で、こうした所から彼は俳優を夢みながら学校を転々としたのであろう。そして、今度の犯行の基となるのは、主運を補ける大切な補運に凶数の22がある事によりこの猟奇事件となつたと推定される。下述したように、22の数があるは、短命、刑罰、遭難の数意であるが、自分から殺人を行したとはいへ、彼の16、8の意思の弱い吉数が、22の凶と相まつてこの惨劇を起したので、けつして他の凶悪殺人犯人の如き計企のもとに女を殺したとは、この姓名からどうしてもみられない。むしろ、気の弱い青年が、思案にあまつて一時的の発作としての凶行とみた方が当を得てはいないだろうか。

さて、この気の弱い青年に殺害されたあわれな女はどうであらうか？ これまた、姓名の数意にあらわす性格がはつきりでているから不思議である。主運の17、初運の13、共に強よすぎるとまでいわれているのであるが、彼女はこの数意の指す通り、非常に活気のある働き手で、勤め先では、男関係以外はよい為に可愛がられたとある。これは数意の男まさりの活動力が彼女をそうさせたのである。しかし、その反面の男関係にだらしかな

45	吉	富貴、繁栄、温和、順調。
44	凶	破滅、破壊、分離、遭難、病難。
43	凶	薄弱、散財、無気力、芒淫。
42	半凶	不如意、器用、散遂、孤独。
41	吉	高名、発展、健康、和順、財産。
40	凶	波瀾、浮沈、孤独、病弱、短命。
39	吉	權威、長寿、財産、投機。
38	吉	平和、平凡、無事。
37	吉	大志、大業、独立、忠実。
36	凶	変転、浮沈、波瀾万疊、失敗。
35	吉	智謀、芸術、技能、温良、順從。
34	凶	破壊、敗退、発犯、遭難、刑罰。
33	吉	名譽、盛大、權威、智謀。
32	吉	温良、隆盛、発展、福德。
31	吉	名声、繁栄、富貴、温良。畜財。
30	凶	浮沈、孤独、失意、短命。
29	半凶	活動、智謀、不平、不満。
28	凶	遭難、殺傷、破壊、不和、逆難。
27	凶	批難、功擊、中絶、刑罰、遭難。
26	凶	波瀾、浮沈、大變動、病難、短命。
25	吉	英敏、成就、成功発達。
24	吉	才能、勤勉、温厚、艷福。
23	吉	功名、栄達、權威、活気。
22	半凶	無気力、孤独、病弱、不安定。

いのは、将来の好色性のためとは考えられない。彼女の孤独性、両親のない家庭にそだつた為の何か人にすがりつきたい性格が、男を求めさせる様になつたのではなからうか。このことは、吉田健次郎と同じく、大切な補運の部位に14の最凶悪数がある事によつてしれる。この14は浮沈定まりなく、破兆多く、孤独で生別死別多く、危難、遭難の数意を含んでこの数意がある人は多く天寿を全うする事が出来ないのである。17、13、31数意の男まさりな勝気な女性、しかも身より頼りのない成熟した女性が、こゝに14という孤独運の靈導によつて、遂には14の凶意である危難、遭難にあつたといつては無理であらうか？

この二人の犯人、被害者の姓名からみると、ありきたりの凶悪殺人事件の役者であるとは思えない。むしろ、姓名の凶数におどらされた一個の人形ではなからうか。

異境の殺人

九月の十日の新聞は、パリ市内のブローニュ森近くでノドに深い切り傷をうけ病院で一命を亡くした美貌の日本人女子留学生の事件を報じている。

殺された女性は、元陸軍中将寺元志雄氏の

次女で、津田塾出の才媛、昭和三十一年の七月にパリに商業フランス語を勉強するために留学中の寺元節子さんである。妹さんの言によれば、節子さんは、将来言語学で身を立てるつもりで若い青春を遠く異境の地で勉強にいそしんでいたのである。犯人はその後すぐ捕つたのであるが何か一方的な恋愛感情のもつれからであるそうだが、それにしても悲惨なのは寺元節子さんである。たゞでさえさびしい異国の空に、外人の手によつて殺害されたとあつては、彼女も浮ばれまい。

さて、この悲劇を彼女の姓名によつてしらべてみる事にしよう。

被害者
寺元節子
6 4 10 19 15 18 3
23(9)

この姓名暗示はまた何んという悲惨な意味をあらわしているのであらう。彼女の姓名は、一つとして良い数意はなく、まことに当人にはお気の毒であるが、姓名数意力の靈導には驚くばかりである。

たゞ初運である18は吉祥数であるが、これとても男子に剛氣、発展、権力智謀の作用があつて名利を得る可能性はあつても、自我心

69	凶	病弱、窮迫、非業。
68	吉	上達、智能、勤勉。
67	吉	発展、成功、隆昌。
66	凶	破兆、孤立、損失。
65	吉	健康、長寿、名望。
64	凶	孤独、別離、病難。
63	吉	成就、富榮、成功。
62	凶	不和、哀運、辛慘。
61	吉	名譽、富貴、幸福。
60	凶	殺傷、刑罰、短命。
59	凶	損失、失意、逆境。
58	凶	浮沈、波瀾。
57	吉	吉祥、繁榮、剛毅。
56	凶	損失、亡身、厄災。
55	凶	別離、病弱、災害。
54	凶	破兆、破産、不具、短命、横死。
53	凶	障害、不幸、不運。
52	吉	成功、富榮、貫徹。
51	凶	波瀾、盛衰、浮沈、困苦。
50	凶	破壊、失敗、刑罰、殺傷、離愁。
49	凶	変化、損失、災害。
48	吉	尊敬、榮達、繁榮、才能。
47	吉	温順、幸福、信用、成功。
46	凶	薄弱、座折、不遇、病弱。

と堅剛によりとかく批難遭難にあう数意である。とされている。まして、女性にとつては、強よすぎ、とかく事を破る凶意の強い数である。彼女が、二十八才の今日まで単独で歩んで来た道、また今留学生としてパリに遊ぶという鉄石心はこの十八の智謀権力の数意からであろう。

しかし、その反面に、この強い性格が、一方的なフランス兵の感情問題とはいえ、男性を刺戟した結果、この惨劇となつて起きた事は当然すぎる事である。

彼女の一番重要な主運は19であり、前記の主運に十九があるのは短命遭難ありと言うのがこれである。元来、この十九の数意は、非常な活動力を有し、智謀と卓越した企画才能は常人に抜きんでるのであるが、この数本来の凶兆である中途挫折、刊罰殺傷はまぬかれないので、他運との関係によつて、非常な凶悪遭難といえるのである。

おそらく、この19と18の数により彼女は多芸多才の才媛であつたと思われる。ところが総運の28は、変動遭難運であり、主運を補ける補運はこれまた9の非業短命運である。

即ち28は、波瀾変動、批難誹謗をこうむり、生別死別多く、傷害刑罰等の凶災が起る

凶悪運で特に女性にとつては後家運と称して嫌う数意である。同じく9は、遭難、逆境短命等の暗い霊導と孤独運は数意中の最凶とするところである。

この節子さんの姓名はすべて女性にとつては最もいむべき変動遭難非業運の数によつて構成され、たゞ一つの吉数18も剛にすぎる霊導とあつては、あの危害をこうむるのも当然の事といえよう。

特に主運の19と補運の9の短命夭折の暗示は、あの異国における血の惨劇となつたのである。

なお、犯人を外字姓名学によつて分析するとなお一層明瞭になるのであるが、今回は略する。

幽霊家敷の同居人

昭和三十年二月頃から湖南の別荘地帯である藤沢に、一軒の幽霊家敷の噂がひそかにたちはじめた。この家は元々女一人暮らしであつたが、一人の美貌の中年婦人が同居しており、その婦人の所への出入りの客は少なくなかつた。

ところが三月五日頃から、この家の主人である婦人が、何処ともなく姿をけし、まもなく

70	凶	殺傷、別離、短命。
71	凶	苦勞、不安、病弱。
72	凶	心勞、窮迫、悲運。
73	吉	平凡、安定。
74	凶	無能、無智、災厄。
75	吉	平安、無事、消極。
76	凶	不和、離別、短命。
77	凶	復難、不幸、病弱。
78	凶	困苦、辛慘、衰弱。
79	凶	無節操、薄弱、非難。
80	凶	病難、刑罰、短命。
81	吉	名譽、富貴、健康、長寿。

なお、81の数字は80を払つて残つた数と以つてこの数理吉凶にてられます。例えば98は18のみ、87は7でみえます。以上の数意を上段の五運分析、即ち、祖運主運、初運、総運、補運に分けた部位に照してみるわけである。然し祖運の部位のみの吉凶はみない。

そして、その部位のあらわす意味がそこにある数の吉凶によつてあらわれるとみる、例えば、主運の吉凶は生渡の吉凶であり、初運の吉凶は中年迄の吉凶とみる。

くその美貌の中年婦人も謎のうちにこの家を立ち去っていたのである。

それが、最近同家に買手がついた為に、女主人の実弟である工学博士榎本信助氏と藤沢市警察立ち会いのもとに、近所のウワサをたよりに庭を堀つてみたところ、地下六尺の所から女主人の半ミイラを発見したのである。そして、その犯人は美しい同居人と断定され、全国手配の結果、まもなく淀橋署に、その犯人は愛人と共に藤尾旅館に潜伏中を逮捕されたのである。

これが謎の美貌女性の殺人事件であるが、後から／＼とこの女性の変つた言動が明るみに出され世間の目をみはらせているのであるが、この惨劇はどのような因から起つたかをしらべてみよう。

犯人 鷹²⁴ 取⁸ 光⁹ 枝⁸
32 14 14 8
46(32)

情夫 吳⁷ 原¹⁰ 勝¹² 美⁹
17 12 21 9
38(26)

被害者 榎¹⁴ 本⁵ 悦¹⁰ 子³
19 15 13 3
32(17)

被害者である榎本悦子さんは、主運15、初運13、総運32の最大吉祥の数意を有する姓名である。や、孤独性はあるが財にも健康にも恵まれた靈導といえるのであるが、惜しむべし主運を補佐する補運17の過剛数意があるのは、かえつて前記の吉兆を失つてもあまりあるものがある。即ち吉数による安意にながれての結果その凶事は一層力を強めることになる。特にこの17の数意は男性にのみ吉数であつて、婦人には権剛すぎ身を破るの意とされ、薄命身内縁薄い暗示のある数である。

彼女は一人でこの家に住んでいたというからおそらく孤独であつたろう。その孤独性はこの惨劇は、補運の17数意による後家運、強剛数意の結果に外ならない。

さて次に、この女性を殺害した謎の美人はというと、主運14、初運14、総運46とこれまたその行動を裏書するかの如き、凶意を含む数を持つている事に目をみはらせられる。

特に主運と総運とにかゝる凶数意を持つて

いては致命的である。

数意靈導上、この46は、変怪短命運とまで称せられる一種独得の凶数をふくむのである。この数意は一時は吉を得るも後には変転極わまりなき凶意をうけ病身、孤独、刑罰、短命の非業に陥るものである。

また、14も孤独、危難、遭難数とされ、非常な孤独性をおびた凶意を含み天寿を全う出来ない暗示の数である。

犯人鷹取には、この凶数14が大切な主運と初運にあり、加えて全生涯に影響する総運にあの変怪危難数があるのである。

彼女の行動は実に怪奇を極めたところがあるが、これは一つにこの14数の孤独性と46の変怪数のあらわれである。そして、補運の32という濡れ手で粟のつかみ取りという財運のある吉祥数意が、かえつて前記の46の変怪数意を刺戟して、この惨事となつたと思われる。女子の身にありながら、借りていた家の主人を殺害しその死体を庭先にうめるといふ猟奇行動はこの46数のなせる業であろう。

その情夫はというと、初運21は頭領運と称する吉祥数である。これからみると初年時代にはある程度の良好な状態感の元に育つたとみられるが、他の主運と補運は最凶の数、そ

して総運は一応吉祥数意なるも、無力、薄弱の氣力弱き意があつて他運との關係により吉にも凶になる移動性の吉数であるのも、この獵奇事件の立役者の情夫とするとぴつたりとあてはまる。

彼の今日のみにくい境遇をまねいたのは、犯人の鷹取にまけない、補運の26という変怪数の靈導であろう。この26の数意は、吉凶ともにはげしい波瀾のある変怪運と言われ、多くはその波瀾が次から次へと凶意をよんで夭寿を全う出来ないのが普通である。

その上、主運である12数は逆境不如意困難の無氣力の破壊運であり、この12の凶意と6の変怪数意とが相まつて、獵奇事件の禍中にまきこまれたのである。彼の性格は、38といひ、12といひ、いづれも氣力のない薄弱な性格であることが言える。前記の吉田健次郎と同様なケースで、おそらく氣の弱い男であり、それが美貌の鷹取に魅せられて、ずるずると今日の、凶行を招いたのではなからうか。彼もけつして自己から手を出す程の強剛な性は姓名からみて少しもない。むしろ。12と38の薄弱な性格が、26の変怪数意に跳らされ、女の為にこうした仕末となつたとみるのが本当であろう。

トランク詰殺人事件

一時は、迷宮入りとさわがれた獵奇事件の「トランクの詰殺人」の犯人も、遂に七十七日間の、逃走の末捕つた。

彼等二人は同じ汽車でも席を別にとる程の要心をしながら逃走をつづけていたのである。

犯人は前科一犯というした、か者。しかしあまりにも獵奇的な行動である。

こゝに姓名をもつて彼の行動を分析してみよう。

犯人	西谷郁太郎
	6 13 7 16 9 4 10 23 36(20)
情婦	大橋君子
	3 19 16 23 7 10 3 29(6)

犯人西谷は主運に16の吉数と初運に23の吉数をもつのであるが、彼もまた、前記の鷹取光枝と同様に総運に36の波瀾怪奇数を持ち、その上補運に最凶悪数である20を持つてゐる。

この36数は46の変怪運につぐ、波瀾怪奇運で、動けば動く程事をおこし、平安を得がた

い数とされているのである。

おそらく、彼の殺人、そして死体隠蔽をくわだてたトランク詰めもこの36数の怪奇運のしわざであろう。

その上補運は20である、この20数意は分裂破壊、逆運、刑罰の最凶数で彼の今回の獵奇事件は、この総運と補運の凶数の靈導のしからしめる所であろう。

彼の情婦はとみると、これはまた男まさりの氣の強い性格の女である事が知れる。即ち、主運の23は勢い冲天の象で猛虎の翼を生じたる様という程、権威旺盛な運で、婦人にとつては強すぎる最悪数であり、総運の29もまた活動的な吉祥数意ではあるが、婦人には剛にながれて凶になる暗示のもので共に男性的権剛の数が二つそろつてゐる。彼女はこの数意のしめす通り、トランク詰の殺人をおかした犯人と氣情にも行動を共にして逃げあつた氣強い女性である。

その上初運には、10という非命刑罰運のあることは見逃がせないことで、彼女の今日の狀態というのは、23、29の強すぎる後家運と、このの非業数によるものであると推定される。

年上の女に裏切られた醜男が犯す猟奇殺人

荒川土堤
街娼殺し

謎

の

質

札



瀬木敏郎
古田英夫画
蝙蝠傘を咥えた女

「大変です。女が死んでいます」
息せき切つて、かけ込んで来た若者の報せに、交番の巡査が、本署に電話で報告した後、その若者を案内人にして、現場へ急行した。
現場は、荒川駅から四、五丁はなれた土堤ではやくも、本署の水上司法主任らの一行も来合せていた。満々と水をたゝえた荒川は、昼下りの春光を浴びて、美しく照り映えていた。
土堤下は、二尺幅位の道路があつて、女の死体が、土堤上から滑り落ちたような恰好で、勾配の下の方に頭をやつてつんのめつていた。

「何じや。土堤から落ちたのか。兎に角、写真を撮つてもらおうか」

現場写真が撮影されてから、死体の検視が開始された。女は二十七、八才紅色のスカートに、グリーンのセーターを着て、赤と白のたてじまのマフラーを首に巻いている。踵のすり減つた靴の傍に、黒皮のハンドバックが

放り出されていた。

「主任、この女は、何かくわえていますよ」

「うむ、変だね……」

樺山刑事が、女の死体を起すと、ほんと、女持のコウモリ傘がおちた。女は、コウモリ傘の柄を、口の中に突込み、うつ伏せになつて、死んでいたのである。上体をたてゝみると、眼は半開きになり、大きく開いた口からはまつ赤な血が、たら／＼と流れ出してきた。

司法主任は、胸に手をおしあてていたが、「心臓は停止しているが、身体はまだ硬直していない。あたゝかさが残っているから、助かるかも知れんぞ」

「えッ、大丈夫ですか」

「兎に角、すぐ病院に運んでくれ。助かつたら、大したものだ……」

刑事四人が女の死体をつぎ、大通りまで来て、そこに乗り捨てゝあつた自動車の中に運び込み、近くの大木外科病院に向つた。病院では、院長大木博士指揮のもとに、敏捷に準備をするため、女の死体は、外科使用のベッドにのせられ、大木博士は応急の処置として、カンフルの注射をした。厚化粧した女は、上品さはないが、ほっそりした細面の顔は、鼻筋が通つてどこか、男好きのする顔だ。

「先生、たすかりますか」

「しずかに……」

医師も、警察官も、看護婦も、ジッと女の眼を見詰めた。若し、蘇生するとしたら、カンフル注射の反応が、女の眼に見られる筈である。チッ、チッチッ……。静かな手術室に時計のセコンドの音だけが、ひびいていた。死人の顔は、何の変調もしめさない。

「残念ながら、駄目ですな」

大木博士が絶望して云つた。誰も、反対しなかつた。カンフルの注射に対して、その瞳は何の反応もしめさず、力なく瞼を閉じて行つたからである。

「やつぱり駄目か。すると、死因が問題ですな、外傷らしいものはないようですが、何如でしょうか」

「さあ、解剖しませんと責任のある事は、申上げられませんが、どうも、過失死らしいですな」

「と、仰有る理由は、何でしょう？」

「この女は、口の中を負傷していて、まだ血が出ていくくらいです。コウモリ傘の柄をくわえて、歩いているうちに、足を踏みはずして、土堤下に落ちたんですな、その時、コウモリの柄で咽喉部を突いて、死んだと思うの

ですが、これはもちろん、私の一意見にすぎません」

「そうですか。すると、自分のあやまちで、死んだつてわけですな。他殺らしいところは、ありませんまいか」

「只今診ましたところでは、そんな傾向はありません。兎に角、解剖を……」

「は、そうですか」

司法主任水上警部補は、口にこそ出さなかつたが、大木博士とは反対の意見を持つていた。警視庁巡査を拝命してから十二年、強犯関係の刑事として、快腕をふるい出してからでも七、八年になる。死体については、専門家のような鑑識を持つていた。

「過失死ではない。すくなくとも、コウモリの柄で、咽喉を突いたのが、生命取りとは考えられん」

司法主任は、そう思つた。コウモリの柄で、咽喉を突いたとしても、重傷になつて死ぬようなことはない、死因は他にあると、考えていた。

謎の質札

女の所持品を調べると、質札が一枚と、十円札が四枚、化粧道具といつしよに、ハンド

バックに入っているだけで、他に目ぼしいものはなかつた。質札は、向島にある錦江質店振出しのもので、入質者は、向井キワとなっている。死人の身元が、向井キワであるかどうかを、たしかめるため、樺山井上両刑事は、向島の錦江質店に行つた。

「ちよつと、面倒な事が起つたんだがこの質札の主人公の、住所と人相を教えてくださいのだから……」

帳場に来て、主人の前に質札を差出すと、手に取つて、見ていた主人が、

「旦那、この人ならわしんとこの裏通りにいる女だ。商売は何をしているか知れませんが、三十過ぎていて、独身でいると云う、変り者ですよ。なんなら呼びにやつてもよございませが……」

「いや、こつちの方から行つた方がいいんだ」

「じゃ、案内させましょう」

店員が案内してくれる。駄菓子屋の二階を借りている女だつた。

「向井さん、お客さんですよ」

「はい……」

とん／＼、階段に音がして、三十がらみの女が、降りて来た。

「お待たせしました。何でしょうか」

「向井キワさんに、お会いしたいんだが……」

「向井キワは妾ですがあなた様は？」

「警察の者だが……あなたが向井さんかね」

質札の主人公は生きています。すると死んでいるのは、何者だろうか。何故あの死体が、

向井キワの質札を所持しているであろう。向井キワと、死体の間には、何か複雑な問題が

ひそんでいる。樺山刑事と井上刑事の二人は顔を見合せて、うむと、うなずいた。

「君、御苦労だが、これに見覚えはないかね。よく見てくれ……」

「まあ、変な旦那ですこと。質札じやありませんか」

「そうだ。君のものがどうか、兎に角見てもらいたい……」

銘仙の袷に、伊達巻をした女は、白粉やけのした顔を、にやりとさせて、樺山刑事から受取つた質札を、ジッと見ていたが、その表情は見る／＼うちに硬ばつてきた。

「狩込みがあつたんですか、旦那？」

「えッ狩込み？……。狩込みつて、パン助のかい……」

「そうです昨夜あつたんでしょうか」

「さあ、狩込みの事は知らないが必要なら調

べてあげよう。それよりこつちの質問が先だよ。どうだね、この質札は？」

「質札は妾のものです。旦那方もまわりくどい事を仰有らないで、はつきり云つて下さいな。妾も藤四郎（素人）じやないですから……」

……

キワは、けわしい顔付きになつて、吐出すように云つた。おかしい女の態度に、樺山刑事と井上刑事が、きつとなつた。

「はつきり云えつて、何の事だね。ワシ等は質札のことが明らかになれば、それでいゝんだよ」

「嘘おつしやいお前の罪状は判つてゐるんだ。うまくずらかりやがつたな。いつしよに来いと云うんでしよう。判つてますよ」

「うむ、よく云つた。それじゃ、荒川へ行つたつてわけだな。あの女は誰だ？」

ずばりと云つた樺山刑事の言葉にキワが頓狂な声を出した。

「あの女……。あの女ツて、何の話ですの。妾はね、昨夜上野に行つたけど、荒川なんかへ行つた事はありませんよ。陽氣がよくなつて、まだ三月の末じやありませんか。吹きつさらしの土堤で商売なんか出来やしません。旦那方、何か勘違いしていらつしやるね……」

「変なのは君だよ。君の質札が、何故ワシ等の手にあるか。君の質札なら、君の手にある筈じゃないか。どうして君が持つていないのだ？」

「ですから、狩込みがあつたんですかつて、聞いているじやありませんか。狩込みでもなければ、旦那方の手に入るわけがありませんよ。おはまちやんは、どこに居るんです？」

「おはまちやん？おはまちやんて、一体誰の事だ——」

「ふん、しらばくれても駄目ですよ。時計を質屋に入れてくれつて、妾に頼んだパン助ですよ」

「えッ、そ、それを何故、早く云つてくれんのだ。おはまに頼まれて、君の馴染みの質屋に、時計を入質してやつたと云うんだろう」

「そうなのよ」

「じゃア、もう一つ見てもらいたいものがある。いつしよに来てくれ」

「おや、また見せるんですか。出かけるなら、支度して来ますから、一寸待つて下さい……」

「いそいでいるんだ早く頼むよ……」

キワの首実験によつて、女の身許は判るだろう。樺山刑事と井上刑事は、注意深い眼を、二階にそゝいでいた。

街 娼 お は ま

女の死体は、解剖のため、東京大学医学部にはこぼれる寸前であつた。白布に蔽われた手術台の死体の前に、向井キワは、顔色を変えて、ふるえていた。

「さあ、この顔を見てくれ、見覚えがあるか、ないか」

樺山刑事が、顔面にかぶせてあつた白布を取除いた瞬間、

「あッ、おはまちやんだッ」

と、キワが叫んだ。喜怒哀楽の極端なのは、娼婦特有の感情である。キワは、今までの恐怖の念はどこへやら、死体に顔をおしつけて泣いていた。

キワの首実験によつて、死体の主人公は、寺島三丁目、伊佐館止宿の街娼新川ハマと判明した。年は二十七才、その当夜は、馴染のお客と約束があるからと云つて、午後二時ごろ、いそぐと出かけて行つたと云うことが判つたが、所持品を見せられて、

「ずいぶん足りませんね。おはまちやんは、三千円か四千円の現金を離れたことのない女で、仲間内でも有名でした。たつた四十円しか持つてないと云うのはおかしい、御自慢の

腕時計と、指輪もなくなっています」

と、云つた。死因は解剖の結果を待たないと、自死か、他殺か、判明しないが、キワの話によつて、現金と時計指輪が紛失している



ことが、はっきり明らかである。強奪されたものか、どうかは、死因の結果によつて、明確になるが、司法主任をはじめ、大部分の刑事の意向は、物盗りの仕業説に傾いていた。

「解剖の結果は、どうあらうとも、時間が経過しては困る。他殺と云う見通しのもとに、調査をすゝめよう」

司法主任の意見によつて、刑事たちは、改めて、現場の検証を行つた。また、他の刑事の一隊は、時計や指輪が古物商や質屋に流れて行くのを見越しその方面に連絡して、厳重な網を張つていた。

ハマの死体のあつた荒川土堤下を中心に、附近一帯にわたつて検証をおしすゝめているうちに、十七枚の名刺やハガキ類が発見されたので、二、三の刑事は、名刺やハガキから、意外な事実をつかむため、現場を立去つたが、あとに居残つた刑事たちは、なおも、何等かの手掛りをつかむべく、ねばつていた。

太陽は西山に半没し、夕陽を浴びた水面は、さゞ波を立て美しかった。時折、はるか下方の鉄橋を、ごう／＼と、物凄いい音をたてゝ京成電車が通過する。枯れた葦が密生して、風のために、さら／＼と鳴るのが、暗紫色に暮れて行く土堤では、何となく不気味であつた。

「おう、ありや何だ！」

「何かあつたかい、樺山君……」

水上司法主任が、樺山刑事の傍によつて来た。樺山は、さや／＼と鳴る葦の間を指差した。

「本じやないか」

「そうですね。取つて見ましょう」

「取れるかな、舟を出したらどうだ」

「それには及びません。なアに、深ければ泳ぎますよ」

樺山刑事は、ズボンをまくりあげて水の中に入つて行つた。ごぼ／＼／＼水は浅くない葦の葉につかまつたが、身体の重味で、樺山刑事の身体は水の中に沈んで行き、乳の下あたりで止つた。

「大丈夫かい？」

「は、これ以上は沈みません。ですが意外に深いですな……」

樺山刑事は、右手をのばすと、葦の間に白いものを覗かせている本をつかんで、土堤へあがつてきた。本は水を吸つて、濡れていたが、読むのは別段支障はなかつた。

「真理の探求か、案外むづかしいもんだね。」

「今時珍らしい本じやないか」

頁をくつていた樺山刑事が、水上司法主任に云つた。

「主任、寺島九丁目、目丸徹雄としてありますが、私は、この本に秘密があるように思いますがね」

「手掛りの一つには違いあるまいが、名刺やハガキの類と同じだよ」

「若し、他殺だとすれば、この土堤上で争つたにちがひがありません。いる間に、持つていた本が飛んで、川の中へ落ちた。本人は女が死んだので周章で立去つて行つたと、こう思うのがね……」

「ところで黒白をつけるのは難しい、兎に角、君の推理に基いて、調べてくれ」

「は、やつて見ます」

樺山刑事は、濡れた本を持つて、土堤の上へあがつて行つた。陽はとつぷりと暮れて、暗い闇が這いはじめた。対岸の人家には灯が点いて、鉄橋の上の電車は、狐火のように見えた。

「引揚げよう。また明日だ……」

本署に帰ると、解剖の結果が知らせてあつた。死因は、咽喉部の絞扼による窒息死で、明白な他殺である。

「睨んだ通りだ。傘の柄をくわえて、死ぬ筈

はないよ」

水上司法主任は、警視庁捜査課に報告すると、居合せた刑事を召集した。警察署内は、殺人事件突発の報に、俄かに、緊張して行つ



た。

昭和の出歯亀

名刺やハガキの調査に出かけた刑事は、疲れた足を引ずつて帰つてきたが、女の死とは関係がないことが判つて、一切は徒労であつた。

主任から、解剖の結果が、他殺と認定されたことを聞かされ、ふたたび元氣を取戻して、新たな活動に入ろうと、鳩首協議しているところへ、樺山刑事が勢い込んで帰つてきた。

「主任、やはり目丸の奴がくさいです。昨日出かけたきり、帰つて来ないと云うんですがね……」

「こつちも大騒ぎしていたところなんだ。解剖の結果が、他殺と判つたのでね、いよく本格的にやらなきゃならんよ」

「そうでしたか。では、目丸のことを報告しましょう」

目丸徹雄は、本年二十六才になる若者だが、身体の大きな、醜い顔の男である。眉毛が太く、まん丸い眼の下に、赤い鼻がすわつていて、うすい唇の間から、黄色くなつた歯牙が二本、にゅつと飛出している。

「チエツ、出歯亀じゃないか」

小さい時から、出歯亀／＼と云われて、徹雄は

「畜生、人間の価値なんで、顔や形で定まるもんじゃねえ！」

歯を食いしばつて、働らいてきた甲斐があつて、二十才すぎの若さで、小金を貯めていた。二十四才の時、久野キチと結婚したが、キチは二十八才で、徹雄より四ツも年上であつた。

「徹ちゃん、うすのろだから、年上の、しつかりした女をもらつてやらなきゃア……」

近所の人たちの世話で、嫁にもらつたのであつたが、一年ばかりすると、キチは徹雄を尻に敷きはじめ、家庭内は風波が絶えなかつた。見兼ねた人々が、仲裁に入つたが、

「将来の見込みがないから、この際、別れたい……」

と、キチが云い出し、とう／＼二万円金をやつて、離縁した。間もなく、二度目の妻をもらつた。川南テルと云い、これも、徹雄より十一も年上の三十五才だつた。テルは、三年ほど前に、先夫と別れて、食堂で働いているうち、徹雄と知合い、

「十一も年が違つたんじや、駄目ですよ」と、云うのを、

「前の房子も年上だつた。俺は年の若い女はきらいだよ……」

と、無理矢理家へ引入れて、夫婦になつた仲である。表面夫婦は仲は円満らしく見えたが二十四、五の若い夫を持つたテルの気持は決しておだやかでなかつた。夫婦になつて、最初の正月を迎えて間もなく、テルは家を飛出してしまつた。徹雄は氣違ひのようになつて、テルの行方を探したが、どうしても、判らなかつた。

「畜生、馬鹿にしゃがつて……」

かん／＼に怒つた徹雄が、タンスの抽斗を調べて見ると、虎の子の貯金は払い出してあつて、衣類も、目ぼしいものは消えていた。払出された貯金は八万余円だが、小商いの徹雄に見れば、永年汗垂らして働いた結晶だし、大金であつた。

「ようし、きつと仕返しをしてやるぞ」

徹雄は仕事もせず、毎日ぶら／＼していたが、昨日から何処へ行つたのか姿が見えなくなつたと云うのである。

「目丸が立廻りそうな家は、調べあげて来ましたが、如何でしょうか、主任……」

「いや、現在のところ、それ以外に、手掛りはない。手分けして、立廻り先に張込んでく

れ――」

「は、承知しました」

樺山刑事が手帳をひろげた。刑事たちは額を突合せて、手帳を睨んでいたが、二人一組となつて部署を定め、いよく張込むことになつた。

年上の女が憎い

目丸徹雄は、事件発生以来、三日目の夜、寺島の自宅に舞戻つたところを、張込んでいた井上、川村両刑事に取押えられた。水上司法主任は、荒川から発見された本を突付けて、「どうだ。お前の本だろ」

と、きめ付けると、目丸はケロリとした態度で、

「俺の間違いねえ。新聞に出ておつたが、もう、判つちまつたんですかい……」

「三月二十六日の晩、パン助をつれて荒川の土堤へ行つただろう」

「すみません。俺がやつたのに、相違ありません。誰にも判らぬと思つていたのに、こんなに早く、どうして判つたんです？ おどろきました、まつたく……」

「こんなモノを置いて行けば、すぐ判つてしまふよ。悪い事をして判らぬと思つたら飛ん

でもないことだぞ」

「そうですか。すみません」

徹雄はすっかり観念して、街娼殺しの犯人である、すべてを自白した。

年上の女に裏切られ、所持金を捲き上げられた徹雄は、自分より年上で、久野キチや、川南テルに似た女を見ると、無性に腹が立つた。取られた金も惜しくなり、殺した上、所持金を強奪してやろうと決意、その夜、京成電車の最終電車で、荒川駅を降りた向井キワに云いよつて、土堤につれ出し、両手でいきなり、キワの首を締めつけて、殺害したのであつた。

強奪した時計と指輪は、浅草の古物商に売り飛ばしていた。

「自分の至らないところは棚にあげ、他人をうらむとは、もつての外だ。死んだ女に、何と云つてお詫するのさ」

司法主任にきめつけられて、深く頭を下げた目丸は、一言もなかつた。

彼は強盗殺人の罪名で送局となつたが、終戦二年目、桜の花を前にした、戦後犯罪の一つである。

(おわり)

金婚の告白

大金持になつたメンデル氏の金婚式が行われた。この金婚五十年目の式の日には、おたがい秘めていた隠しごとを披露し合うというしきたりがあつた。

式が終えて二人きりになつた時、メンデル氏は夫人の手をやさしくとりながらいつた。

「サラや、わしはお前に対しこれまで隠していたことが二つあるのじやよ。それを今いつてしまおう。そして気を軽くしたいと思うのじや。実は、わしはお前を二度騙している。一度うちにいた女中にこつそりと手をつけたこと、あとの一度はうちの隣りに住んでいたことのあるワイスの奥さんとしやつた。もう／＼何十年も前の旧いことじやが……」

年はとつていても、メンデル夫人は夫の告白を聞くと平静ではいられたかつたと見えて、きり／＼と入歯をかみながら、首を振つていたが、それもしばし、今度は彼女の方からもいゝだした。

「ねえあんた実はあたしにも、あんたに隠

していた秘密が二つあるんですよ。二度ともあんたの眼をかすめて道ならないことをしたんです。一度はあんたの甥のナタンと、一度はお店の若い店員と……でも、あんたと同じに二度きりだつたんですがね」

これで老婦夫は釣合いがとれたわけだつた。メンデル氏が三度といつたら、夫人の方も一つぐらひは取つて置きがあつたろうに。

窓 裏 醉 艶 集 窓 裏

恐しい誤解

「おい／＼、そこへ行くのはブラムじやないか。どうしたんだ、蜂にでも刺されたのかね。まるで二目と見られた顔じやないぜ」
「やあ、ブロックか、いやどうも、ひどい目にあつたところさ。レヴィの奴に殺されそくなつたよ」

「えッ、レヴィに？ 人違いじやないのかね
レヴィといつたらお前とは無二の親友じやな

いか」

「その無二の親友が仇になつたんだ」

「はてね、一たいどうしたわけだ」

「まあ聞いてくれ、今日の午後、レヴィの家へ寄つて見たんだ。レヴィが留守でね、妻君と世間話をして、さて帰ろうとした時に、ズボンのボタンがぼろりと、れちやつたんだ」

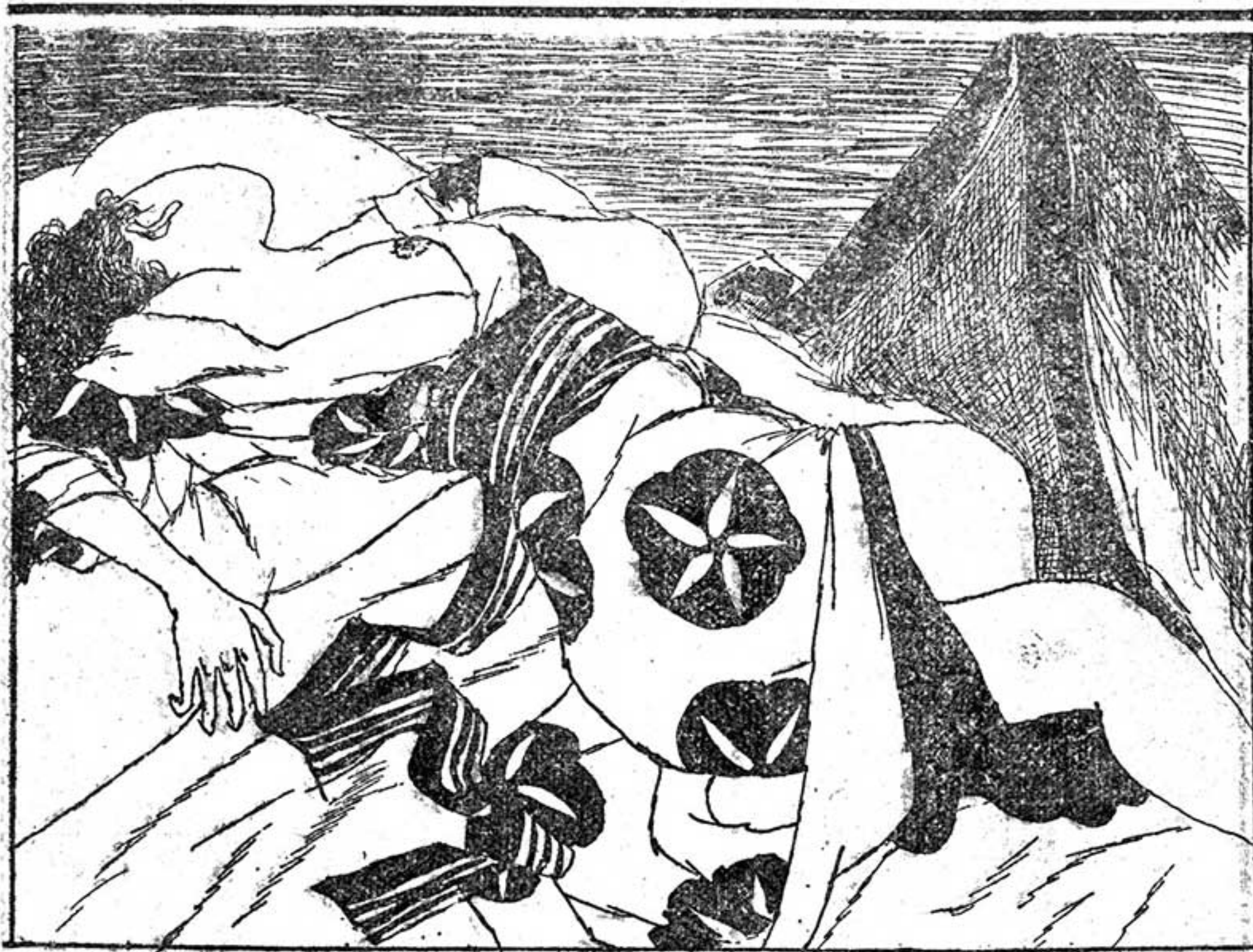
「よくあるこつた。まあレヴィの家でよかつた」

「うん、レヴィの妻君もそういつたぜ。あたしの家だからよござんしたね。すぐつけてあげましょう。いゝえ、わざわざズボンをぬがなくなつて、ボタンをつけるくらいわけありません。そのまゝでいらつしやい、てんでレヴィの妻君が手早くボタンをつけてくれたもんだ」

「うむ／＼」

「ボタンを縫いつけて、最後に糸をとめ、それから糸を切らなくちやならない。レヴィの妻君は、いつもの癖でその糸を缺でなく糸切歯で切ろうとしたんだよ。……その時にレヴィの奴が突然帰つて来たんだ。……それで俺はこんなにな顔になつたのさ」

し殺美容師坂玄道



愛するが故に死にのぞみながら
加害者をかばう女心

戸部 春光

黎明の血飛沫

「殺人だ！ 臨場を頼む」
と宿直の金井刑事が、叩き起されたときは、まだ戸外には薄靄が垂れこめていた。

昭和十五年七月十六日の早晩である。

睡い眼をこすりながら刑事部屋を出ると、階下の事務室には赤々と電灯がついて、どれも休憩中の熟睡中を叩き起されたいらしい、制服、私服の泊り巡査が、めまぐるしく右往左往している。

容易ならぬ事件の突発を物語る緊張した空気がだった。

「手配電報の案文が出来ました。これから直ぐに打とうと思いますが」

と若い警務係の巡査が両眼をかゝやかせて、一枚の電報用紙を差出す。文字がふるえ、ところ／＼にインクが滲んでいる。

慌て、いるのだ。

（落着かんければいかんぞ！）

と金井刑事はわざとむつつりと。電文に眼を通した。

今朝三時五十分頃、管内上通り四丁目五十二番地百合美容院主初村京子当年二十七は同家二階の寢室に於て、何者かのために鋭利な

る刃物にて咽喉部を刺され頻死の重傷を負う。犯人は旋錠なき窓から侵入したるもの、如きも、家人は熟睡中にして、犯人の人相年令特徴不明。手配乞う。

読み終ると、指令通信室（電報の発信所）へ行く階段を上りながら、

「届出人は誰だ？」

「道玄坂の杉田医師です」

「被害者の家の者からじゃないのか？」

「弟子が二人居て、そのうちの一人が怪我人ができたから。すぐに来て下さいと杉田医師を呼びに行つたそうで」

「ふむ？」

と金井刑事の眼がピカリ光つた。

「ところが、怪我人を見ると、咽喉の動脈が切れて、もう手の施しようもなく、明かに他殺とわかつたので、弟子達の止めるのも聞かず、前の公衆電話から報せたのです」

「弟子達は警察へ訴えるのを拒んだというのだね」

「被害者の京子が——女主人が警察へしらせではいけない、あたしの不注意の怪我だからと、杉田医師を呼ばせたそうです」

「犯人をかばっているのだ！ 面識のある奴

だな？！」

早くも、事件にからむ複雑な糸を手繰るよ
うに、金井刑事の眉宇にけわしい皺が浮かぶ。
事件の概略は、掴んだ。

「非番刑事の全員を呼出しておいでくれ。集
合場所は現場だ！」

警務係に言ひのこして、先発として金井刑
事も宿直主任の一行に加わつて、早曉の戸外
へ飛出した。

現場は渋谷の盛り場。百軒店の歡樂街を、
目と鼻の先にひかえた。道玄坂の一角。夜の
遅い附近はまだ深い睡りに沈んで、血臭い殺
人事件が起きていようなどは、まるで嘘の
ような静けさだ。

被害者京子は、二階の、居室兼寢間になつ
ている六畳の自室に、床の間を枕に敷いた蒲
団のなかに、朝顔模様の浴衣を鮮血に彩つて
横たわつていた。両眼が苦悶にゆがんで醜く
吊上り、吐く息も掩々として、蒼い顔には、
すでに死のくまが拡つてゐる。

敷蒲団も、ま新しい青畳にまで血飛沫が飛
んでいるが、部屋のなかは割合に整然とし
て夜具までがきちんとしているのは、熟睡中
を、何等抵抗なく襲われたためであらうか？

まだ、咽喉部からは、どくどくと血が噴き

出て、見るも凄惨な現場だ。

やがて数分を出でずして駆けつけた、田々
羅捜査課長が、嚴肅な面もちで、自ら被害者
の耳もとへ口をよせ、

「誰にやられたのだ？！ 君は知つてゐるんだ
ね？」

京子は苦悶のうちにも、顔を他向けようと
する。

「男——？ 誰だ。どうして言えないのだ」
追ひすがる鋭い声に、京子の唇がひくく
とけいれんした。

怪しい男

「いいえ、ちがいます、かわださんは悪い男
じゃない……かわださんはい……男よ」

京子はやつとそれだけ言つた。

だが、果してその言葉が、田々羅捜査課長
の訊問に対する応答であつたらうか？

頻死の重傷に喘ぎながら、すでに溷濁した
理性のなかに去来する、たゞ一片のうわ言で
はなかつたらうか？

京子は苦しい息の下から、それだけ言う
と、それが最後で、がつくりと頭を下げてし
まつた。

万事は終つた！ 京子は事件解決の鍵を胸

中に秘めたまま、息を引取ってしまったのだ。

鉤手の切れた蚊帳が、ぶらんと宙にぶら下った蒲団の上に、美しい寝化粧のあとを匂わせた京子の死体は、酸鼻な現場に不釣合なほど媚かしい姿態だった。おそらく、そのむつちりした肉づきのいい、白い脛や、ふつくらとふくらんだ胸の隆起には、生前の男関係について、何事か物語る妖しい吐息が流れているようだ。

しかも、捜査課長が疑問とする点は咽喉部に七ヶ所の刺傷を負い手当ての施しようもないほど致命的な重傷をうけながら、警察へしらせようとせず弟子達に医師を呼ばした京子の心算だった。

京子が臨終に口にした、かわだ、なる名は如何なる人物か？

先づ二人の弟子を訊問した。同家は家人と言つても女主人の京子と、この住込の二人の弟子だけだった。

「二階に変な物音がしたので、びつくりして眼をさまし、お師匠さんの名を呼んだのですが返事がないので、変に思つて二階へ上つて行きますと、ぱつと、黒い影が窓から飛び降りるのを見ました。ぎよつとして、部屋のなかを見ますと、蒲団のなかに、お師匠さんが

血だらけになつて苦しんでいるのです。私はびつくりしてお師匠さんのそばへ駆け寄り、夢中で咽喉の血を拭きました。そこへ、民江さん（もう一人の弟子）が上つて来たので、お師匠さんは『何でもないのよ。驚かないで、あたしの不注意で怪我をしたんだから警察へなんかしらせちや駄目よ』と仰有るので、民江さんと相談して、杉田医師をお呼びしたのです」

姉弟子の絹代が脅えた口調で陳述した。

絹代が見た黒い影が男であることは決定的だ。被害者の刺傷がそれを物語っている。七ヶ所の傷は、何れも深く喰いこんで、女の力では到底不可能な業だ。

「君達はずつと前からこゝで働いているのかね？」

「はい、お師匠さんが、昨年こゝへ店を開いたときからです」

「お師匠さんは独身なんだね？」

「はあ」

と絹代の顔にちらつと朱ののぼるのを見逃さず、

「二十七にもなつて独身じや、彼氏のいるのも無理はないが——一体誰だね。働きの、しかもあんな美人のお師匠さんに想われてい

る男と云うのは」

男が居ると、頭からズバリ斬りこむあたりは、流石に名捜査課長で、相手に詭弁を弄す隙も与えない。

絹代もついうっかりとこの誘いに乗つて、「保険の外交をやっている野依さんですけど、それは仲がよくて、この秋には結婚するお約束のようでした」

「昨夜来る筈だったんだね」

「はい、昼間お電話があつたらしく、お師匠さんは宵のうちに銭湯へ行つて綺麗にお化粧までして、とても嬉しそうでしたから——」
「来るときは、いつも泊つて行くのだね？」
「はい」

と絹代の顔がまた赤らむ。

や、老嬢の年令に近い、美貌の娘美容師と、野依と云う男との情事がどんなに濃厚であつたか、想像に難くない。

「野依は昨夜来なかつたのか？」

「私達は十一時頃までおきて居りましたが、そのときまでは未だお出でになりませんでした。十一時過ぎになつて、お師匠さんが「遅いから、戸締りをして寝てちょうだい」と仰有るのですから、階下の部屋で寝てしまつて——あとのことはわかりません」

深夜になつて野依が訪ねて来たか？

とにかく、犯人が被害者京子と面識があり、重傷をうけながらも、且つ犯人を憎んでいないことはたしかだ。

——とすると、保険外交員という野依に対する疑問はますます濃くなってくる。

しかも、現場捜査の結果、被害者の枕元にあつた被害者所有の褌口に異状がなく、室内を物色した形跡がない点から、犯人の目的が明かに京子殺害にあつたと肯定できるのだ。

巖頭の美人

たとえば犯人ではないにしろ、野依が京子殺害事件に、重大な鍵を握っていることは、最早否定できない。

網代の陳述によつて、野依の住所が判明すると、老練の渡辺刑事（現部長刑事）と金井刑事が、都内某区の野依のアパートへ飛んだ。ところが、果たせるかな、疑問の男野依は、兇行のあつた翌朝から姿を消したつきりアパートに帰らず、勤務先の会社を洗つたがそこにも現れないことが判明した。

野依追究の手は八方に拡つた。

そして、ついに四日目、憔悴しきつた野依が、渡辺、金井刑事の組によつて逮捕され、

渋谷警察署に設けられた捜査本部に連行されたが、訊問にあうや、意外な事実を陳述した。

彼は先ず自分は犯人でないことを釈明し、凶行のあつた夜は、同じ外交員仲間と新宿の遊廊で夜を明かし、その日は女の部屋で過したが、夕刻になつて何気なくひらいた夕刊を読むと、京子殺しと、もに、自分が重要人物の如く書きたてられているのである、うっかり事件にまきこまれては大変と、友人の宅を転々と泊り歩いていたというのだ。

直ちに刑事が新宿の遊廊へ飛んだ。

野依の陳述に偽りは無い。不在証明がとれると、はりきつていただけに、刑事達の顔にみじめな落胆の色が覆いかぶさつた。

「あの日に京子のところへ、野依だと云つて、今夜行くからと電話をかけた者があるのだが、君には心当りはないか？」

容疑が晴れて、すつかり喜色を取戻した野依は、

「へえ、私の名で——」

と首をか傾げる。

「では、聞くが、京子が臨終ぎわに、かわださんは悪いひとじゃない、と一言云つて息を引取つたのだが、かわだという人物を知っているかね？」

「かわだ？」

口のなかで呟いていた野依が、びくつと、両眼を血走らせると、

「川田のことでしょう！ きつと川田のことを言つたのです！」

「どんな関係の男だね？」

「畜生、川田の奴だ。京子を殺したのはあの男に違いありません！」

憤怒に燃える野依の眼から、やがてはらはらと涙があふれた。

「私が京子と知合う前に、京子と関係のあつた男で、熱海で井戸堀人夫をやっている男です」

「井戸堀人夫？」

「ご不審はごもつともですが——何故京子がそんな男と関係を結ぶようになったかと申しますと——」

一年前の春のことであつた。

熱海——夕陽のおちかけた錦浦の巖頭に、潮風に黒髪をなびかせて、じつと海面を見つめている女があつた。

女の白い頬に、涙がつたわつてきりつと一文字に結んだ口元には、容易ならぬ覚悟のいろが偲ばれた。

やがて膝をおると、足もとに転っている

石を一つ二つと拾い、たもとのなかへいれはじめた。

女のたもとが、小石でふくらんだ。草履を脱いだ、白い素足が、痛々しく一步二歩、しずかに岩の上を渡つて、海面近く進んだときであつた。

「これッ、馬鹿なことをするな！」

錆のある、太い声がしたと思うと、黒い影が、うしろから、女の肩を抱いて、うしろへ荒々しくひき戻した。

「離して、死なせて下さい！」

男に羽交い締めになれたまゝ、女は両脚をばた／＼とさせた。潮風で裾が紊れ、白い脛が闇のなかに、くつきりと躍つた。

「馬鹿言え」

男は大喝して、女を横抱きにしたまゝ、のつそりと草の根をかきわけ、平坦な道路のところまで行くと、どさりと、女の身体を地上に転がして、

「バカッ、あんなところへ飛込んだらその綺麗な身体を、くじらかふかに、粉々に食ってしまうよ。海中には、金魚なんか棲んじやいねえ。鯨や鱈がうじようじよしているんだぜ」

と白い歯を出してニヤリと笑つた。

女は泣きはらした眼をちらつと、はるか眼下の海面に走らせたが、ぶる／＼と身ぶるしていた。もう完全に死神に見離されている。

嫉妬に狂う男

「どんな男だつたかしらないが、そいつ一人が男じやあるまいし、捨てられたからと云つて、何も死ぬことはねえやな。まあいゝさ、死んで新しく生返えつたつもりで、こんどはお前の男を見返えすようないゝ男を探すんだな」

海の見える旅館の一室で、男の前で首をうなだれているのは、いましがたまで、錦浦で投身自殺の一步前を救われた女だ。

一風呂浴びたあとらしい。宿の丹前に着替えた姿は、水々しく、それでいて、ひどく色つぽかつた。男は卓子に頬杖をついて、手酌でチビリ／＼やつている。衿もとがはだかつて、まつ黒い胸毛が覗いている。色の浅黒い眼のするどい男だつたが、精悍な身体つきのなかに、人の善さそうな情味があふれている。

それが、安堵を与えた。

東京から、死のうと思つて熱海へ駆けつけお午頃から錦浦の岩かげに立つていた。男に

捨てられた傷心の娘を氣に病んで、金はいくらでも出してやるから道玄坂あたりへ美容院でも出し、しばらく独りで商売をやつて、気分をまぎらわしたらどうだと、やさしくいたわつてくれる父親の話もした。

でも生きていることは辛いことだつた。死にたいと一途に思つた。

何も彼も忘れて、あたしは渦の中へ飛込もうとしたが――。

もう死にたくない。生きたいという心で一杯だ！ どなたか、心から頼れる男に、ぎゅッと抱きついたまゝ、あたしは生れ替つて生きたい！

そう言う女の瞳が、燃えるように、眼前の男に注がれていた。胸が妖しくときめくのだ。闇のなかでいきなり声をかけられ、むんずと抱きすくめられたときは夢中だつたが、こうして明るい燈の下で向い合ふと、あのとき逞ましい力で押えつけられた乳房までが、もの狂わしくうずくようだつた。

女は鏡台に向つて薄化粧した。唇に紅をさすと、四肢が蘇つたように、かあッと火照つた。

「お酌を――そいつはすまねえ。お前さんのような綺麗な女に酌をして貰うと、酒も一段

とすめえに違えねよ」

銚子を持つ女の手が、微かにふるえてい
る。湯上り姿の若い女と、差向いになりなが
ら、微鹿も心を動かそうとしない、純眼の男
の心が、恋に破れた女の胸をえぐつたの
だ。

「あッ」

と酒が盃からこぼれるのを、男の膝に
にじり寄つてふこうとしたとき、男の手
と、白魚のような指先が触れ合つた。

熱い衝激が、それ／＼の胸に火花を散
らした。お互いにこらえていた最後の一
線だつた。どちらからともなく崩おれて、
二人はその夜、海潮のうねりをき、なが
ら、仇な縁を結んだ。

男は温泉町の井戸堀人夫川田、女は京
子だつた。帰京した京子は父に頼んで、
道玄坂に美容院を開業し、月二、三回を
きめて上京する川田と、ひそかに、待合
やホテルで逢つて肉体関係を結んでいた
が、都会の女の軽薄さを身につけている
京子は、次第に粗野な川田に愛想をつかし、
やがて、新しく登場した、若い保険外交員の
野依と懇ろとなるや、秋には結婚するという
堅い約束まで交す仲となつてしまつた。



愛する者の敏感さで、川田は京子の裏切り
を知つた。逢つて、その心変わりを難詰し、
野依と別れてくれと泣いて頼んだが、京子は
あたしのために、いま、でのことはあきらめ

深更、二人の弟子が寝しずまるのを待ち、二
階裏側の窓から忍びこみ変心した愛しい女の
頸部に凶刃をふるつたのであつた。

「君は京子に川田と云う男があつたのを知ら
なかつたのかね」

「はあ、あとになつて、京子から川田の
ことを聞きました。しかし、そのときは
もう私も京子なしでは一日も生きられな
い男だつたのです。過去にどんな男があ
ろうが、これからの京子が私一人を愛し
ていくなら、私は川田のことを許そうと
京子に言いました。京子は、きつとうま
く言つて、川田とは切れるからと申しま
すので、まさか、川田が京子を殺すほど
までに、深く愛しているとは知らなかつ
たものですから簡単に二人の仲は精算さ
れると思つて居りました」

語り終つた野依は額に流れる汗をふい
ていた。

川田はまもなく、熱海で渋谷署亀田部長
刑事、渡辺刑事の両名によつて逮捕され

てくれと、剣もホロロの言葉。一旦京子と別
た。

れて熱海へ帰つた川田だつたが、京子の愛心
に憤る心押え難く、ついに嫉妬の鬼と化し、

偽電話で京子の在宅をたしかめ、七月十六日

愛するが故に

「野依という男も考えの浅い男で、一年近か

くも肉体関係のあつた女を、川田がそんなに簡単に思いあきらめるわけがないじやありませんか」

当時を述懐して渡辺刑事はしみじみと筆者に語った。

「どうも、殺された京子という女は、近頃よく云われる太陽族型の娘によく似たところがあるんですね。失恋してすぐ自殺を思いつて熱海へ駆けつけたり、そこで、自殺を思い止ませた男に、すぐ恋を感じてしまう。自省も反省もない。無軌道で、刹那的で、しかもどうも肉体派的の素質もあつたんじゃないですか」

「しかし、その川田という男ですが——温泉町の井戸人夫をやつていよう男なら、女遊びも相当やつていて、女の感所を押えることは充分心得えている。そこで、宿に連込んで傷心の京子を慰めているうちに、じわり、じわりと京子の気持を、ヘンな方向に引張つていつたんじゃないですかね」

「ところが、この川田という男は飯場でも変り者で——川田の捜査のときわかつたんです——女遊びもしない。稼いだ金はコツコツ貯めて、故郷の母親のところへもときどき送金しているという、非常にもの堅い男なんです」

す」

「そういうところが、川田の態度に自然に、じみ出て、それが京子の心を惹きつけたのかなあ」

「そうなんです。人夫をやっているほどだから、筋骨隆々として、色は浅黒いし、都会の柔弱な男を見つけている京子にとつては、まさに世紀の偉丈夫という感じを与えたのですね。」

それに、京子は川田を知つたとき、すでに処女でなかつたということが、捜査の結果判つたのですが——男を知っているだけに、こうした逗ましい男を見ると、肉感をそそられるんですな。

だから、自分から酒の酌をして、その勢いのおもむくところ、とうとう変な関係を結んでしまつたんですが、川田にすれば京子はじめての女なんです、その交情がどんなに細やかであつたかは、京子が三日間もその宿に、川田と泊りつづけていたという事実でも判るのです」

京子は二人の弟子に、川田の存在はひた隠しにしていた。

熱海で死損つた事実を、弟子達に知られ度くもなかつたし、それに、身分の賤しい男

牝牛

五つになる子供をつれて、ある百姓が町の市場へ牛を買いにでかけた。

市場につないである牛を、彼は一匹ずつ念入りに調べた。手で牛の背中をなで、毛並みの具合を見たり、横腹のあたりをつまんで、肉づきのよさをためしたり、乳をちよこちよこやつて精がついてるかどうかを見たりした。

「おとつちゃん、一々どうしてそんなことすんの？」

「そりやお前、物を買う時は、隅から隅まで念を入れてしらべて見ないことには、とんだ屑物をつかまされては、こつちの損じゃ。お前もよく覚えときなさい。」

子供は黙つて返事をしげかつた。

しばらくたつて、子供は何か確信でも生れたかのように父に向つていた。

「おとつちゃん、うちのおっちゃん、もうずっと前から売りに出されているんだね。だつて、こないだ近所のおじさんが、おっちゃんとても念入りにしらべていたよ。」

が、自分の情人であることが、世間に知れるのを怖れていたのである。

そこに、川田に対する軽薄な、京子の愛情に不純なものがあつたのを知ることができる。

「晴れて夫婦になるまでは、二人のことは誰にも知られたくないの」

京子は人眼を避けたホテルのベッドで、川田の耳もとに囁くのだつた。

正直一途の川田は、恋しい女の言葉を、その通りに汲み取つた。女の言葉の裏に潜んでいる、真実の臭いを嗅ぎだそうとする注意心は、微塵もなかつた。

それだけに、京子から野依との結婚話を聞かされたときは、川田には青天のへきれきのように驚き、容易に京子の言葉を信じぬほどだつた。

しかし、結局、秋には二人で結婚しようとして約束したと聞き、いくたびか電話で声色を使い、二人の弟子達に、「野依」の名で京子のことを聞くと声を揃えて、

「秋のお式がお待ち遠しいのでしょ」

「野依さんが師匠さんの、旦那さんになつたら、うんとご馳走して貰うわ」

などとひやかされたりした。

京子と野依の結婚は事実なのだ！川田は、倉ろうと熱海の飯場へ帰つたが一夜として、睡れなかつた。

弟子達や、世間の人は何故いま、で京子と自分のことをひた隠しに隠していたか？その理由がいまこそはつきり思い知らされた気がしたのである。

「裏切られた憤りだけじゃないんだ。嫉妬なんだ。嫉妬は、平常やさしい男の心も一瞬にして鬼畜に変貌させてしまう。上京した川田は道玄坂の金物屋で庖丁を買い求め、それで京子の生命を奪つたのだ。殺された京子も、日頃やさしい川田が、何故そんな怖ろしいことを企んだか——わかつたんだね、わかると同時に、自分を殺そうとする川田を憎もうとせず、自分の罪を詫びているので。臨終の言葉こそ、最後にしめした、川田に対する京子の美しい愛情だつたとも云えるね」

どんな人間でも、よの体内には美しい心が宿っているものなんだねと、渡辺刑事は話を結んだ。

——完——

運 命

イサクはまだ二十五になつたばかりだが、なにか思慮が深い。そろそろ結婚しようと思いはじめているが、それには一つ運勢を見て貰おうと思ひ立つた。

イサクはトランプ占いの女のところへ行つた。占い師はしきりとトランプを並べて考えていたが、やつとうなずいて、『どうも、はつきり申してはお氣に障るかも知れませんが、占いがそういう風に出てしまつたから隠しだてをせずに男しますよ。……あなたは遠からず結婚をすることになつています。まず最初の三年間は、奥さんの移り気や金使いの荒いことやいろんなことで大分苦労をしなくちやなりませんね。』

『なアに、三年間ぐらい何もありませんよ。その三年が過ぎたら、私の運もひらけてくるというわけなんでしょう？』

『といたいところですが、あとはただ慣れっことになつてしまふだけなんですよ。』

妖塔から来た女



妖塔から来た女

雪国の、温泉の朝程静かなものはない。

そこは、飛弾と美濃との国境、下呂へ続く中山七里の入口。前に益田川支流の氷溪を見下し、後は御嶽支峰の峨々たる巨嶽を仰ぐ静かな温泉郷、岐阜県武儀郡飛弾金山町の金山鉱泉、湯元別館の明るい浴室である。

土地の娘だろうか、桜桃のような頬を輝かせ、小麦色の健康な肉体をピチ／＼させながら、まだ若い

娘が二人手拭一つで、朝の浴室へ下りて来た。

皆いゝ身体をしている。爛漫な笑顔を撒き、屈託のない土地訛りの言葉が、如何にも純真そうに見えるた。

「おや、お客様だよ」

先の娘が浴槽を覗いて、そこに一人の若い女客が入っているのを見ると、開けっ放しの話を止めて後の一人を振り返りながら、肩でくすつと笑って入って来た。

「おゝ熱い」

詩 画
清 裕
山 元
杉 根

先の娘が茶目ッ娘らしく、バチャ／＼湯をかき廻してから、チャ／＼は素晴らしいの鼻唄を唄いながら、そこに気持よく沐つてゐる女客の方を見て、人なつこそうにニーツと笑つた。そして、一寸照れ臭そうに、

「今朝は寒いですね」

と話しかけて来た。

浴室のすぐ外には、ガラス窓越しに、廂から二尺も下つてゐる氷柱が見える。湯煙で溶けた屋根の雪が、早朝の冷氣に凍つて、こんな大きな氷柱を作るのであろう。

一尺から二尺くらいの氷柱が林立したり、窓ガラスに美しい雪の花の結晶が、燦爛として開く様は、寒い朝の一つの奇観である。

娘の言葉に、先の客も素直に笑顔と挨拶を返してくれたので、娘達はすぐその客と親しくなれそうな気がした。しかし、お互に黙つて顔を見合してしまつたのは、

（何と美しい人だろう。屹度大都会から来た人だね）

と、眼と眼で語り合つたからである。それは、自分たちよりずっと美しい女に対する、嫉妬というよりは、もつと温い崇敬と羨望の方が勝つてゐた。

土地の娘が一驚した程、その先客は美しか

つたが、それも、女優か何かのような、人工的な美しさでも、山の山人種がする技巧的虚美でもなく、この娘の優しい心と、健康な肉体が造形し、創造する、素晴らしい美の具現的象徴だつたので、彼女らにも、大層身近い親しさの中から、尊敬の念を沸かせたのであろう。

娘達はかゝり湯もそこそこに、身体中がとろけるような湯に入ると、快よさそうに肌を暖めてまだ客の顔を見ていた。

「お客様、東京からいらしたんですか」

「いゝえ、京都からです」

「お客様、どこかで見たような気がするわ、ねえお富さん、そお思わない？」

「失礼ですけど女優さんか何か……ちやござ

いません？」

「いゝえ、違いますわ」

彼女の可愛い八重歯が、微笑と一緒にこぼれて見えた。

「お芝居に関係ありますか？」

「二十の扉ね。直接関係ございません。第三

問」

色の黒い小柄な方の娘、富子の方が、やつと濃霧のような中から、一つの映像を捉えたらしく、

「ア。分つた！ 貴女、淡島美也子さんでしょう」

客は笑顔と一緒にふ／＼と笑つた。適中の証拠である。そしてもう三人は、百年の旧知のように仲良くなつてゐた。それもその筈、淡島美也子と言えば、広い日本で唯一人の乙女探偵であり、アプレ娘たちにとつては、少女歌劇の男役や、千原しのぶ以上に人気のある、女王的存在だつたからである。

「まあ、この方が淡島さんね。道理で美しい人だと思つたわ。後でサインして頂戴ね」

美代子も富子も、忽ち彼女を、黄色い声で取巻いてしまつた。

やがて彼女は、人魚のように弾力的な肌を湯から出し、快く桜色に温まつて、湯船の縁に腰を下すと、土地の娘たちはまるで眩しいものでも仰ぐように、彼女の肉体を凝視した。

☆☆☆☆人里離れた飛弾の山奥に屹立する妖奇の塔。其處に☆☆☆☆
☆☆☆☆住む人々はみんな気が狂つてゐた！ ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

美也子はあまりじろ／＼湯の中から見上げられるので、一寸腰塞地帯を手拭で隠しながら、

「あすこに見える変な塔、あれは何ですか？」と、氷柱の林の向うに見える、古風な尖塔のある建物を指差した。

「あれは或る学者さんの住んでる家です。でも、あすこの家の人は、みんな気狂いばかりなんですよ」

「やつぱり人が住んでるの？ あたし、イゴールとフランケンシュタインの怪物でも住んでる、魔塔かと思つたわ」

「あすこの家の人も、よくこゝの旅館へお湯を貰いに来ますが、大部分は深夜なんです。

それにこゝの女中さんの話では、学者の爺さんも若い男も、あの塔の狐憑きみたいな娘も、混浴でもないのに一緒に入るんですつて。何だか動物的で嫌アね。看護婦さんは時々朝もやつて来ますが、やつぱり何所か桁の外れた所があるわ、あの塔の人は、みんな狂人ばかりなのよ」

美代子が雄弁にそんな話を話している時、又脱衣場へ誰か来た様子。目ざとく富子がその影を認めて、

「シーッ！ 噂をすれば影、塔の看護婦が来

たわ！」

と小声で激しく制した。

やがて手拭一つで入つて来たものは、もう二十七、八だろうか、長身で、瘦癯で胸に女らしい膨らみも低く、赤い薄毛の、そのくせ蒼白い炎を焚いているように見える顔を持ち、娘の春もとうに過ぎた、葉桜のような感じのする女である。

彼女は誰に挨拶するわけでもなく、勝手にジャーツと湯を浴びると、無遠慮に浴槽へ飛び込み、自分とは雲泥甚だしい魅惑の肉体を持つた、美也子の方をじつと見詰めた。それだけでなく、何か蛇に睨まれたような、嫌な戦慄をさえ感じて、彼女ももう一度湯に身体を沈めた。

「多毛質の女は色情妄想が強い。淫婦型と純情型は体質に於て紙一重だよ」

突然彼女が口を開いたかと思うと、赤い舌をヘラヘラ動かして、面と向つて美也子にそう言つた。成程この女は変つてゐる。失礼とも無縁とも考える余裕もなく、美也子もさすがに面喰らつて、眼をパチクリさせた。

成程あたしの身体は、ちよつと羞かしい程毛深い体質だし、聖教徒みたいな男性嫌悪症でもない。娘二十三、若くて健康で、時には

変な妄想を抱いて、独り赤くなる事もある。

しかし、観相家でも予言者でもないこの人から、突然一面識のあたしに、こんな、忠告でもなければ推断でもない事を、頼みもしないのに受けようとは——やはりこの人は、頭のゼンマイが多少逆廻転しているのかも知れない。

「齒齦を見せて笑う女は、性卑しく、多情多淫だよ」

今度は美代子に言つた。

「ぢやア貴女は何なのよ」

彼女はむ／＼としたらしく、そう反撥すると「胸腺淋巴体質は感じ易く、神経系循環系衝撃に抵抗力弱く、発狂し易いんだよ」

表情一つ動かさず言つた。富子は危く嘔き出しかけて、ソッポを向いてしまつたが、発狂し易いどころか、とつくに発狂してしまつてゐるのであろう。

「貴女はあの尖塔の人ですね」

「北条小雪。看護婦だよ」

「看護婦つて、あすこでは、何か医学的な研究でもやつてられるのですか、それとも、病人の附添いか何かなんですか？」

美也子は更に追及してみた。

「来れば分るよ」

「ぢやア、あたしを案内して下さいますか？」

妖塔へ行く美也子

美也子は弟の五郎を連れて、旅館を出た。厳冬の道は凍りついて、頬刺す風は痛いばかり。

名前だけは小娘みたいな北条小雪娘、どんな先立つて、奇妙な尖塔の家の方へ歩いて行く。晴れた冬空に摩して立つその建物は、如何にも怪奇の焦点であるかのようである。

歩いて行くうちに、小雪さんから聞いた塔の家の話というのは、精神病医学の権威、田代讓博士の研究室兼住宅で、彼女はそこの看護婦、その他にその塔の住人は、娘の頼子、義兄の宏一、頼子の許婚者川橋養徳の六人。

それ以上の事は何も分らなかったし、塔へ行くまで、そこがあんなにも奇怪な所だったとは、勿論美也子だつて想像も出来なかった。

塔の家に着くと、小雪がすぐ、陰惨な感じのする門前へ消え、暫くして、怖い程に強く口を結んだ、五十余りの瘦身の男が姿を見せた。その硬い能面の様な表情も、どこことなく狂的に見える、博士である。

「家を見学したいというのは貴女達かね」
鋭い眼光が二人を射た。

「家を見て何になさるんぢや。貴女達は医者でもなさそうだが」

再び視線がぶつかった。臉の奥に燃える火花は、敵意だつたらうか、威嚇だつたらうか？

「あたし、この家の種々な噂を聞いて、湯治の閑のつれづれに、一寸訪ねてみたくなつたんです。好奇かも知れませんが、いけませんでしたかしら」

言葉は穏やかだつたが、語気は、博士に對等するだけの圧力を持つていた。たとえ断られても、そう簡単には引下らないぞという、

抵抗の色さえ見える。

「うん、お入りなさい。貴女の期待は満たされんかも知れないが」

博士は急に折れて、美也子たちを、何思つたのか邸内へ招じ入れた。煉瓦疊みの廊下、無気味な壁、それにムーンと暖い風が肌に迫るのは、暖房装置でもしてあるのだろうか。





応接間。クラシックというよりは、やはり陰惨な感触。どこまでも物の化のような翳のある部屋。蒸気ヒーターの暖かさが、却つて肌に妖しくヌル／＼感じられた。

やがてそこへ姿を見せたのは宏一君。学生服。慎太郎刈りのキザな髪。のつぺらぼうとした胡瓜の化物みたいな男。間の抜けた額のどつ広いツラと、眈の幾分吊上つた眸が、

やはり狂的に見える。

「ようこそ。美しい方ですね。僕は貴女が好きになりそうだな」

それが彼の初対面の挨拶である。

そこへ川橋という青年がやつて来たが、今迄のうちに、彼が一番まともな人間らしい表情をしていた。博士が出て行つたのと入違いに、小雪さんがコーヒ―を運んで来たがその

間宏一は、美也子を穴が開く程眺めていた。
「一杯飲んで下さい。貴女も妹の身体を見に来たんですか」

「え——？」

「妹がいくら貴女と結婚しようと言つたつて、妹は僕の恋人なんですからね、妹は僕の妻なんですよ」

「……」

美也子は何と応答してよいのやら、暫くは次の言葉に迷つてしまつていた。宏一の頭脳は確かにノルマルではない。この男の中枢神経は既に狂つてしまつている。

「多毛質の女は色情妄想が強い。淫婦型と純情型は体質に於て紙一重だよ」

「え？」

美也子は又言葉を呑んだ。それは今朝小雪が言つたのと、同じ言葉だつたからである。

「雪は夢を破つてしまふ。赤い齒齦を見せて笑う女は、多情多淫だよ」

「胸腺淋巴体質は感じ易く、神経系循環系衝撃に抵抗力弱く、発狂し易いんでしょう？」

先廻りして美也子がそう言ふと、宏一は頻りに首を振つていたが、傍に居た川橋の方が、ギョツとして彼女を見返した。

「妹を連れて来る。妹の身体を見せてあげる

から、暫く待つていらつしやい」

宏一はそう言うのと、ツと立上つて、もう応接間を出て行つてしまつた。

「驚いたでしよう」

彼を見送ると、すぐ川橋が言つた。

「え、誰やかつて吃驚しますわ」

「いや、驚かれるのは当然ですが、宏一君は気が狂つてゐるんです。彼は偏執狂で、自分の思つた事を頑強に固執して、それがたとえ非道でも不倫でも、そこまで判断する能力を失つてしまつてゐるのです。それに、今に分りますが、頼子さんも発狂してゐて、一種の倒錯性色情狂で、兄であろが父であろが、相手がどんな種類の人間であろがお構いなし、欲情と性の対照にしたがるのです」

「狂つた太陽の季節ですか」

「狂つた果実ですな」

「でも、貴方は頼子さんのフィアンセなんでしょう」

「外形上はね。実は僕も一週間ばかり前に、この研究所へ戻つて来たのですが、その時は頼子さんも正常な脳髓を破壊され、今も申すような状態だつたので、勿論狂人を妻にしようとは思いませんし、頼子さんは既に、何度か博士の為に犯されて、こゝはまるで動物

の情獄のような有様なのです」

「血族相姦ですな」

「え、しかもそれも非常に極端な例でしょうが、頼子さんと博士とは、一親等の父娘ではありません。宏一君も頼子さんも、博士の妹の子なんです。博士は二人の狂人を自分の実験材料にして、表面では研究していますが、裏面ではその独逸生活の、情慾のはけ口に供されてゐるのです」

「宏一さんと頼子さんの肉体関係は？」

「悲しいかな、彼は頼子さんと情を通ずる方法を知りません。たゞ頼子さんの裸身を愛撫して、たゞそれだけで自分の愛人であり、妻であると思念して、錯誤を自覚し得ないので、偏執狂の通常錯覚ですが、時々波状幻覚が催起されて、それらしい行動を覚醒される事もあります。しかし、逆行性記憶喪失は、到底二人を肉体的には結び得ないでしょう」

「小雪さんという人は？」

「あれは病院時代からの博士の助手だつたというだけで、彼女は婦人冷感症から来る性的不能者、つまり不感症なんで、最近では強度のヒステリーに罹つていますが、生きている木偶人形に過ぎません。唯、博士を神様のよう

の便利な世帯道具ですな。但しこの種の不能者は、うつかり情交光景でも見せようものなら、突然狂暴になつたり、或いは発狂状態になつたりする事があるので、博士の醜行は見せられませんかね。とにかくこゝは獸人の獄、到底正常な神経の持主が、介入する場所ぢやなさそうですよ」

「頼子さんも宏一さんも、先天的精神分裂症なんですね」

「いゝえ、宏一君は遺伝学的に、軽度の精神耗弱者である素質は持つていますが、大体は、アルコール中毒から逆行性記憶喪失が起り、次第に重症に進行して行つたのです。但し、狂燥性が無いだけ安心ですがね。」

頼子さんの方は、若い時から露出症的傾向はありましたが、何かの激しいショックで、精神霍乱が突発したのです。今電気療法などを採つていますが、又何かの衝撃を受けければ、正常な思考力が復元するかも知れません。

話を聞いてゐるうちに、美也子までが、終には何か妖しい霧のようなものに包まれ、この男は本当に狂人ではないのだろうか、いや／＼それよりも、この怪しげな雰囲気酔つてゐるうちに、あたし達も氣狂いの仲間入りをして、思慮も判断もばやけ、脳髓の反射も、

麻痺してしまうのではなからうかと思われた。異様な環境の中に醸成される異様な智性処理に、自分迄支配されるような、戦慄をさえ覚えるのである。

「お客さん、僕は貴女が誰であるかを知っている。こゝへ来る迄京都に居たからです。しかしそれだけに、貴女が此所へ来られた事が怖ろしいんです。名犬が特殊な嗅覚を持つているように、貴女も何かを嗅ぎつけて、此所へ来られたのでしよう。さすがは名にし負う女流探偵だと、秘かに驚愕し、且つ怖れているのです。此所には事件がある。それが何かは分らないが、気狂いじみた事件がある。僕にはそれが分るのです。僕が此所へ来てから、宏一君は偏執独占の妄想から、頼子を僕に奪われるのを恐れている。小雪さんは、自分の地位を脅かされるような、博士の助手としての僕の出現を恨んでいる。頼子さんは僕にも狂愛を示し、情熱を受けてくれない事を僻んでいる。僕は昨日頼子さんを犯したが、それは一層宏一君との対立を深め、相手は狂人ばかりだし、僕は殺されるかも知れない、いま、殺されないまでも、どんな目に遭うか知れない。僕に好意を寄せて下さるのは博士一人だ。しかし僕はもう、獣人のような先生を、

心から慕う気にはなれない。僕はもうこゝに長くは居ないだろうが、しかし、何か起る。気狂いじみた何かの事件が起る。僕はそう考えているんです」

彼は自分の言葉に熱して、激しく喚くように語り続けた。

その時、廊下に不規則な足音。頼子さんであろう。しかしその次の瞬間、応接室人へ入つて来た異形の人物には、さすがに美也子もハッとした。

この厳冬に、何と彼女は全裸だったのである。

二十二才の婦人が、全く羞恥も刺激も反射も忘れたかのように、真裸のまゝ、何所一点隠そうともしない。そのあまりに放蕩な姿には、美也子さえ頬が紅くなるようだった。同性の破廉恥な裸形を露出されると、まるで自分の裸身を想像され、自分の肉体を見られたような羞しさを催したからである。

「お客さん、如何です。美しい妻でしょう。

此奴はこの通り多毛質だから、色情妄想が強いんです。赤い歯ぐきを出して笑う女は、多情多淫なんです」

連結のない言葉を口にしながら、宏大は頼子の身体を指さし、人形でも弄ぶように抱き

寄せたりする。その肌は寒さを感じないのか、赤紫に凍えながらも、衣類をつけようともしない。

美也子は視線のやり場に困つてしまったが、豊艶な肢態——妖しいまでに美しい曲線。完成された爛熟美。

彼女は五郎を見ると、急に粘り媚愛を示し、頬を紅潮させて、身を摺り寄せて行こうとする。さすがの五郎も驚いて、美也子の後へ飛退いた。狼敗した宏一が嶮しい眼で、彼女を抱き止める。川橋が二人を室から追い出そうとする。——混乱。狂愛。美也子はその場の光景に、鳥肌立つような戦慄を覚えていた。ゲーッと嘔き出したいような、胸苦しい、悪感。血も濁るような想い。嫌アな嫌アな気持。あゝ、狂人達の演ずるパントマイムの、何と奇異で不快な事！

何と現実を超脱した、汚濁界の気味悪さ！美也子は、腐敗した胃液が、ゲロ／＼と口元までこみ上げて来るような、堪らない程の不快さを感じていた。

発狂殺人劇

その次の朝。今日もぐんと冷え込む静かな寒い朝。美也子と五郎は手拭一つ持つて、長

い湯殿の廊下を渡つて行く。

「姉さん、一度一緒に入ろうか」

「馬鹿ねえ、嫌よそんなの」

「姉さんの温泉狂も、露出症的色情倒錯の一

変形らしいから、たまには異性に肌を見せて、

自家刺激だか自家催淫だか知らないが、やつ

てみたいんじゃないかな？」

「ブッ！ 何言うてんの。嫌らしい子。あら、

女湯に誰やら居やはるわ。あほな事ばかり
言うて、聞えたら羞かしいやないの」

女湯の脱衣場、帯を解いているのは、昨日
の富子である。

「お、寒い」

手を摺り、背を丸めて、美也子にちよつと
微笑を返すと、一気に肌着を脱ぎ落して、ピ

ーンと凍っている手拭を取り上げ、腰の辺り

に当てる恰好だけで、足早に温い湯煙の室へ
駈込んで行く。美也子も紐を解くと、足が板
の間に凍りつきそうで、身体中がピリッと震
えた。

と――

「キャァーッ！ 大変！」

浴室から大きな声。裸の富子が又飛出して
来た。寒さのセイけだじやなく、齒の根が合
わない程、「ガチガチ」と鳴っている。

「美也子さん、大変。男の人が死んでる！」

「え！」

彼女も驚いて、そのまま飛込んでみると、
湯船の傍に倒れているのは川橋養徳。致命傷
は心臓部の刺創で、兇行後湯で血を流したら
しい跡があつた。

美也子はすぐ脈を取り、眼瞼を返してみた。
駄目だ。しかしまだ死斑も硬直もない。兇行
はほんの二時間もたゝない前だつたのだろ
う。むんずと虚空を掴んで、眸を睜つたまゝ
絶息しているのは、一撃の刺創が如何に激甚
なものであつたか分る。

やがて五郎が来る。事件が旅館全体に伝わ
る。駐在の巡査が青くなつて飛んで来る。そ
のうちの一人が、すぐ妖塔の一家全部を引致
に行く、静寂は一瞬動揺に変わり、波紋のよう



に揺がった不安だけが、皆の心に植えつけられた。唯冷静を守っているのは、美しい美也子の唇と、醜怪な姿で倒れている青年の惨憺のみ。

田代一家の到着。珍らしく頼子さんは着物を着ていたし、眼許にも、あの妖しい媚の焰は焚いていなかった。今日は全く淑やかな令嬢姿である。しかし、それは反して、北条小雪の視線の方が濁っていたし、居並ぶ人々を見るとすぐに、

「博士は氣狂いじゃない！」

と、不意に頓狂な事を口走ったが、表情は能面のように蒼く深かった。宏一君は相変らず、胡瓜のような顔色のまゝ、のつぺらぼうと立っていた。

「早朝御苦勞でした。川橋養徳氏がこのような姿で殺されました。旅館の女中の証言では、今朝早く皆さんがこゝへ入浴に来られたと言いますので、参考人として、いや、この中の一人を嫌疑人として、皆さんに来て頂いたのです——」

美也子は死体の前では皆にそう解つた。

「兇行推定時間は午前四時前後。浴室の床の乾いている事などからして、最初の発見者岩崎富子さんが入浴に来る迄は、誰も入浴者は

なかつたようです。と、この中の誰かを、嫌疑者に仮定しなくてはならないのですが、被害者が川橋さんだとすると、宏一さんは偏執狂の恋のライバルとして、川橋さんを恨んでいたし、北条さんは地位と仕事のライバルとして、やはり川橋さんを敵視していました。頼子さんも狂愛から失恋へ突き墜とされて、色情狂の逆作用は、怨恨に替つていた筈です。そこで問題はかなり複雑になつて来るのですが……」

美也子はそう言つて一同を見廻した。

「あたしは殺人を知りながら、このまゝでは犯人を指摘する事は出来ません。けれどもあたしは、世の正義の爲にも、この事件を解決したいんです。それには、たつた一つの光明があります。それは、逆に嫌疑者が狂人だと言う事なんです。狂人の狂的反射心理を利用する事なんです。あたしはあたしの一本の線を引いて、あたしの推理通りに事件を再演してみたいのです。その爲に、あたしの無理なお願いを聞いて下さるでしょうか。北条さんは強度のヒステリーから、ある光景を目撃して発狂しました。頼子さんはある衝撃の爲に、環元されたのではないでしようか。宏一さんが逆行性健忘症なら、何かの記憶を蘇らせて

くれるかも知れません。精神病理学的に分らない所は、博士の御指導を得て、事件解決に御助力願いたいのです。

恐れ入りますが、関係者以外の方は、全部浴室の外へ出て下さい。五郎は川橋さんの代理をやつてもらいます。その他の人は午前四時の浴槽再現の爲に、裸体になつて下さい。寒いでしょうから、充分お湯で温まつてからで結構です」

先ず宏一が入つて湯に沐つている。そこへ

頼子と小雪と川橋が入つて来た。勿論混浴。

五郎は一番照れ臭く、羞しくて困つてしまつていた。やがて頼子は昨夜の連鎖妄想から、川橋に対して妖しげな媚愛を示し、わざと浴槽の縁に坐つたりなどして、川橋の劣情を煽動しようとした。

さすがにこの再演劇では、頼子の頬は羞恥に紅潮していたし、五郎はもう何とか勘弁してくれろとばかりに、美也子姉さんに哀願していた。

「姉さん、本当に何とかしてくれよ。僕、僕……」

「もうちよつとやから辛抱してよ。でも、本当に頼子さんを陥落させたら駄目よ」

彼女の言葉に、五郎は頭を掻いてしまつた

が、その時頼子の方も悲鳴を上げて、思わず意外な事を叫んでしまった。

「美也子さん、私、知ってるんです。私は川橋を殺した犯人を知ってるんです……」

「頼子さん、貴女は御存知かも知れませんが、貴女の口から、それを仰言る勇氣があまりですか？ あたしは最初貴女がこゝへ入つて来られた時から、露出症的色情倒錯狂である筈の貴女が、異様な川橋さんの死体を見て、羞しげに紅潮した視線を避けられたのを見て、何か大きな衝撃が貴女の頭脳を正常に戻した事を感じました。」

小雪さんが突然発狂状態に入つたのも、川橋さんが貴女を襲つた時でした。勿論川橋はそれを計算に入れていたでしょうが……、

そこへ博士が入つて来ました。宏一さんは不能者だし、頼子さんの肉体を所有出来るのは、自分独りだと思つていた所へ、この光景を目撃して、自分の愛玩物を強奪された憤りに、博士の血は逆流しました。しかし、勿論兇器一つある訳じやなし、ふと見廻すと、月光のさし込む窓があつたのです」

美也子はそう言つて、窓を開くと、その窓外に沢山下つている氷柱を一本折つて、川橋ならぬ五郎を仰向きに引倒し、その胸へ突立

てしようとした。

その時、湯の中に居た小雪が、突然、博士は氣狂いじやないと叫んだのである。

その瞬間、博士の顔はさつと土色に曇り、浴室を飛出そうとした。室外が動揺する。しかし逸早く、その時手錠が博士の腕に鳴つていた。

「博士、貴方こそ偏執狂だつたんです！」

美也子がそう叫んだ時、わーッと泣き伏していたのは頼子である。

「この激しい精神衝撃は、頼子さんの異常神経を復元させたのです。氷柱は川橋さんの心臓を刺し、一瞬にして息の根を止めてしましました。博士はその上へ湯を流して、血潮を洗い落すと共に氷柱を溶かし、兇器は跡形もなく消失しました。目撃者は全部狂人ばかりだと思つて、博士はすっかり油断していたのです。」

多毛質の女は色情妄想が強く、淫婦型と純情型は體質に於て紙一重だと言う事や、齒齦を見せて笑う女は性卑しく、多情多淫だという事、胸腺淋巴體質は感じ易く、神経系循環系衝撃に抵抗力弱く、発狂し易いという事などは、頼子さんの事を博士が常に嘆いて、口癖のように言つていた言葉だつたんでしよう

が、最初は頼子さん、次は小雪さん、最後は宏一さんに該当したようですね」

その時、泣き崩れていた頼子が、頭を上げて言つた。

「いゝ美也子さん。それは私のお母さんの事なんです。お母さんは発狂して、今日のようは寒い日に、お風呂場で氷柱を胸に刺されて、お父さんに殺されてしまつたんです！」

「えゝッ——？」

「その時私は頭がカーッとなつて、それから氣が、変になつてしまつたんです。それが偶然、同じ恐ろしい刺激を与えられたので、又記憶を回生し、何年か前のあの忌まわしい出来事まで、思い出してしまつたんです。あゝお可哀想なお母様。ねえ美也子さん、私らの血の中には、精神病の遺伝質が含まれているのです。私……私はやつぱり、氣の狂つたまゝでいた方が、幸福だつたのかも知れませんか——」

やがて博士は引かれて行つた。宏一君の神経は遂に蘇らず、涎を垂らして「ゲタ——」笑いながら、断頭台へ曳かれて行く父を見送つていたし、頼子は顔も上げ得ずに泣き崩れていた。果して、どつちが幸福だつたかは、私も知らない。

——(終)——

帝國海軍桃色暗号 解読する！

宇佐美正夫

ヘル談と云うのは、かつての日本海軍において、Y談を意味している。日本の海軍では、もともと、すべての点に、範を英國海軍にとつた。歴史上の事実から見ても、海軍用語が概ね英語、若くはその転化を慣用したように、海軍の隠語も、多くは英語が用いられ、しかもそれを、アメリカ流に短く省略するとか、或は転化の型式で造られている。又隠語も、士官の間に用いられるものと、下士官、兵の間に用いられるものとは、自ら相違があつた。こゝでは主として士官の間に用いられたものについて述べる。

女中がメイドで、女給がウエイトレスの如きは別に隠語でも何でもない。料理屋等のお神さんがゴツトで、待合のことをウェーチング、料理屋の名称、例えば魚勝がフイツシュ、岩越をロツク等と呼んだ。これらは夫々の日本名を、そのまま英語にあてはめて呼称したり、それを短縮したものである。

英語そのものを短かく省略したものに、キャプテン（艦長）をケプ、コンマンダー（副長）をコンマ、レストーラント（主とし

て日本式の料理屋のこと)をレス、芸者のことがS、娼婦のことをP、娼家のことをPハウ(ス)、女性のことを一般にウーマンから上だけとつて、ウーと呼んだ。一寸複雑で難解なのは、娘即ちお嬢さんを含む、英語のドウターを、その音で銅と訳し、それをカツパーと英語にして、それをコウベルと称した。これは発案者が何故こんなに廻りくどく、暗号のようにしたか、素人娘に対するタブーが心理的に働いたのではなからうか。

だいぶ前置きが長くなつたが、つまりヘル談と云うのは、助平話、要するに助平の助を、英語のヘルプのヘルに置き替え短縮したもので、これをヘル談、ヘルブツク(Y本)、ヘルピクチュアリー(Y画写真の類)、ヘルプレース(遊廊とか花柳界)、ヘルペー(ペーはペーパーの略、即ち櫻紙の類)、又あいつはヘルだとか、ダメヘル(だまり助平)とか用いた。

以下思出すまゝに列記して見る。女房のことをK・A(囁のこと)、年よりの女をB・A・B・A、大便がグレート又はK・U(糞)小便をスモール、淋病をR、梅毒をプラム

(梅毒)これを用いて、しやがれ声を、プラムボイスの如く云う、横痃のことをサイド、一般に性病と云うときはシツクで代表されていた。半玉をハーフ、女と馴染になると、その女をインチ(インチメートルの略)と云い、これは概ね性的関係の成立した場合の者に対して云う、プラトニツクの場合にはハート・インチと云う。彼女は奴のインチだとか、女に對し貴様、俺のインチになれとか用いた。衛生サツクは單にS・Aと呼ばれ予防薬はピストル(チューブ入り)と云つた、禪はローマ字の頭文字でF・U、宿泊することが(多くの場合は女とオールナイトの時も含まれる)ストツプで、Mが「もてる」、Fが「ふられる」ことを表現し、用語例として、昨夜はMだつたとか、Fられたとか用いた。

海軍では、花柳語がそのまゝ日常語として使用されたものがある。例えばお茶をひく、と云うと、これは進級や、良い配置換えが出来ないで、現状維持の時に用い、又他の配置へ転ずるように、話があつたり、誰かに呼び出しをかけられて誘われると、貰いがかゝつた、と云つたりした。隠語としては、女の水湯をウオターアップ、男の場合は筆おろし

だから、ペンダウンこれをペンダンと呼び玉代を、ボール代と云つた。飲んだくれはへべレケになるということから、へべ助と云い、飲むことを、動詞にしてへべルと活用して、これは料理屋等で飲むことに多く専用された。

これはヘル談には無関係だが、戦後、若い復員者仲間の挨拶に、オツスと云うのが使われたが、これは「お早ようございます」をごくつめたもので、朝の挨拶に常用されたものに外ならない。又陸軍では申し送りと云われたことを、海軍では申し継ぎと云い、物を貰うような場合は申し受け等、何れも昔の言葉の名残り、特に海軍では、夜中航行中、舷燈番が報告のとき、「右舷よりろし」と永くひつばつて云つたり、舵手が「よりそろ」と云つたり昔のものが多い。又簡單で、便利なものが「願います」と云う言葉で、その場の状況と、相手によつて、たゞ「願います」と云い、簡單な動作でもつて、ある時は物を借りたり、上陸許可を得ることに諒解された。又海軍でも艦上生活者でないと、わからない特殊な語に、毛蟲のことをK・G又は測距手と云うが

この測距儀で距離をはかるために、測距手がレンズの調節をする、その両手の指の運動が、しらみの肢の運動によく似ていることから名付けられたものである。又「片舷航行（又は片舷）でも奴は子供が出来た」などと云うのは、淋病で片方の副睪丸がやられて駄目になつたのに、と云う意味である。それは商船と違つて、軍艦では左右両舷に、プロペラがあり、従つて機械も二つあることからである。

陸軍では物の数量、程度をメートルで表現していたが、海軍で云うメートルとは多くの場合性的リビドーのことを云い、メートルが揚がるとは、性的亢奮を生じたこと、従つてメートルを下げるとは、性行為等で弛緩状態にさせることになる。又時には、幻滅等のために自然メートルが下つてしまふこともある。

男性性器の隠語は簡単で、ラ（これは摩羅の、らである）睪丸は英語の秘語と同じくボール、又別に防舷物とも云われた、これは船と船がぶつ時又破止場に着く時、舷が直接衝突しないために、パインアップル形の緩衝物を舷の外に出すが、その形がよ

く似てることから云われたものだ。

女性の性器は簡単にホールとも云うし、性器全体を含めて、連動機のことをいう、ギヤードで表現していた。即ちナイス・ギヤードとかキヤー・ナイスというように用いた。そして分泌物の多少を、プレんテイ・ジューズこれをプレジユウと呼び、スカンチリー・ジューズをスカジユウと云つて、その状態を現わした。

尻のことは、ベツキと云つて、動詞にしてベキルと活用し、後尾に追突した時などに用いたが、又ソドムのこととも表現した。これはバックがなまつたものらしい。キツスのことは單にK I^{クワイ}であらわされた。

性行為を数多くすることを、單価を下げるとは、普通でも、云われることだが、これをナンバーをきかせると云う意味で、ナンバーと云つた。従つて性力の強い人をナンバーのきく男と称した。

前技的演技（探春を含む）をフックと称した。これはハンモック・フックとかポート・フックのように鈎のことで、これを動詞のようにして、鈎をかける、ひっかける意味に用い、指でフックすることが主なるものになつ

ていた。

性行為の準備を、一般には前戯も含めて合戦準備と称し、後始末を、要具收め、並に甲板掃除と云つていた。面白い表現に、舷門ゴーと云うのがある。船が碇泊すると舷梯を降して小舟等が着くようにするが、その舷梯を昇つたところ、船の出入口が舷門である。軍艦ではそこに衛兵が立つていた。即ち船の玄関である。このゴーは、性行為では射精、オルガスムスを称する。そこでこの舷門ゴーは玄関口の射精、即ち早漏を意味するのである。

メンゼス是一般と同じく赤で、それをやはりレッドであらわす。そこで万国船舶信号旗（以下万船と略する）のB旗が、危険信号等に用いる赤旗なので、メンスをB旗全揚だの、半揚などと用いた。海軍士官というものは、よくよく、ヘルマンが多いとみえて、海軍の約束信号の中にK・A・Bと云うのがあつた。信号旗をこの順につゞつて揚げたものゝ意味は「休憩せよ」となるのである。つまりKA（女房、前述）がメンゼスだから、休まなければならぬ、と云うことになる。実によく考えたものだ。

性交そのものは、動詞として押す(オス)と云い、これはその動作から考えられたものらしい。海軍秘語としてもつと一般的なのはPO、これを動詞にするとPOをするこれからポーをスル、ポスルと用いられて来た。この言葉の起りが、やはり万船のPとOを連揚すると、それが「勢力半減」と云う意味になるのである。即ち性交後(ナ

つたと云つてもよからう。昨今、またまた再軍備がどうの、コースト・ガードがどうのと世上にやかましい時、過去に過ぎかつて次第に忘れ去られていく、これらの秘語を性交の一端に残すことも多少の意義がありはしないかと思つて、書いて見た。次に性交関係の二三の思い出話を述べる。

○

この話は、まだ日華事変が起らなかった。平和な頃、或軍艦が地方巡航をやつて、或中小都市に入港した。すると恒例のように、地方の人々が、軍艦参観にやつてくる。丁度その日は、初夏の候の、天気晴明な日であつたから、朝からぞくぞく押しかけてくる人々で艦内は賑つていた。この艦の舷門の下、下甲板が兵員室になつていて、上陸番になつていない兵員達は、退屈まじらしに、舷窓から外をぼんやり眺めてゐた。その舷窓は、高さが舷門から降され、その、半ば以下の部分に當つていた。舷窓というのは御承知のように普通の梯子段と違つて裏板はない。(時にはケンバスを裏に張ることもなくはないが)従つて、裏側からは、段の切れ目の空間が、よく見えるものである。兵員室の舷窓から、何

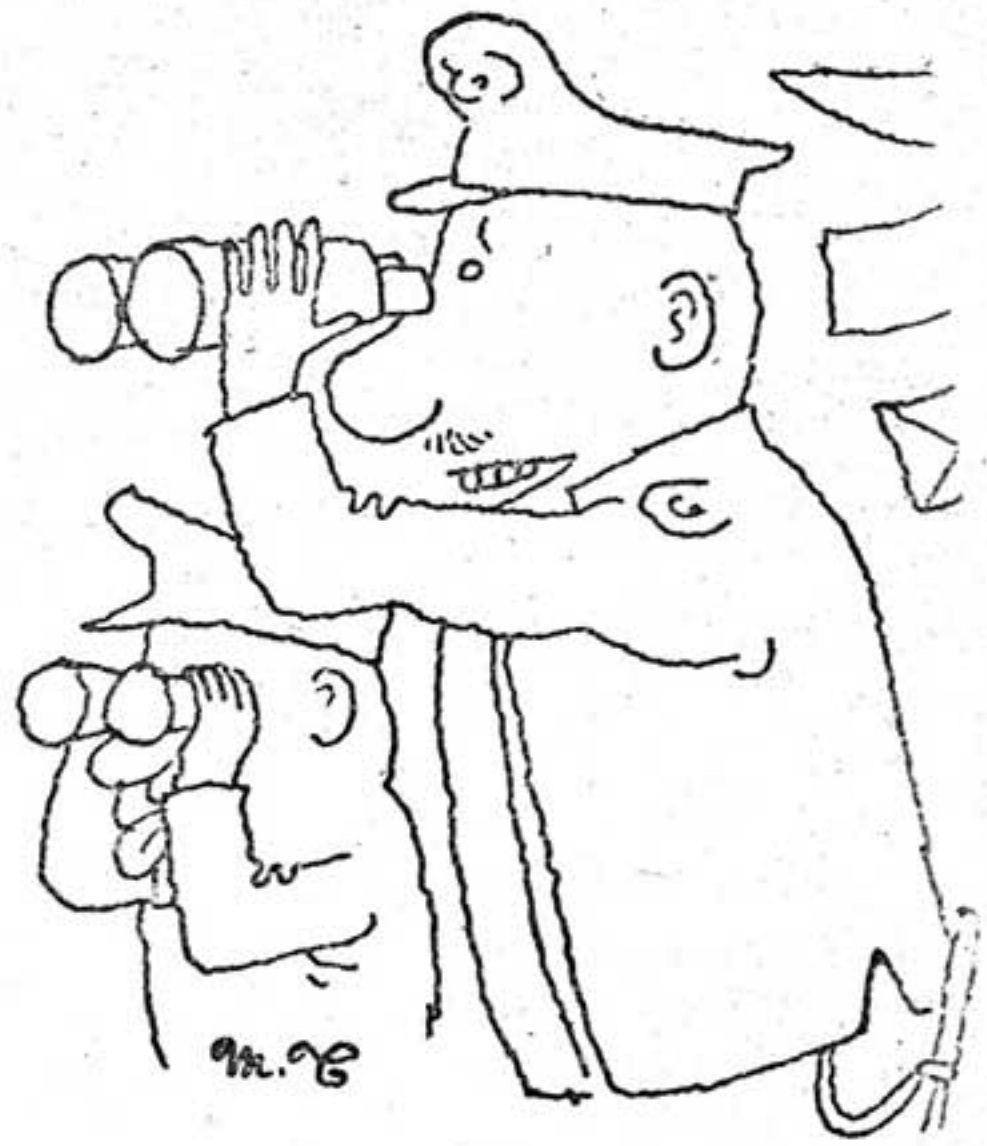
げなく、参観者が艦内に出入するのを見ていた、兵員の一人が、突然、緊張してじつと、上の方を見つめていたが、やがてニヤニヤしながら、居あわせた他の兵員に、小声で囁いたので、他のものも一齊に、舷窓から上を見て、一様にニヤニヤしだした。それはそうでしょう、折から参観に来た和服姿の若い女の人達の一群が、次から次へと、しかも危かしく、ゆつくりと、一段々々舷梯を昇りつゝあるのが、殆ど皆と云つてもいゝくらい、ノーブロだつたのだ、その頃の女は和服では、ズロースを着けな

い人がまだ多かつた。そこで忠臣蔵の由良之助が、お軽の舟玉様を見たのどころか、まるで現今のオールスト以上、下の方は開けつ放しで、しかも下から見ると、舷梯を昇る動作につれて、ギヤーが様々な形に変化するの、手にとるように見えたのである。だから一同上陸の出来なかつた鬱憤をはらす以上に、大悦びをしたのであつた。御婦人達は将来とも、露出症でない限り、この点御用心が肝要である。

○

以上が大体、かつての海軍で常用された隠語と秘語である。(記憶の誤りがあるかも知れないが御諒承願いたい)前述の言葉は、終戦後はその母体なく死語、廃語にな

満洲事変の起る前年の春、ある朝早く、



霧の深い、青島大港に、碇泊していた、軽巡の後甲板を、ぶらぶら歩いていた、軍医中尉のところへ、ガントリーム（士官次室、中尉以下の公室）から、通信士がやつて来て、

「おい、軍中（軍医中尉の略称）大変だ、水雷士のやつが、Rになつたと云つて、寝てるから見てやつて呉れ」と云つたので、軍医中尉は、ガントリームに降りて行つて見ると、ソファアーに、顔蒼ざめた水雷士のI少尉が、苦しそうに横臥していた。

「どうしたんだ、貴様、ほんとにRになつたのか？ どんなか話して見ろよ」

「うん、昨夜、平康一里（Pハウ）でショートタイムでポストで帰つたが、一応例の洗滌をやつて、多少いづもより、滲みて痛いとは思つたがあとになつて、スモールの時に、馬鹿に痛いし、朝になつたら、ラが腫れ上つて、膿が出るんだ」

そこで診てみると、ペニスは何れも腫大し、特に龜頭部は甚しく発赤浮腫状になり、尿道口からは膿が出ている。疼痛が劇しく、排尿も困難な状況だつた。そこで昨夜貰つたRにしてはおかしいと、軍医中尉は、もつと詳細に訊いて見ると、次のような事が判明した。

海軍では、衛生訓練は特に嚴重で、各士官室、兵員室には、必ず昇汞水か、リゾールを洗面器に入れたものを、備付け、食事の前には、手洗を勵行させていた。又性病予防のためには、SAを持たせ、且シークリーム（青汞クリーム）を使用するように、指導していた。そこでガントリームでは、軍医中尉の提案

で、若しSAを使わないでした時は、洗滌用のカメレオン水を用意して置き、洗滌器で洗う方法も教えてあつたのであつた。ところで水雷士は昨夜遅く、最終定期で帰艦し、早速例の洗滌をやつたのであるが、時刻が遅いのと、誰もいない、薄暗い場所であつたために、たまたま、同じ戸棚に、ボリー（従兵）が何の気もなしに並べて置いた、手洗用の、薄めた昇汞水を間違えて、それで洗滌してつたのであつた。普通、消毒用昇汞水は桃色に着色しており、カメレオン水は、紫がゝつた赤色で、晝間なれば、間違える筈はないのだが、若さと、多少の罪障惑もあつて、落ち着きもなかつたのであろう。とんでもない災難にあつたのだつた。幸に、昇汞水が薄いものであつたので、それでも一週間位、患部の濕布と安靜を保つことで全治した。

○

性病予防で思い出すのは、平時に於ても海軍の艦隊勤務者は、例の歌の文句にあつたように、月月火水木金で、一定の訓練期間中は、たとえ陸の灯の見えるところに碇泊することがあつたとしても、下は、一

兵員から、上は、艦長、司令官に到る迄、禁慾生活をよぎなくされるのである。従つて禁慾の辛さは上下一致するわけであるから、その辛抱の限界は、上級者にもよくわかる。そこで特別の状況に変化のない限り一定の期間が過ぎれば、必ず休養のため、軍港に入港するか、又は別府のような、包容力のあるヘルブレースに入港し、半舷上陸、外泊を許して、性の捌け口をつくつてやる建前になつていた。薩摩人をはじめ、九州男子の多かつた海軍であるが、余り同性愛の問題を聞かなかつたのは、異性愛にまで成長していたものが、絶対多数であつたためもあるが、一面、変則的な性の捌け口を見付けなくとも、正常の捌け口が許されていたためであらうか。(戦時、形勢不利となつた時には、どうであつたかよく知らないが)

一度、休養地に入ると、それこそ上下共へベル事に熱中することになり、各グループ毎に宴会に忙しい。一方では女房を回港させるもの、近くの家庭に帰省するもの、その他はSだPだと、思い思いに捌け口を求めて、次の訓練に具える。それだけに、

その期間の性病予防、事後の発病早期発見に、力を注いだものであつた。

この点、アメリカ海軍は実に徹底していた。終戦当時実見されて、御承知の人もあるが例の、サニタリー・ステーションの設置である。現在の米海軍はどんなか知らないが、かつて比島の艦隊が、夏期支那海に巡航していた当時、チーフで見たのによると、臨時に出来た、Pハウスのある場所の要所にSPを立て、封鎖し、出入口

の二ヶ所にサニタリー・ステーションを設置し、衛生兵はこの場所に入つたものは、皆必ず洗滌と、消毒薬の塗布を施し、その上で通門許可証? を与え、それをSPに示さないと、そこから出さないと、ということであつた。戦時中は、日本でも外地では、やかましくやつていたが、仲々まくいかなかつた。性病

○ 予防は結局、本人の衛生的知識の啓発と、自覚に待つよりしかたがない。

性慾の本能が、人間生活において、いかに強いものであるかは誰も疑わなところであるが、戦争中のことを、ふりかえつてみても、実に切実なものがある。これは軍人ばかりではない、毎日のように空襲を受けている最中、内地のことだから、夫婦生



活をしながら、戦つたわけだが、或人は毎日出勤の時に、出先で、何時やられてもよいように、性行為を必ず毎朝出掛けにすまし、又帰れば夜の空襲に具えて性行為を遂行し、夫婦のどちらが、若しやられても、心残りがないようにと、これを続けていたと述懐した。これは、いさゝか強迫行為に類するものとも云える。

戦争中昭和十七年の半ば頃艦隊が次期作戦に具えて、軍港地に帰り、臨戦準備をしていた頃の状況は、実にさまざまに限りであつた。軍港地に家庭を持つていた者はよいが、妻君が遠地にある場合は、それぞれの方法で、家族を呼び寄せることになつて軍港地はアベックで大氾濫した。平時でも海軍軍人は兵も、下士官も、アベックで歩くことは、当然のことになつていた。士官の方は私服のために、目立たなかつたに過ぎない。それが戦時であれば一層甚しく、

ために軍港の宿屋という宿屋は勿論、木賃ホテルのようなものまで満員で、近くの隣接地にまで流れていく状態であつた。そして出撃迄の短時日の間を、心残りのないように、楽しむための、忙しい営みが続くの

であつた。これを平時の、局外者的見地から又は道徳家という人々の立場から見れば、浅しい限りと思われるだろうが、止むにやまれぬ、切実な思いにかられ、とても平時の、たゞ夫業追求の観念では割り切れないものがあ

ひとい宿屋では、隣室との境が、薄い、建付けの悪い襖や、破れ障子で区ぎりされた部屋では、隣りの情況が、手にとるように聞える。外泊を許されない兵員は、晝間の上陸中に、事をすまず、夜ともなれば、又大変なことになる。お互いに、こんな環境では、普通ならば落着けない筈であるのに、もう隣近所にかまつてはいられない境地になつて、別に露出症の心理状態になるわけではないが、それこそヘルプツクの描写そのまゝで、互いに隣の声に却つて、興奮させられるということになるのであつた。

○

今次大戦開始に近い年の晩春、S海軍病院の手術室に、朝つばらから中年の下士官が、担架で運ばれて来た。報告によると、昨夜遊廓の某Pハウスで、馴染のPと、心中したのだと云うことで、女は短刀か、何か鋭利なも

ので切られたか、突かれたかして死亡したが、男の方は腹一文字に切つたけれど、死に損なつて、担ぎ込まれたのだつた。手術室にはいつて、その男に近ずいて、まず第一に、最初に感じたことは、手術室特有の蒸気と混つた薬の臭とは別に、何とも云えない異臭が鼻をついた。それは、栗の花の匂いと云われる、精液の臭でもなく、女性の分泌物と、それとが混合した臭氣に外ならないものであつた。男の腹部は、血の滲んだ仮繃帯がしてあつたが、下腹部から股間にかけて、性器を中心に、粘液でベタベタに濡れ、臭氣はまさしく、こゝから発散していた。腹の創は極めて浅いもので、皮膚の創は長いが筋層の一部が切離し、僅かに腹膜を切つて、腹腔に達してはいたが腸は傷ついていなかった。それで簡単に縫合したゞけで処置はすんだ。

この男の状況から推察すると、彼等が心中を決行する迄に、最後の性行為が、如何に甚しい程度に、行われたか、わかるような気がした。こんな心中沙汰の際には、必ず最後の名残りに、性行為が営まれることは、別に珍らしいことでもない、法医学

者や検死官等は認めている。たゞこの場合は、手術室が適度に温められていたためと恐らくその女が、所謂特別プレジューだつたからでもあらうと思われたのである。

臭に關連して、フランスの好き者のムスタツシニは、ミネットの際、女のジューズがその毛について、それが何時までも臭うのを悦ぶのに、都合がよいためだという、話を聞いたことがある。又フツクした指を大切に、手を洗うこともしないで、臭の消えるまで、時々嗅ぎながら悦に入つていた人も知つてゐる。或人はPOした翌日入浴の際、ラの残り香を楽しんでいたし、又水交社の早風呂で、ラにヘルペーの破片をつけたまゝ知らずにやつてきて、昨夜の行状を暴露することは、よくあつたがそれとは違つて、石鹸で洗つてゐるところを、側にいた同僚に、臭で発見されて、赤くなつたりしたことも聞いている。これ等は、まあ一種の、臭のフェチズムかも知れない。一体に哺乳動物の間では、嗅覚は高度に発達したものであるが、人間では、視覚が最上位の感覚となつてゐる。体臭も、日本人では、欧米人よりは勿論のこと、中国人そ

の他の亞細亞人種よりも少く、むしろ無臭に近いとされている。昔しの上流日本人は、香をたき込めるとか、匂い袋を持つとか、相当香りに努力したらしいが、近代になつても、欧米人程、香水、香料に興味がないのか、関心を持たない。もつとも、香料は可なりぜいたく品扱いをされてゐるためでもあらうか。

牛や豚の人工授精のための精液採取は、偽牝台に発精中の、牝動物の性的分泌物を塗つて、これで牡を誘惑し、精射させるといふことだが、人間では、嗅覚が性的選択の條件として、哺乳動物程ではなく、全く失われたといつてよい。そのかわり、人間の視覚が性的選択に、重要な役割をつとめてゐるから、今さら嗅覚を問題にすることは、文明の逆行かも知れないが、エリスの性の心理に書いてゐるような、嗅覚の鋭敏な人でなくとも、人間の発情の程度が、嗅覚を利用して、確認される何等かの方法が工夫出来たら、面白いと思うのである。

○

女性の場合、鼻血がメンゼスの代償となることのあることは、認められてゐる。ところが、男性でも、これによく似た現象が、ある

らしいのである。本誌掲載の「男性週期律」は小説であるが、その人は軍医でラバウルにおいて戦病のため故人になつた。彼は艦隊勤務とか、外地勤務で、長期間禁慾生活をよぎなくされると、ある一定の期間を過ぎる頃に、必ず鼻血を出す習慣があつた。それで、その際は性的な放出を行い、メーターを下げていた。しかし、夢精、遺精はなかつたそうだ。日華事変の際も、大多忙を極めていたために性的捌け口の機会がなかつた時、下江して南京に上陸するとすぐさま張り切つてやつて来て、「おい、自動車を一輛願ひます。昨日は又例の鼻血が出ちやつた。早速メーター下げなくちやならないから……」と云うわけで、その晩はレスへ行つて、さんざんPOしたのである。この人の話は、いつも面白かつたが、とにかく鼻血の出ることは確からしい。たゞ正確に何週目か、何日目に出血するかはつきり云わなかつた。この人がラバウルで、又何日目か、何週目にか、おそらく鼻血をくりかえしてゐただろうに、遂に帰還せず。それを確かめることが出来ないのかえすがえすも残念なことである。(終)

お芳は重ねた上の着物をするすると脱ぐと波打つ乳房の見える緋色の長襦袢一枚になつた。むっちりと肉付きのいい肌がすけて見えるようだ。

貞操賭博
師行状記

賭^{かけ}儀^{にえ}にされた女



富永洋介
古正英生・画

三等船室

これで三度目だ。

お芳が洗面所から出て来ると、すれ違つて、「やア、すつかり化粧しましたね」

と、言葉をかけて来た。

何故かぼつと頬が赧くなつた。

それが、まだやつと三十に手が届いたばかりのお芳を、いつそう艶っぽく見せた。――

お芳自身は、今は堅気の商人のお内儀であつたが、こうやつて独り身の旅をつゞけていると元来が、芸妓上りの女だけに、男の船客から注視の的になつてゐる自分を意識すると、自然心が弾む想いだつた。

船室で彼女から少し離れた横に陣取つてゐる、曲馬団の者だ。

笑顔でも見せないわけにはゆかない、それだけでなく相手は男つ振りのいゝ若い衆だ。「でもないんですけどね。少し酔いそうなんですてね」

最初は尼ヶ崎港から船に乗つた時だつた。

上下二段に別けた三等船客に遅れて這入つて来たお芳はぎつしりと詰つた客の中で席を取り兼ねていると、

「若し、もし、こつちがあいてますぜ、お内儀さん」

と、声を掛けられた。

若い者が四五人、隅つこで車座になつて、

——赤黄だんだらの派手なジャケツの上から飛白のような和服を引かつている奴がいるし、上衣なしの半ズボンの奴も居る。

何んだらう、と思つたが、

「え、有りがとございます」

他人と話をすれば、自然としなを見せるお芳だつた。

「さア、さア」

と言ふと中で綺麗な顔のジャケツ一枚の男が、いざつたが、その時入口で頼んで置いたボオイが、鳥渡離れて毛布をしいて呉れたので、会釈だけして、そつちの方へ行つてしまつた。

二度目は、少の船が出だして、お芳も少しうと／＼しだしたと思うと、耳の傍で

「煙草の火、お持ちじやありませんか」

開けた眼で見上げると、今度は横の男であつた。いでたちは商人風で五十がらみの男。

袂を探つてマッチを出してやると、横合いから

「やア、済んませんがお済みになつたらあつしにも一つ」

お芳に話しかけてきた。さつき声を掛けて来た、ジャケツの男で、すぐとマッチを渡してやつた訳だが、それが二度目。

——今洗面所ですれ違いざまに声を掛けて来た男だ。お芳は頬を染めたまゝ、ジャケツの連中が車座になつて何かやつているらしい船室へ戻つてきたが、見ると、——

「丁半」のあれだ。

こんな所で、よくも大胆にと思つたが、場所が丁度、船客一同の眼に届かない蔭になつている。車座の真ん中に少しばかりのぼら銭が撒かれて、ジャケツのなかで和服を引つかけた兄哥風なのが、右つ端に座つて壺代りの茶碗を伏せている。

お芳ははつと眼を伏せた。自分にも経験のないことではない。だが、それだけについ手がふら／＼と動きそうになる。——で、わざと見て見ない振りをしてみせた。

戻つた席で、また横になつてみたが、

「お独りなんですか」

不意に耳もとで呼び掛けられてみると、隣

りの商人風の男だつた。

「え、一人でして——」

応えてはみたが、何にか変な予感がして、胸が妙にしめつけられるような気分になる。

「やつてますね、あいつ等……」

顎でしやくつたのは、車座の連中の方。

「そうですね。でも面白そうじやありませんか」

お芳がにつこりと笑うと、それがきつかけだつた。

「こう言う言つちや、失礼だが、あんたもやりなさらない事ア、ねえんでしよう」

「ご冗談。滅相もないことおつしやる」

とわざとらしく手を振つてみせたが、それから話がはずんで、

「あたし、え、桐生で……反物の掛金を集めに廻つていゝんですけど、どうもこう景気が悪つくつちやねえ」

「ほう、それじや、あんたそいつア、好都合だ。実はあつしも、あそこの近くまでなんなさア。お供させて頂きますか」

その話がまた外れて、

「どうもね、あつしらみたいな野郎、一人の旅じやア、から面白くも有りませんね。自然と手慰みもやろうと言ふんですよ、まアたの

しみなもんでして——」

と言われると、流石に、

「でも殿方お一人の旅なら、そうでもないでせう」

とは答へてみたが、そこへ横から

「どうです。面白そうじや有りませんか」

と、またジャケツの男が顔を出した。

「そうですね、何んなら、あつしも一枚入れて頂きませうかな、どうせ纏つた金でやるんじゃないし」

とお芳にも話しかけて来て、

「どうです。一緒におやりになりませんか」と誘つて来た。

小さな金なら、少し位損したつて、独り旅の憂さばらしに持つて来いだ。——少しぐらいならと、内心興味をそゝられていたところだつたので、

「そうですね、じや烏渡、——ちよつとだけならやらせて頂きませうか」と、すらりと座を立つた。

崩れる札束

——それが、お芳に取つて一生の破滅の因となつたわけだ。

実を明せば、桐生の織物工場主近東明治の

女房お芳、明治の代りに関西地方へ集金に行つて帰えりなので、懷中には現金にして八万円あまりしまひこんであるのだ。

だから、先き程から警戒を重ねて賭博の誘惑と戦つて、来たのだつたが、——烏渡位なら、と氣を許してしまつたのが、そも／＼のあやまりだつた。

一応の挨拶じみたものが済むと、

「じやア、まゝ、これ位で」

最初に商人風が、帯の間から出した若干の札がそこいらに並べられると、今まで賽をふつていたジャケツの一人に「とつ走りに半と行きやせうか」

と、——出たのは、半だつた。次ぎも

「半」

と賭けて、——矢つ張り、半と出た。

二三度続けて半が当つて、次ぎが丁が同じ位出て、又少し半となると、結局、一区限り着くと、商人風の男に多少の間が出来て来ているのであつた。

「御損させやしたな」

ぴよこりと頭を下げると、今度はお芳の方に向いて、

「ま、悪るくもなし、と言つたところでさアね」

につこりと笑つてみせて、——次ぎはお芳が出なければならなかつた。

帯の間から財布を抜くと一枚の紙幣を置いた。

「これで行かして頂きますわ」

相手が変わつて先き程お芳を誘つた顔の綺麗なジャケツの男だつた。二枚の紙幣を並べて男が茶碗を振つた。

「あたしも半と出させて貰ひませうか」

「よォし来た、ほイ」

とわざとへうきんに茶碗を伏せたが——出たのは、

「あッ、やられた」

と頭をかいた。

「じやア、これ頂いときますわ。お氣の毒さま」

「今度ア、負けねえつもりで」

また一枚同じ紙幣が出されて、——半がまた出た、

「おや、ほんとうに済みませんわねエ」

とまたお芳の勝ちだつた。

「いけねえ」

とジャケツのポケットに暫らく手をつゝこんでいたが、

「今度ア、少し小せえので願ひやせう」

撒かれたバラ銭に茶碗が伏せられたが――

それもお芳の手に渡つてしまうと、

「益々もつていけねえ、俺らの相手なんぞじやねえや」

と頭を掻いて、

「お前さん、ひとつやつてみてお呉んなせえ」

と、一服している商人風に茶碗を押しつけた。

「そうですか、――だが、あつしなぞじやア余程のお手筋ですなア」

と半ばからかつた口調に出られると、

「ご冗談。――こちらこそ、だわ」

そんな口が利ける程、もう親しくなつていた。

「じやア、先ずあたしが親元にならして頂きやせうか」

茶碗を取り上げると、お芳と二人の間に紙幣が一枚づゝ出された。

「丁」

お芳だつた。

――が、半だ。

「これア、済まねエ」

「よござんすわ。どうせ、此の人のなんですから。じやア、もひと丁」

伏せた茶碗を開け

ると、今度はお芳の勝ちで、そのまゝ紙幣を取り戻せた。

「あいこね。じやア序でに丁と」

矢つ張り丁で、座の金をお芳がかき集めた。

「凄えお手筋だ。――余程おやりになつたんでせう」

「ご冗談ばかり、まぐれですわ」

が、そのまぐれがまた続けた。

丁、丁、丁、とお芳が当つて、商人風が少し顔色を変えて来た。

ジャケツも立膝になつて、――

「丁」

とやつて、商人風の勝ちだつた。

の勝ちだつた。



が、まだ負けている。——金額にして五千円余り。

「やつと一息でさア」

と、ほつとした調子で、

「千両、と行きやせう」

「よござんす、じやア、ほら」

男が茶碗を伏せて起すと、——丁、

「いけねえ、今日は、三りんぼうだ」

と、ジャケツが交ぜつ返したが、続けて行く

くと、今——度は半が出続けて来た。

「矢つ張り、お強いですわ」

と、お芳口先きだけでは言つてみたが、心

の中で、何ィッ、と白く歯をむいた。だが、

まだ差し引きで少しの勝ちであつた。

「じやア、阿呆の一つおぼえで、丁と行きま

すわ」

開けると、——半で、お芳はちツと舌をか

んだ。

が、——後も矢張り半の出続けた。

で、丁の一点張を半に直してみたが、途中

で一二度当つたきり、後はすべて負けだつ

た。

そして、ふと気付いてみると、七千円以上

の負けこし、——何時か、懷中の別にした八

万余円に手がのびてしまつていたのであつ

た。

が、気付いても遅かつた。

その上、半とやれば丁。丁と賭ければ半で

とンとン拍子に、紙幣束が崩れて行くのだつ

た。

今更ら引くに引けない。——勝気に出たお

芳、じつと唇をかねで、夫の明治に合わせる

顔がないと思つて、何んとかして取り戻せな

いか、と焦つて来たが、それが、頭のぼつと

なつて来ている、お芳に、

「陸に上がつてから、もう一度、やり直させ

て頂きたいわ」

と言はせてしまつたが、その時ジャケツ達

と商人風が顔見合せてニヤツとしたのを夢に

も気付かなかつた。

緋の長襦袢

「それじやア、この先のあつしらのサーカス

に来てやりませんか」

顔の綺麗な男の言葉だつた。——ああ、そ

れではサーカスの人達なのかと、お芳は思つ

て、躊躇せぬ訳には行かなかつたが、

「宜しかつたら、あつしだつて、お供しませ

う」

と、商人風に出られて来ると、

——何んとしてでも取り戻さなきやア、夫に申訳けないと言う気持ちに、火が付けれられて、

「場を変えたら、また、何んともなりますよ」

と言うジャケツの言葉に、やつと、

「じやア、船から陸へ上つたら、続けさして貰いませう」

と言つたが、お芳の顔色が、青くなつてい

た。

やがて浜子、鳴海と船が着くと、みんなが

一緒になつて上つて行つた。

途中で、商人風がウキスキの角壺を買い

こむと、皆にすゝめて、

「どうです、お内儀さん、気持ちばらしにや

持つて来いですぜ」

で、仕方なしに口をつけてしまつたのが、

お芳の仇つぽさを取り戻させ、頬を染めさせ

たが、お芳自身、久し振りの酔に全身の血が

カッと燃えて、なんともいえないけだるいよ

うな陶酔感に肉体のしこりが、ときほぐされ

て行く想いだつた。

縄でつないだ円形の骨組だけが出来て、裏

の方でテントがはられ、色のさめた、「大山

サーカス」……の幟がうらぶれている。その

裏口をくぐつて行くと、ひよつと天幕の切れ目から青い光りが這入つて来たり、その蔭で妖しげに半裸形の男女たちがうごめいていた。

「丁と行きませう」

大きく出て四五枚ばかり重ねた紙幣だつたが、三度ばかり続けると、損した額の半分程をお芳は取り戻しかけていた。

「ま、ちよつと一服」

ランプの焰に取り出した「光」を近かつけると、焰の心が揺れて、何か妖怪めいた陰影をこしらへた。そこだけが同じ薙がたれていて、先き程も這入つて来た時、

「万に一、踏みこまれることなんがござんせんが、そんな時にやア、こつからで——エッヘッヘッ……」

と、ジャケツが笑つてみせるのさえも船の中とは打つて變つて卑らしく見え始めて来てはいたが、無理な笑顔を見せて、我慢しなければならなかつた。

何時の間にか男は二人、赤黄のジャケツで顔の綺麗な男と、商人風に、後はお芳一人、皆、何時の間にか姿を消してしまつていた。が、それにしても此の部屋はどうしてこうも怪しげなのだろうか。真つ昼間だと言うのに

厚ぼつたい天幕の中に光り一つ這入つては来ずに、殊更らに妖怪めいたランプしかともされていないのだ。

「じやア、次ぎはあつし、半と出ませう」

——親元は何時か一服すませたお芳。その昔を思い出される慣れた手際わで、茶碗を伏せた。

ジャケツの前に、併せて紙幣八枚。

「いけねえ、又だッ、続けて——」

商人風が頭を掻いた。

「お内儀さん。その調子。その調子」わざとらしいジャケツの言葉だつた。

で、お芳、ほつとまた一息吐いて、

「続けて、あたし親をやりませうか」

この分なら、後もう少しで取り戻せる、——と頭の中で勘定してみた。

「じやア、今度、あつしがいりませう」

かくしをごそくやつていたジャケツが、出したのは三枚の千円札。

「半と行きやすよ」

で、振つて出たのは、——。

半だ、失敗つた！　と思はずお芳、心の中で叫んだ。

「まぐれですよ、何アに」

とジャケツが笑つたが、——だが、確に失

敗だつたのだつた。

額にしてはそれ程でもなかつたが、数回負け続けてしまうと、折角芽の出かけた気持ち

が崩れて来て、——焦つて

「あんたひとつ相手代つて頂けませんか」

で、代つた相手の商人風に賽を振らせて——

「矢つ張り、あつしとした方がよろしいでさアね」

とお世辞まで言はれたのも次になると、

「半ですね。ようがすじや。行きますよ。そら」

——丁と出た。

こんな具合に負けが数番続いてかぶつた後お芳が賽を振つた時、そつと懐中具合を調べてみると、来た時より少しばかり負けこした額の方が大きくなつていた。

ジャケツは独りで隅つこの方で、商人風に渡されたウキスキーの角壇の二本目を空にし

か、つていた。

何時の間にか、ずんと負けが重つて、——お芳、金は後一万にも充ぬ程しか残つてはいなかつた。憑かれたように彼女は賽を振り、散らばつた紙幣を見詰めている。

ランプの焰がジイッと燃え上つた。来てか

ら、もう二時間も経つたろうか。

「丁！」

——出たのは、依然、半。お芳これで残っているのは後五千円程。今度こそは是が非でも勝たねばならない。

彼女の眼が血ばしつて来た。

「あたしが、賽を振らせて貰ひませう」

商人風は落ち着いたものだつた。今迄のお芳の狂態を、そ知らぬ顔で、煙草なぞくわえていた。

「じゃ、代りませう。今度はお金を少くして千両。よすがですか」

「え、」

とうなずいたが矢つ張り負けだ。

お芳の青ざめている顔。

「まだやりですか」

商人風の言葉の外にジャケットが覗きこんで来た。

「後、よござんすか」

でも、——仕方がなかつた。

残りの千円紙幣六枚。そこへ出すとお芳は思い切つて、賽を振つた。

開けた。商人風の賭けた半だ！

「あッ」

崩れるようにお芳の上半身が倒れた。

彼女の頭の中で夫明治の怒つた顔が一ぱいに拡がつて行つた。

どうして、いゝのか解らなかつた。

「じゃ、お終だ。この身体を賭ける。二千両よ。どう、世話暇はいらないでせう！」

言うなりお芳は重ねた上の着物をスル／＼と脱ぐと、波打つ乳房の見える、緋色の長襦袢一枚になつた、むつちりと肉付きのいゝ、脛が、裾を乱して、それが男たちの瞳を異様に射つた。

「ウーム」

男達は二人とも唸つたが、やがて商人風の男が上ずつた声で叫んだ。

「よおし、じゃ、やりねえ」

ジャケットは黙っている切りだつた。

で、サイコロを握つて商人風。散らばつた紙幣を一まとめにして、お芳の身体の前へ置くと、

「さア、半でも、丁でも」

と大きな声になつた。

お芳は、すう／＼と血の気のひいた蒼白な頬をひき釣らせ悲痛な声で叫んだ。

「丁ッ」

賭けた肉体

開けて出たのは、——半だつた。

何時の間にか、船の中でみたジャケット達がこつそりやつて来て、背後につゝ立つて、お芳の淫らな姿を見てニタニタ笑っている。それで、始めて、お芳——燃え上つた頭で、ペテンにかゝつたらしい、と思い始めては来ていたが……。

「あんたの身体、冗談じゃなく、あつしが貰うけやしたぜ」

何時の間にか紙幣束を胴巻きへしまひこんで、立ち上つた商人風の男の、声も態度も、ガラリと變つていた。

仕方がなかつた。お芳、身体中にきり／＼こみ上げて来るものがあつた。言いなりにならねばならなかつた。

——その夜、引き上げた丸庄という旅館で商人風の男の言うなりに肉体を滅茶々に弄ばれた。

はじめてといつてもいい、ほど荒々しい男の技巧に喘ぎながらも、お芳は後悔はしなかつた。たゞ金で身体を売つたと思うと口惜しかつた、それに男と寝ている間に始めて、自分がペテンにかゝつたのだということが段々はつきりして来た。

と、言うのは、第一、ジャケットの男がその

夜、宿までついて来た。そして、一ツ部屋で酒まで飲んだが、あの時の二人の口の利き方が可怪しい。

「親方、うまくいきやしたね」

「馬鹿、黙つてやがれ、それよか、酒でも飲めよ」

そうだ。確に、親方つて云つた。そんな時お芳はただジャケットが親しい気持ちでそう言うのだと思つていたのだが――

そうじゃない。確にあれば共謀に違いない。最初から。警察へでも訴えてやろうか。

――だが、それではお芳自身賭博の罪をあく事になるだから今となつては捲き上げられた八万円を取り戻し出来ることなら、この男に唾でも吐きかけてやりたいのだ。

若しこの男から金を盗んで逃げ出してしまつたら、と考へていると、――寝ている男が寝返りを打つた。

(ちえッ、何んていまくしいんだろウ！)

思はず口にまで出かゝつたが、矢つ張りどうにもならない、お芳の今の境遇であつた。

そしてそのまゝずるゝと男の腕に肉体をまかし切つたお芳は、それから数日間というもの、爛れた肉慾の泥沼にのたうつていた。

女になつてはじめて知つた慾情の美酒――そ

れがお芳を男の傍から離れさせなかつたといつた方が正しいだろう。

血しぶき

共謀、――矢つ張りそうだつた。

男の素性は、サーカスの興行元みたいな事をやつている傍、旅稼ぎのイカサマ賭博師だ

つた。

お芳は、それと気付いても、もうどうにでもなれという自棄半分の気持ちも手伝つて、夜になれば娼婦の役目、時にはサーカスの入口に座つて札改めや呼込みさえやるようになっていた。

例のジャケットの若い男庄公とも平気で口を



きくようになつていたが、或る日、

「姐さん、ちよつと、ちよつと」

庭の蔭からそのジャケットが呼んだ。

この男は一座中での二枚目役、最初、船で
出会つた時から、憎い気持ちになれなかつた
お芳。

「なにさ……」

と、ニツコリ笑つて見せると、

「姐さん、俺ア、あの親方のインチキは始め
から知つていたんだ。尼ヶ崎で船に乗つた時
にやア、俺アそのつもりでもなかつたのに、
お前エに金があると眼を付けて、手を付けよ
うつて企んだなア、あいつの指金なんだぜ。
でも、俺ら、お前エと近かつきになれたこと
喜んでる。何アに、あんな親方なんざ構うも
んかい」

お芳、黙つていたが部屋は二人切りで、
—いきなりジャケットの手がお芳の首にまきつ
けられ、そのまゝどつと仰向けに押し倒され
た……抵抗しているつもりであつたが、若い
男の炎のような息吹きに、眼がくらんだよう
にむしろ自分から痺と部厚い胸にとりすがつ
ていた。

こうした二人の關係が親方に知れぬ道理は
なかつた。

「この売女」

お芳の頬に平手が飛び、滅茶々に蹴られ
た。

「今度してみろ！ そのまゝじやおかねえぞ
！」

——が、その後もまたジャケットとの關係が
続けられた。いや、盗んで食う禁断の果実の
美味さに、二人の慾情は生命をかけてもとま
で、燃え上つて行つたのだつた。

「庄公、汝何処まで俺をなめる氣だ！ こう
してくれる」

親方はギリリ九寸五分を振り上げた。

場所はサーカスの天幕小屋の内部。団員た
ちはどうなる事かとぐるりを取りかこんでい
た。無論、中にはお芳も呼吸を殺して、この
動物そのまゝの浅間しい争闘を見守つてい
た。

ピュツと！ 血がとんだ。

庄公が肩をグサリとやられたのだ。それか
ら腕も！

——お芳はぞつと震え上つた。血を見ては
じめて人間らしい感情に返つたお芳は夢中で
表へ飛び出した。

警察へ！

よろ／＼走りながら、たどりつくと、彼女

は呼吸も絶え／＼に叫んだ。

「人殺し！ その大山サーカスです！」

かくして一切が明るみにさらけ出された。

——桐生から、お芳の夫の明治もはるばる
警察へ呼び出された。

そして刑事の取調べに対しお芳は、

「金を取られたのは、最初口惜しかつたけ
ど、日が経つた来たら、段々何ともなくなつ
て来ました。ねエ、そうじやありませんか。
あの金があつたつで、私が勝手に使えるわけ
じやなし、ちつとも面白いことなんかないじ
やありませんか。それにサーカスの旅は面白
うござんしたわ。ちつとも窟屈じやなし、遊
びたい時やア自由に遊べたし、食物だつて随
分贅沢だつたし……」

そして、賭博に己が貞操をかけた点を追求
されると、酒蛙々々として、

「それやア何んとも思いませんでしたね。そ
れや亭主の家に居てこそ悪いかも知れません
が、親方には賭けて負けたんですし、庄公は
好きだつたんですから、仕方ありませんわ」
これが果して新しい貞操観念だろうか、そ
れとも、このお芳という女の無智がそうさせ
たものなのであろうか、——警察の刑事部屋
で、亭主の明治の姿を見出した時、

「あなた！」

と叫びさま、わつと明治の胸許に泣き伏したお芳、その姿のみが、丸裸の彼女の姿であ

り、それから四五日後、明治にいたわれながら警察の門を出てイソ／＼と帰途についたお芳の姿、これも無智ゆえに天真爛漫ともい

える彼女のむきだしの姿であつたともいえよう。

(終)

木登りはいけない

有閑マダムのマノンが、御主人の留守中にお定りの若い燕を引き入れて、きょうも楽しい夢をみていました。すると開け放された窓からその有様をすつかり盗み見たのが隣家の少年ジャンでした。

少年はただ木登りをして遊ぶつもりだつたのですが……あッ！と叫んだので、一刻の陶酔から醒めたマダムは、樹の上で大人の遊戯を眺めていたジャンに気がつきました。

早速ベッドから飛び下りると、マノンは身づくろいしてから、ジャン少年を呼びました。「ネ、坊ちゃん、木登りはあぶないわよ降りていらつしやい。そうすれば美味しいお菓子を沢山あげますよ」

無邪気な少年は木登りしたお蔭でどつさりキーキを貰えたので大喜びでした。

二、三日経つてジャンはマノンの御主人に町角で出会いました。

「おじちゃん、この間ボクが木登りしてたらおばちゃんがお菓子をくれたよ。いいおばちゃんだね」

二、三日経つてジャンはマノ

ゴールはまだよ

夫を亡くしたキャンベル伯爵夫人は、売り食いでいまは遺産も心細くなり、残つたのは夫人の名前をとつたキャンベルという競走馬だけ。この馬がレースで勝つことだけが最後の望みと

世界裏窓風流譚

戸山一彦

「はて？」と御主人はいぶかしげに「何で坊やは木登りしてい

たの？」「ウン、ボクおばちゃん、どこかのお兄ちゃん、スリングしてるの見て止めてあげたの」映画ではないが、木登りは「禁じらるべき遊び」です。

なつておりました。いよいよ競馬の開催日となりますと、未亡

人はジツとしていられず、厩舎へ出かけて行き、若い騎手のマッカレーに「調子はどうなの」と声をかけました。「ぜひ勝つてもらわないと困るのよ。有り金全部賭けたんだから」とこ

ろが騎手は首をかしげて「今日のレースは強い相手が多いもんで……」「そこを何とかして勝つてよ。どんなお礼でもするわ。何でもいつてよ」「ほんとですか」モジモジしていたマッカレーは思い切つて申しました。「ぼくの欲しいのは、あのウ、奥さまの美しいお身体です」キャンベル未亡人もちよつと考えましたが、勝金が欲しいのでついに承諾しました。勇ましいカケ声をかけて馬をあやつり、マッカレーが強豪を尻目に優勝したのはこんな訳があつたからでした。

その夜やわらかい鞍にまたがった騎手はゴールを急ぎすぎましたが「まだ、まだッ」とカケ声をかけるのは馬の方だつたそうです。



街の娘

ゴホン、ゴホンと力のない咳を吐きながら
いつまで吞んでも、啓次郎の顔は赧くならな
かった。盃を重ねるにつれて、もと／＼油
気のない青い顔は、凄いまでに蒼褪めていっ
た。

新宿の元ムーラン裏、くすぶり横丁にある

スタンド「駒鳥」の一隅である。

しきりに他の客へ愛嬌を振り撒いているマ
ダムの肩越しに、柱にかゝった鳩時計を見上
げると、もう九時をとくにすぎていた。

「勘定を願います」

相変らず軽い咳を洩らしながら、啓次郎が
席から立ち上ると、

「お酒が五本の寿司が一皿、それにトンカツ

が二枚ですから、七百二十円に
なりますわ。毎度、ありがとう
ございます」

ニツと媚を含んだマダムのお
愛想的な流し目を意識の裡にお
いて、おど／＼しながらポケッ
トをあちこち探してた啓次郎の
表情に、一瞬！ おや？ とい

宮下 文作

う疑惑の色が湧いた時には、

「ふふん……」

と、なにものかを素速く見てとつたマダムは、ついと視線を他の客へそらしていた。それでいて眼尻はじつと啓次郎の姿を捕えて離さない。

「マダム……」

思わず啓次郎の声がはずんだ。

「あら、どうかしまして？」

つとめて笑つてゐる筈のマダムの眸の奥はチラリと冷たかつた。

「どうやら、財布を忘れてきちまつたらしいんです」

「まア——」

大仰に驚いてみせたマダムは、

「困りますわねえ」

と、いかにも思案がなさそうである。

「たしかに宿を出る時持つていた筈なんですけど……」

あとまで云わせず、

「まさか、はじめから無銭飲食をするつもりではなかつたんでしようが……」

と、あたりへ聞こえるように大きく云つて

おいてから、

「じゃ、仕方がありませんわ。その学生服でも脱いでいらつしやいな。この次、お出下さる時までお預りしときますわ」

「——と、云われても地方から出てきたものですから、それに明朝早く家へ帰るんです」
「ちえッ、じゃどうしてくれるの」

不機嫌をむきだしに、言葉に、表情に出したマダムに睨まれて、

「……！」

啓次郎は黙つてうつむいた。

「さんざ呑み食いた上、無一文だなんて云われて引き退がられたんぢや、とても商売が成立ちませんわよ。それも馴染の方ならとも角フリの客にねえ」

言葉と共に周囲の視線が、どつと自分へ集中しているのを覚えると、啓次郎はどぎまぎしながら、

「じゃ済まないけど、僕が泊つてゐる旅館まで誰か勘定をとりに従いて下さい。七百元位のお金なら、なんとか帳場から都合して貰いお払い致しますから——」

「でも、この節は物騒ですからねえ」

「物騒？ と云いますと？」

この初心な言葉と、学生姿に先ずその心配はないだろうと思つたのか、

「旅館はこの近くの」

「ええ、駅裏の旭館なんです」

「だつたらキヨちゃん、済まないけど、あんなこの学生さんの馬になつてついて行つてくンない」

「はア——い」

と、答えながらも、会社員風の男とふざけていた女給のキヨ子は、折角のお楽しみ場をぶち壊された腹いせか、鼻を鳴らしつつ啓次郎の傍へやつて来ると、

「あんだ、学生のくせにお酒呑むなんて、第一なま意気だわよ」

邪剣に腕をとつて外へ出た。

旭館につくと、

「まア、上つて来給え」

と、キヨ子には構わず啓次郎は二階への階段をどんどん上つていった。仕方なくキヨ子は彼の後へ続いたが、部屋へ入るなり、

「おいッ！」

啓次郎の言葉がいきなり変つた。

「お前も人並みの女の体になつたんだ、何も泣くこたアあるめえ」
「よし！ 音をあげるまで馬力をかけて可愛がつてやるぜ」……悪魔の口からもれる呪いの数々。

あッ！と思つたがもう後の祭り、啓次郎の右手にはジャックナイフが無気味に光つていた。

「まさかムスメでもあるまいし、今更、厭だとは云えめえ——」

なにをッ！と思つたが、真ッ青な啓次郎の顔を見ると何故か怖かつた。手むかいしたら、どんなことになるか判らないと思つた。

「とんだ悪党だつたのね」

恐怖にとられ、あとの言葉も出ない。胸がドキ／＼鳴っている。そんなキヨ子をじつと見つめて啓次郎は、

「おい！ その指輪はダイヤか。ちよつと見せろッ」

云われるままに指輪を抜いて啓次郎にわたすと、しげしげとひつくり返し、ひつくり返し見やつていたが、

「なんだこりや、イミテーションだな。シケてやがらア」

ピシッと彼女の頬へ投げつけてから、

「金を持つてるだろう？ あつたら出せッ」

先刻の会社員から貰つたばかりのチップをおそる／＼ポケットから引き出すと、

「たつた、これだけか？」

みにほうり投げた。

「てんでおめえ、稼ぎが悪いなア。チップをうんと引つたくる方法を工夫しなくちやいけねえよ」

ニヤッと笑つて、

「別に金目になるようなものを持つていねえとなると、ちよいと可愛がりかたが手荒になるぜ」

ゆつくりいつたその台詞に、それだけの男の度胸が見えて、キヨ子には抵抗するだけの氣力も失せていた。こんな手にのせられた自分の迂闊さもさることながら、ただチンピラなどに……と思うとむしろ口惜しかつた。「うふッ、いゝ身体だ。はやくシユミーズをとれッ。ふッふ……」

愛慾の鬼

最近、無理してンじやないですか。三月前のレントゲンとくらべると、大分、すすんできたのがはつきり写真に出てますよ。血沈も今月は七十四ミリの九十八ミリと、随分、下つておりますし、ラッセルも聞えますね。それに、なにしろ親指大の空洞が上葉部にあるんですから氣胸じや望み薄ですよ。思いきつて成形（手術）でもやつてみると好いんです

がね……」

親切な医者と言葉を背後に、啓次郎は医院の門を出た。

「何云つてやがンだい。生きようと死のうと俺の勝手じやねえか。章魚じやあるめえし、成形（手術）をやつて肋骨を五本も六本もプツ切られてまで、のほほんと生きていたつて始まらねえよ。どだい、肺病なんて死ななきやなおるもンじやねえンだ」

喧嘩相手にたなかでも切るような調子で、独り言をつぶやき乍ら歩いて行く、啓次郎にはその実、五月のやわらかい初夏の陽差しもまるで真夏のもののように強烈に感じられるのだつた。少し急ぐと息切れがし、額からは冷い油汗が滲み出た。

「ふッ、どうにでも、なるようになりやがれ！」

とつくの昔に自分を棄てている筈なのに、道行く元気な人々の姿を見ると、訳もなく腹立たしいものを覚えるのであつた。

貝村啓次郎——彼は昭和六年の生まれであるから、満で算えれば未だ二十才の若僧だ。だのに、婦女子誘拐、強姦恐喝の前科三犯という肩書を持つているから驚かざるを得ない。いわゆる先天的犯罪者というのか、彼の

父は啓次郎が三つの時、強盗殺人を犯し処分を受けている。母親はこの世に居るのかどうか、彼は知らない。幼い頃、誰からともなく聞かされた話に依ると、東京でカフェーの女給をしていたとのことであつたが、逢つた記憶は全くない。啓次郎は父の弟にあたる叔父の手によつて育てられたが、この親にしてこの子ありの警え、国民学校五年生の時U市内のデパート、書店、学校内など至るところで、万引、窃盗を手当り次第に働いた為、感化院へ送られ、二年程して家（叔父の許）へ戻ると、今度は強姦、強盗、恐喝を数度に亘つて行い、検挙されると直ちにN県の少年刑務所に収容された。終戦と同時に刑期をつとめて娑婆へ出ると、またまた婦女子誘拐をやり、U刑務所へ投獄され、それが、正式に前科一犯と印を押された第一歩。あとは出たり入つたり、二犯、三犯とハクをつけ、二十年の九月には、茨城県下で強盗を演じて逮捕、留置されるやM署の留置所から監視の眼を逃れて脱走したものだ、この頃から常日の不摂生がたゞつて肺を悪くしていた。

そうと気付いた始めの頃は、それでも偽名をつかつて、五、六度医院へ診察を乞ひに出かけたが、もとよりスリルとサスペンスの

ぎつい刺激なしには一日たりとも生活していけない啓次郎には、療養とか絶対安静などというものを医者がいくら説いて聞かせても、全く馬の耳に念仏で、呑む打つ買うの無軌道ぶりを発揮している中に、病状はぐんぐんすすんでいった。

「肺病など、所詮、なおりツこねえんだ。どうにでもなりやがれ！」

そう自暴自棄に思う心の下から、若しかしたら……と、淡い期待を抱く妙な気持。と自分でもわからぬまゝに、今日も、昨夜キヨ子から捲き上げた僅かな金で医院へ診断を受けにやつてきたのだが……。

軽い咳を吐きながら、上野駅前、車坂まで来た時である。温泉マークの連れ込み旅館から出て来たアベックを見つけると、啓次郎は、つと立止つた。

男は五十前後のデブプリと肥えた紳士風で、連れは横顔の美しさをゆるやかなサイド・カールであらわした二十二三才。レイヨンのネービーブルーのあざやかさで、全体をタイトにすつきりと仕立てたワンピースを身につけた派手な事務員風の女である。

「ふん、こいつはちよいと臭いな」

啓次郎はゆつくりと二人の後をつけて行つ

た。

「ねえ、日光へは何時、連れていつて下さるの」

「来週の土曜はどうか」

「来週？ うん、いやよ。ねえ課長さん、今週中に連れていつてよ。でないと、わたしアレになつちやつて都合が悪いの……」

耳をすませば、こんな会話がとび／＼に聞えてくる。

「O・K。次第によつちや、こいつはいゝカモだ」

ニヤリと笑みを洩らしながら啓次郎は、何処までも二人の後をこつそりつけて行つた。

上野駅構内で紳士と別れた女は、大宮行の電車に乗つた。啓次郎もそれになつた。日暮里で女が降りると啓次郎もまた同じ、彼に後をつけられているとも知らぬ女は、足取りも軽く、やがて平和荘という建物の中へ入つて行つた。

「アパート住いとあつちや、ます／＼仕事やりよくならアな」

知人を訪ねるような恰好で、啓次郎もアパートの中へ続いた。女は八号室の中へ入つた。標札を見ると古沢とみ子と記されている。ちよつとの間、廊下に立ち止つて室内の

様子をそれとなくうかがつてみると、とみ子の他に同居している者はないとみえ、ひとつそりとして声一つ聞えない。

啓次郎がグイとドアを押した。錠がはずれていたののでドアは音もなく開いた。黙つて、にゅーと顔をつつこむと、それまでハンドバックをテーブルの上に無無雑作に投げつけて、疲れ果てたと云わんばかりに、ベッドの上で大の字に仰向けになつていたとみ子は、この不意の闖入者を見るや、ハッとしように起き上ろうとしたところを間髪入れず、「おツとツ／＼と……。そのまゝで結構」

と啓次郎はベッドの傍へ駆け寄ると、「てんで、おあつらい向きに出来てらア。いか、必要外の言葉を一つでも云つたらズドンと一発、土手ッ腹へ風穴あけてやるからそう思えッ」

声と動作が重なつて、とみ子の目の前へ突きつけたのは三十二口型のコルト拳銃だ。悲鳴を発する暇もない。あッ！と云うまの出来事である。

「姉ちゃん口から助けて——えの夕の字一つでも飛出してみろ。とたんに、このコルトが火を吐くぜ、俺は人殺しをやつてサツに追われてんだ。パクられりや、どつちみち生命の

ねえ身体。姉ちゃんが素直に俺の云うことをきけばそれでよし、洒落た真似でもしようものなら、その場で冥土への道連れにするぜ」

男を知つてゐる女とはいえ、まだ／＼若い彼女には、啓次郎からこうハッパをかけられると、もうグウの音も出なかつた。

「おい、そこにあるハンドバックを改めてみるぜ」

テーブルの上からハンドバックをとり上げて開けてみると、千円札が三枚出てきた。

「こいつは貰つておく。ほかに金はねえか」

「は、はい……」

「どこにあるんだ」

「つ、机の引出しです……」

ガラリ引手を開けて奥の方を覗き込むと、千円札百円札まぜて二千八百円ほど出てきた。

「しめて五千七百円。こいつはあずかつておくぜ」

「……………」

とみ子はガク／＼おびえているまゝだつた。

「それから、あの彼氏の名前は？」

「……………」

「おい、何もかも知つてゐるんだぞ。車坂でいちやついてゐた五十男の名前だ？」



「鈴木三郎——」

「住所は？」

「北品川五丁目です」

「勤務先は？」

「秋葉原駅前のサカイ商事です」

「あいつが課長で、お前は事務員だな。恋仲か？」

「……………」

「こゝんところが肝心要の決めどころッてんだ。はつきり云えッ」

「そ、そうです」

「男には勿論、妻子があるんだろう」

「は、はい」

「よし、こゝまで聞きや、合点承知。当分、小遣いに心配ねえッて云う訳だ。ふッふ……はやいとこういうことをきいて貰おう」

とみ子は観念のほぞをきめると、一枚一枚下着を脱ぎはじめた。

號泣する女学生

病状がすゝんでいるせいか、こゝのところ睡眠が全くとれず、頭は鉛でもぎつちり詰まされたように、重かつた。たとえようもない気だるさと、ぞく／＼と背筋を走る悪感に衝き上げられて、啓次郎はぶる／＼と身震



いしていた。咳はひつきりなしに飛び散り、痰はいつまでも咽喉にからまつてやりきれなかつた。気分転換に煙草でも喫おうと思つたが、昨夜は新宿のある鉄火場で、有金全部をすつてん／＼に叩かれて、煙草一つ買う三十円の金もふところには残つていない。下宿屋の亭主に借りようと思つたが、これもネオアゴチン・ヒロボンの麻薬ブローカーであり、昨夜から泊りがけでハマへ仕入れに出掛けて留守だつた。

「まるつきりヤク日だなア」

と、啓次郎が何気なく、窓に添つた道路へ視線を投げた時である。思わず彼の胸が踊つ

た。高峰三枝子に似通つた、めつばうきれいな女学生が通りかゝつたのだ。

「こいつは飛び切りの上玉だぞ」

疲労しきつた身体もなんのその、啓次郎は矢庭に下駄をつつかけて道路へ出ると駈けだした。二三十米、小走りに後を追つてから、

「もし、もし……」

と、何気ない風をよそおつて声かけた。

「あら、私ですの……」

くるり踵を返すなり、振りかえつた女学生を見ると、夜目遠目傘の内——と俗に云うが、それとはおよそ反対に、近くで見れば見るほどきれいな面立ちであつた。ニッと揃つ

た白い歯並びのあたりに、啓次郎は殊更に気をひかれた。小高く盛り上つたセーラ服の胸に光つた校章を、すばやく見てとつて、

「あなたS高女の女学生でしょう」

「ええ——」

「実は、お頼みしたいことがあるんですけど」

「はア……なんでしょうか？」

チラと女学生の表情に疑惑の色が浮いたのに、あわてゝグツと気持ちを引き締め啓次郎は、
「あなたの学校に伊藤先生ツていらつしやるでしょう」

「えッ？……」

「ほら、体育の方をやつてらつしやる朗らかな先生——」

「さア……」

と女学生は迷惑そうに小首をかしげ乍ら、
「体育の先生は三人いらつしやるんですけど、伊藤先生と云う方は……」

「あのウ、男の先生で独身の方ですよ」

「じゃ、小原先生かしら……」

と、思い淀んだその隙狙つて、すかさず、
「小原先生ツて、眼鏡を掛けておりますか」

「いゝえ——」

「掛けていませんか？　じゃ、その先生に間違ひありません。実は先週の日曜日にね、僕、

奥多摩へハイキングに行つたんですよ。その時、伊藤先生達——連れの方も四十近い先生らしい方でしたがね。お二人と偶然にも知りあひましてね、写真を撮つて上げたんですよ。その時の焼つけが其処の谷田写真館で昨夜出来たものですから、今からお届けしようと思つているところへ、あなたが通りがかつたので……」

「これから学校へ行くんでしよう？」

「ええ——」

巧妙な、決して他人をそらさない態度で話しかけていく啓次郎に眩惑されて、女学生は先刻までの不安な表情は何処へやら、いや、先生方に写真を届けてやるのだと思うと、乙女らしい妙な好奇心も湧いてくるのだつた。

「じゃ、済みませんけれどね、僕の家はすぐ其処なんです。暇はとらせませんから手紙と一緒に届けて下さいね」

云い棄てると彼は、ずん／＼女学生には構わず歩き出した。こうした場合、女が後をついてくることは、これ迄の女たらし哲学に依れば九十九%までは確実であると、ちやんと計算している啓次郎である。

案の定、女学生は彼の下宿まで従いて来た。

「どうぞ、お上んなさい」

言葉をかけたが女学生は、うす汚い彼の部屋を破れ障子の合間から見透すと、なかなか上る気にはなれなかつた。

「すぐ手紙を書きますからね、暇はとりませんけど、其んな処に立つてるのもなんですからどうぞ……遠慮はいりませんよ」

と、啓次郎が女学生の手をとろうとするので、彼女はあわてゝ、

「ええ——じゃ、失礼させていただきます」と、部屋へ入つてきた。

啓次郎は窓ガラスに錠をかけ、さつとカーテンを引くと女学生を室の片隅に坐らせ、自分ばかりと閉めた障子を背にあぐらを掻いた。そして、

「煙草買う銭がないんだが、あんた百円札の一枚位なら持つてるだろう」

と、いよ／＼魔性の本体をむきだして、たかりはじめたのだ。

彼女の処女の本能的な恐怖から逃げようとするや、啓次郎はついと腰を浮かし、スカートの裾から畳にかけて、グサツとジャックナイフを突き差した。そうしておいてから、今度はおもむろに机の中からもう一本ジャックナイフを取り出すと、彼女の頭すれ／＼に投

つけた。ピシッという音と兵に、ナイフは彼女の頭をわずかにそれて壁に突きささ、つた。

「おい、野暮な声を出すと生命まで貰うぜ」
芝居もどきにゆつくり台詞を掛けると、女学生にとつては驚天動地というか……。声もなく真ッ青になつていた。

「今から学校へ行くのは未だ早い。それよりも社会科の予習をしていつた方が為になるのじゃねえのか」

ニヤリと例の薄気味悪い微笑を蒼褪めた顔にかけると、

「なにも取つて喰おうと云うんじゃねえ。おとなしくしていりや、直ぐ帰らせてやるよ」

「……………」

「おいッ！」

と、睨まれるとひとたまりもなかった。激しい呼吸を続けながら女学生は云われるがままになつた。

「服を脱げッ」

「全部？」

「あたり前だ」

「い、いやッ……」

と、瞬間的に彼女は身をくねらせ、両手で顔を覆うと、たまりかねたかクックと泣きは

じめた。

いつまでも彼女は泣いていた。啓次郎は肩へ手をかけながら、

「お前もこれで人並みに、女になつたんだ。何も泣くことあるめえ」

と、こずるそうに舌をだした。

「お前の名は、なんて云うんだ」

「う、上田、か……和子です」

「上田和子だな。よく覚えておくれ。今後機会があつたら会おうな」

「……………」

「俺とお前とは、もう他人じゃねえんだ。何か弱つたことがあつたら、俺はいつでも此処に居るからな、相談に来いよ」

血みどろの情炎

このところ、たいしたカモも擱めず酒を呑む金もない。それで啓次郎は、いつかアパート平和荘で関係をつけたとみ子の恋人、妻子持ちの五十男、鈴木三郎から少しゆするうとして、いつもの学生服を脱ぎ、粋な藍がかつた紺のダブルを着込み、アメリカンハットをかぶり、ハイバリッジの眼鏡をかけ、伊達男気取つて国電品川駅に降り立つた。日曜日の

せいか乗降する客はグッと少なかったが、それでもいゝ女は居ないかと例の奇病から先ず周囲を見廻してみると、構内の入り口にすらりと立つた長身の二十五、六の女が眼に止つた。グリーンネットカチーフをかぶり、シルバーダバックを下けている恰女は、パンパ程のどぎつさはないとしても、堅気の女というには縁遠かつた。

「こいつはダンサーかな……」

つんと済まし気味な女の横顔をみつめながら、よしッ、出たとこ勝負だ、と啓次郎は近寄つて行つた。

「やア……」

なれ／＼しく声を掛けてみると、

「あら……」

と、軽く驚く表情が身についているのを、見逃がすような啓次郎ではない。

（鈴木三郎を訪ねる前に、今日はこいつから手玉にとつてやれ）

と云うのは内心で、

「しばらく振りだな」

と、手はじめに云つたものだ。

「いま、何処に居るんだい」

「五反田のSよ」

「これから彼氏と映画でも観に行くのか」

「うゝん、そんなんじゃないのよ」

「じゃ、暇なんだな。どうだい、お茶でも附合えよ」

「でも……」

「遠慮する必要はないよ。来い、来給え」

啓次郎は五、六歩あゆんでから振り返つてみると、女が未だその場でもじ／＼しているのを見届けて、

「早く、来給え——」

ためらつてゐるのを、きつぱりさせるように力強く一言いつて、あとはグ／＼歩き出した。

女にしては、この男が誰なのか突嗟に思い当らなかつた。何処かで見たこともあるようだし、また、はじめての顔のような気もする。が、渋谷、赤坂、銀座、五反田と、転々とき迷つて来た、長いダンサー稼業の間に、一度位はホテルへ附合つたことがあつたのかもしれない——とも、男の言葉づかいから推して思われた。本当のところ女は、これから映画でも観て、勤時間までゆつくり其の辺を遊ぼうと思つてゐたのだが、映画が始まるにはまだ時間もあつたし、何か甘いものを御馳走して貰うのも悪くないわ——そんな氣持から啓次郎の後をついて行つた。

戸を開けて間もない喫茶店の中には、二人の他に客はなかつた。

深いボックスの中に肩を並べて身を埋めたまゝ互いにハイボールを呑んだり、菓子をつまんだりした。

「そちらの景氣はいゝかね」

「いえ、さつぱり……」

「糸ヘン金ヘンが暴落したからか」

「ふゝゝ……そうかもしれないわ」

いたずらつぽく笑つた女の腰へ手を廻すと、

「じゃ、どうだね……」

女は身をくねらせた。

「えゝ……」

「……」

「どうだね。今から行かないか。今日は金を折よく持つてるんだ」

「だつてえ……」

「カマトトもいゝ加減にしろよ。アッチの方は君、凄じやないか。一年前のことを、今でもはつきり覚えてるよ」

「いやな方……」

「さ、行こう」

と啓次郎は手を執つたレジスターの前で、

と、彼は後ろを振り返つた。

「どうせ、むこうで清算するんだからいゝじやないか、いちじ立替えておけよ」

これが亭主氣取りの男ツていうのかしら、と思いつつ、苦笑し乍ら取り出した。が、啓次郎にしては、これで絶対に、どんなことがあろうとも女は自分のいうなりになると確信してゐた。すなわち、しみつたれの性質である女は、啓次郎に少し位の不審を抱いても金を返して貰いたさに、何処までゝもついて来るといふのである。

温泉マークへ連れて込んで、女をベットの
上へ寝せつけると、

「おいッ」

早速、啓次郎の態度がガラリと變つた。

「お前の腕に捲いてるやつはナンキン虫だな。そいつは金目になりそうだ。出せッ！」
あまりの激變ぶりにすつかり慌て、女が起き上ろうとするのを片足で踏んづけ、
「動くんじやねえ。それから声も出すんじやねえぞ」

とドスの利いた声をかけておき、
「死に損いの、肺病やみのこの俺だ。チャチなことをしてみねえ、どうなるかわかるだらうな」

と睨みつけ、

「その時はこれでいくか」

と、右のポケットからコルトを、

「あるいは、これにしようか」

と、左のポケットからジャックナイフを取り出した。

「なにさ、ふん、そんなもの……」

「云つたなア」

いきなり、左手に握られたジャックナイフが彼女の顔へ突っかけていった。

「あッ……」

叫びも軽い喉のうち、瞬間、女は両手で顔を覆い、身体をねじつたので、手頸をわずかにかすめ突かれたとだけだった。がポト／＼と滴る血を見ると、真青になつたまゝ、本当に下手すると男に斬られる事を知つておびえ上つた。

「ふッ、どうにでもしてちょうだい。あーあ、いやんなつちまう。四年前、私が与太者から処女を奪われた時も、こんな目にあわされたつけなア……」

と、しみ／＼つぶやくと両手、両足を大きく投げだしてふてくされた。

「さすが。ダンサーともなりや判りがいいや。じゃ、片ツ端から金目になりそうなやつ

は貰つておくぜ。まず、そのロケットだな。そいつは真珠だろう」

と、捲き上げ、

「それから、ナンキン虫とシヨルダーバックだ。ナンキン虫は密売のものだからいゝ金になるな。バックの中にはいくら入っている」

と口金を開けると千円

札で七、八枚。

「見かけによらずふところは寂しいんだな。俺は二、三万はあるだろうと睨んだんだが……」

「今時、そんな大金を持つて歩く女はいないよ」

「まア、いゝや。これだけあらア十五、六万は軽くはたらきだされるツて。

ところで、お前の名は」

「京子と云えばすぐ判るわよ」

「ふん、京子か？ ちよ

いといゝ名前だな。よしッ、これだけ貰う札心だ。

音を挙げるまで馬力をかけて可愛がつてやるぜ」



そして、啓次郎の唇が、ぶつつけるような荒々しきで顔へ迫つてきた時だ。

ぬめ／＼ツとした、生あたゝかいものが、どツと滝のようなしぶきとなつて口のあたりへ降つてきたのを、一目見るなり、

「きや——ッ！……」

世にも異様な悲鳴を發して、京子は裸のまま廊下へ駈けだして行つた。

報せを受けて、近くの交番から警官が飛んできた。

しかしその時には、あわれ！ 啓次郎はベットの土上から真ッ逆様にずり落ちて、床いっぱいに吐き散らした喀血の、その血潮の中に顔を埋めて息絶えていた。

右手の人差指と中指が第一関節からプツプツ千切れて、血の海の中にねばりついているのが痛ましかつた。

口の中に指を突込んで出るだけ吐こうとつとめたが、衰弱が余りにもひどかつたので、それだけの体力もなく、果ては窒息の苦しさから無我夢中で、自分の指を噛み切つてしまつたものであろうか……。

その姿は、最後まで生に執着する醜くい一個の野獸にも似た状態であつた。

やせこけた蒼白い額には、じつとりと無氣味な油汗がにじみ出ており、窓からさす明るい陽ざしに輝いていた。

野獸——の、名にふさわしい、それは凄惨な最期であつた。

千載一遇

往診先から戻つて来ると、看護婦が診察室で一人の紳士と一人の婦人が、一時間近くも院長さんの帰りを待つていると告げる。

ドクトルはいそがしい足取りで診察室へ入つて行く。

『やあ、どうもお待たせしました。何しろ忙しいものですから。さあ、拜見いたしましたよう』

と声をかけると、それに応じて婦人の方が進み出た。

『先生、お願いいたします。どうも腰が痛んでならないものでございますから……』

『お腰が？ それではどうぞお召し物をぬいで頂きましょう』

云われるまゝに婦人はむきたての卵のような胸から下をあらわにして、くまなくドクトルの診察に身を委せた。

『いや、大したことはありません。ちよいとした神経痛といつたものです。薬の処方差上げておきましょう』

『先生、どうもありがとうございます。診察料の方は、いかほどで？』

『いや奥さん、そのほうの御相談は御主人と

よくいたすことにしますから……』

と、医者はさつきから壁際のベンチに腰をおろして身動き一つせぬ紳士の方を見やりながらいつた。

『あら』

と婦人もその時初めてびつくりしたように『あのかた、わたくしの主人でも何でもございませんのよ。ほかの患者さんですわ』

焼けぼつくい

『もしもし、そちらジョルジュ？』

『あゝ、ぼくジョルジュ。きみはジャックリオンだね』

『そうよ。あんた覚えてるわね。もう絶対に二度とあたしとこの敷居をまたいじやいけないッてこと。それを確かめようと思つて電話したのよ』

『忘れるもんか。あれほど云われゝば、忘れようたつて忘れられないよ』

『安心したわ、大概大丈夫とは思つただけれど』『それなのに、何故電話かける氣になつたんだね』

『だつて、あたし引越するのよ。新しい番地教えて、そこへも来て貰わないようにしようと思つて』

夕の映画防犯

主催 頓狂都暴犯協会
後援 御用十手タイムス社
場所 各地区 交會堂

プログラム

一、性界ニュース 性界映画社提供
二、痴漢白書防犯 同
物語(全四卷)
強姦殺人

以上

司會者 今晚は、多数皆様の御来場を得ましたことは、不尙頓狂都暴犯協会の役員の一人と致しまして、欣快に絶えない次第でございます。さてとかく戦後乱れに乱れました性道徳を確立し、人倫を正し、犯罪を撲滅することが、目下緊要の問題であります。今晚これから上映致します映画は、性の乱れを正し、エロ犯罪、暴力犯罪の絶滅する意図の下に、作られましたものでありますから、ゆつくり御観覧の上、社会の毒虫、エロ虫を退治し、正しい社会、立派な社会を作りたいと思います。

(観客拍手)

性男ニュース

第六〇六号

画面——受胎調節内服薬。瓶と十数個のタレット。

(アナウンス) 今度アメリカのブラチン製薬会社で製造されました、劃期的な避妊内服薬は、就寝前に一服飲んでおけば、十二時間は効果があるという至極重宝なもの。

画面——事後の洗滌。洗滌器と便器。側にシュミーズ一枚のアナリカ女性。

(アナ) こんな面倒な洗滌は、昔物語となるのも遠くありません。ところが——

画面——製薬会社社長と内服薬発明家との争い。互に喉を掴み合い、ネクタイを引きちぎつて乱闘中。

(アナ) 製薬会社と発明家は、

特許権のことが折り合わず、発明家は、会社に戻り込んで、会社側をインチキ呼ばわりをして遂に暴行沙汰となりました。ア



ノ獲りました。

画面——社長ノック・アウトを食つてデスクの上に倒れる。

(アナ) どうやら勝ちには、発明家にあつたようですが、この特許料の問題、どうなりますことやら。金が仇の世の中。人類を幸福にする薬も、今の所、いつ手に入るか分かりません。

画面——ナイロン製の最新海水浴着をつけた美人が、ビーチを散歩している。

(アナ) 夏は楽しいスポーツの季節であります。紳士方に取つて悩ましい、曲線美がこう素透しては、公衆衛生上よくないという声も起つております。前を蔽うのは、ストリッパーのやる透明バタフライだけです。

画面——首都ダラリトンで海水着美人の写真を前に、公共衛生局と関務局とが立合の上で、慎重協議している。

(アナ) アナリカ公共衛生局と関務局の。お役人の慎重協議の結果は、どうなりますやら。マリ・ン・モンロウやラッセルなどに、これを着られたら、大変だと、関務局では、大反対の模様です。

画面——世界オリンピックベニス対交レースの連勝者ザイメンコフ。

(アナ) アジア・対交レースの招待を断つて、ひたすら世界対交レースに精進したザイメンコフは、一九四九年に、優勝以来本年も優

勝。遂に挑戦者アラビヤのアナジ

ンを退け、堂々連勝制覇しました。記録は、八時間廿六分三六・四秒。正に文字通り空前絶後のベニス対交レース記録。人間キングコングは、今や世界優勝盃を受けました。この人間ビストンは、独得の猛練習「インターバルレース走法」によつて鍛えあげたもので、この超人は、涙ぐましい努力の結果であります。第二位は、アラビヤ出身のアナジン、第三位はチベット出身ラマ僧アナングルジ



やでありました。

画面——警察護送自動車に次々に収容されるチンピラ強姦グループ。

プ。

(アナ) これはセイヨークの下町ブルッチスルンの貧民街に巣喰つた少年強姦グループ。去る七月十八日夕方七時半頃、ゴールドボール銀行女秘書マルアーナ・ベニスレスさんは、メッチエン街とパン／＼十街の交差点で、数名の少女グループに襲われ、あわやという間に、附近公園内のブッシュに担ぎ込まれ、あたら処女の誇りを奪われました。

画面——世界一の巨大陰の所有者。

(アナ) これはアフリカ西部シヤングル内に住む未開アナ／＼ガ族の青年ですが、世界一の陰のう象皮病患者として、発見されました。今日の医学では、目下の処治療法は、ないとされています。原因は、蚊が媒介するミクロフィラリヤ糸状虫という原由で、蚊の撲滅が大切です。

画面——ギリシヤのバッカス祭の復活。

(アナ) 今度ギリシヤで、古代のバッカス祭を復活、酒の神ディオニソスを盛大に祭ることになりました。当日は、各地から数万の、男女が集り、夕方から朝まで、酒は飲み放題、女は抱き放題の、大乱痴騒ぎを演じました。会場はアナタ市の元オリンピア競技場に設けられ、御覧の通り、入場者は一糸まとわぬ、赤裸で、思う存分、ディオニソスを讃美しました。

画面——頓狂都突尻(ツギジリ)の待合で、汚職官吏、贈賄議員逮捕する。逮捕後の室内の散乱状態。

(アナ) 頓狂突尻(ツギジリ)の高級待合で、うてない弾丸(タマ)や動かないエンジン、飛ばない飛行機取引の暴衛隊汚職一味が逮捕されました。逮捕令状によつて、拘引された一同の

後は、御覧の通り、和本、ワ印、器具、薬品、紙屑が散乱、花の嵐の跡を示しております。シーツの乱れ、汚点など、いやはや大変なものでした。

画面——痴舞乱舞する座敷の内部

(アナ) これはかねて事あるを察知した、本社秘密望遠特殊カメラ



で撮影した汚職一味の高度の乱痴騒ぎはだか跳りの実況。これでは税金を納める国税は我慢出来ません。アッ抱きつきました。転びました。まるでプロレスリングの血闘です。

タイトル——終

映画色天然絵

章十二 犯防白痴漢

字幕——性界映画

社製作提供

字幕——痴漢白書

防犯物語

字幕——本映画は

頓狂都暴犯協会指

導の下に性界情勢

を描いたもので、

煽情発映画とは同

一視さるべきもの

でなく、また、金

儲け本位の性映画、商業映画とは

断然その製作意図を異にする。従

つて満十八才未満の男女は、観覧

を遠慮して頂きたい。

画面——空中から、俯瞰した首都。中央駅、ビル街、公園、盛り

場、河、橋架、工場街など。順々

に現われる。

(アナ) 人口八百万の大都市頓狂

部そこは人間の密集団であり、あ

らゆる犯罪のジャングルでもあります。

画面——国会建物から国会の乱

闘シーンへ。

(アナ) これは猿ヶ島の猿群の

支配権争奪戦ではありません。

国家の選良たる、紳士淑女諸君

が、原始的暴力行使のシーン。

あちらで揉みくちやにされているのは御婦人——

画面——泣いている婦人代議

士

(アナ) お、可憐な婦人代議

士が、おい／＼泣いています。

泣くにも所を欠いて、何たるこ

とでしよう。

画面——阿修羅のように奮闘

する代議士。

(アナ) どうやら代議士の資格

画面——阿修羅のように奮闘

する代議士。

(アナ) どうやら代議士の資格

画面——阿修羅のように奮闘

する代議士。

(アナ) どうやら代議士の資格

画面——阿修羅のように奮闘

する代議士。

は、柔道や拳闘、プロレスのチャンピオン級がい、ようです。

画面——静かな料亭、障子に影法師が写っている。

(アナ) 皆さん、お分りでしょうか。これは有名な有名な幫間が、宴席で珍芸四十八手を演じている所です。ほらこれが有名な夜這いの光景でござ——い。

画面——酒を飲む主人と客と芸者。

(アナ) 重要会談も終つたと見えて、饗応側も被饗応側も、のんびりしています。

画面——浅い川を踊る芸者の群。

(アナ) 浅い川が、始まりました。うんと捲れ、前まで捲れ。日本に古くからあるカン／＼踊りです。チラ／＼するのは何でじやいな。

画面——四畳半。客の寝ている寝床近附いて、色つぼく着物を脱ぐ芸者。

(アナ) やつぱり落ち着くところは、暗い洞窟のようなところであります。

画面——キャバレーのフロア・シヨウ



(アナ) 美しいストリッパー。見事な脇の下の体毛。みなさん、みなさん、おんなの前にチラ／＼するのは何じやいな。あーれは、おとこを討てとの黄金の、バタフライ。

画面——グラスを傾けて、舌なめずりする男の客。

(アナ) 大分、よだれが出ているようです。

画面——御同伴ダンスホール。

男と女。女と男。むせ返るようなうん気の中を、みんなかたまつて動いている。

(アナ) お若い方々に、大もての御同伴ホールです。

画面——頬と／＼接しながら踊る若い男女。

(アナ) 踊り踊るな、ちよいとチークダンス。ヨイ／＼。花の都の真ん中で、やつとな、チュウ／＼。

画面——特飲店の店頭。洋装の女の子三四名。

(アナ) 売春法案成立後美妓三千を擁したかつての不夜城も、今やどこに行くのでしよう。

(同時録音) あノウ、お兄さん、一寸遊んで行かない。シヨートでいいわ。サービスするわよ。チエッ、答ん坊行つてしまつた。

画面——女と抱き合つて二階に上る若い男の客。

(アナ) 今度は、大成功。彼女はナンバーシックスの客をキャッチ

しました。

画面——秘密の二階家。若い男が寝ている。

(同時録音) コレ／＼起きな。坊や、起きな、もうお昼です。

画面——照明が若い男性の一部に当る。

(同時録音) ほう、坊や起きたネ。元気だなア。

画面——小さな帽子とりボン。

(同時録音) サア、お仕度だよ。帽子とネクタイつけて。



画面——廻るレコード。

(同時録音) そら帽子被つたら、今度は、ダンスだよ。ラ、

、、。

(溶暗)

画面——華やかな映画館。映写中の恋愛映画「大公妃殿下の浮気」。

画面——見とれている和装の美しい女性。

画面——女の側に腰掛ける革ジャンパー姿の中年男。

(アナ) 映画は、ほんとに楽しい娯楽です。ところが、人生到



るところに痴漢が毒牙を磨いています。ほら、男の膝と足が、お隣の女性の方に向って行きます。

画面——男の足の先が、女の

足に触れる。

画面——男の手が女の股に触れる。

(アナ) アツ、いけません。御婦人は、映画に見とれて、痴漢の行為に気が付かないようです。はてどうなることやら。

画面——男の無礼な行為に立ち上つて席を変える若い女。

(アナ) この女の方は、賢明でした。でも、せつかくの観覧の楽しみを邪魔にする男は、変態的痴漢に違いありません。皆さん、御注意下さい。

画面——満員電車の中。男が和装の婦人の尻にびつたりしつゝいて、動揺の度毎に、段々、ぐつゝいていく。

(同時録音) 後で変なことしないで頂戴。——何やつてんのよ。

画面——こわい女の顔。

画面——ムキになつた男の顔。

(同時録音) 何だ、手前みたい

なオカメなんか誰が相手にするもんか。

画面——こわい女の顔。

(同時録音) スケベ野郎。何云つてやがるんだ。

画面——男こそくと離れて、



下車する。

(アナ) 満員電車の中には、こんな痴漢がいます。見附いたら、ドナツてやることです。おとなしくしていると、男はつけ上ります。

画面——若い女が、白胄を出して洗濯している。

(アナ) 古い柳に「洗濯の向うへ廻り拜むなり」とありますが、かの久米仙人も雲の上から墮落しま

した。

画面——恒も垣根の隙から覗いている男の顔。

画面——男、異様なものを動かしている。

(アナ) どうもいけません。こんなことしないで、ちゃんと、ゼニコ払つて抜きに行つたらどんなものでしょう。

画面——赤い洗濯物が、べつとり糊のようなもので濡れている。

(同時録音) 若い女の声「誰だろう。こんな悪戯する奴わ。汚らしいヨ」隣の花代ちゃんは、電車で袂の中に、べつとりしたものを入れられたというが、パカな男がいるものサ。こんなこと位で、交番に届けられないしね。いやになつちやうよ。昨日は、足袋の中にしてあつたよ。今度こそ、見張つていた、変態男を取つちめてやろう。

画面——駅の暗い蔭で抱き合

つている二人の若い男女。

(アナ) 仲のいいお二人。結婚もまだでしょう。こんな御時世では、家もアパートも、安いお金じゃ、借りられません。

画面——暗い夜道を、一人で帰って行く若い女。

字幕(スーパー)——くらい

夜道は二人で行こう。

(アナ) くらい夜道を、女が一



人で歩くのは危険です。暗闇に痴漢が、眼を光らせて待つています。遠廻りでも、人通りの多い、明る道を歩きましょう。男の人は、女の家で、タスコートして行くのがナイトの務めで

す。外国では、夜八時過ぎは良家顔。

の子女は、一人では歩きません。

画面——暗い土手の上を行く若い女。

画面——女の後から、忍びよる悪魔の姿。

画面——背後から、抱きつく悪魔。

(アナ) 心配していたことが本当になりました。

画面——悲鳴をあげる女の顔。

画面——女の口をふさぐ悪魔の手。

画面——草むらに女を引ずり込む悪魔。

画面——抵抗する女の手や足。

画面——ぐつたりとした女の身体。

(アナ) 何というひどいことをする悪魔でしょう。殺人強姦という兇悪犯です。犯人は逃走しましたがすぐ嚴重な捜査陣で逮捕されるでしょう。

画面——逮捕された兇悪犯人の

(アナ) この犯人は、家庭の不和



失業。失恋が犯罪の原因でした。

画面——若い女の後をつけて来る男。

字幕——変な男が、つけてきたら、交番か附近の家に飛び込むと。

(アナ) 転ばぬ先の用心。あなたの後をつけて来る変な男は、不良痴漢です。帰りがおそくなつたら、誘い合せて、同じ方角に帰る人は、一緒に帰りましょう。単独行動は危険です。

画面——暗い道を走つて来る無灯の自転車。

字幕——無灯自転車に注意!

灯火無し自転車来るのに充分気をつけて下さい。淋しい町や郊外に出没する臀肉切りの犯人です。災難はウツカリしているところ。大切な顔でも傷けられたら、取り返しがつきません。

画面——夏の海岸。ビーチパラソルのまわりに集う曲線美の婦人たち。

(アナ) 派手な服装やお化粧は、痴漢を惹きつけます。被害者の女性は、大半が廿代で、濃厚な方が多いようです。

画面——異様な眼で注意する痴漢の顔。

(アナ) 元々、痴漢は、性慾異常者が、性慾のハケロのない、独身の異常者が多いですから挑発的な服装は、絶対に不可ません。中には、結婚に失敗した者もあり、女性に対して復讐をまくる異常心理者もあります。

中年婦人も、大年増の方も御注意肝要です。

画面——暑い夏の夜、窓から見えるうたたねしている婦人。

(アナ) 暑いからとて開けつ放しにして、大の字になつて寝たりしていると、思わぬ兇魔に狙われます。

画面——太股もあらわに寝ている姿。

(アナ) 寝乱れ姿は、美しいものですが……

画面——表を通り掛つた若い男が、窓越しにチラリ見えて近づく。

画面——若い男は、窓乗り越え、侵入して、いきなり、女に抱きつく。

画面——抵抗する女。

画面——喘ぐ男の顔。

画面——格闘する男女二人の姿。

(アナ) 浅間しいことになりました。これというのも、挑発す

る原因を作るからです。

画面——道路で、若い女に道を尋ねる男。

字幕——未知の男を見たら痴漢と思え。

(アナ) 通り掛りになれなれしく近附いてもたり、公園や映画館、駅などで、言葉巧みに近づく男は女を狙う狼です。



画面——女子高校生をバーに誘つて行く三人の高校生。

画面——ビールを飲む女子高校生。

画面——酔つ払つた、女子高校生。

画面——男の部屋で騒ぐ女子高校生。

校生。側に男三人が手を叩いて喜んでい

画面——一人の男に抱かれた女子高校生。

(アナ) 知らない男性との交際は危険です。この娘さんも、酒を飲まされ、男の家に連れ込まれ、尊い処女性を失いました。

画面——楽しい登山。夜のキャンプ。

字幕——異性との同伴は念には念を。

画面——若い男、そつとキャンブで一人の女の所へ忍び込む。

画面——日記つけている、若い女。ふと物音に気がついて——

(同時録音) 「だあれ、」「ボクです」「ああ、昼間一緒になつた方ね」「皆さんは」「みんな池の方に行きましたのよ」

画面——若い女に抱きつく男。

(同時録音) 「いやよ。いやよ。放して」「アール助けて」

画面——温泉地。社長と若い女

が山道を散歩している。

(同時録音) 「いゝ所だね。ほら月が出てい

画面——社長木の根に頭く。

画面——女は、手を差し出して、男を抱える。

(同時録音) 「山道は危ううございますわ」「さあ宿に帰ろう



かね」「みんなが心配しておりますわー

画面——男が、いきなり女を引き寄せて接吻する。

(同時録音) 「イヤ、く、イヤ」「ねえ、いいだろう」「お

知り合いになつたばかりで、厭ですわ」「こうしたらどう。動けないだろう」(微かな女の叫び)



画面——線路伝いに歩く女。

夜。
字幕——機転は貞操を救う。

画面——背後から近づく鉄棒

もつた男。

(同時録音)

男「オイ娘さん」

女(ぎよつとして)「どなた」

男(鉄棒を示して)「一寸、

つき合ねえか」

女「あなたどこの人」

男「うんいや。どこでもいゝじやねえか」

女「忙しいもん」

男(女の肩に手を掛けて)「云

うこときかんとバラすジ」

女(落着いて)「無粋な人ね。こ

んな高い線路の上で、云うこときけませんわ。外の場所に行きましよう」

画面——男と、女、鉄橋の上に

差し掛る。

男「危いぜ」

女(ええ)

画面——女は男の隙をみて、鉄

橋の上から男を下に突き落す。

男「ワーツ」

女「いゝ気味ね」

画面——女、線路伝いにパタ

逃げて行く。

(アナ) 女の機転で、襲つた男を高さ十尺の鉄橋から突き落とし、無事に危難を逃れました。

画面——電話を掛ける女。

女(一一〇番を廻して)「今、男に襲われました。男は、私が突き飛ばしたら鉄橋の下の河に落ちました。場所は——」

(アナ) 犯人を見たら、人相、着衣、目じるし、特徴などよく覚え警察か交番に届けることです。一人の機転が、沢山の他の被害者を救います。警察への電話は、局番なしの一一〇番です。

画面——淋しい道で背後から男に襲われた女。



画面——女の強い腕で胸を突かれた男たじうぐ。その隙に、女の叫び声。

画面——急をきいて駆けて来る男。

画面——逃走する若い男、忽ち捕えられる。

(アナ) 馬鹿なことをする痴漢が、後から後から絶えません。この女の方は、幸い護身術を習つていて、羽搔締めになされても自由になる肘で、男の胸を突き虎口を脱しました。また男の隙をみて、男の急所を蹴つたり、掴んだりすることも、一瞬の隙をもたらしします。こいつは、大抵さくものです。どんな女でも抵抗のある限り、強姦といういまわしいことは起りません。

画面——アイススケートを楽しむ若い男女。

画面——キャンプでダンスに興ずる若い男女。

画面——夏の海岸辺で、遊び戯れる若い男女。

字幕——終

覗き見た女妖



豊満そのものの臀部の中央にこれはまた妖しげなものが……

〇〇〇 前 田 勇 〇〇〇

他人の部屋を覗いた事がありますか

「こんな事を話して、よいか、どうか……」

と、一寸当惑した面持で、松前氏は暫くためらっていたが、やがて念をおすように、

「前田さん、本当に誰にも私の話をおしやべりになりませんか」

私は彼の真剣な目の光に気おされして、反射的に大きく頷いてしまいました。

余りに、松前氏の態度が、いつもとは違っていたからなのでしよう。

「絶対に、誰にだつて、喋りはしませんよ。」

御安心なさい。松前さん」

思わず知らず、私も言葉に力をこめていました。それでも、まだ彼の目は奥に疑惑の影さえ宿っていたように、私には思われました。

私の目の前の松前善作氏——。

彼は私の所属する日本探偵作家クラブの一

員で、年令は初老に這入ろうという四十五ですが、いまだに独身主義者で、その所為か、気持はいたつて若々しく、それは彼の日常生活を見ただけでも、そこはかと感じられるのです。

ところで、この人にはたつた一つではあるが、妙な悪趣味のある事に、私は気づきました。強いて断ずるならば、彼の結婚を阻んでいた理由こそ、この妙な趣味が原因である、

と云えましょう。

妙な悪趣味——それは一種アブノーマルなものであり、彼は日夜、暇さえあれば、件の趣味を、みだす行為を敢えてやつていたのです。

こんな事を書いて行くと、読者諸氏はきつと、松前氏が嫌らしい下卑た中年男だ、と考えられるかも知れませんが、決して、彼はそんな賤しい男でも何でもありません。

一見、高級サラリーマンと云つた格好で、その鼻下にたくわえた美髯が、何とも云えぬ奥床しさすら発散させているのです。

大体、探偵作家などという輩は、既して風采の香しくない、変屈そうな者ばかり揃つているのですが、彼、松前氏だけは例外だ、と云う外ありません。

「本職は、画家だよ。小説はアルバイトさ」と、彼自身は言っていますが、私は彼が如何な画を描いているのか殆んど見たこともなかったのです。

さて、松前氏について、余りこゝでくどくど書いてみても無駄でしょうから、この辺で矛先を変えて、何はともあれ、彼の妙な趣味……即ち、猟奇趣味なるものをば、先に暴露して行きましょう。」

嘗つて、松前氏は次のような事を私に訊いたのですが、今から考えると、やはり彼の猟奇趣味なるものが、ものゝはずみに口からとび出したのには相違ありません。

「前田さん、変な事を尋ねますが、貴方、他人の部屋を覗いた経験があたりでしょう？」

その際、私は非常に突飛な彼の質問に、当人の頭腦のほどを疑つた位です。

「まさか、泥棒じやあるまいし、他人の部屋なんか覗きやありませんよ」

幾分、怒気を含んだ私の言葉に、

「お気にさわられたでしょうか。でもね、誰にだつて、内心では他人の秘密を見たいという欲望はあるものですよ」

そう言つてから、私の目を凝視して、

「貴方、乱歩さんの『屋根裏の散歩者』とか、『猟奇の果』『湖畔亭事件』などを讀まれたでしょう」

「むろん、讀みましたよ。で、それが、どうかしたとでも……」

「それなら、人間たるものが他人の秘密事を覗きみる心理等も、おそらくお解りでしょう。殊に、男が若い女の秘密を覗こうという心理は……」

そう言われて、私はぎくりと胸にこたえる

ものがありました。そうです、お恥かしい次第ですが、以前、私にも同じような経験があったからなのです。

けれど、私はつとめて態度には現わさずに、冷静を装つて、彼に応えました。

「覗きの心理など、一向に僕には興味ありませんよ。だから、それを実行することなど……」

と、言いかけて、私はあとをにこしました。それは、内心、彼の次の言葉を期待していた証拠とも言えましょう。

こんな話の具合から、何時のまにか、私は肝心の探偵小説も忘れ、猟奇趣味に転向して、月々の例会散会後には、きまつたように、よく松前氏と二人して、あちらこちらと奇を求めて、漁り歩き巡つたものです。

然し乍ら、その間に、私の心を満足させてくれるものなど、何一つとして出くわしませんでした。

そんな、こんなで、私の猟奇趣味も次第にうすれて、最近では、松前氏と親しく猟奇話に打興することとてなく、互いに疎遠になりがちだつた訳ですが、突然、一週間前の夕刻、松前氏から電話がかかり、港、神戸の某喫茶店で落ちあう段取と相成つたのです。

久しぶりで、店の隅のテーブルを挟んで対坐すると、彼はその柔和な眼から、常にない輝きを放射させて、徐ろに話しはじめるのでした。

猟奇趣味がカマ首をもたげた……

「よろしい。じゃ、貴方を信じてお話ししましょう。で、まずお断りしておきますが、これは作り話でも、何でもありません。私の見たまゝ、事実のみを有りのまゝを述べるのですから……」

さて、かくの如くに、彼の話は進められました。彼は実に弁舌さわやか、こん／＼と谷川のせゝらぎにも似て、人をそらさぬ話しぶりでしたが、今、こゝに、その全部を書きつくすことは、到底出来そうにもありません。

だから、私はその要所々々を、かいつまんで、順を逐つて書いてみましょう。

「今朝のことです。私は秋の出品作『自然風物』を画くために、キャンバス台を抱えて、アトリエから出たのですが、実際はこれといったアイデアもなく、たゞ行きあたりばつたりに、好資料を得んものと虫のよい考えからだつた訳です。芦屋の別荘地帯である山の手

に出ると、貴方もご存知でしょうが、あの辺りは誠に風光明媚、いつか私は憑かれたようになつて、懸命に描きなぐりました。

然し、思う様には中々描けないものです。



これは小説を書く場合と同様でしょうね。

ところで、こんな調子ですから、私は途中で嫌気がさし、筆を置いて、そのまゝ、ごろりと休息をとるため横になりました。

そして、何時のまにか、うつら／＼してしまつたのです」

彼はそこで言葉をきると、コーヒーをちよつと口に含んで、私の反応を見極めようとする様子でした。

私は沈黙をまもり、同じようにコーヒーを口にしてい、彼の目をじつと見返しました。

「前田さん、それから何が起つたとお思いですか？……」

「僕には分りませんが……」

「女ですよ。いつ来たのか、若い女性が私のすぐ傍に坐つて、目をあけてこの私の顔を覗きこんでいたのです。」

私は、驚き、且つ年甲斐もなく慌てました。

それは、女が異常にコケティッシュな目つきで、私を見つめていたからかも知れません。

然も、大柄な彼女は、肉体美のフランス女優マガリ・ノエルそつくりに見えましたよ」

「それから……それから……」

と、私はつい無意識に体をのりだして、松前氏を心ならずもせきたて、しまいました。

すると、彼が唇をきゅつとゆがめて、にやつとうすら笑いをうかべて、

「前田さん、貴方も全く隅におけませんね。若い、それも美女となると、目が光る」

「誰だつて、そうじゃないですか！」

きめつけるような私の態度に、彼は「さよう、ご尤とも」という風に、かぶりを幾度もふりました。そうして、松前氏の語は、愈々、佳境に這入つていつたのです。

「その女は、私の心の動揺を無視して、こう言いました。『先生……珍しい画をお描きになりませんか？……妾、ご案内しましてよ』とね。この時ばかりは、私も吃驚しました。

と、同時に、勃然と例の猟奇趣味がかま首をもたげて来たのです」

「それで、松前さん、貴方は……」

「勿論、行きましたとも、その女に従いてね」

「そこは、何処？……どんな所でした？」

「どこを、どう、歩いて行つたか、道順はよく記憶にありません。とに角、辿りついた所は、古色蒼然たる何世紀前の建物とも思える洋館で、中に這入ると、女は玄關脇に置いてあつたランプに灯をつけ、『さあ、どうぞ』と、低い声でうながしたのです」

彼の語をきいている中に、何だか私はぞくりと背筋のあたりが寒くなつてきました。

「それで、それで、貴方はその女の言葉どおりにしたのですか？」

松前氏は、私の問いにこたえる代りに、目

で軽く笑つてみせました。それは、何とも云えぬ、彼の猟奇にひたつた時にする愉しそうな顔でした。

女が「絲もまとわぬ姿のままて……」

「通された部屋は、丁度、アトリエ風のこしらえて、黒いカーテンが重たく垂れさがり、淡いランプの光にうかびあがつた女の顔を、私はもう一度しげ／＼と眺めました。

すると、女は『暫く、待つていて下さいませね』と言つて、それから姿を消してしまつたのです」

「姿を消した？……」

「驚くには当りません。その部屋から出て行つただけなのですから……。それより、その時、そこにとり残された私の氣持をば察して下さい。私の胸の中は妙にときめき、鼓動が脳髄にまで響くようでしたが、けれど私は耳をすまして、何ものをも探りとうとしませんでした。と、壁を透して、女のさゝやきが聞えてきたではありませんか。

『あなた、私を、この哀れな私をお見せするつもりなの？……止して、止して頂戴！……私は見せ物じゃないわ！』

『でも、思い直して……先生に、あなたの

画を描いて頂くためなのよ』

一人は、明かに先刻の女の声でした。だがもう一人の方は、いやに腹れた、それでいて変に甲高い女の声だつたのです。

『ねつ、いゝでしよ。承知してくれるわね』まるで懇願するような彼女の言葉に、相手は何もこたえなかつたが、それは肯定の意味だと、私は思いましたよ。やがて、彼女が私のところに戻つてきました。

『お待ちになりました？』

私は、大きく深く首をふりました。

『すみません妹が中々返事してくれなかつたものですから……』

『妹さん？』

私が訊くと、女はさも悲しげにうなだれ、『先生、妾の妹のこと、誰にもお喋りにならないで……妾、先生にだけお見せしますのよ。それは、妹を立派な絵画として永遠に残して頂くために……』

私はどのように返事をしてよいかと、とまどい乍らも、もう一度深く大きくうなずきました。そうして、彼女の背後に視線を注いで、彼女の妹なる人物を待ちうけたのです。が、どうでしょう。彼女は自分だけ室内に這入ると、直ぐにドアを閉めてしまつたのです。

『妹さんは？……』

私はおどろいて尋ねました。が、女は返事もしません。

『どうしたのです！？妹さんは……』

再度、強く叫んだ時、女は部屋の一隅にいたランプに近寄り、フッと灯を吹きつけたのです。一瞬、真暗闇となつた室内で、私は恐怖に戦き、たちすくんでしまいました。

『ど、どうするつもりだ！私を！』

震え声になり、叫ぶのもやつとでした。私の声が反響するに混つて、何か絹ずれの音がさらさらと、聞えたようです。私は暗黒の中で、一縷の光明を探り求めんものと一心でした。と、その時、ぼんやりと室内がうきあがつたのです。女が、ランプをつけたのです。

その途端、私は臉を二度、三度、しばたき、目前咫尺の間に近づいた彼女に、思わず唸り声をあげてしまいました。何故だと思ひます、前田さん？……。女が、彼女が、一糸をまとわぬ姿で……。

『全裸で？……』

『そうです、完全なるオール・ストという奴ですか』

と、松前氏は意味ありげに、にやりと笑みを刻みました。今迄の氣品がかなぐり捨てら

れたような態度でした。彼は残っていたコピーをぐくりと呑みはすと、

『前田さん、美女の裸は、いつ見てもいいものですよ。金色のうぶ毛が、そして毛穴まで



が、私の瞳にクロースアップされて映りました。心持ち上向いた豊かな胸の隆起、あえぐように揺れて、セックス・アピールするかに私の瞳にとびこんできました。

『君、裸になつて、どうするつもりだ』
『先生に画をかいて頂くためですわ、妹の画を……』

私は狐狸の類に化かされているのではないかと？と疑問を抱きました。然し、彼女の眼差は真剣そのものでした。

『妹さん？……どこだ！どこに、彼女がいる！？』

私は鋭くつめ寄り、彼女の肩をぐいと掴んで、烈しくゆすぶりました。

『か、かんにんして……』

瞬間、私はぎよつとして、手をはなしてしまいました。私は妙な声をきいたのです。しわがれた、あの変に甲高い声を——。それは、彼女の声ではなかつたのです。

『先生……、妹の、妹の声ですわ』

『ど、どこにつ！妹さんが？……』

私の言葉に応じるように、彼女はくるりとそのヴォリュームある体を廻しました。その刹那、私は息をのみこんで、呆然となつたきりの状態でした。何という、奇怪な事でしょう！私は悪夢を見ていたのでしょうか。いや、そうではなかつた！たしかに、たしかに……』

私も残っていたコピーを、ぐ、ぐうーつ

と流しこんで、松前氏の次の言葉を待ちうけました。だが、彼は黙して語らず、私の気持ちを何だかじらすようでした。

と、彼は私の前にスケッチ・ブックを差しだし、目顔で私に開いて見るようにと、うながしたのです。私は取る手ももどかしく、それを開きました。

おゝ！ そこに！ ……そこには、裸女のデッサンが……。然も、デッサンにも似ず、克明に画かれた裸女の背部には、かの平家蟹の甲殻に見るような顔が、不気味にうかびあがり、豊満そのものの、臀部の中央に、これは又、妖しげな女の——ヴァルヴァが、あざわらうかのように画かれたのです。

「これは……一体！？」

私は、松前氏の常識のほどをうたぐりつ、も、問いつめねばおけませんでした。

「松前さん、これが、これが貴方の真の芸術ですか？ それとも、猟奇のうわ言ですか？ そうです！ これは、エロ・グロ以外の何ものでもありません」

私はさすが周囲をはばかり、低く詰めよるように責めたてました。幸い、店には、私たちの外に客の姿も見当らず、喫茶ガールが一人、ぼつねんとスタンドによりかゝり、しよ

ざいなげに立っているだけ。

すると、その時、店のドアを押して、すうーと這入つてきた一人の女——。

何気なく、その女性に視線をさせた私は、愕然として息もできぬ位でした。

マガリ・ノエルそっくりの女——デッサンと寸分違わぬ、その女が、こちらを見て、につこりと微笑み、静かに私たち二人の方に近づいてきたのではありませんか。

臀部が互に密着した双生児が……

私は、件の女を見た！

確かに、この目で見、かつ話も交しました。松前氏の話を、半信半疑で聞いていた私。だが、もはや、それは夢でも、幻でもなく、

現実にあるうべからざる妖女が、この都会のどまん中に飄然と現われたのです。

当夜、松前氏と彼女……（名前を、野江マコと名のりしましたが）、そして、私は遅くまで親しく語りあつたけれど、マコは何ら普通の女性と異なる様子も見えず、私の神経を益々

ちぐはぐな方向へと誘惑するばかりでした。ハマコの体に、実際あのような恐い秘密があるのだろうか？……馬鹿な！ そんな馬鹿な！……だが、それにしても、松前氏が嘘を

まことしやかに話した、とも思われない！ 考えれば考えるほど、判らなくなつて行くのです。

その挙句、翌日、早速に私は中学時代の同窓だつたT氏を訪ねて、医学的見地から今度の問題を説明してくれるようにと、内密に願つたのでした。現在は、一かどの開業医として、外科技術に手腕をふるつてゐるTは、最初、私の話を真にうけず笑つて聞いていたが、やがて徐々にその顔から笑いが失せ、彼の眼光が異様にけいけいと、輝いてきた様子に、返つて私の方が気味悪くなつてきたほどです。

「君、その話、案外、事実かも知れんぜ。遺伝学上から云つても、同じような例がレポートされているし、それに又……」

と、言いかけて、彼は書棚から分厚い金表紙の書物をぬきとり、せわしげにぺら／＼とめくつていたが、

「こゝを見てごらん」と、指示したのは、先天性畸型児に関する写真図版。

ドイツ語の解せぬ私には、その文章を訳すことは無理だつたけれど、それらの写真だけでも、不気味さだけは充分に味わえました。臀部が互いに癒着しあつたシヤム双生児、

頭が一個で胴が二体のもの、手足の指が二本ずつしかない女、一つ眼の男児、E・T・C……全く以つて、この世の地獄図絵そのものが、ずらりと並べられてあつたのです。

「然し、これらは皆、死産じやないのかい？ 現在、生きている者でも居るのかね？」

「いや、こゝにあるのは、すべて死んでしまつた者だが……」

と、彼は何かを思い起すようにして、

「そう／＼、あれは……もう二、三年も前だつたが僕の大学附属病院で、こんな事があつたのだ」

そこで彼が話したのは――。

数年前、或る一人の娘が眼球の疼痛をうつたえてき、診断した処、人骨のかけらしき物がレントゲンで透視され、直ちに手術を加えた結果、その眼球の奥から、齒の生えた上顎の一部が摘出された事実があつたと云う。

この事は、新聞紙上にまで、発表されたから、今更、説明するを要しないが、とも角、一卵性双生児の片方が、他の生れでた方……即ち、当の娘さんの体に二十年近くも寄生したような格好で、次第に大きくなつて、遂にあのような切開手術まで惹起させた、と報告されているのです。

それだから、「今度のような事も、或いは現実にあり得るかもしれないが……」と、彼は疑問符をつけて語つたのでした。



逆光線の中に彼女のシルエットが……

「松前さん、僕にはまだマコさんの事が、どうしても腑におちないのです。それで……」

「それで……貴方は、マコの素肌をその眼で確かめたい、と、おつしやるのでしよう。よろしい／＼では、ごらん頂きましょう。そうすりや、幾ら貴方だつて、この事実を信じて下さるでしようから……」

それは、松前氏と喫茶店で話しあつた翌々日――。私はもう矢も楯も堪らず、妻にも内証で、彼に電話をしてこの様に頼みこんだのです。すると、暫しの後、松前氏がさゝやきかけるように、

「前田さん、時間は丁度今夜の九時。そうです、私のアトリエまでおいで下さい。但し、これは、貴方の奥さんにも内密にねがいますよ。むろん、マコにもですよ」

と、低く言い放つてから、電話をきつたのでした。

へほう、彼女にまで秘密にせよか？

それは、明かに彼女には感づかれぬようにして、件の背中を覗き見よ、という、松前氏の言葉でした。

私はその時間の来るのを、どんなに心待ちに待つたことでしょう。

午後九時、かつきり――。

私は静かに約束のアトリエの裏側に辿りつき、偷盗の如く足音をこらし、忍びやかにその

窓辺に近寄ると、透明硝子に顔をおしつけて、中を覗きこみました。

松前氏と、彼女、マコ——。

キャンパス台を前にして松前氏が、何かマコに命じたようです。

と、彼女ははおつていたガウン風の物を、何のためらう様子もなくさらりと脱ぎすてました。逆光線の中に、彼女のシルエツトが、ギリシヤ女神のように映えて、私の官能をばいやがうえにも刺戟するのです。

私は胸の鼓動をおさえて、バセドウ氏患者の如き目を剣き、彼女の、秘密を探りました。

△お、あれだ／＼……まぎれもなく、あれこそ、彼女の体に寄生して成長した、もう一人の女性なのだ／＼

私は、尙もそこから目を放さず、漸く、猟奇の妖しさを味わうことが出来たのです。

△だが、何たる哀れな姉妹なのだろう／＼

ふつと、こんな風に考えると、俄かに私は自分の現在為している事が恥かしくなり、もう居ても立つても居られなくなつて、こそこそと其の場から逃げだしました。

△可哀想な女、マコよ／＼……どうか今後とも、その秘密を松前氏以外には、見せないでおく

れ。私はそれを願う。心から願うのだよ／＼

そう心で叫び、走り続けるうちに、私の眼のふちから、いつしか一すじ、二すじ……熱いものが、つ、つうーつと伝つておちたのでした。

△マコ／＼……美しきが故に、より一層、ものの哀れを感じさせる女、マコよ／

私は、貴方の幸せを永えに念じて止まぬ／＼

いやよ、女性の裸を覗いたりしちやア

それから、数日後——。

私宛に、一通の手紙が舞いこんできました。

差出人は、松前善作氏。

△ハテ？ 何用だろう？……／＼

不審に思いつゝも、直ぐに読んでみると、次のような意味の事が書かれてありました。

それによると——松前氏は、予ねて、マコ

との間に婚約を誓い、×月×日、午後五時より、自宅に於いて、形式的に式を挙げる事に決定。それで、まことに己勝手だが、是非とも私たち夫婦に媒酌の労をとつて貰いたく、若し都合悪ければ、私だけでもよいから来賀ねがいたい、との書面をよこしてきたのです、

暫し、私は啞然として、独身主義を旗幟として今日までやつてきた松前氏の心算の大変

化に、少からず疑惑と羨望と嫉妬さえ覚えませんでした。けれども、その反面、私は彼らの結婚に対して、大いに危懼の念を抱かざるを得ませんでした。何故なら、彼女があのような悲しむべき畸型体だったからなのです。

が、まあ、とにも角にも、私は松前氏の指示した当日に、彼の家に出かけました。実は、妻と一緒にきたかつたのですが、何しろ大層になりすぎますので……いや、本当は外にも理由があつたのです、

私がそこに着いた時、時刻は午後四時半。

顔を出したのは、当人の松前氏一人——

「ありがとう、よく来てくれましたね。……

ところで、あなたお一人、奥さんは？」

と、如何にも嬉しげな彼の顔を見て、

「家内は何だか邪魔なので置いてきましたよ

……。それより、松前さん……」

私は声を低めて訊きました。

「マコさんは？……」

「今、支度の真最中ですよ」

「お客さんは、他には？……」

「貴方達の外、誰一人も呼ばなかつたのです。私たちの結婚は、これでいゝのですよ」

少しのかげりも見えぬ彼の言葉でした。

それでも、私は心配なので、

彼女等は何故肉親を殺したか

！
小鹿あいつ

注目される一世の論告

想起すれば、昭和十一年十一月十三日の準備公判以来、肉親謀殺の重大事件として、世人の注目を喚起した日大生殺し事件の公判は、東京地方裁判所坂井裁判長係り、野村検事立会、太田金次郎弁護士等列席のもとに事実審理を終了、昭和十二年七月十九日、坂井裁判長は次の如くおこそかに、判決を云渡した。

判決

死刑（検事求刑死刑） 父 徳田 寛
無期懲役（求刑無期懲役）母 “ はま
懲役十年（求刑懲役八年）妹 “ 栄子
この判決に対して、寛は直ちに控訴しはまも賛成した。肉親によつて殺害された不良の子貢の妹である栄子（二三）は、どんな判決が下ろうと、別に気にしている様子もなく、ひたすら死んだ貢の冥福を祈り罪に服する心境に到達していた。



——日大生謀殺事件——

立会野村検事が、懲役八年を至当と求刑したのに、裁判長は懲役十年に処すと判決した。検事の求刑よりも、二年間も重いのである。求刑よりはいくぶん、軽く判決されるものと思われていたが二年も重かった。これは誰も予期しないことであつた。

が、栄子は微動だにしなかつた。静かに頭を垂れると、

「有難うございました」

と、受けた、彼女の心のなかには、すでに、控訴して、いくぶんでも軽い判決を受けよう

と云う考えは、みじんもなかつたであらう。彼女は検事求刑よりも重いこの判決に服罪して、下獄するつもりであつたらしい。そうし

た榮子の心情に対して、席を埋めた傍聴人たちは、同情の眼を見張り、中には貰い泣きする者もあつた。毎日二百五十枚づつ、発行される傍聴券が、開廷前に一枚もなくなり、いつ

も法廷はぎつしり詰り、満員つゞきであつたのも不良の子を持つ親や妹の心情に対し、世の人が注目した証左に他ならないであろう。

父や母が、大審判決を不服として、控訴の申立をした時、

「父や母がいくらかでも軽くなるようでした……」

と伊藤弁護士を通じて、控訴の手続きを取つたのであつた。

昭和十年十一月三日、

「暗闇で強盗と死闘、日大生刺殺さる」

と云う見出しの三面記事が、東京都下の新聞に掲載されていた。日頃強盗、殺人と血腥さい事件が頻発していた時だったので、

「またか——」

と、至極かんたんに片付けられていたのだが、後日端なくも、親と妹が相協力して、不良の子を殺害した事件と判明社会をアッと云わせた。阿部定の尾久旋風事件、二・二六事件と共に、昭和三大事件の一つとなつた問題の事件である。

「実の肉親を何故殺さねばならなかつたか」一世の名論告と云われた長谷川検事の論告内容について、これを伺うことにしよう。

殺人の裏面 犯罪の縮図

息詰るような、緊張した空気の中に、法衣官姿も厳めしく検事席に立上つたのは、長谷川検事（元最高裁判所検事）である。

嘗て、映画『女の行く道』のシナリオを執筆し、広く文名を知られている長谷川検事が、彼の、肉親謀殺の惨劇を敢てした所謂『日大

生殺し』の被告に対し、如何なる論告をなし、如何なる求刑をなすであらうか。世人の斉しく、注目して止まないところであつた。

前審の東京刑事地方裁判所に於ては、吉田裁判長係りで審理の結果、被害者貢の父徳田寛に死刑、母はまは無期懲役、妹栄子に懲役六年の判決が下つたが、三名はこの判決を不服として控訴の手続きを執つた。そこで、東京控訴院第三刑事部中野裁判長によつて控訴公判の幕は切つて落され、事実審理、証拠、証人調べと進捗し、いよいよきようの論告求刑となつたのである。

「論告は聊か、長時間に亘るから、被告人は腰掛けたまゝ、でよろしい」

長谷川検事は先ず優しい一言を以て被告を感激させる。寛、はま、栄子の三名は、慇懃に頭を下げて着席した。いよいよ論告開始だ。満廷を埋めた傍聴人一同は、長谷川検事の口元を見詰めて、身動き一つせず固唾をのんでゐる。

シーンとした法廷に物静かな、しかも、力強い長谷川検事の声が、人々の胸を叩きつ、響いて行く。

『……本件は世上「日大生殺し」と称し深夜、強盗殺人の訴へ出に捜査の端を発し、爾来数

十日に亙る捜査当局の苦心の結果に依つて以外にも其の強盗殺人の訴は全く、虚偽の訴であつて実は、被害者の肉親にして、保険金獲得の為、計画的殺人行為をなしたるものなることを発見するに至り、人をして啞然たらしめた、犯罪史上稀有なる非人間的、惨忍極る事件として、世人の耳目を聳動させたものがあります。被告の一人栄子は、其の手記に『世間の人達は私達の事を、どう考えているのでしょう、子殺しの鬼のような親、兄殺しの恐しい妹だと思つてゐるでしょうね、私は留置場に居る間にも、私の事を恐ろしい兄殺しの憎むべき妹と思つてゐる人に度々会いました』と言つて居ります。

被告達を鬼畜の如く考え、其の行為を羅刹の所業と目して、怖れ、憎む者が世間の大部分であります。洵に、無理からぬことであります。然しながら、本件は果して、しごく簡単に、被告等三人の行為を一樣に鬼畜の所業なりとして、片付け得るべき事件でありましたようか。

本件は之を深く掘下げて、其の底面に横わる諸々の原因的事象を掘り上げて、之を分析解剖して觀察するならば決して、簡単に一列に、被告等の刑事責任を評価し得べき事件で

ないことを知り得るのであります。

本件は恰かも、被告三人を各頂点とする不等辺三角形に均しく、其の頂点を異にする毎に、視角を異にし、本件の相貌も亦、自ら異つて、吾人の前に展開して来るのであります。

而かも此の事件は、一人の不良学生を被害者とする一殺人事件に過ぎないのであります。が、此の事件の内には利慾、愛慾、嫉妬、憎怨凡ゆる人間の感情と慾望とが複雑微妙に交錯し、織り込まれて居るのであります。さながら犯罪世界の縮図であると共に、人間生活の全面を描写、表現して居る一個のスチール・カットの感があります。

犯人鬼畜ならず 検事に一掬の涙

『……世人の観るが如く、単に、肉親の謀殺事件なるが故に、犯罪史上稀有なりと謂うにあらずして、犯罪世界の縮図であり、人間世界の横断面である意味に於てこそ、本件を犯罪史上稀有の事件と言ひ得ると惟うのであります。

同じく栄子の手記に、
……母さんは、我子想いのほんとうに良い母親です。決して、世間の良い母親と変つたところはない。

こうなつてしまつたことは決して、母のせいではないのです。私はほんとうに母が可哀想でなりません、どうか母だけは助けてやつて下さい。一年でも二年でも刑を軽くしてやつて下さい。

例え、私の刑がどんなに重くなりましてもよろしくございますから、どうぞ母さんだけは軽くしてやつて下さい……

と、子としての情懷を切々として訴えて居ります。

栄子とて決して、兄殺しの鬼ではないかも知れぬ、母の乳房を慕つて泣いた頑固な嬰兒であつた頃の栄子と同じく、今も、母を一心に慕い想う可憐なる娘であり、人の子であり、優しき一女性であるかも知れません。

母はもとて同じであらう、母のはまは其の手記に、

……栄子よ、苦勞をかけてすみませんね、みな母さんが悪かつたのです。これから、お前は、自分の事だけを考へていて呉れればよいのですよ。

母さんのことなどは心配しないでも大丈夫ですよ、いまにお上のお赦しが出たときには、お料理の先生のところへ行つてみっちりお習いなさい、お料理の先生になつて、この母を

喜ばして下さいよ栄子、母さんのことはくれぐれも、心配しないでい、のですよ……

と、娘に呼びかけて居ります。

別々の監房に離れ離れに置かれて居る母子が切々たる情感を手記に訴えて相呼び、相慕つて居る姿を見ると、此の母も此の子も世にある凡ての母や娘、親や子と何の相違があらう。

栄子は又、その手記の中に、

……兄さんは、私を恨んでいないでしようか。私は毎晩休む時に、兄さんのことを考えます、それなのに、一度も、兄さんの夢を見ないのです。

兄さんは、私の怖がるような夢を見せて呉れないのですものね……

と言つています。

栄子も又、優しき妹である。世の一般の女性と、そして人として、何の変りがあるうかと考えさせられます。果して、此の人達を非人間的、鬼畜とのみ呼ぶべきではありませんまい。

然らば此の母、此の娘、そして其の父が、何が故に本件の如き犯罪を敢行したか、そして、此の犯罪事件の外に居る年若き妹や弟にまで、背負い切れない悲しき運命を負わしめ

なければならぬ様なことにしてしまつたのであらうか。

その原因を探求して、被告人達の行為を正しく評価してこそ、量刑の標準が見出されるのであります。

常職は被告人三名を、世にある父、母子、夫、妻、妹と根本的に変りのあるものでないと信じ、そして、其の魂の傷手にも思い遣りの眼を投げかけながら、静かに、そして深く本件を観察してやるべきだと思います。

そうすることは決して、検事の職務線を踏み越えたものでないと、信じて居ることを前言して、これより、論告の本論に入ります』

妻と娘が殺した 父は無関係か

長谷川検事は、莊重な口調で、言葉を切ると、被告席に視線を落した。はま栄子は深く頭を垂れ、キチンと、両手を膝に置いてゐる。寛は、ぐいと頭を上げて、正面を見つめたきりである。

論告はいよいよ本論に入つて来るので傍聴席は一層緊張し、咳一つするものもない。長谷川検事は草案を手に、言葉を強める。

『……本件の公訴事実、当控訴公判の冒頭に陳述しましたところでありまして予審終結

決定と同一でありますから、茲に、その重複を避けて、極めて簡単に、要旨だけを犯行日時を除いて述べて置きます。

即ち、寛は、其の長男貢が素行極めてよろしからず、娘栄子の時計、衣類等を入質し、屢々外泊をつゞけ、遊蕩、放縱なる生活をなし、妹栄子に対し、金銭を強要し、衣類等を持出して入質し、咎めれば殴打するところから多額の保険を付し、貢を殺害して之を騙取せんと企てたる処妻はまも直ちに之に応じたので、茲に、二万六千円の保険が締結してあるに係らず、更に、四万円の保険に付し合計六万六千円を受取ることの出来るようにしたのであります。而して、

第一 寛は亜硫酸を購入して、はまに交付し、

(イ) はまは柳川鍋に混入して、貢にこれを食わせたが、亜硫酸は溶解せずして目的を達せず。

(ロ) はまは栄子に対し、謀殺の顛末を語り貢を殺害して、保険金を騙取すれば一家将来のためになることを力説、栄子は母の頻りなる懇請に黙し得ず、賛同し、亜硫酸をコロッケ一個に混入して之を食膳に供したが、兄貢が之を食しなかつたため、目的を達せず。

(ハ) 栄子は更に二回に亘り、亜硫酸を米

飯中に混じて、食せしめたるも、ついに、殺害の目的を達せず……。

第二 寛は、貢が暑中休暇にて樺太に帰省したる際、梅毒治療に藉口して、『ネオ・ピストラン』なる蒼鉛剤を静脈に注射して、殺害せんことを企て、看護婦に注射させたが、同看護婦が分量等に不審を抱き、薬局生に相談し、少量の注射をなしたる為、目的を達せず。

第三 はまは、寛が貢毒殺の遅延を責めたため出刃庖丁を以つて、貢を殺し、強盗の所為の如く装うべきことを申出て、寛の諒解を求め、帰京後栄子の協力を打合せ、貢が外出先から帰宅するや、訓戒を与うるが如く装つて機を見て出刃庖丁を取出し……更に栄子は手遊びを装つて手拭にて貢の両手首を緊縛し、はまは出刃庖丁にて其の頸部を刺し、

『お母さん、僕が悪いんだよ、許して』

と謝罪しつゝ逃げんとして倒るゝや追い縋つて斬付けたる後、はま、栄子兩名にて、その前頸部を突刺して殺害し、

第四 被告人三名は、受取人が故意に被保険者を死に致したるときは、保険金の支払いなき旨の約款あることを知りながら、右事実を秘し、保険金騙取を共謀し

(イ) 寛は栄子と共に第一生命保険相互会社

より三万一千円を騙取し、

(ロ) 兩名は、帝国生命保険会社より九千六百六十五円六十銭を騙取し、

(ハ) 寛は、明治生命保険会社より二万四千七百十二円七十銭を騙取したり……

と謂う殺人、同未遂及び詐欺の犯罪事実であります。

右の公訴事実に対し、被告人等が当公判廷に於て、如何なる弁解をなしているかと言うに、

はまは、此の公訴事実を全面的に認めて居ります、但し、保険金を詐取する目的で殺したのではないと供述して居ります、併し、保険金を詐取した事実については、結局認めて居るのであります。

保険放火の事実、依頼した訳ではなく、冗談で言つたのだと否認して居りますが之は公訴事実になつては居りません。

コロッケは自分が毒薬亜砒酸をなすつたのであつて、栄子はやらぬと申し、頭を出刃に刺した際、栄子が力を添えたことはありませぬ、自分一人でやつたのですと申して居ります。

栄子は同様、公訴事実を全部認めて居ります、コロッケには私が薬を付けたので、母で

ないと申し、出刃庖丁の上から私が押さえたか、どうか判らない。覚えていないと言つて居り、更に、保険金を取る気で殺したのではないと供述して居ります。

寛は、殺人も、保険金詐取も全部否認して居るのでありまして、放火にも全く無関係だつたと称して居ります。

左に其の否認の要旨を述べることにいたします——』

と、長谷川検事は、被告寛が否認している点を亜砒酸、蒼鉛剤の静脈注射、出刃庖丁と強盗の訴え出をした前後、六万六千円の保険詐欺の四項目に互つて陳述し、寛は、漸く低く面を垂れて、傾聴する。

妻のはまや、娘の栄子が、不良性の貢を殺害した事実を認めているのに、一人寛のみが何故、

(自分は無関係で、妻や娘が勝手に殺したのである)

と強く言い張つて居るのであろうか。

涙でつゞる栄子の日記

長谷川検事は更に語を強めて、

『……サテ、本件の公訴事実を認むべき証拠は如何と申しますと、はまと栄子は一切を悔

悟して卒直に、公判廷でも自白して居りますので証拠説明の必要はないと思います。

茲に、問題として取上げるのは、唯寛の犯罪の部分だけであります。

(と、寛が否認している犯罪事実に対し一々証拠を挙げて説明し、又はま、栄子の兩名に對しても)

貢を殺したのは、保険金のためではない』と保険金詐取の点を否認しているのを凡ゆる角度から論駁、被告席の三名を沈黙させてしまふ。そして、

『……被告人達の刑責の輕重を考慮するため先ず、本件犯罪の原因を考えて見ようと思ひます』と犯罪原因の検討に論及

(イ) 先ずはまの生立から其の性格を考えて行きます。はまはその手記に

『私が六七歳の時と思ひます、朝起きて見ると母が居りません、それつきり母が帰ります、父に抱かれ、抱かれて、姉と二人で泣き泣き暮しました』

とあります。はまの宿命的な、涙多き生涯は、此処に始まつています。

はまは、然も、貧しい生活の内に育つたのである。

寛と結婚してから後、私は妊娠月がかさな

るし、夫は試験がまたおちた……。二月五日の寒い朝石炭拾いに出かけましたところが、お腹がいたみ出し、その夜生れたのが貢です……

貢を眠らせてから豆ランプで二疊敷の部屋で、私は、勉強しました。斯くして産婆の試験は此の苦難の内に通つたのである。

又手記は言う。

栄子を妊娠しました、そして『ツワリ』で

一カ月も物を喰べることが出来ないで吐いてばかりいました。それでも夫は、私にお産の取上げに歩いて働かなければならぬようにさせていた……

試験に通つてからの主人は、台湾へ行くとか、満洲へ行くとか言い、どんな処ですかと訊けば、手前も行くつもりか、手前のような者はくたばれの、おきざりにするとか言いました……



Ran

はまは苦心して、自分は産婆の試験を取り、身を粉にして、幼き者や、夫のために働いて居る。入山炭坑時代には、妻の方が寛の収入より遙かに多かつた程であると寛も述べています。然るに、夫寛から酬いられたものは何であつたか。

くたばれの、置き去りにするぞとか、氷の如き言葉と酷薄な態度であつた。寛は大正七八年頃自分方に居た看護婦と通じ、はまは逆上して出て行くと騒ぎ出し、又昭和二年夏頃には平町の芸妓玉香なるものを、約二千元で落籍し、親戚或いは自宅に置き、はまは逆上して、自殺を計つたこともあつたのであります。

夫の斯の如き素行と冷酷なる性格は、はまをして益々本来の強い性格が夫寛と対立的なものにした。そして、男に対して、余りに純潔を求め、男性を厳しく批判すると言つた性格が醸成されていつたが、この性格が、本件犯罪と密接な関係を持つたのであります。

(ロ)次に寛の過去、性格について考えて見ます。

寛は、早くから医師たらんと志したるも、貧しくして学歴なく、正規の修学をなし得なかつた。或いは医家の書生となり、或いは薬

局生となつて転々、慘担たる苦心の内に数回医師試験を受けたるも落第しているが、之にくつせず、十有余年にして始めて、試験に合格した意志強固なものであつて、従つて、自我意識たらざるを得ない。

はまは予審に於て、述べている。

『夫寛は我儘で短気です、それに女癖も余り母い人ではありません、尙夫婦、子供に対する情愛の乏しい殊に、他の女でも出来ると私の方の親戚のみならず、子供に対しても眼中にないという振舞いをする人でした』

寛は妻はまの言うが如く、冷情的で、自我意識の強い男であつた。

そして、暴君的なところもあつた、之等の性格は妻はまとの対立をますに充分であつて、この性格が、本犯罪に大なる関係を有することは今更、説明の限りではありません。

(ハ)更に榮子と言うに、母の胎内にある中、既に父が母に対する冷たい態度の犠牲者であつた。

その手記に、

父は母に対して冷たかつた。母が妊娠して、近く生れ相なのにも拘らず、決して働くことを休めとは言わなかつたそうです……そして、幼い時から父の遊蕩と母の嫉妬と

の間に挟まれて苦しんで来た。

家庭の不和 父の愛慾史

私が三つのときから六つのときまで、父は、川崎で、病院を開業していましたが其の間に父は看護婦との間にイザコザを起しました。母も長い間、父に服従して辛抱して居りましたが大變立腹して、私を連れて家を出ようと致しました。

私が小学校六年頃、父はある芸妓を身請けしたことがありました。この女は家に来て母の妹のようにしていました。私は唯父と母とのことを小さな心に心配しながら、外に出たときは肩身のせまい思いを致して居りました。

母はある朝、私達子供の未だ眠っている時、お線香を立て、眠っている子供の顔を見て、『丈夫で育つように……』と、拝みながら物置に入り、首を吊つて、自殺しようとしたこともありました。

父が夜おそく帰ると、母は私に、父が帰つたら、

『どうして、そんなにおそいののか』と、そのわけを聞きなさいと言われ、私は嫌な思いでよくお父さんが帰つて来ると、涙ながらに、

父に尋ねた。父と母は毎日不愉快な顔ばかりしていましたが、お客が来ると直るの、私は始終誰かお客が来て呉れるとよいがとばかり思っていました。

斯く、幼い者に苦勞をかけ幼い魂をイデけさせ、悩ませた父の罪は甚だ軽くないが、又母が、自分の嫉妬のために娘を犠牲にしたことは、その責を反省すべきである。

栄子は早くから父母の許を離れた。永く父母の下に平和な家庭に育つた子供と違つて淋しく、然も、強い性格に傾いて行くのをどうすることも出来なかつたのであるが、止むを得なかつたのである。寛は予審に於て、

栄子は、真面目で、正直で、温和しい物堅い女です。

と言つてゐる。そして栄子が、世の男性を如何に見たか、その手記に、私の理想の人というのは男らしい人、どつしりと落付いていて、細かい事にこせこせしない人です、本当に男らしい人とは、弱い者に対して親切である筈です。この様な人が、この世の中には必ず一人、居るように思います。

男性に対し、余りに多くの純潔と完全を求める理想主義の点は、母と相似ている、此の性格は父に反感を持ち、兄に反感を抱き、

実の男性に反感を持たざるを得ないであろう。

高い観点から男性を鋭く批判する点は、はまたと全く相通じた性格の特徴であり、之は決して悪い性格ではないが、併し、本件の犯罪は此の特徴ある性格が一脈の關係を有つて来ていることは争われない事実であります。

(二)次に被害者の貢はどうであつたが両親の受験時代に生れ、両親の苦闘の間に生立ち田村中学を一学年やり、平町の磐城中学に転校したが、同校には炭坑地帯の者が入学して居り、生徒の中には素質の良くないものもあつた。貢は成績悪く、三年より寄宿舎に入つたが落第し其の後樺太の真岡中学校に転校した。

それから日本大学の歯科に入学したのであるが、少年時代から成績芳しからず素行も又よろしくなかつたのである。

栄子同様、父母の下に居ることが少なかつた、生来の素質と相俟つて、彼の性格は追いつく我儘になり、遊蕩性に富み放縱になつて行つた。

その性格は父寛の性格と相似ている、この点が、本件に深い關係を有するのである」

血涙の論告 検事の求刑

寛、はま、栄子及び惨殺された貢の性格を遺憾なく解剖した長谷川検事は、更に、はまと栄子の性格の似ている宿命感と殺した父寛と殺された息子貢の性格の相似性を陳述し、女性と男性の相剋について、論告はますます熱を帯びて来る。

『……ここで当然、生れ来るものに、はまと栄子の相似性と、寛と貢の相似性対立である。即ち、はまと栄子と連結する一つの線、寛と貢とを連結する一つの線とは何時の日には、相会うことを得ざる悲しき二つの平行線であることを看取せざるを得ない、この二つの線の対立こそ、社会の幾多の場面に広く言へば女性と男性との相剋摩擦の悲劇を惹起するのではあるまいか。』

はまは寛に対して、品行の良い夫であることを要求している。

栄子は貢に、同様の要求をすることである。而して又、寛は妻はまに対し、もつと母らしく、優しく、従順なる妻であることを要求するであろう。

若し貢が今日生きていて、栄子の如く手記

を認めたとしたら、

『栄子よ、もつと女らしく、優しく、従順なれ……』

と要求したのであろう。

ここに犯罪の遠い原因があり、ここに犯罪の動機が胚胎するのであります。

寛が本件を計画する頃には医業振わず、放縦性に災されて落付かず、新らしき事業等を目論みて焦慮し、一方貢の不良性は自分と類似するものを見出して不快な圧迫と嫌悪を感じるに至つた。

その上強い寛の物慾は動いて、冷酷にも子供等に愛情を欠き、彼は此処に保険殺人を計画するに至つたのであるが、けだし、必然的な過程であらう。

そして、情婦をその家に引入れて、寛に相応しい享樂に耽つているところへ、妻はまの闖入があり、ここに両者の感情は激動し、憤怒、苦悶、焦燥の醜き心意の混乱を招来し、遂に、はまを駆つて、出刃庖丁に因る殺人を執行せしめたのである。

即ち、情婦と享樂する夫を発見したはまは極度のヒステリーに陥り、夫より、『まだやらぬのか、口ばかりでヘラヘラして居る』

と言われ、やりますと言ひ出すのは当然の事でありましょう。

殊に、夫は満洲へ行くと言ひし、情婦と共に逃げられそうである。棄てられてはならぬと思つて、たゞ／＼夫の意を迎へる余念なきはまが、ここに至つたのは必然である。

栄子は、母に極度の同情と尊敬を持つて居た、特に男性の暴君的な点に反感を持つて居る。母より嘆願されれば拒みながらも之に従わざるを得ないのは当然のことであらう。

斯くして三人は、犯罪を敢行した。そして、その後も、此の相剋はつゞいて居る。当公判廷を見るに、父は頑強に否認するのみならず、恰かも、はまには他に力を藉りる男でもあるかの如き事を言ひ、はまから自分まで殺されるのではないかと思つたとさえ言つてゐる。

はまは夫の否認に拘らず、夫との謀議を自白し、犯行一切を公然と供述したではないか。

此の父と母との相剋の裡にあつて、栄子は幼い折からの悩みを又、つゞけている。而も母に同情して居る栄子は、母の正しき主張と供述に味方して居る。そして、母と同じく悔悟し、母と共に父の悔悟を念願している。

この夫と妻との対立、子の悩み、相剋摩擦

之は大なり、小なり、多くの家庭に見らるゝであり、多くの悲劇を随所に生んで居る。

男性と女性との相剋、それは人類に投げられてゐる一つの謎であり、悩みである。この悩みを知つて、三人おの／＼の立場から見てもやらなければならぬ。

以上述べた犯罪原因を基として、次に本件の犯情を考えて見ましょう』

長谷川検事の論告はいよ／＼情狀論に入つて来る。

先ず、非難すべき犯情として本件に保険金詐取の目的で放火が企図されたこと事件が保険殺人であること、而も、殺害行為が反覆されてゐること等を挙げて、

『本件は実に戦慄すべき犯罪であり、非人間的なものとして非難されても止むを得ない行為であらう』

と痛論し、被告席の三人の心胆を寒からしめる。

『以上は非難すべき方面からこれを觀察したのでありますが、その間多少とも同情すべき見方がないでもありません。即ち、他の子女の将来を思い、貢の不良性に悩んだ結果、本件を犯したという点、或いは又、本件の殺人行為が執拗に反覆されたということは、肉親

が肉親を殺すという切なさ、臆病さが殺害行為を反覆せしめたとも見られる。

はまは夫から使喚されている。嫉妬のために他の子女のために、不良児を除いた、然し残酷なる殺害行為の主たる実行者であるという点で犯情は重いものであります。

栄子は、母への同情と貢の不良のためここに至つたもので、同情すべき点がある。殊に、全く改心している点等を考慮して……』

と栄子に対しては一掬の同情の涙を注ぎ、『寛の犯情は尤も憎むべきものであつて懲罰の必要があります』

と力強く言葉を切る。

餞の言葉 合掌の道

いよ／＼結論である。検事が如何なる求刑をするであろうかと、傍聴人一同固唾をのんで緊張する。

寛はもとより、はまも栄子も面を上げて検事席を仰いだ。

満廷を見渡した長谷川検事は徐ろに胸を張つて、語調を改めた。

『……以上の犯情を各方面から観察し、且つ検事局は一般警戒の見地より、本件の影響を重視して原審判決通り、

被告寛を死刑

被告はまを無期懲役

被告栄子を懲役六年

に処する事を求めるものであります』

法廷がざわめく。はまが再び、声をたて、

泣き出した、今まで正面を見詰めたまゝ、だつ

た寛が、ガックリと首を折つてうつ向いた。

法廷の動揺がしずまるのを待つて、長谷川

検事は更に、

『……以上を以て当職の論告を終るのでありますが、これを終るに望んで被告三名に特に告げたい――。』

栄子は当公判廷に於て、今の心境はと裁判長に問われました時、

『嬉しきにつけ、悲しきにつけ唯合掌の気持ちです』

と答えました。イミジクも言いつるものかなの感があります。

この罫一、合掌の道は感謝と報恩の心境に他ならぬ、子は父に感謝報恩し、妻は夫に感謝報恩し、弟妹は兄姉に感謝報恩し、父は子に夫は妻に兄は妹に感謝報恩し行くところに、尤も聖く、美しい、人生の姿があるのではないだろうか、ここにこそ、夫の行く道があり妻の、行く道、弟妹の行く道があるのである。

若し、被告ら三名がこの道を早く見出して

歩んでいて呉れたらこの一家壊滅の悲劇は生れなかつたであろう。被告らの科刑は如何なる刑に定まるか判らぬ、さりながら其の形が如何に定ろうとも地上の禍福栄辱、死生を絶し、唯この慈光滴る久遠の大生命へ向つて慎しき合掌の歩みをつゞけて貰いたい、被告栄子が答えた言葉『合掌の気持ち』この言葉を今被告三名に送りたいそして今は御仏の御手に抱かれていようであろう貢の霊にも送りたい、そして仏門に入ろうとしている薄幸な栄子の弟にも、又淋しく母や栄子を待つてゐる妹にもこの言葉を送りたい。

嬉しきにつけ、悲しきにつけ、唯合掌の気持ちでいて呉れよ……

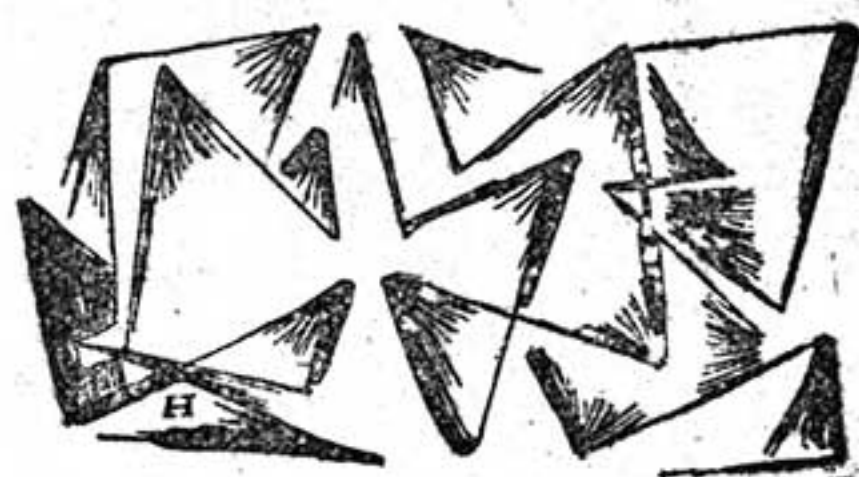
とこれが本事件の控訴公判に立合つた検事からの被告達に送る餞の言葉である。之を以て、本件の論告を終わります』

――長谷川検事は静かに着席した、人々はじつとりと濡れた臉を拭きながら裁判長の厳かな閉廷の宣告を聞いて、夢から覚めたように起立した。

本誌独占・公判秘録

「裏窓夫人」殺人事件

こゝに寸分の装飾もない或る「姦通殺人」の記録がある——。好奇心に悶える思春期青年と、夫に不満を持つ爛熟期の人妻が、一枚の春画をきっかけに繰り出した妖しい情痴模様の果ての破局。戦後の特異な性的犯罪の一つだが、死を賭した不倫快楽の最新モデル・ケースとして、その微妙なデータを余すところなく提出して、その批判は読者に委ねる。



1、二十青年と三十人妻

【A市警察署警ら係D巡査部長の報告書】

昭和二十七年三月——日午後九時三十分ごろ、A県立A病院の看護婦某から「いま若い男が来て、青酸カリを飲んだと手当を受けに来た。連れの女もB公園で苦悶しているといっている」との電話があり、直ちに同公園に急行したところ、園内中央の記念塔附近の芝生に、一人の女がうつ伏せに倒れているのを発見。A病院へ収容手当を加えたが、まもなく絶命した。男は別に異常を認めず、取調べた結果、

A市C町二丁目 大工 吉次郎次男

同職 稲垣邦二 当二十一才

と、死亡した女は、

A市C町四丁目 会社員 勇蔵妻

無職 岡崎美奈江 当三十七才

で、両名は同日午後九時ごろ、B公園にて青酸カリを服用したものと認められる。なお現場から、

①万年筆一本 ②ワラ半紙二枚

③ヨーカン二箇 ④お好み焼一箇

を発見、押収した。

【A大学医学部教授E博士の死体解剖鑑定書】

岡崎美奈江の死体について次の如く鑑定する。

①死因は青酸中毒である。②外傷はない。(下略)

【A市B町九番地、菓子販賣業Fの上申書】

昭和二十七年三月——日午後九時ごろ、かねて顔見知りの近所の稲垣さんが訪れて、

①ヨーカン二箇 四十円

②お好み焼二箇 三十円

を買われました。お好み焼を焼くとき稲垣さんは「きようは、ちよつとシヨウガをたくさん入れてくれ」と注文しましたので、私はいつもより少し多い目にシヨウガを入れ、焼いてあげました。

【A市G町七番地、工員Hの供述書】

事件の前日午前十時半ごろでした。私の勤め先の工場へ友人の稲垣君が来て「ノミに焼きを入れたいから、青酸カリを少しくれんか」といきました。むろん稲垣君は大工ですし、自分で焼きをいれるというので、私は焼き入れの方法も教えて、豆粒大の青酸カリを渡し「おかしいことに使うなよ」と念を押したら、稲垣君は「まだオレも年は若いし、命も惜しいよ」と笑ったので安心しました。

【A市警察署捜査係J巡査部長の捜査報告】

稲垣邦二は二月——日夜B公園内で、かねて情交関係があつた岡崎美奈江から心中を迫られ、青酸カリをお好み焼の中に入れて一しよに食べ死ぬ約束であつたが、自分は命が惜しくなり、美奈江には食べるように装つて食べず、生き残つたとの申立をした。自殺関与罪として身柄拘束、取調べ中だったが、被疑者の供述に矛盾の点があり、また自分が食べずに棄てたというお好み焼をA大学で鑑定の結果、その中には全く青酸カリが認められなかつたので、極力追及したところ、美奈江にだけ青酸カリ入りのお好み焼を与え、自分は青酸カリの全然入っていないお好み焼を手にし

美奈江を殺害したと自供した。

以上がこの事件の本筋である。二十一才の青年と三十七才の人の妻の邪恋の果て、それは「合意の心中」未遂なのか？ 単なる「自殺ほう助」か？ あるいは、全く最初からの「謀殺」なのか？——当局の詳細な捜査の結果、事件の十日後、A地方検察庁はつぎのような結論に達して、稲垣邦二をA地方裁判所に起訴した。

2、もう一人の三十未亡人

【A地方検察庁K検事の起訴状】

（公訴事実）被告人稲垣邦二は昭和二十三年九月ごろ、岡崎美奈江と知り合い、そのころから情交関係を結び今日に至つたものであるが、昭和二十六年九月ごろ、同女の知人である、北川はるみ（当三十才）と知合い、同女とも交際するに至つた。ところがこれを知つた美奈江は、被告人に対して再三にわたり、はるみとの交際を絶つてくれと迫つたが、被告人はそれに応ぜずなおも交際を続けていたので、さらに嫉妬を燃やした美奈江は、本年（昭和二十七年）二月ごろ被告人にM公園で「貴方のはるみさんとの交際を止めてくれなければ、貴方を恨み殺して、自分も一しよに死ぬ」と脅した。

そこで被告人は同女の恐ろしさを感じ、もし同女をこのまゝ放つておけば、自分の生命は危く、いつそのこと先に同女を殺害するにこしたことはない」と決意。これを実行するため三月——日、友人である工員Hから青酸カリを入手し、一たん自宅に帰つてか

ら美奈江方におもむき、紅茶の中に投入して殺害しようとはかったが、来客などがあつたため果さなかつた。

翌日ひるごろ、被告人は同女と逢つたさい「今夜B町の某パチンコ店へ遊びに来るように」と誘われたので、それを機会に再度実行しようと思ひ、同夜七時ごろ同パチンコ店で同女と逢ひ「B公園へ遊びに行こう」と言葉たくみにいつて、同八時ごろ同公園へ連れ出した。たまたま同所で同女が空腹を訴えたので、「お好み焼を買つて来るから、一しよに食べよう」とそこに待たしておいて、F菓子店から買い求め、園内記念塔附近に連れて行つた。同所でお好み焼を食べようとするさい、被告人は同女に察知されないようにして、かねて用意の前記青酸カリ全部を、お好み焼の一箇に投入して与え、同女をしてその全量を食用せしめ、もつて青酸中毒により、間もなく同女を毒殺したものである。

(罪名) 殺人——刑法第一九九条

この公訴にもとずき、被告稲垣邦二に対する殺人事件の第一回公判は、同年三月一日、A地方裁判所でL裁判長係り、K検事、M弁護士出廷のもとに開かれた。

【被告稲垣邦二の第一回陳述】

公訴事実のうち、北川はるみさんと関係したことはなく、また本年二月N公園を美奈江と散歩したことはないし、したがつて、美奈江から「貴方が北川はるみさんとの関係を絶たなければ、貴方を恨み殺してうんぬん——」といわれたこともありません。貴方むろん美奈江を殺そうと決心したことはありません。友人であ

るHから青酸カリを手に入れ、その日美奈江の家へ行つたのは、これはかねてから美奈江に「青酸カリが手に入つたら持つて来てくれるように」と頼まれていたからです。美奈江の家で紅茶を出してくれましたが、そのとき「一しよに死んでくれ」ということはいわれませんでした。

その翌日の夜、一しよにB公園へ行き、お好み焼に青酸カリを入れるときは、私も一しよに死ぬつもりでいましたし、美奈江も私が青酸カリを入れるところは見て知っていました。二箇のお好み焼に青酸カリを半分に分けて入れ、そのうち一箇を美奈江に渡したところそれを食べ、私も食べようと口に入れましたが、吐き出してしまいました。——以上のように、私は美奈江を殺すつもりで食べさせたのではなく、そのほかの事実、間違ひありません。(M弁護士も被告人と同様の意見を述べる)

【A縣O郡P村、農業北川はるみの供述書】

岡崎美奈江さんは、ご主人の勇蔵さんと一しよになる前、私の村へ嫁に来ていました。当時美奈江さん夫婦の間には、男の子まであつたのに、勇蔵さんと知り合つて良い仲になり、とうとう先夫も子供もそのままにして、勇蔵さんと一しよになつたのです。

以前から私は美奈江さんとは親しい間柄でしたので、その後A市の美奈江さんからしきりに「遊びに来い」といわれ、ちよいちよい美奈江さん方へ遊びに行つていました。稲垣邦二さんと知り合つたのは昨年(昭和二十六年)九月ごろだつたと思います。が、稲垣さんは岡崎さんのところへ、ほとんど毎日のように来ているとのことでした。

それいらい稲垣さんから私のもとへ「岡崎さんのところはご主人が留守がちで奥さんが淋しがっているし、いろ／＼話もあるからぜひ遊びに来てほしい」との手紙が、再三来るようになりました。しかし私は、主人は病死して子供も三人かゝえ、やつと女手一つの百姓仕事で細々暮していますので、稲垣さんが親切な手紙を下さつても、A市へはそうしよつ中出かけられません。でも、三、四回は岡崎さん方を訪れて、その度にといいわけではありませんが、美奈江さんと三人で映画を見に行つたこともあります。——本年二月の中ごろだつたと思いますが、岡崎さん方を訪れたとき、稲垣さんに映画を誘われ、そのときは、二人で出かけました。

しかし、稲垣さんのおつき合ひは、そのほかでは手紙のやりとりだけで、情交関係までの親しい交際はしておりません。私の気持として、稲垣さんには「永久に親しいお友達として、つき合つてほしい」とは申上げたのであります。別に稲垣さんからも、情交関係を迫られたことはありません。本当に、現在までは美しい交際でありました。——もつとも、私が稲垣さんと二人で映画に行つたとき、あとで美奈江さんから「ちかごろの若い男は、年増女を好むそうだから、稲垣さんと一しよに出かけるのはいいがその点は気をつけるようにと、うちの主人もいつている」と注意して下さつたこともありました。

稲垣さんと美奈江さんとの間があんな深い関係だつたとは、今度の事件で初めて知つたことで、今日までそんなこととは夢にも思いませんでした。——ともかく、美奈江さんは私の村へお嫁に来ていたころ、主人があるのに他の若い男と村内でかれこれウワ

サのあつた人でした。しかし今日では、四人も子供のある夫婦の仲であり、そんなことなど本当とは信じられませんでした。

3、春画とワイ談の論理

一人の二十青年を共通対象とする友人同士の、二人の三十女——表面的には「永久にお友達としてつき合いたい」未亡人と「ちかごろの若い男は年増女を……と、うちの主人もいつている」と内心のシツトを当てつける人妻。ではこのへんで三人のこれまでのイキサツを、当の稲垣自身の口から、語らせてみよう。

【L裁判長あて稲垣邦二の上申書】

——私がちやうど十七才のときで、昭和二十三年の夏ごろのことだつたと思います。私たちC町の青年が建てた集会所が、ちやうど岡崎さんの家の裏の空地にありまして、私たちは一日の仕事の疲れをなおす憩いの場所としてその集会所を使っていました。娯楽用としましては、ピンポンや碁、将棋のていどでしたが、そうして毎日のようにそこで遊んでおりますうちに、すぐそばなもので美奈江さんがちよい／＼出て来るようになります、私に「私の家へ遊びにいらつしやい」としきりにいわれますので、つい美奈江さんの家へ遊びに行くようになったのです。

ところが、誘われたのは私だけかと思つたら、近所の青年も二人寄つて、レコードをきいたり雑談をしたりして、おもしろく遊んでいましたので、私もみなさんと一しよに愉快に過すようになったのです。そうしているうちに、美奈江さんが、私に対して

非常に親切にして下さいますので、私も好意を感じて、「小母さん／＼」といつて慕うようになりました。

忘れもしません、ちょうどその年の十月一日で、私の仕事休みでありましたので、いつものように、美奈江さん方へ行きました。ジャズのレコードをきいて楽しく遊んでおりますうちに、ラデオが正午の時報を知らせましたので、うちへ食事に帰ろうとしますと、美奈江さんが急に私の手を握って、「いま中華ソバを作っているから、うちで食べなさい」といきました。私は恥かしかったので断りましたが、ぜひ食べるようにといつて私を奥の間へ連れて行き、すぐにソバを持って来てくれましたので、私はそれをごちそうになりました。

食事が終つて、またレコードをかけていますと、美奈江さんが私のそばへ来て、「いゝ本を見せてあげよう」といつて、手渡ししてくれました。ところがそれは、男女関係の春画でありましたので（注、この春画は証拠品としてA地裁へ提出）私はびっくりして美奈江さんの顔を見ますと、美奈江さんは「女というものを知らなければ男ではない。戦争前の話だが、年をとつたある婦人が知人の息子が兵隊に行くとき、女を知らなければ一人前の男ではない、女を知ることが男には一ばん大切なことであるといつて、その婦人が手をとつて教えた」というようなことを説明してくれまして、とつぜん私のからだを力いっぱい抱きしめ、キッスをして「稲垣さんにも、私が男女のことを教えてあげる」といいながら、私の顔に座布団をかけました。私はすこし抵抗しましたがそのままに陥つてしまいました。（注、法廷での陳述によればこのとき初めて童貞を破つた）

そのとき美奈江さんのいうことには、「実は主人が兵隊で戦傷を受け、非常にからだが弱いので、これからも私のいうことをきいてほしい」と頼みますので、私もつい返事をしてしまつたのです。

そういうことで、美奈江さんとの関係が成立してしまいました。が、私の幼な友達であるQ君というのが私たちのことを感ずいてしまいました。そしてQ君は、「稲垣君を返せ」といつて、何度も美奈江さんと口論するようになりましたが、美奈江さんは「絶対にそんなことはない」と、うまくあしらつていました。私は、美奈江さんをそんな関係は別としても、親切な小母さんとして慕つておりましたので、相変らず遊びに行つていましたが、Q君の態度が強くなつて来ましたので、私は美奈江さんに、「Q君がすごく怒っているから、当分の間Q君と一しよに遊ぶから」と申しましたら、美奈江さんは非常に怒つて「Qさんと遊ぶんだつたら小母さんはもう貴方とはお話もしないから」と止めました。しかしQ君が感ずいては、なにしろ世間がうるさいからということである。当分私はQ君と遊ぶようになつたのです。

そういうわけで、私たちの関係は一時断たれておりましたが、昨年（昭和二十六年）の夏の中ごろであつたと思います。夕方美奈江さんの子供が来て、私に「お母さんが用があるから来てくれ」とのことでしたが、私は仕事のつごうがわるくて行けません。来たところ、ところが翌晩もまた子供が来て、「用事があるからぜひ来てくれ」とのことでありましたから、行つてみますと、美奈江さんは「貴方に少しきゝたいことがあるから、ちよつと待つていてくれ」といつて子供たちを早く寝かしつけ、私にいうのに「私

は今まで貴方の方からまた来てくれることを信じて待つていたのに、なぜ来てくれなかつた？」と、子供の様子をうかがいながら「私が嫌になつたのか」とききますので、私は「そんなことは絶対にない」と申しましたら、美奈江さんは「そんなら今晚は、ぜひ私と寝てくれ」と申しまして、今後とも自分のいうことをきいてくれるように頼みますので、私もまたつい返事をしてしまつたのです。

そういうふうにな二度目の関係が成り立ちましたが、そのときご主人が見えなかつたので、美奈江さんにきいてみますと、「主人は事業に失敗して生活に困るので、一時倉庫会社の守衛として勤務している。昼勤務と夜勤務と一週間交代だから、夜勤のときは貴方のところへ子供を使いによつて知らせるから、毎夜私のところへ来るように。昼間勤務のときも、スキがあつたらうまく連絡するから、ぜひ私のもとへ来るように」と細かく私に知らせてくれました。それからというものは、私がちよつと時間が遅れるとすぐ子供が呼びに来ますので、一日も欠かさず、美奈江さんのところへ遊びに行つておりました。五、六月ごろから、私たちのことが近所で評判になりだしましたが、美奈江さんも私も苦にせずそのまゝ押切つて愛しつづけていたのであります。

八月か九月ごろのことでしたが、〇郡F村の北川はるみさんという人が美奈江さん方へ遊びに来られたとき、私も美奈江さんのところへ雑誌を借りに行つていたので、そこで知り合いになつたのです。ところで、それをきっかけに美奈江さんは、私に「ぜひはるみさんと文通をするように」とすすめますので、わけをきいてみますと、「私と貴方との関係を主人に感ずかれないようにす

るためだ」といふ、「はるみさんが貴方に会いに来るようにみせかけて、私もそういうように主人や子供にいつておけば、私たちの仲はまず安全だ」というようなことを説明したので、私もはるみさんと文通することが、必要になつてしまつたのであります。

十月二十日の夜でしたが、ご主人が用事があつて留守のため、子供が呼びに来ました。子供がみな寝ついてしまい、私も用がすんで帰ろうとしましたときに、美奈江さんは自分の髪の毛を切つて、「私が本当に好きだつたら、これを肌身はなさず持つていてくれ」と申して私にくれました。それを私は今まで後生大事にと持つていたのであります。（注、この髪の毛も証拠品としてA地裁へ提出）

ところが今年（昭和二十七年）になつて、ご主人が勤めを辞められましたので、美奈江さんも今までのように関係が出来なくなつたため、内心悲観して「世の中が嫌になつた」といつて、私にハツ当りするようになってきたのです。

二月ごろ、美奈江さん宅へはるみさんが遊びに来られたさい、美奈江さんはカゼを引いている上、主人の手前もあつて、私に、「はるみさんを映画に連れて行つてやつてくれ」と申しますので私もご主人の手前、美奈江さんをわざと誘わず、はるみさんと出かけました。ご主人も昼から競馬へ行かれ、美奈江さんは一人で私の帰るのを待つているのだと思うと、早く帰つてやらねば可哀想だと考えて、映画を見終ると、すぐはるみさんを駅まで送つてその足で美奈江さんのところへ戻りました。ところが美奈江さんは、「自分が一しよに行けなかつたことが、非常に残念でならな

い」と申し「きようはさぞ楽しかったことだろうが、これを機会に、はるみさんとの交際を絶つてくれ」といゝまして、なにかにつげ八ツ当りますので、私は「絶対にはるみさんとは妙なことはない。もしそうなら、きようだつて、こんなに早く帰つては来ない。それは小母さんの誤解だ」と説明してやりましたら、「それが本当なら嬉しいけど」と、納得したようでありましたが、それいらい何か深く考えこむようでした。

それから四、五日して、美奈江さんは、「なんだか貴方が私から離れて行くような気がしてならない」といつて、私にヒステリックな態度で「どうしてもはるみさんとのことが信じられないから、交際を絶たなければ、私と一しよに死んでくれ」とさえないうようになつてきたのです。私は、はるみさんとは二、三度逢つただけで、文通も三、四度。それもみんな美奈江さんの入智恵でやつていたことで、美奈江さんもよく承知していることです。そして私としましては、美奈江さんが好きなればこそ、美奈江さんに納得してもらうよう努力してきましたが、一途に思いこんだ美奈江さんは、なか／＼信じてくれなかつたのです。

三月——日の夜、美奈江さんと逢いましたら、美奈江さんはR川の土手へ私を連れて行き、すこし興奮した顔つきで、「今まで私は貴方のことで悩んだとき、パチンコや何かでまぎらわして来たけれど、もう本当にいやになつた。私を本当に好きだという証拠に、一しよに死んでくれ。もしそれが嫌なら、私は貴方を殺して自分も死ぬ。私は貴方を誰にも渡したくない。私のこの苦しい気持ちを察して、頼むから死んでくれ」といつて、涙声を出して必死にすがりますので、私は美奈江さんが可哀想になり、また今ま

での罪の清算をするためと思い、一しよに死ぬ約束をしたのであります。

そして「青酸カリを手に入れるよう」美奈江さんが頼みますので、「手に入るかどうかは判らないが、一度当つてみる」と答えて家に帰ろうとしましたら、途中でQ君に逢いました。Q君に「青酸カリのことを頼みましたら「なに、使うのだ？」ときゝますので、「美奈江さんの弟さんが写真の焼付に使うんで、頼まれたのだ」といゝました。そして「そんな危いものはダメだ」と断られました。私の態度がいつもと変つていたためか、Q君は私に「本当のことをいつてみるよ」といゝましたので、すこしためらいながら「岡崎さんの小母さんが……」というところ、「心中か？」と申しました。私は「するかも知れん」といつて、その夜は別れました。

4、妻の不貞を信じない夫

夫の目をゴマかすために、頭をしぼつて仕組んだトリックが意外な自縄自縛になろうとしている。カモフラージュ役の友人が、いつのまにか筋書にもなかつた役割を演じようとし、主役であるべきはずの自分の地位を脅やかそうとしている——疑心暗鬼のドス黒い猜疑と嫉妬の焰が、ぶす／＼といふり出して、いても立つてもおれなくなつた女は、「絶交してくれ」の哀訴が「貴方を殺して自分も死ぬ」の脅迫となり、三転して、「一しよに死んでくれ」の懇願。定石通りのコースをたどつて、男に肉迫して行つた。

さて、これはどまで急ピツチに進展した。二人の仲に対して

女の夫はいったいどうであつたろうか？　こゝでちよつと、彼の立場をその証言などからきいてみよう――。

【公判廷における岡崎勇蔵さんの証言】

裁判長Ⅱ証人（岡崎さん）はどういうことから美奈江と結婚するようになったのか？

証人Ⅱ私が戦傷で当市の陸軍病院に入院中、美奈江が慰問に来てくれて知り合いました。退院後も駅で乗り降りのとき、よく顔が会い親しくなりました。お互いに身の上のことなど話し合っているうち、あれが病気で嫁入り先から実家へ帰つて来ており、継母に育てられて来たことなどを知り、一しよに映画を見に行つたりしているうち、私も美奈江の身の上に同情して、一しよになるようになりました。

裁Ⅱ美奈江は嫁入り先に対して、何か不満でもあつたようなことをいつていたか？

証Ⅱ美奈江は町で育つたため田舎の生活は向かず、それに継母のためにその結婚を無理強いされたといつていました。

裁Ⅱ証人と美奈江との間の夫婦関係はどうであつたか？

証Ⅱ十二分に行つていました。

裁Ⅱ証人が身体が弱かつたため、美奈江に満足を与えられなかつたというようなことはなかつたか？

証Ⅱ私としましては、そんなことはなかつたと思います。

裁Ⅱ美奈江は若い者に親切であつたのか？

証Ⅱそうです。

裁Ⅱなにか美奈江に性的魅力があつたのではないか？

証Ⅱ私は、そんな魅力があるとは思われませんが、美奈江は若い者の面倒をみるといゝますか、人に対する親切心から好かれるようになったと思います。

裁Ⅱ証人は、稲垣と美奈江との関係について疑つてみたことはなかつたか？

証Ⅱ絶対そんなことはなかつたと信じています。

裁Ⅱ美奈江が死ぬ前に、変つた態度とか物思いにふけていたようなことはなかつたか？

証Ⅱ全然そんなことはありません。淋しいような態度は少しも見られませんでした。

裁Ⅱ美奈江が死んでから家の中を調べて遺書のようなものはなかつたか？

証Ⅱ見当りませんでした。

裁Ⅱ子供は可愛がつていたか？

証Ⅱ可愛がつていました。一ばん下の子供なんか、私の留守のとき自分の身体から離れたことはありませんでした。

裁Ⅱ可愛い子供を残して死んでしまうなど、ちよつと考えられんがどうか？

証Ⅱそうなんです。

裁Ⅱ証人が失職したため、美奈江は少し厭世的な気持になつていたのではないか？

証Ⅱ美奈江は、あればあるだけ使い、なければないで何所からか都合してくるといつた性質の女でしたから、そのようなことはなかつたと思います。

裁Ⅱ現在でも証人は、稲垣と美奈江との肉体関係があつたこと

は信じていないか？

証し信じていませぬ。

知らぬは亭主ばかりなり——のモデルのような岡崎さんの一面を、もう少しつゝこんでみると、こんなエピソードもある。

【岡崎勇藏さんの供述書】

——昨年（昭和二十六年）の暮ごろのことでした。私が夜勤から帰つたとき、夜中の十二時すぎだつたと思います。稲垣君が妻の枕元に坐りタバコを吸つており、妻は床の中に寝ていました。そばに薬袋や水のみがあり、稲垣君は私に「小母さんが病気で、貴方が留守だつたから私が看病してあげていた」といつて「じや私はもう帰らしてもらいます」と帰つて行きました。

私は夜中のことでもあり、ちよつとおかしいと思つて妻に「ちかごろ稲垣君の出入するのがちよつと多いようだが」と念を押しましたら、妻は「私を信じて下さい。稲垣さんはたゞ遊びに来るだけで、決してそんな疑われるような点はありません。そんなにいうのなら、これから稲垣さんと呼んで来て二人の前で尋ねて下されば判るし、それに今後は稲垣さんにもうちへ出入してもらわんように誓つてもらいます」とまでいゝますので、私は妻のいうことを信じたのであります。

私は、あんな事件を起すまで、二人が深い仲になつていたというところが、どう考えても想像できません。二、三回ぐらいの関係はあつたかも知れませんが。

一方、稲垣君はP村の北川さんとの仲のことを私たち夫婦から

懇々と意見と申しますか注意してやつたこともあり、また家庭的にもいろいろ悩みがあつて、あれやこれや悲観の結果、美奈江を殺したのではないかと思うのであります。

——ともかく私と美奈江との仲は、夫婦愛も他人からうらやまれているくらい仲よく、美奈江は私に対し絶対的に愛してくれたから、私も信じ妻を愛しておつたのであります。だから稲垣君の申される点は、どうしても私として、信じられないのであります——。

5、お好み焼は苦かつた

すくなくとも悲劇を食いとめるチャンスはあつたのだ。それほどまで妻を盲愛していたから、破局を防げなかつたともいえる。ところが、姦通の準現場ともいふべきものを目撃していながら、深くセンサクもしてみなかつたのは、たしかに夫のミスではある。——この間に、愛する妻は仇し男と、不倫の終点へのコースを急速度で突進して行つた。稲垣の告白を、つゞけてみよう。

【L裁判長あて稲垣邦二の上申書】（つづき）

——その翌日の夜、美奈江さんと逢つたとき、美奈江さんは、「クスリが手に入つたか」と尋ねましたので、「なか／＼手に入らない」と申しましたら、少し考えるようにして「Hさんに頼めば必ず手に入るから、私がいつたとはいわずに頼んで入手するよ」に」と教えてくれましたので、翌日Hさんのところへ行きました。（注、以下青酸カリ入手のいきさつは工員Hの供述書通りに

つき省略)

青酸カリを持つて美奈江さんのもとへ行こうとしましたが、これで私は死ぬんではないかと思ひ、私には借金がありましたので両親あてに手紙(注、公判での陳述によれば、借金の明細書と、「生命あやふし。万一のときは後を頼む。御両親様お許し下さい親不孝な邦二より」という内容)を書いて、美奈江さん宅へ行つたのであります。

美奈江さんに、粉にした青酸カリを全部渡しましたら、「きょうは頭痛がする」といつてアスピリンを飲み、その空紙で青酸カリを半分つゝみ、残りの半分を私に渡しました。私が「いつ死ぬの」ときゝますと、美奈江さんは「あすにする。騒々しい昼より静かな夜の方がいい」と申しますので、翌日の夜ということになったのであります。美奈江さんは「一ばん下の子供を道連れにする」と申しますので、私は「そんな可哀想なこととはできない」といつて少し口論しましたが「もし貴方の子だつたらどうする?」といつて、なか／＼きいてくれませんでした。

(中略)

その夜七時すぎ、約束してあつたB町のSパチンコ店で落ち合いました。しばらく二人でパチンコをやつてから、B公園の方へ行きました。ところが途中で美奈江さんが「なにか買つて来てくれ」と申しましたので、お好み焼と美奈江さんの好物のヨーカンを買つてきました。

B公園で美奈江さんは、「本当に覚悟しているのか」といゝましたので「もちろん覚悟している。僕を信じないのか」と申しましたら「絶対にそんなことはないが、いまこゝに薬を持っていな

いから、一度家に帰つて出直して来よう」といゝました。私は、家に帰れば必ず子供を連れて来るに決つていふと思ひ、ポケットから薬を出しましたら、美奈江さんはしばらく黙つていましたが「貴方はやつぱり私を信じていてくれなかつたのね。それじゃ早く」といゝましたので、二つのお好み焼の中へ入れました。美奈江さんはその一つを取つて、私のいうことを書いてくれと申し、「まゝならぬ。好いて好かれ」とまではきゝとれましたが、私も死を直前にして興奮していたため、落着いて書く勇氣がなく、紙と万年筆を投げ出して、一しよにそのお好み焼を食べ始めたのであります。

一口食べたなら、鉄くさくて非常に苦かつたので思わずはき出してしまいました。美奈江さんがノドに手を当てゝのみこんでいましたので、私も一気に食べようと思ひ、残り全部を口の中へ入れました。美奈江さんが私のからだへしがみついて来ましたので、びつくりしてそのまゝ医者へ走つて行つたのです。

そして眠りから覚め、警察の方が私を連れて外へ出ようとしたら、美奈江さんの主人が見えまして、私に、「叩き殺してやる」といつて飛びかゝつて来ました。やつと警察の方が取押えてくれましたのでほつとしました。だがそのことがあつてから、私はその恐ろしさを一途に思いこむようになり、警察で二度目の調べのとき、「お前が殺したんだらう」といわれて、どうせ生き残つていても叩き殺されるんだという恐怖心と、人を殺せば死刑になるのだからこのさい死刑になつて死んだ方が幸せだと思ひ、心にもないことを申上げてしまつたのであります。

今さらながら死んだ美奈江さんがうちやましく、どうにでもな

れという気持になつて、「殺したんだろう」という言葉の出るのを待つて、「ハイそうです」といつてしまつたのでありますが、以上申上げましたことが、嘘も隠しもない、実際の真実であります。

美奈江さんの冥福を祈り続けるかたわら、立派な人間に更生いたしたいと思つております故、裁判長様におかれましては、どうか御寛大なる処置をお願いいたします。

殺したのではない、あくまでも心中するつもりだつたのだと主張する若い被告。しかし、それはどうあろうと、少くとも彼のために妻を奪われた夫が、母を取られた子が残されているのは事実だ。夫の、いや父としての悲痛な声はこう叫んでいる。

【岡崎勇蔵さんの供述書】(つづき)

——私には十三才を頭に四人の子供があります。あゝして美奈江は殺されてしまい、現在私は職も定つておらず、四人の子供を抱えてこれから先、どんなにしてやつて行くのか、考えますと本当に胸がいっぱいになります。あれからというもの、私は四人の子供たちをながめるたびに、あゝ妻がおつたらなと思いますと、子供が可哀想で、夜もろく／＼眠れません。しかし、なんと申してももはや美奈江は仏になつてゐるのです。思いなおして、その冥福を祈るよりほかありません。

6、スサまじ女の獨占慾

この事件に対して、A地方裁判所は昭和二十七年十月、法の

裁きとしてつぎのように宣告した。

【裁判長の判決文】

(主文) 被告人、稲垣邦二を懲役六年に処する。

(理由) 被告人は、生来おとなしく真面目で、また世の荒波を知らない純真な青年だつたが……美奈江と知り合い、同家に入居するようになってからは、かねて夫勇蔵の病弱に性的不満を感じていた美奈江の注目の対象となり、容貌の尋常で純情一途の被告に多大の興味を覚えた美奈江より他の青年たちと違つた特別な待遇を受けたばかりでなく、美奈江の煽情的な姿態とともに、これまで未知の世界である男女色情に関するワイ談や、ワイセツな絵画等を示されるに及んで、異常な刺激興奮を覚え、にわかになつた情動的関心から自制的能力を失い、ついに満十七才にして初めて美奈江と情交関係を結んだ。

いらいセキを切つた奔流の如く、性的悦楽を追う情熱的感情にかられ、主人勇蔵にかくれて不倫な関係を続け、一時友人の忠告をいれて一時美奈江との交渉を絶つてはいたが、またもや再燃し主人勇蔵の不在勝なのを機会として、しば／＼美奈江との性的悦楽にふけつていた。

……美奈江の紹介により北川はるみと相知り、文通を重ねるうち、いつしかはるみに愛情を感じるに至り、やがて相愛の情をこめた手紙を取交わすに至つてからは、自然と美奈江に対する熱情も冷め勝ちとなり、ようやく美奈江の不満を買うようになり……美奈江から、はるみとの交際を絶つてくれとの再三にわたる要求も柳に風と受け流し、はるみとの交際を続けていたため、いたく

美奈江の独占欲を傷け、その嫉妬の情をますますかきたてた結果……逢うたびに、はるみのことから激しい口説をくり返されたのであるが、被告はこうした美奈江のしつような態度や欲情に閉口し、あまつさえ美奈江の脅迫的な言辭をきくに及んで、いつしか恐怖心を抱くに至り、この上は美奈江との関係を一日も早く清算しようと考えたこともあり……場合によつては美奈江より心中を迫られ、自殺のやむなき事態が起るかも知れぬと思い、遺書（前出）をしたため、半ば覚悟を決めたものゝ、死に対する恐怖感から心中の動揺はいかんともし難かつた。

……ついに美奈江を殺害する以外に清算の途なしと決意し……友人Hより青酸カリを入手し……B町Sパチンコ店で美奈江と密会……お好み焼を買い求め……B公園記念塔附近で並んで腰を下し、美奈江に対し「今後ははるみとの交際を絶つから、二人で仲直りにお好み焼を食べよう」と、ひそかにそのお好み焼一箇にかねて用意の青酸カリ全量を塗布混入し「さあ仲直りだ、食べよう」といつて、これを美奈江にすゝめ、美奈江をしてこれを食べさせ間もなくその場で美奈江を青酸中毒により毒殺し、もつて殺害の目的を遂げたものである。

右の事實は、①被告人に対する檢察官作成の供述調書。②証人……の当公判廷における各供述。③（⑩略）を総合してこれを認めることができる。

法律に照らすに、被告人の判示所為は刑法第九十九条に該当するから、所定刑中有期懲役刑を選択して、その刑期範囲内において処断すべきところであるが、被告人に対してはいかなる程度の刑を量定して、これに臨むべきかにつき考察するに……思慮経

験に乏しく、ことに感受性の一段と強く心の動揺の激しかるべき思春期において、人妻であり性的経験の豊かな中年婦人の美奈江より、その性慾の対象に選ばれ、性的技巧のともなう誘惑から、判示のごとく思慮分別を超えた情痴の世界に沈溺するに至つたことは、未熟な青年の常として、一般に陥つた過程であるとはいふながら、これがすべて被告人の不幸を招く大きな原因ともなつたのであつて、しかも人妻との不倫関係であるという反道義的な性質にとりまがう行動の秘密的傾向から、自ずと養われて行つた卑屈性や懐疑性の影響を受けて、漸次被告人は自主自律的な氣風を失ひ、道義的良心も薄くなつて……思い余つた被告人はついに本件犯行を犯すに至つたもので、まことに同情を禁じえないものである。

その責任は、ひとり被告人にのみこれを負わしめるのは甚だ酷であつて、一半の責任は被害者である美奈江の恣意的な欲情から被告人の純真を傷け、また春秋に富む前途ある被告人をして、この重要な罪を犯さしめるに至つた美奈江自身にも科せられるべきものではあるが、また一面、被告人の選んだ犯行の手段や美奈江亡きあとに残された家族に対する重大な影響、その他諸般の事情を考慮するとき、必ずしも軽々に取扱ふことは妥当でなく、被告人に対しては懲役六年の刑をもつて臨むを相当とし……よつて主文のとおり判決する。

（氏名はすべて仮名）

邪魔者は消される

「ナッソーのふとつちよ殺し」と呼ばれた此の犯罪は、まだ成年に満たない少女が「おじさま」と自由に遊びたいと云うだけで犯したものであつた……



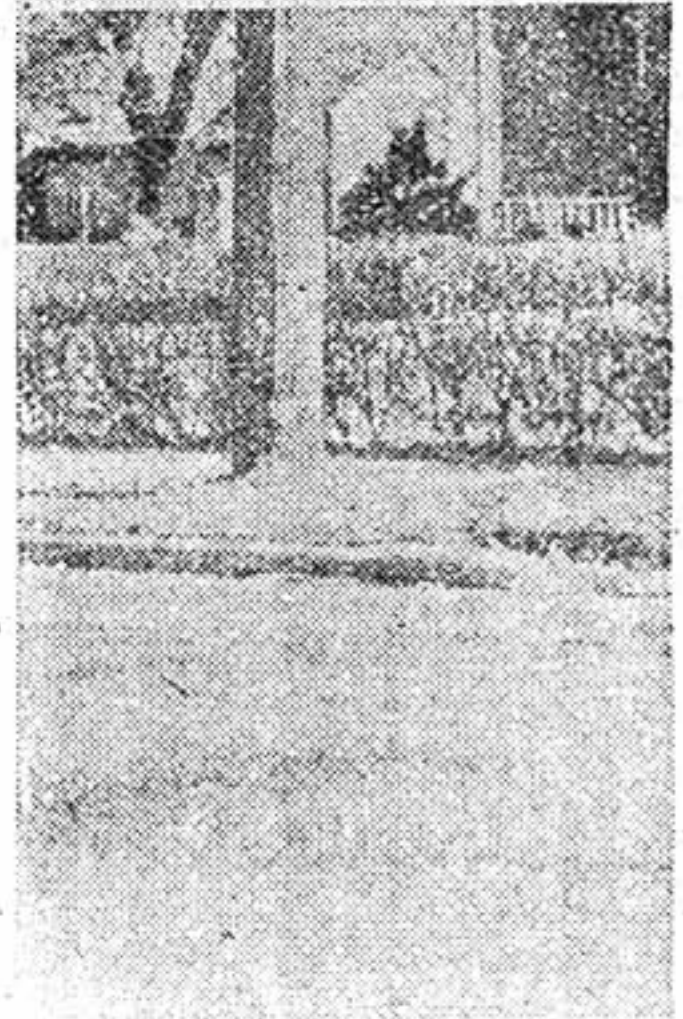
結城 惣

奇怪な七人家族

性犯罪というものは、元来肉体的なものだから、食物その他の関係からいつても、肉食主義の日本人は到底毛唐には敵わない。外国の性犯罪史をくりひろげてみると、その質からいつてもポリウムからいつても、とても対抗できないような物凄いやつにぶつかる。尤も日本にも小平とか平沢（これは性犯罪ではないが）というような世界的水準の人物が現れるようになったことは困つたものであるが……。

さてアメリカの性犯罪で、性的且つ動物的な点でナンバー・ワンといわれているのを一つ紹介しよう。これは世界性犯罪のうちでも有名なやつなのだが、戦前は日本人はこの方面に関心がなかつたし、敗戦後は大いに興味をもつた

少女ルスと事件のあつた クレートン邸



三人家族である。

両家合せて七人の家族は表面上、仲よくやつていたようだったが、こゝに周囲から奇異の眼で見られていたことは、アップルゲート夫人のアダ、この女が物凄い大女であつたことは先に述べたが、前任者の、クレートン夫人マーゴ

が、またアダにも劣らない大女だつた。背はむしろアダよりも高く、横幅も広い。恐らく目方はアダよりもあるかも知れない。

何しろ一家族が住むのもやつとくらしいの狭まな家の中に、蟒のような巨大な大女が二人、朝晩鼻を突き合わせてくらしているのだ。想像しただけでも不吉な感じのする情景ではないか。

死んだアップルゲート夫人の主治医ザビン氏が、取調べの係官に語つたところによると夫人は前から肥満病患者であつたが、特にどこが悪いということもなかつた。ところが十日ぐらい前の九月十八日に、突然電話がかつたので、往つてみると、夫人は激しい嘔吐に襲われていた。医師は診療の結果、膀胱炎と胃瘻瘻の処方にあたえたが、二日たつても夫人の嘔吐がおさまる様子がないので、医師

が、占領政策でガッチリおさえられて、アメリカさんのお気に召さないことは発表困難な時代だつたから、活字になる機会がなかつた。

事件のおこつたのは一九三六年の九月、ニューヨーク州の小都会バルドウィン市で、この都会のあるナッソーという地区は、たとえば東京に対する浦和とか平塚といったような関係にあたり、ニューヨーク市に通勤する人が多数に住んでいる地方だ。そこでこの事件は「ナッソーの肥満女殺し」とよばれる。

アメリカ東海岸特有の、輝くように晴れたつた九月二十八日の朝だ。ナッソー地区警察署へ、バルドウィン市の在郷軍人会支部長みたいなことをしているアップルゲートという人の夫人アダという女が、昨日急死したと

いう届があつた。

このアダという女は身長は普通だが、目方が二百六十九ポンド、つまり三十二三貫もあるというさながら横綱鏡里みたいな大女で、町でも評判の婦人だつたから、警察でも注意を払つて、町のうわさをしらべると、どうやら死因に臭いところがある。そこでキング署長が部下に命じて本格的な調査を行うと次のようなことがわかつた。

バルドウィン市の郊外に、瀟洒なバンガロー式の二階建、そこにクレートンという会社員の一家が住んでいた。夫婦とルスという十四才の娘と十一才のジョンの四人家族だつたが、そこへどういふ関係からか昨年の末から前期のアップルゲートの一家が同居することになつたのだ。夫婦と十二才の娘アグネスの

は病人を入院させてみた。するとすぐ薬の効めが現れて嘔吐が止まつたから、四日目に退院させた。ところが奇妙なことは、夫人は退院して家へ帰ると忽ち、前と同じ激烈な嘔吐が初まつた。病院にいた時と同じ手当が行われたのに、夫人の病氣は、すこしもよくならず、女レスラーのような体格の夫人は、日に衰弱していった。そして退院後四日目の二十七日の朝、突然、夫のアップルゲート氏から電話がかゝつて来た。

『先生、すぐ来てください。妻が死んだようです！』

ザビン医師が取るものも取りあえず駆けつけてみると、夫人は一個の大きな骸となつてベッドに横たわつていた……。

『お話をうかがうと、非常に疑問の点が多いのですが、あなたはそれについて何の手續きも取らず、死亡診断書を書いてやられたのですな』

キング署長に詰問されてザビン医師は頭から恐縮した。

『何分、主人のアップルゲート氏が、死者を切斷することは神に対する冒瀆だと主張するものですから……』

『アダ夫人の食事や薬餌の世話をしたのは誰

ですか』

『それはクレイトン夫人です』

署長は郡検事のリットルトン氏と協議した結果、アップルゲートとクレイトン夫妻を召喚することにした。

夜寝る方法

深夜午前一時頃、リットルトン検事とキング署長の待つてゐる部屋の前の廊下に足音がして、刑事に導かれて三人の男女が入つて来た。

死んだ女の夫であるエヴァレット・アップルゲートは、五十という年齢にも似ず、中肉中背のしなやかな身体つきをした、ビロードのような柔かい頭髮と、すべ／＼した青白い皮膚を持つた酒落た中年男に見えた。

一方のジョンクレイトン氏はガッシリした色の黒い平凡な四十ぐらいの男で、知らないものは、彼の方を在郷軍人会支部長と間違えたかも知れない。

係官達の眼を聳立たせたのは、クレイトン夫人のマーゴで、前にもいつたように三十六七の氣味の悪い大女で、特長は彼女の二つの眼だつた。それは大きくて、真つ黒で、断固とした光を放つていた。こんな眼をもつた女

はどんな犠牲を払つても、自分の意志を通さずにはおかぬ性格に違ひない。

三人の男女は、ある時は三人一緒に、時には一人ずつ、という風にして慎重な取調べを受けたが、取調べの進行につれて、この一軒の家に住む二つの家族のまことに奇怪な夜寝る時の習慣が明らかにされて、検事も署長もびつくりして眼を丸くしてしまつた。

三人の説明によると、彼等の家の一階に二つの寢室があつたが、これをクレイトン夫婦とアップルゲート夫婦が一室ずつ使用してゐた。そして二階の一つしかない寢室には、クレイトンの娘のルスとアップルゲートの娘アグネスが眠り、ジョン少年はボーチの隣の部屋を寢室にしていた。

こんなぐあいでは、二家族の共同生活は一年ぐらい無事に続いたのだが、今年の五月のこゝと、クレイトン家へ夫婦づれの泊まりの客があつた。そこでクレイトン夫婦は、お客に自分たちの寢室を譲つて、自分たちは二階の娘たちの寢室を使用したのだつたが、そこで娘たちはどうしたかという、アップルゲートの娘のアグネスは、弟のジョンの寝ているボーチの隣の部屋、これは不思議はないとしてクレイトンの娘の十四才何ヶ月になる少女ル

スが、普通なら両親と同じ二階の寝室で寝たらよさそうなもののに、変なことには、他人のアップルゲート夫婦の部屋で一夜を明したのである。

そしてその一夜以来、ルスはいつもアップルゲート夫婦と同じ部屋に寝る習慣になった。絹糸のような柔かい髪の毛とすべ／＼した顔のおじさんと、象みたいに肥つたおばさんと、そして十五才の少女三人は、何のことはない、仲のいい『床友達』というわけである。この習慣は今も続いている。

これは放任しておいてもよい習慣ということとはできないのじやなかろうか、というリットルトン検事の疑問に対し、父親のクレートン氏は、ちよつと肩をすくめて、『娘に別に変つたこともおきなかつたようですよがね』

と云つたきりだつたし、母親のマーゴ夫人は、能面のような無表情な、顔の皺一つ動かさず、

『ルスはたつた十五才の少女ですよ』

そして、中年色男の在郷軍人会支部長は、口辺に輕蔑するような微笑を浮かべて、『私は、あの娘が自分の子のように可愛いのです。失礼ながら、御訊ねの意味がわかりか

ねますが……』

と上品な紳士的態度で、検事をたしなめた。

アダ夫人の死体剖見の報告が検事のところへ届いたのは、朝の四時頃であつた。

それは警察が予想したとおりのもので、死者の肝臓と胃袋から大量の——四十人の人間を一時に殺せるほどの——砒素が発見されたというのであつた。

そこで、検事と署長は、アップルゲート氏とクレートン氏は警察へ残しておき、クレートン夫人一人だけつれて、問題の家の実地検証を行うことにした。

リットルトン検事は、心に期することがあつたので、特にたのんで、心理学者のホフマン博士を同

行して行つた。

發育しすぎた少女

検事がマーゴ夫人に、ルスに会いたい、という、夫人は冷ややかに頷いて、二階へ声

ハクレートン夫妻



をかけた。

睡そうな女の子の声が聞えて、やがてドアの開く音がしたので、一同が待ちかまえてみると、階段の上の方から、スリッパを穿いたしなやかな素足が現れ、やがて絹パジャマの上にナイトガウンをかけた一人の女が彼等の前に立つた。

これが十四才何ヶ月の少女？

検事たちは、ギョッとして眼と眼を見合せちよつとの間、口が利けなかつた。

何という奇怪に發育した少女であろう。長いのび／＼した手足、盛りあがつている胸、張ち切れそうな腰部、唇が厚くて真紅で、眼に蕩けるような光があつた。

妖艶なお化けのような少女をひと目見て、検事たちは、あの奇妙な「床友達」の秘密が初めてわかつたような気がしたのである。

彼女の歩く調子、笑う表情、小首を傾げてこちらを視る様子、それらは何ひとつとして十四才何ヶ月の少女と、絹糸のような頭髪をもつた五十男との間の性的交渉を物語っていないものはなかつた。

検事と署長が、マーゴ夫人の案内で、家内をあるき回っている間に、別室でホフマン博士とルスとの問答がはじまつた。

『ルス、あなたは、アッピー（アップルゲートの愛称）がとても好きらしいんですね。あなたは度々、キスしたんでしょう』

やさしく微笑みながら、博士は吊り出してゆく。この「度々」が曲者なのだが、身体だけは一人前以上でも、十四才の少女の頭脳はそんなに細かく働かない。

『え、度々キスしましたわ』

『口と口とのキスでしょう』

『そうよ』

『あなたはアッピーと寝ることが、好きだった？』

少女は無言で肯いたが、パッと頬が赭くなつた。博士は急いで、

『ああ、それでいゝのです』同情をこめた調子で『私はお医者だから、あなたは何でも私にしやべつていゝのですよ』

と少女の警戒心を解いておいて、何気ない調子で、

『アッピーと初めてねたのはいつ？』

『ねるつて……？』

と女は呟くように云う。

『男と女と二人だけで遊ぶことさ。悪くないものだよ』

『四ヶ月ぐらい前だつたかしら……』

『あたたがアッピーたちの寝室で寝るようになつてからだね。最初の晩から……？』

ルスは無言で頷いた。

『あなたは、どんなぐあいにして寝ていたの？ アッピーとおばさんとの間に？』

『いゝえ、おばさんの横、おばさんが真中です』

『すると、アッピーと遊ぶ時はどうするのだろう？』

『あたたち、おばさんが睡つてしまふまで待つことにしていました。おばさんが眠つてしまふと、アッピーの側へゆくんです』

少女は安心したか、漸くすらくと話した。

『でも、ルス、私は何だかあなたの言葉が信じられないよ。だつて、アッピーはもう五十近い、立派な大人だし、あなたはまだ十四か十五の小さい女の子だろう。そんな二人が、あんなこと出来るものか知ら、二人で遊んだだけだろう』

ルスは、すこし赤い顔をして笑いながら、首を横に振つた。

アップルゲートは最初の夜妻の熟睡を見すまし、ルスを抱いて二時間以上もペッティングし続けたことがわかつた。博士は話題を切

り替えた。

『お婆さんは、何も気がつかなかった？』

『二三度眼を醒ましていたように思ったことがあつたけど、何も云いませんでしたわ』

身体は象のように大きかつたが、心は弱く小さかつたアダ夫人は、同じベッドに戯れる夫と少女を、涙を吞んでがまんしていたのであろう。

『あなたのお母さんは、何も知らないんだらうね？』

『お母さんも知っています』

この答には、ホフマン博士も、思わず顔色を変えた。

『お母さんが知つてた？ あなたが話したの？』

『……あたし、知らないわ』

『知らない？ それはどういう意味なのかね』

誰か、そのことをお母さんに話すか、それとも、あなたが話すか

しなければ、判りつこないじゃないか……』

『……』

『矢張り話したね？』

博士の鋭い追及に少女は思い切つたように



顔を上げて話した。

『いゝえ、昼間、寝室でアッピーと、遊んでいました時、お母さんが入つて来て見られてしまつたのです』

『その時、お母さんは何も、云わなかつたの？』

『えゝ、黙つて出ていつたきり、その後何も云いませんでした。そんなこと二三度、ありました』

ホフマン博士は無言で頷いた。

鬼哭愁々

クレイトン夫人が、リットルトン検事の前へ呼び出されたのはその翌日のことであつた。

『クレイトン夫人、あなたは、いつからアップルゲート氏と、性的関係を結ぶようになったのですかそれを是非とも詳しくお聞きしたいのですが』

<アップルゲート>

検事は最初に一撃を加えておいて、じつと夫人の顔色をうかがつたのだが、夫人の能面のような青白い顔には何の表情も

浮かばなかつた。しばらくして単調な声で、

『あの人たちの家族が私たちと一緒に暮すようになったから間もなくでした。ある日、わたしが病気で寝ておりますところへ、外から帰つて来たアッピーが入つて来まして、ベッドの側に立つて、気分いゝか、などと聞いていましたが、そのうちに毛布をまくつて入つて来たのです。そしてわたしを抱きしめながら、接吻しました。それでわたくしは彼の自由になりました。わたくしはアッピーが好きだつたのです』

それはまるでお経でも読むような感動のない調子だつたので、検事は心が寒くなるような感じがした。

『アップルゲートがあなたの娘ルスと関係するようになったてから、やはり続けていたのでしょうか？』

『非常に、度数がすくなく、なりましてけど……』

『どちらが求めたのですか？』

『多くの場合、わたしから求めました』

『クレイトン夫人、あなたは、ルスがアップルゲートと結婚するようになればよい、と考えはしませんでしたか』

『……』

『それはルスが父のない子を生むことを恐れたからですか、それとも、アップルゲートを永久に失いたくなかったからですか？』

『両方の心持ちがありました』

夫人は相変らず機械的な声で呟くように答えた。

ある夜、アップルゲートとクレイトン夫人とルスと三人だけが居間にいた。

アップルゲートは、現在の母親の目の前で、少女を接吻し、ルスはそうされながら、アップルゲートの首に両腕を巻き、夢うつつのような声を出した。

まもなくルスは、乱れた髪を掻きあげながら寝室へ去った。

アップルゲートは、その後姿を見送りながら、

『あの娘には勝てん……』

と満足げに呟いた。

クレイトン夫人が、冷やかすように、

『アッピー、あの子と結婚なさい』

『したいのは山々だが、あの女相模がね』

『砒素を嚙ませるんですよ』

『砒素を？……』

アップルゲートが眼を丸くして夫人の顔を視詰めた。夫人は冷たく頷いてみせて、

『たつた一服でおしまいよ』

『だが、電気椅子も気が利かないからな』

と男は考えこむような調子で云った。

『誰にもわかりやしませんよ、あの薬は証拠が残らないんです』

『君は経験があるからな』そういつて男はニヤリと笑った。

クレイトン夫人の兄が、彼女と暮しているうちに原因不明の死を遂げ、多少の保険金が妹のクレイトン夫人の手に入つたということがあつた。そのために夫人は毒殺嫌疑で取調べを受けたが、結局証拠がないままに釈放された。アップルゲートはそのことを指していつたのである。

しかし、クレイトン夫人はせゝら笑つて云つた。

『そんなこと、どうでもいいですよ』

アップルゲートは、夫人の顔をじつと視ていたが、臆て静かに彼女の方へ身を寄せていつた。

夫人が腕をのばして、アップルゲートのしな／＼した頭髪を撫ではじめた。

クレイトン夫人のこの自白に対し、アップルゲート氏は、断固として身に憶えがないと

いつて、突つ張つた。彼は、猿のように、高い声で叫び立て、

『友人の妻と娘とを犯したことは事実だが、自分の女房は殺さなかつた』と主張し続けた。

しかし陪審は、そうは信じなかつた。

エヴァレット・アップルトンとマーゴ・クレイトンは死刑の判決を言い渡された。

一九三七年一月二十五日、その巨軀を純黒な衣裳でまとつたマーゴ・クレイトン夫人はやはり断固たるきびしい眼をしたまゝ、左右を教悔師と女看守にまもられて、シン・シン刑務所の一号電気室へ入つていつた。

同じ時刻に、別の廊下を、すべてを諦めた弱々しい微笑を浮かべてアップルトン氏が二号電気室へ歩いて行つた。

十四娘の愛人であつた中年紳士の魅力などは、もうどこにもなく、そこには、死へむかつてとぼ／＼歩いてゆく憔悴し切つた一人の五十男がいるだけであつた。

五分後、刑務所中の電気は一時に明滅し、二つの薄汚ない魂が、雲の上へ飛び去つたのである。

(終)

風裏隨筆 流窓筆



三つ巴合戦

磯貝純

(詩人)



朝山健吉は長野県のさる中学の先生をしていました。数学の専門で、二十七才の独身者なか／＼の美男子で、人柄もよく、女の生徒たちにも大へん人気がありました。近頃の桃色教師のように、生徒たちを誘惑するといふ悪業もなく、同僚の女教師との色事もなくお固いで通っていました。

人口六万のその町に遊廓めいた一角もないワケではないのですが、商売柄そんな所へ出入するとすぐに生徒か父兄にバレてしまうので、その方の所業もつつしんでいました。よ

ほど女気が恋しくなると、下宿のすぐ近くの「狸茶屋」というおでん屋へ入り、そこのお主ちゃんという東京帰りの二十二才の娘のお酌で、一二本の地酒をのみ、なにくれと東京の話などして、ようやく酔を散じて、下宿へ帰りあとはひとり寝るばかりと言う、実に模範的な生活を送っていました。勿論、半年に一度ぐらいはワザ／＼汽車に二時間もゆられて、N市へ出かけて、さる古い遊女町の一家に沈没し、自分の男性の力を試み、かつは浩然の気を養うことはあつたのですが……。

所がこの先生、ある年の三月のことです。四月の新学期に毎年ゆく三年生の修学旅行の下見分に、東京へ出張する役があたりました。例の相模湖の事件以来、学校もうんと慎重になつて、生徒のゆくコースを机上のプランだけでなく、予めそつくり廻つておくことになつたのです。

三月末、朝山先生は、何となく大きい期待に胸おどらせながら、学校から支給された旅費の外に、貰つたばかりのサラリーの半分ばかりを懐中に、下見旅行の旅に出ました。道中は緊張して何のことはなかつたのですが、最後の夜は、予定の宿、上野の不忍池のほとりのY館に泊つて流石にホツとしました。それと同時に、何やら物足りず、遊び心がフツフツと沸いてきたのです。

宿での夕食は軽く切りあげて、十二時ごろまで映画にゆくと称して、ぶらりと宿を出ました。その辺に映画館もあり、多少、盛り場めいた商店街もあります。アメヤ横町と呼ばれる昔の闇アメの間屋街のあたりをふと曲ると、「狸茶屋」という懐かしい名のおでん屋がありました。先生は急に寄つてみたくなつて吸いこまれました。

ガンモ、豆腐、竹輪、大根などが、型の如

くうまそうに煮えています。先生はそれを皿に二つ三つもらつて酒をのみ出しました。余りつよくない先生は二本目が空になる頃には、ちよいと御機嫌になつていました。

——先生、もう一本おつけしましょうか。マダムが如才なくききます。

——ウム、もう一本貰おう、しかし、おれがどうして先生なんだい？

——それや、分りますワ、一見、先生タイプの美男子……。

その時、今まで片隅にいて、つつましくおでんで御飯でも喰べていた女の子が、クスリと笑いました。それがソモ／＼縁の始まりだったのです。

笑い顔に気がついて、先生がチラとその方を見ると、これは二十才ぐらいの仲々の可愛い女性です。一見、デパートの女店員風と見えますか、先生の顔をまじ／＼と見て、瞳で笑いかけてきました。それが先生の酔い心に快いシゲキとなつて迫つてきました。

——よう、あなたもそう思いますか、お嬢さん……

——えエ、私も先生だと思いますワ、まず田舎の高等学校の英語の先生……

——そうか、有難う、お察しの通りで、一

つ今夜はゆかいに飲みたいですね、お食事を止めて一つどうですか。

テナところから、朝山先生、旅の気易さから柄にもなく、見知らぬ女とお酒をのみだしたのでです。そんな間にも、先生は、この可憐な女性が恋人でもあつたら、どんなに嬉しいだろう、とそんなこともチラと考えて、下腹のあたりに妖しき気配を感じたりしました。

そして二十分ほどしていると、

——マアちゃん、お待どうさん、ともう一人の二つ三つ上の女性が入つてきた。察する所その女性の友人が同僚らしい。そこで型の如く紹介があつて、さらに三人で二三本の酒をあけた。おでん屋のことだから、お勘定も安く、千円札でお釣をもらつて、表へ出る頃には、三人とも相当に酔が廻つて、早春の夜気も快く、何となく人生がたのしくなるアノ瞬間の気持になつていたのです。

朝山先生は女の子二人を、両手に引具してふらり／＼と街を歩きながら、久々に握る若い女の子の柔かな掌の感触に、大いに春情を誘発されると共に、二人の女性じや、仕方がない、せめて一人ずつなら、何とか行きずりの恋のチャンスもあるかも知れないのにと、ちよいと残念な気もした。

しかし、右をみても左をみても、仲々にミメよくしかも上品な、この二人の女性も捨てかねて、握つている掌に力を入れたり、ゆるめたりしながら、次第に肉体へのノスタルジィを深めていつたのです。

——ねエ先生、どこへいらつしやるの？突然に若い方の女がいたずらつぽく訊いた。

——どこということもないがね。

——ねエ、先生、どこか遊びにゆきたいンでしよ、吉原とか、何とか……

無邪気な女の子の口から、急にそんな台詞がとび出して、先生はびつくりして握つていた手を放した。そして、

——キミたちは何でも知つているンだね。と答えた言葉が吉原行の希望を肯定した形になつた。

——ねエ、そんならあんな所ゆくの、バカバカしいから私たちでいい所へ案内してあげる。先生二千円もつてる？

とたたみかけてくるのであつた。そこまできると先生も度胸が坐つてきて、じや、案内してくれ、と言うことになつて、二人に抱えられるようにしてタクシーに乗せられた。

(あとで朝山先生の述懐によると、何しろ女性二人いつしよだし、二人とも負けずおと

らず美しいので、最後まで、遊ぶ相手がこの二人だとは思ひもよらなかつた、と言うのである。(懐中にはまだ小遣の方が全然手つかずで残っているし、少々の冒険は覚悟で彼女に導かれた由)

所が車で十五分ぐらいで下されて見ると、そこは素人風のよい宿屋で、部屋へ通ると、すぐ風呂場へ案内された。湯に浸つてみると先刻の二人が一条もまとわぬヌードで、笑いながら入つてきたので、先生はすっかり驚いたという。しかも二人はマメ／＼しく石鹸をつけて、前後からキレイに洗つてくれるのである。その態度が誠に嬉々としていて、これから愉しむ玩具を清掃しているような感じ。

そして部屋へかえると、布団が三つ敷かれて居り、先生はここよ、と示されたのが真中の布団、先生スツカリ恐縮してもじ／＼してゐると、電気消すわね、とどちらかがスイッチをひねつたらしく、部屋はくらくなつたが、ガラス戸越しに、外から向いのネオンが美しく明滅して、ちよつと煽情的な部屋の雰囲気となつた。

男一人に、女二人、ハテどうしたものか、とすくんでいると、お姉さま、あたしの方が先よ、とか何とか言つて、つつと若い方の女

が、豊満なからだを朝山先生の床の中へ這りこませてきた。

これからあとのことは詳しく書くワケにゆかぬが、朝山先生の話によると、それは誠に妖しくも珍しい女身曼陀羅であり、入れ交りたち代り、二人の女性に責められたそうだと。アワヤという所までゆくと、さつと一方が退



き、また新しい方が唇をよせてくる。そして一方が衰えると、また一人が柔かな手をのばしてくる。

これを浅ましい地獄絵図と観ずる人もあるかも知れないが、まことは、美しい天女の乱舞でありました。と朝山先生は、次第に闇に目がなれてくるにつれて、ネオンの光でハッ

キリと網膜にやきつけられた彼女たちの美しい姿態をいまも思い起すらしいのです。

それをたしかめたい方は、上野の狸茶屋へゆくことです。或は狸にだまされるかも知れませんが、朝山先生の当夜の支出は、女の子二人に千円ずつ、ドヤ代千円、夜中に三人でたべた生玉子二ケずつで百五十円、そして朝食代一人分三百円、と聞けばそんなに高くなく、一晩ぐらいただまされてみたい人もあるかも知れませぬ。

朝になつたら聞いてやろうと思つていた彼女たちの勤め先は、翌朝、九時ごろ先生がハッとして眼をさました時は、もう彼女二人は帰つてしまつて居らず、布団もきれいに片づけてあつたということですから、勿論アドレスも名前も分らず仕舞なのだそうです。やつぱり狸の仕業なのでしょう。

その話をきいた筆者が、その道の物知りになつてみたら、「それは朝山先生が、多少潤色している。本当は新橋のあたりの話でないか。ダブル・パンといつて、新橋に出没したということはいかぬけれど」と言うことでした。東京はひろい所で、そういう素人が本当にアルバイトするのも知れませぬ。それにしても二人組というのは珍らしいですね。



お色気拜見

西条 凡兒

(漫談家)

「こんな話がおまんのやが」

住宅ね、住む家だ我々人間の、何とかならんのかいな。政府が替りよるたんびに、住宅建設計画やちゆうて、なんやもの／＼しい発表しよるが、公営住宅に当つて入つとる人は何十人に一人や。わいはその間に腹五六辺当つたわ、三十円の握り寿司喰うて。

出来んのなら、言わなえ、ちゆねん、空手形ばつかり振り廻して大小屋もたゝんわ。

ついでこないだだ。公開録音の合間みて、南海高島屋の七階で開いとる「明るい生活展」ちゆのん見に行つた。

明るい筈や、後援しとるのがナシヨナルで、電化生活の宣伝や、いかれとる、見に行つたアホは。

えらい人だつしえ、へえ。三十五万から二百万まで色々取り揃えてございます。御遠慮なく御申込み下さいてパンフレットに書いた

アる。御遠慮するがな、パン買いに来とるんやあれへん、家だつしえ。ま、わいはえいしやから文句はないが、一般庶民大衆は泣いとるわ、六階で特価品の大売出しやつとつて、七階で二百万の家売つとる。根性悪しとるよなもんや。

家が狭いと暑い、嫌や、四畳半の部屋に六人寝起きしとる。一人半立つて寝とるカンジヨ一や。

うちの近所にとろ／＼馬小舎改造して這入つた人がある。朝逢うたら挨拶がえゝ、「ヒーンお元気だつか」馬やがな。笑いごつちやおまへんで。

狭いとどないしても無理が起る。夜が問題や、どないせえちゆうねん。

わいの友人にNHKの声優しとる奴がいてまんのやが、月二万円足らずの月給で、一日に六本も放送しとる、こいつも一寸アホや。

それで六年働いて、今だに安アパートに住んどる。おまけにお爺ちやんとお婆ちやんが一緒、老人夫婦が二畳の間で、若夫婦が四畳の板の間や。カマボコやがな。

こいつのお婆ちやん、今年七十になるのやが至つて元気や、わいの話を聞いて、明るい生活展のこ／＼観に行つた。嫁はんは手ひかれだつせ。

ところがお婆さん、家も一生懸命見とつたが、そのうちどないしたんか、キヨロ／＼キヨロ／＼しとる。

「お婆ちやん、何キヨロ／＼したはりますねん」

嫁はん気になるさかい訊きよつた。

「えゝのがないなア……………」

「何がです、家だつか、アイロンだつか？」

「ちがうがな、若い男のえゝのんやがな」

嫁はん阿呆らしなつて帰つて来よつた。

その晩のことだ。三十七度八分、日本記録の猛暑だ。死にたいわ。

布団かぶつたら殺されてまいそうな暑さや。十二時過ぎても婆さん寝られへん、隣で爺さん大きなイビキかいとる。

「お爺さん、お爺さん、あんたよう眠れまんア」

「シッ！ちよつとも寝とれへん、たぬきやつとるだけや」

お爺さんイビキかきもつて大きな眼開けとる。

「嫌なお爺さん」

骨筋の間をキュッ！とつねりよつた。

「痛い！……ヒステリー婆さんにも困つたもんや、さ、早よイビキかいた〜」

「阿呆らしい、こんな暑いのに寝られまつかいな」

「そやけど、若夫婦おとなしゆうしとるやないか」

「そうやおまへん、これから初まるんだつせ」

「そやから儂等は気きかして眠つてやらにやア可哀想や」

お婆さん昼間見て来た明るい生活展のこと思い出しよつた。

「ねええ、お爺さん」

「うるさい婆さんやのう、要求は何や」

「今日ね、嫁と明るい生活展見て来ましたんやが、三十五万で家が建ちまつせ、お爺さん、退職金の残りで家建てとくなはれ」

「退職金はガンオケ買う位しか残つとらへん、儂やもう何んにもようたてん」

「情けないこつちや、悪い亭主持つたら一生の不作や」

「そら儂の言うこつちや」

と思つたが、お爺さんつねられるのが嫌やさかいに眠つぶつてしまひよつた。

四、五分経つて、そろ〜若夫婦が行動を起しかけよつた。



「ねええ、あなた、こんな狭いアパートでわたし神経衰弱になるわ、何とかしてよ」

「僕も同感や、そやけど、凡児みたいに僕はい、い、いやないさかい、今、急にどないもならん」

「だつてえ、神経使つてたら、少しもいいことないわ」

「僕も同感や」

「切ないわア」

若夫婦の手は遠慮しいしい動いとる。

「イ、ヤッ！」

「大きな声出すなよ、お爺さんらに聞こえるやないか」

「でも、声おさえてたら一寸も気分が出えへんわ」

「そらそうやろ、お前も元はと云えば、声優やさかいな、パントマイムの方はあんまり得意やないさかい」

アホが汗かきもつて洒落とる。哀しいわ。婆さん天井睨みもつて若夫婦の会話を一生懸命に聞いとる。女の悪い癖や、死ぬ迄なおらん。

そのうち、新妻の方が、鼻声になつて来よつた。

「ねええ、あんた今日はどないしたん、あかんやないの」

「放送が六本もあつたさかい、疲れとんねん」

「嘘、六本もやて」

「痛い、そないきつうつねるなや、お婆さんみたいやで」

お婆さん吃驚しよつた。悪い遺伝や。

「ねええ、わたし待てないわ」
「無理云うなよ、今夜はあかん」
「いや！ お爺さんもお婆さんも眠つてく
れてはるさかい、今のうちやわ」
お爺さんイビキかきもつて大きな眼開けよ
つた。

「わたし、そちらへ行つてもいい？」

「それが……」

「あんた、外で浮気したんと違う、こない
だから、私を避けてばつかりいやはるやない
の」

痴話喧嘩や、家が、狭いさかい、丸聞こえ
や。

「そない言うたかて、あかんもんはあかん
がな」

「口惜しい！」

「痛い！」

えらいことになりよつた。

隣の部屋で二人の成行をきいとつたお婆さ
ん、

「息子も、よそでたてんかて、家でたてい
くれりやアえゝのに」

「ほな今日はこのへんで」

凡児敬白



ちん友記

高梨久

(NHK声優)

泣きよる慟哭ちうやつ。

旅の楽屋で派手に儀式をやらかしよる。そ
ばにいてる我々が辛抱出来ん。布団持つて舞
台へ避難や。

K君、諸国行脚の甲斐あつて、芸は大成せ
なんだが、特大の今の女房見つけよつた。

このKが新婚旅行に出かけた。

図体の割に気の小さいK、夜がどん／＼更
けて行くのによう要求しよらん。

花嫁も布団の中でどうやら震えとる様子。

覚悟を決めて枕もとのスタンドを消した。

息子の奴が「お父ちゃんガンバッテェ！」
と叫んどる。

Kの奴、やおら花嫁の方へ……その瞬間、

「何しやはんのん、いやらしい！」

その途端、Kの奴、一生一代の名セリフを
吐きよつた。

「あのう……ほ……僕、向う側へ行こうと

思て、そんで側を通さしてもらいましてん”
K、述べ懐しとつた。その瞬間の僕のアレな
ア、面目ないゆうて、小つこつなつとつたで
え”
ほんまかいな。

× × ×

P君は目下、NJBやABCで語り手とし
て大活躍している、二枚目の優男である。
此奴が社長令嬢にぞつこん惚れられた。
おきまり新婚旅行より一足お先に実物の下
見にP君彼女を怪し気な所へ連れて行きよつ
た。本番前のテストとは此の事。

”ねえ芳子さん、かまわないでしょうか”

”あら?”

”あなたと一緒に僕……”

”御不浄?”

”御不浄?!”

これやから深窓の処女はしんどい。

Pの奴、今はこれ迄と、手をとつた。

いきなり力一杯抱きしめた。

”あら! いやッ、いやッ! そんなこと、お

母アちゃんに叱られる……”

死にたいわ、これやからお嬢さんは困る。

物凄い力で抵抗しよる。許しよらん、Pもカ
ンニン袋の緒が切れた。

いきなりお嬢さんの頬つぺたをバチッ!
と殴りよつた。

正式に婚約した相手をどない思もてるの
や、と延々一時間半にわたつて、説教しよつ
た。語り手はお手のもんや。

お嬢さん、彼の名セリフに、遂にそれなら
と、Pの腕の中へ。



一回、二回、三回、キスは数が多い程、
本番でよろしい。

五回目のキス、開始となつた。お嬢さん、
又、猛烈にレジスタントを開始しよつた。

Pの奴、訳が判らん、四回許して、なんで
五回目がいかなのや、念には念を入れと言う
ことがある、お婆ちゃん言うよつた。

”キミは訳の分らん女やなア”

”……でも、あたし……あんまり……”

”あんまりどないしたんや?……”

”五回も……。あたしいつたい何人赤ちや

ん産んだらえ、のんか、怖わなりましてん”

あ、この事実を、石原慎太郎君に聞かせ
てやりたい、美談は夜つくられる。

× × ×

プロデューサーの大友、此の男が露出狂や。
酔うと定期的に一物をチンレッツしよる。

バーのカマトト女給共、大友のチンレッツが

始まると、見て見ん振しとる。

チンレッツする勇気持つてるだけに、実に堂

々としとつて、髭はやしとる。

”いややわア……Oさん! もうえ、さか

いしもうときなはれ……”

マダムが客の手前たしなめよつた。

大友真面目な顔で

”マダム、水臭いこと言いなや、あんたに

子が出来たら、こいつはお父ちゃんになるね

ん、親子の対面、PTAの会員や、は、は、

、、”そこらじゆうでの会員や。

無邪気なものである。

人生はチン友ありて楽し、私など彼等に匹
敵する何物もない、チン黙あるのみである。



七月一日(日、雨)——税務署に見せるためと、もう一つ本当の事を書くためとの、二冊の帳簿を用意する商人の、周到な心がまえが、今日ほど、つくづくと理解される日はない。

六月の日記のおわりの頁に、暗号を用いて、K子とのデートの回数や、感想を記しておいたら、その横に赤インキで『知らぬは女房ばかりなり……ね』と、註書きがしてあつた。あきらかに女房の字である。畜生と思つたが、咎め立てすりや、ヤブヘビになるから、さつそく、二重帳簿を、つまり二重の日記をつくる事にした。然し面倒くさいだろうな。

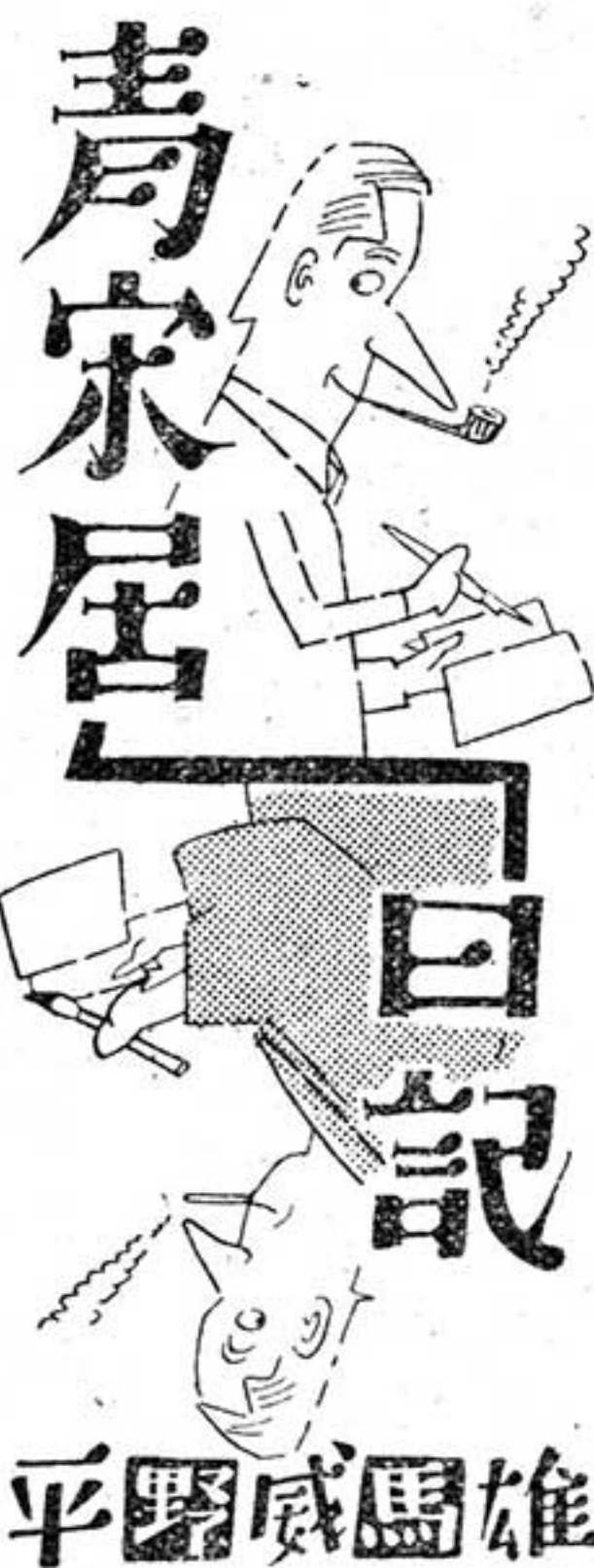
内外タイムスや観光新聞にでてある御休憩所の広告で、手頃な料金の奴を切りぬいておいたが、それも、いつの間にか、紙入れの中から抜かれていた。

御休憩四〇〇円より、御泊八〇

〇円より……が多い。だが、ここにトリックがあるようだ。恋人をもつてみなければ実感の来ない事柄だが、この御休憩四〇〇円よりというのに、秘密があるのだ。何時間が四〇〇円なのか、わからないのだ。よし、明日は、K子とリンドンで落ち合う約束だから、た

というのに細の単衣では寒いくらいだ。午前中、「裏窓」の編集部にゆく。青宋居日記を渡したが、『少し固すぎる。平野さんらしく、底抜けに面白いのがほしい』と、突返された。尻パア(スリ用語でズボンのポケットのこと)に、原稿をつ、こんで『では、七

那服姿が、婉然と微笑み、くちなしの花のように、ほつかりと白く香つていた。八等身の彼女は、ぼくとならんで歩くには少し背が高すぎて、こつちがワリを食う。彼女は二十才の聰明な近代女性だ。だからぼくとのデートには決してハイヒールを用いない。



めしてみよう。ロマンス・グレイは、決して女性に、ゆへ行こうと誘わないのが本領だ……とかなんとか、気のきいた事を書きながらぼくのしていることは、自分ながら、一寸眉唾である。

七月二日(月、晴)——七月だ

月号から書き直し、うんと面白い事だけを書きましよう』と、酒屋か、乾物屋の御用聞きみたいに、万事引きうけて辞去。その足でデパートの場所、リンドンにかけつける。完全冷房なので、絹では寒すぎる。薄暗いソファに、K子の支

今朝まとめてとどいた二三日分の内外タイムスから手頃なのを切りぬいて、もつてきた。即ち、「余り安くて気の毒な、之で良いのか、増築完成ホテル八福」「緑の森静かなお部屋、伽羅の香りゆかしく……お風呂場のついた本当の離れ家……」「雨も好し……風情をこめて……さわやかな憩いのひとときを……みそらホテル」などなどである。さすがに、いきなり出してみせるほどの猛勇はない。「また、二人つきりにならないか?」と切り出した。

「え、……でも……今日は六時までに帰るつてお母さんに云つてきましたの」

品物は包装を美しく、結び紐の目は固く……である。なかなか解けないように……モーパッサンの恋のテクニクである。

「じゃ、手近かなところをえらんでみよう」

K子は心の底を見透すような目で、じつとぼくをみつめる。コーヒーテーブルの上に、ホテル広告の切り抜きが六七枚ならんだ。

とゞのつまり、レッドウイングという、新造語ができた。レッドは質、ウイングは羽である。だから赤羽である。二人は雨にぬれながら、赤羽駅から十分ほど歩いた。

「ただ話をするだけ……お茶をのみながら……それだけそれ以上のことは、考えていない」、どもりく云いわけをする。

「先生を信じていますわ」

そして、閉静を売りもののホテルの玄関に立つ。二十才の乙女はとたんに大胆になつた。「少し休ませてちょうだい」K子がさつさと交渉する。「彼女ハジメテじゃないのかな？」と疑念がわいてき



るのである。とたんに、「太陽の季節」を感じた。巧まざるティーンエージャーの愛の仕草……といったものを。この日記が又、女房に見つかつたら、一騒動だ……と之を書きながら当惑した。何か云われたら、



た。ハジメテであれ！ という権利がぼくに、あるわけでもないのに。……万事のみこみ顔の女中の案内でK子がさきに立つて廊下を通る。

……キスをしながら、イヤイヤ……をするみたいに、或は廻転式扇風機みたいに、顔を左右にふ

「そんなことをいち／＼咎め立てられた日にや、原稿なんか書けやしねえや。小説が、いちいち本当だつたら、体がいくつあつたつて足りるものか」……そうだこれがいい。そうだ……こう云えばいい。

さて……肝腎の問題になる。ベ

ッドにならんでねころび、「君の作品は、二十才の女の子が書いたと思えないくらいマセてるし、人生を知つてる……おどろいたよ」というような会話とベゼーで三時間経つてしまった。

御休憩四百円とあるから、三時間、いくら位かしらと、すこしビク／＼しながら、「御会計してちょうだい」と、K子に云わせた。ら、「はい、六百円でございます」と女中がお盆に紙きれをのせて出した。ほつとした。してみると四百円、という規準は、ワカラナイ。

「単位がとれたわけよ」と、K子がにこ／＼しながら説明する。二三年前高校を出たばかりの彼女はデートの代償にも単位本位のチャージをする。

よし、こんどは、もうすこし、料金のアイマイなところへいつてみよう——こうなると、デートが

主なのか、やゝこしいお勘定に興をひかれてゐるのか、われながら変な気がする。

七月三日(火、晴と曇)——朝食の卓で、長男のさとしが「今日とはとても面白い事があるんです」と、にこ／＼している。話をきくと、これも一寸した太陽の季節である。男女共学なのでとても交際が自由で、お互いに秘密や心配を打ちあけて助け合うなどなく、よろしいが、昨日学校の昼休みにS子という女の子が「だれか一緒についてきてくれない?」と云い出した。「どこへ? 何のために?」とみんなが好奇心から口々に問う。「昨日の事なのよ」とその女の子は語り出した。有楽町の駅に立つていたら、五十才前後のおじさんがそばによつてきて「お嬢さんは高校生でしょ? 何年?」と、きく、から「三年です」というと、「うちにもあなたと同じ位

の娘がいたのですが、数年前になつて……」と淋しそうな顔でしやべり出し、「その辺まで一しよに歩いて下さい」という。S子は「ええ」と何の気もなくその中老紳士と肩をならべて歩いた。紳士は心から嬉しそうでなく／＼帰ろうとしない。銀座の森永にはいり



アイスクリームや何かとつてくれたり「時々会つて下さい」と云つたりした。之が今ハヤリのロマンスグレーというのかしらとS子は心の中で領いた。やがてあたりが薄暗くなつた……「映画でも見ましょうか」とさそう。「いゝえ、

早くかえらないと、うちで心配しますから」と断わると、じや、明日、学校がひけて、かえりにぜひもう一度一緒に歩いて下さい……と老紳士は真剣にたのむ。「え、」とS子は時間を約束した……というのである。この話にすつかり興をそゝられた同級の男子学生た



ちは、「そいつは面白ええや、Sちやんの警衛をしてやろうじやねえか……どんな事がもちあがるか……見ものだぜ」ということになつた。「そのかわり佐藤が今日は、みんなにおごるつていうんです……」

さとしは、とても楽しそうに報告するのだつた。

「あまり、おとなしい老人をいじめるんじゃないぞ……見てみないふりをして、遠くからついていくんだぞ……」ぼくは、その善良な紳士が、可哀そうになつてきたので、よく、注意しておいた。

晩食までにさとしは、帰つてきた。

「どうした? 尾行したのか?」まつてましたとばかり、報告をうながした。

「はたして、そのおつさん、有楽町のホームにしょんぼり立つていたんです」と、さとしは、ごくりと水をのみながら、はじめた。

要するに、古ぼけた中折帽のりボンには汗のしみが白く塩をふいていて、見るからに貧弱な五十男であつたという。「とつてもロマンス・グレーなんてんじゃないんです。よつぽど、うれしかつたと

みえて、佐藤の姿をみると、ていねいに帽子をとつて、おじぎをしましたよ。そうしたら、グレーどころか、ロマンスハゲなんです」そして、さとしは他の三人のクラスメートと、四人で、見えがくれに、二人のあとをつけていった。

時々、佐藤とし子は、うしろをふりむき、いたずらそうに、片目をつぶつたり、こつくりしてみせたりする。老紳士は、そんな事とは露知らず、約束通りきてくれた美しい女子高校生の出現に、老いの夕靄が一時にまぶしい日の光に照らし出されたような感激を抱いていたにちがいない。今の学生はおそろしいと思つた。いゝ年のおつさんを逆にアヤツルのだから。

「くたびれちやつた……歩きも歩いたり、何をするというのでもなく、銀座の裏通りを二三回往復したり、一寸立ちどまつて、何か云つたかと思うと、和光のうらの映

画館の前に立ちどまつて、しきりに、中へはいろうといつていゝらしいんです。見たら、ちようと太陽の季節をやつてました。あとをつけるのも楽しやありません。佐藤とし子だつて、きつとずい分くたびれたでしょう。その中に、



が、とつても、もつたない気がして、あれがぼくたちのテーブルににこばれていたらなあ……と、ためいきをつきました」

「で、結局どうなつたのさ？ まだつづくのか？」ぼくは、めんどくさくなつたし、ますます、その

月ヶ瀬に入りました。佐藤のやつ、いつもとつてもよくたべるく

老紳士が、かあいそうであつたくなつてきたので、いゝかげんで

「もし、その老人みたいな人が、うちのお父さんだつたらどうしよう……と、ぼくは心配してたんですよ」

せに、そのおつさんがいゝんなものをつとてくれたのに、下をむいたまま手をつけようとしませんです。ぼくたちは、すぐ横のテーブルに陣取つて、看視していたんですが、佐藤が何にもたべないの

打ち切つてもらいたかつた。さても、今時の高校生はおそろしい！ その老人は、涙を流して喜び又会つて下さいと手を合わせんばかりに頼んだが、佐藤とし子、

「バッキヤロー！」と、おもわず、ぼくはどなつた。が、すぐそのあとからこんなことを想像してゾッとした。つまり、ぼくだつて、省線にのるたびに、かならず一寸した恋をすることになつてゐる。

駿河大納言秘帳(由起の章)

岩 堀 泰 三
秋 吉 戀 鬼・畫



白い猿と女

盛り上る厚いくれないやみどりの葉裏にしじまの籠る山街道を、忠長は愛馬「勝山」に一鞭当て、いつきに速駆けてきた。

相洲底食温泉に遊ぶ直前、病を得た父秀忠の状態が悪化するにつれ、忠長の周りにもぶ気味な暗雲が低迷してきた。兄家光を間にして、反忠長派の春月局、酒井、土井、阿部、松平など幕閣の連中が勢力を張ってきたからである。忠長の重臣たちが、この機会に、彼と兄の不和を緩和しよう、父の見舞いに彼を江戸に入らせようとしても許さない。逆に幕府から『郷は乱心の



病勢日々募らせ給うとの事、専一に御養生あるべし』と伝えてくる始末だつた。

だが、忠長は押寄せてくるそれらの「何か」を恐れなかつた。たとえ津波の勢いを持つ運命の「死の手」であつても、たゞ待つ間の苛立たい反撥を感じるだけだつた。

今も彼は、沈んだ黒の手に怯える周りの顔が辛抱なりかねて、そつと城を抜出てきた。行くての大気を突抜け疾駆しているさなかに、最近の彼は、たまらないもの淋しさを感じることがしばしばある。人多勢の満ちる匂いのぶん／＼する中で、孤愁を感じるあれだ。そんな時、憧憬のように浮かぶのが利音の顔だつた。数多くの知つた女の中でなぜ彼女だけが想われるのか？

『殿は仇きです。憎みます。おいのちを、きつといたゞきます。だから、だから殿は、利音のために、それまでは生きて下さい』

檻の中に裸形のまま投げ込まれた由起!! 猿どもは彼女をとり囲んで齒をむいた……

いひ

る。

と、利音が彼に書残して姿を消した女だからだろうか? ……とにかく、あの女は余の欲しいものだけで、余に対してい

浅間山中の茶店に馬を止めると、彼を領主とは気付かぬ老爺の出した渋茶をすゝつた。そしてまだ、甘い汁の舌にとけるような想念を噛みしめていた。

老爺が焼栗を皿に盛つてきた。

忠長は栗をとる彼の手許を物欲しげにみつめている、五、六才の童に気付いて「孫か?」と訊いた。

老爺は「はい／＼」とさも恐縮げに答えて、童を追いたてるようなしぐさになりながら、反対に眼が自然に笑えてくるようすであった。

「あつちへいつて遊んでこ。お前にも、後で焼いてやるでな」
「参れ、これをとらそう」

忠長は童を招いて、まだ掌に熱い焼栗を掴んで与えた。両掌に栗を受けると、びよこんと頭を下げて、童は山街道に飛出した。そして、道のへにつないだ「勝山」の尻にそろ／＼近寄つては、馬が尾をふるとあわててぼんと跳び退つたりして遊びはじめた。百姓風の男が二人通りかゝつて、茶店の前で立止まると老爺に挨拶代りのようにいつた。

「爺つあん、あしたはいよく祭りじやが、景気はどうやな」
「悪かろう、山は今年も不景氣じやで」

「ほんにこう年々お猿さまが増えてはな」

「山里じやみかんも柿も栗も無収穫じや。なんでも芋畑に出よるてよ此頃は」

「わしらの毬子在では田を踏荒されたわい」

百姓たちも老爺も、そこで急に話やめた。

「お猿の本家が来たかな」と呟く声に忠長は山街道を跳めた。そして思わず眼を見張った。娘と猿が仲良げに並んであるいてくるのを発見したからである。

娘は桂姿にめ覚めるようにはでな被衣をきていた。眉も目も尻が多少釣上りぎみながら、美貌ではあつた。猿は白い毛並みの大きな奴だつた。そして娘と猿を守護するように五、六人の屈強な若者が続いていた。一行は、老爺や村人たちの、会釈もしらぬげに行過ぎた。

その時、栗を喰べながら遊んでいた童が、突然恐怖の叫びを上げた。白猿が飛びついて童の手から焼栗を奪つたのである。童の泣声に飛出した老爺は、童を抱え寄せた。

「栗のお代は、後程とりにおいで」

娘は冷めたくいとうと、爺のぺこ／＼するのに、もう一瞥も与えずに歩るきだした。

「待て、女」

忠長はつか／＼と娘の側に歩み寄つた。

「この畜生はそちのものか？」

娘は刺すような眼で忠長をみた。

「お判りにならないのですか、浅間の神猿です。わたしは神官平田孝磨の娘由起です。」

「猿の女房ではなかつたのか？」

「御無礼な。おみかけしましたところ、御身分ありげな御武家と存じればこそ名乗りましたに……他国のお方ならお教え致します。浅間の御社は駿遠の守神、その御使いの猿は神獣として、御領主さまさえ、何事にあれ、無礼とがめはなさらぬならわしですぞ」

「忠長が、猿めをとがめぬとてか」

彼の白皙な面上に皮肉な殺氣が走つた。と、敏感な畜生の本能からそれを悟つたのだらう白猿が、いきなり焼栗を忠長に投げつけてキキッと危怪な叫びを上げた。だが、それより早く冷めたい「露割り」の裸身が空を走つた。くえッ！と白猿は、地上高く一間ほど跳び上つて一廻転するとどつと落ちた。そして、白い美事な毛並みが、みる／＼真ッ赤に染まつた。

「由起と申したな。猿めの代は、そちがきつと忠長が許にとりに参れよ」

果然と立ち尽す娘や供の若者、村人、老爺たちの視線を背に、彼は「勝山」の手綱をとつて鞭をあてると駆け去つた。

神樂を舞う女

それから三日、忠長は白猿の事も神官の娘の事も全く忘れていたが、何かでひよいと思ひ出すと、急に興味がわいて、また「勝山」に鞭を当てる。小姓頭清水八右衛門と太刀持小姓の山岡主殿正の二人が従つた。

祭礼の最終日で、浅間神社の宏い境内では神樂舞が行われていた。社屋正面の階に舞台が組まれていて、見物衆が集つていた。忍びの忠長は群集から離れた小高い丘に坐つた。舞台では巫子の持ち振る



矛がきら／＼と篝火に映えていた。巫子は悪鬼にでも襲われたのかしだいに力弱るしぐさになった。と、ほの暗い御社の奥から大猿が現われて巫子に加勢して舞出すと、また巫子が勢いを盛りかえした。笛、太鼓が急調子になるにつれ、巫子と猿が狂喜したように踊り猛った。

猿は白毛ではなかったが、巫子はどうやらあの娘、平田由起のようだった。紅の地に金銀の花紋を散らした小袷をかけ白小袖に緋袴姿で神矛をかざす姿は異様な美しさをもっていた。ことに長々と背にたれた黒髪が女の激しい動きに乱れはねるのは心をひいた。濃く白粉をぬった顔に唇だけ紅をさしているのも、物の氣に魅せられた巫子のどこか狂ったこの場の様子に効果をみせた。

「清水、余の宿を致すよう神官に告げよ」

忠長は神楽舞台から眼を離さずに命じた。

まもなく神官たちにむかえられた忠長は、平田の家にはいつた。酒肴が運ばれ宴がはられた後、彼は臥床に案内された。彼の身の廻りの世話は、由起が相変らずケンの含んだ冷めたい顔つきでつとめていた。最後に茶菓を持つてきて、御寝遊ばしませと、畳についた娘の手首を忠長は引きよせた。

「なにをあそばされます。」

「伽を致せ。」

「そのような」と、由起はさすがに羞らいを露わに赧らんだ顔をそむけた。と、まだ障子の開けられたまゝの庭で、クキッ！と変な鳴声があった。忠長がみると、明るい月光の中で大きな箱が眼についた。格子をつかんで大猿が三四、彼をにらんで齒をむき出していた。

「何故余の側にあの檻を置きおつた。」

「はい、御身辺をお守護致しますため。人よりは、夜になるとものゝ影に敏感に騒ぎたてますから。」

「先刻踊つた猿めもいるのか。」

「はい、三匹共、まだよく馴れてはいませぬが、それにこのころは気が昂ぶつております。だから、眼馴なれぬものにはあゝして」

「なぜ猿めの気が荒みおるのじや」

「はい」と、由起は、まだ自分の手首を離さぬばかりか、肩を抱きかゝえんばかりの忠長を恐れるように隙で後ろにしさつた。

「申してみよ」

「はい、あの、殿が、一番人には馴れていました孝女猿をお手打ち遊ばしましたから」

「白猿をか？ あれは孝女と申したか。ふゝむ、すると、あの猿めらは太郎冠者、次郎冠者、三郎冠者か、そうであろうか？」

「はい」と、由起は恥かしげに可細い声になつた。その肩を、忠長は胸に抱き寄せた。由起は抗つて身悶えたが、腕はゆるまない。忠長のいきが、彼女のやわらかい耳朶に、なまあたゝかくかゝつた。

「そちたちの神さまも、すると人みなな夜を重ねていたとみえる。

それなら、斬るではなかつたぞ。なぜ申さなかつた。あの時にそちが、この神の女猿には、家に良人は待つておりますとな」

「まあそんな」

「白猿を哀れとみる忠長だ。そちに動く余の心もちがわかるであらうが、それともいやか？」

「お許し遊ばして」と、由起の懸命に立とうとする腰を折つて、忠長は臥床に引きずつた。と檻の中で猿たちがいゝゝ騒ぎだした。

格子の棒を掴んでゆする。

いつしか小袖の胸が乱れて、そこに差入れられた忠長の掌が強く乳房を驚掴みにしているのに由起は、全身から力を抜きとられるような感覚を呼び起された。特徴のある刺すような彼女の腫がやわらいた。

「障子をお閉め遊ばして」

彼女は弱々しくいつた。だが、忠長は檻の中の猿共など忘れていた。

父の愛・女の愛

城内に房つてから忠長は、改めて由起を奉公に出すよう平田孝磨に命じた。神官は喜んでお受けしたが、なか／＼実行にうつされぬまゝ、月余がすぎた。忠長は別に重ねて催促もしなかつた。というより、そんな一夜の激情など忘れていたのである。それよりも彼は父秀忠の病がいよ／＼重いのをきくとさすがにひとめあつておきたい思いにつかれた。母は三年前に死んでいたから、たとえば成人後の彼に対する思いようはどうあれ、江戸城内に暮した幼ない日々、彼を欲得なしに愛してくれた今ではただ一人の人である。だが、彼の想いに反して、江戸家老から届いた情報は意外なものだつた。

それは、秀忠が、忠長の輔弼の重臣のひとり朝倉築後守宣正を病床に呼んで「余がそちを彼が後見として保伝せしめしは、彼が行跡を諫めしめんためである。しかるに彼が狂乱暴虐の振舞多しと聞くは無念ぞ。最近も猿は江府の鎮守山王の神獸にして、駿河にても神君の信心厚き浅間神社の神獸として山にては、猿を殺すことを禁じられたりと、神官、重臣共の計めるをきかず斬殺せしとか。余が生

死の病にあれば、たとえ神獸たらずとも領内にての殺生を禁ずるが親子の情なるにその振舞い人理に背くなり。これ皆そちが罪なるぞ」と怒つて、宣正を酒井阿波守に預け罪したというのである。忠長の重臣たちは、そんな秀忠の処置を、忠長の兄家光や、その幕閣の忠長に対する心を和らげんための深い心とみて、宣正の犠牲を哀しむと共に大納言家の安泰をよろこんでいた。こんどはこれくらいですまぬぞよ、との秀忠のさすがに父らしい愛の鞭と。

だが、忠長は、全身の血が逆流するような憤満を覚えた。宣正が何をしたというのだ。余は余の意志で動いたのだ。父が余を真実愛するなら、なぜ余を江府に呼びつけて叱つてくれぬ。そう事を表面に出せば、余の駿遠五十五万石に傷がつくというのか。余は駿府もいらぬ。大納言でありたくもない。余はそれよりも、もつとじかに余を愛してくれる父の子でありたいのだ。

忠長は自分の振舞を遂一江府に知らせている間者たちの無数の顔を想像した。そんな顔のいくつかが彼に仕え、彼の碌を食んでいる中にもあるのだろう。ばかな、誰が白猿のことなどまで……と、彼は、神官平田孝磨の狡猾そうな顔が思い浮かんだ。そして、檻の中

で忠長に自分がさされているさまに狂声をたてる猿に、障子をお閉めになつてと熱っぽい調子でいくたびを懇願した由起の顔までが笑っているように想われた。

「お捨てにならないで」

と、確かに終りには、彼の背にツメをたてるようにすがりついた由起がいるのだ。

忠長は小性頭の清水に命じて由起を迎えにやつた。だが、清水はたゞ神官からの嘆願だけをもつてかえつた。それは、浅間神社の神猿を馴育する困難を訴え、その名手として、の由起の手腕をたゞえ



を、それゆえ、由起のお心は光榮身に余るものがあるけれども、当分彼女に代る神楽舞の巫子役とその相手の神猿を馴らすものゝみつかるまで、ご猶予をというのであつた。

あの冷めたい顔を赧らめ汗ばまして、熱く女体を燃やしても、そのすべてが嘘だというのだ。それが、愛の破片も証らかにしないのを忠長は承知していたが、それでも、欲しいなにかゝあつたのだ。あまりに由起の顔だちが非常から情熱へと激しく移り変つたから、まさかそれさえ嘘だつたとは思われなかつたのである。

「女め！ 忠長に仕えるよりは、猿の愛を受けようとぬかししたかッ！」

彼は、立ち上ると、大声で狩の用意を命じた。浅間山の山々、谷々の猿を一匹残らず狩取るのだという。驚いて重役たちが必死にとめると、忠長はいつた。

「父が天下のための兄の邪魔になる忠長を狩ろうとなさるうちに、余が領内の民百姓のために、山の幸、野の幸を荒しおる猿を狩るのがなぜ悪い。それほどの申開きを江府でできぬおのれらかッ！」

忠長は駿府勢数万の勢子を揃えた。彼自身が狩装束に身を固め、重藤の弓のゆずかをにぎり、護田鳥の矢を負い、露割りゝに尻おはかせ帯取つけ腰に釣り、勝山ゝに銀梨子に葵の金紋散らした鞍においてまたがつた。浅間山麓の本陣に落着くと、彼は勢子共に下知した。

「忠長は駿遠の領主なり。この山猿が神なりとも、余が命に背くべきや、容赦なく狩立てい生獲も射殺すもそゝの數に應じて略賞をもらすぞ！」

「うわアッ！ うわアッ！」

と浅間山の山は谷は時ならぬ歡声が木霊した。まるで深い森の中に千木を反らす御社を狙つて数万の軍勢が鯨波をあげるように。

猿の檻と女

この日、夕陽が燃える頃は浅間山が猿共の血で真赤に染められたかに見えた。獲物数は千二百四十余頭と記録に残っている。夜に到ると本陣の庭は赤赫と松明や篝火に照り映えて昼もあざむくばかりだつた。そこに大きな檻がしつらえられて、狩られ追われ、恐怖と飢えに狂つた大猿共が、血走つた眼と白い歯をむきだして猛いまわつていた。

忠長は床机に腰をかけ、眼前に彼の足輕共が両腕をねじり上げ引きすえた由起を眺めた。随分抗らつたのであろう髪は乱れて地を撫で、小袖は破り裂けて、あせ衣がはだけてむつちりと白い肩が露わになつていた。

「由起面を上げい！」

だが、彼女は頑固に地面をみつめていた。足輕がたまりかねたように、艶々しい彼女の頭髪をつかんで後ろにひいた。

「こらッ、殿の仰せがきこえぬのか！」

由起の頭は苦痛に曲んで、顎が反るように忠長を仰いだ。常でさえ尻上りの肩や眼がそのためにいつそうつり上つた。怨恨を籠めたように、れいの刺すような瞳である。しかし、恐怖と反抗に疲れ切つてか、蒼白な顔は透きとおるように美しかつた。一つには、常にはしている薄化粧も、また、あの舞楽舞いの厚化粧もしていないせいで、ツンと筋の通つた鼻すじは、そんな場合にもどこか非常な高慢さをみせていたが、形のいい唇だけは、意外にあどけなかつ

た。まるで少女のそれのように、ほころびはじめの花の夢を思わせ
た。

「おかしな女だ、そちは」

忠長はつぶやくようにいつた。そして、彼女の両腕や頭髪を掴ん
でいる足輕に命じた。

「離してやれい」

足輕たちが、手をはなすと、由起は、反動でがくんと前につつぶ
したが、そろそろと顔を上げた。そして、一番はじめに乱れて覗い
ている膝小僧を小袖のすそで蔽うようにした。次にはいそいで、肌
衣と小袖のえりをなおして、肩や胸前をなおした。

「そちは何才だつたな？」

由起は答えなかつた。

「こらッ、なぜ答えぬ」

と、また足輕が彼女の背を突いた。

「なんの必要があつておたずねになります」

「相変らず氣丈に理屈をいいおる」

「十七才でございます」

「忠長は、自分の女の齡をしつておきたいでな。そうであろうが
？」

忠長の室は二十才を少し越していた。だが、側女たちの中には、
十六、六才の女もいた。その誰もが由起のように固いからだを持つ
てはいない。利音も由起に似た年頃だつたが、と、彼はまたまたふ
いに思いだした。女忍者め、今頃どこで余のいのちを狙いおるか。ぎ
ゅツと歯でかみしめると弾力のあるはごたえと共に甘いしるが舌に
とけるような利音の肌を思いだした。あれもいちずなところをもつ



ていた。だがこの女のように、ただ固さだけのものではなかつた。憎しみに燃えながら愛にみ悶える情を知つていた。女のもたねばならぬ宿命の弱さに反撥しながらおぼれて行く深みをもつていた。それに、なんだ、この女は……先刻、ふつと彼の心によみがえつた由起に対する情念がすうツと崩れるのを彼は感じた。

「なぜ、由起は余の情を受けながら、城にこなんだ。捨てるなといつた言葉は嘘か？」

「由起は殿の女であつたことはございませぬ。あの時、由起はなにをいつたか覚えがございませぬが、城へ召されたいとは申しませなんだ。由起は浅間の御社に仕える巫子でございします。神々の御意をむかえるようとなさらぬ殿が、ただ怖ろしいだけでございしました」

「うぬ、だから、江府に忠長の非道を父と共に訴えおつたかッ？」

「ただ神君家康公さえお許しになつた神猿の保護を、お認めにならぬ殿の所業をお知らせ申しただけでございします」

「そちの肌を知つた男が憎いゆえではないと申すのか」

「神に仕える身だと申上げております」

「そちのいう神のために、なぜ 田圃の作物まで食い荒す猿共を保護せねばならぬのだ。そちにもそれぐらいのことはわかう。またこの山に育つたそちが、里人たちの不平を知らぬでもあるまいに」

「神のおきてのほうが尊いのです」

「ばかな、それゆえたかが白猿一匹のため、忠長のいのちを売りおつたか」

「猿は神の御使いでございします」

「うぬ！ それほど大事な猿ならば、畜生の女房になれい。白猿の身代りになつて飢えをなぐさめてやれい！」

恋愛病患者

街角の薬局へ、一人の立派な紳士が入つていつた。彼は帳場にいる女へ、いとも柔い物腰でいつた。

「御主人に逢いたいのですが。」

「これはいらつしやいませ。私がここの主人でございしますが。」

「おや、男の方はいないのですか。」

「ええ、私は二人の娘を助手に使つて、この薬局を開いております。」

「それはちよつと困りましたな。あなたでは申し上げにくいのですがな。」

「そんな事がありますものですか。薬剤師は医師と同じなのですもの。何で御相も談に応じますわ。おつしやいませ。」

「そうですか、実は私は変な病いを持つて居るのです。戀愛病とでもいいまいしょうか、一日に十度戀をして、まだそれで治つてはくれないので、絶えず新しい犠牲者を探して歩くという始末で、ほとほと困り抜いて居るのですが、肉体上の鎮靜劑はございせんかしら？」

「ちよつと御待ち下さいまし。」女薬剤師は立上つた。

「奥に行つて探してまいりましょう。」

それから約五分、奥の方で話声がしていたがやがて女主人は「お待たせ致しました。恰度間に合いましたわ。薬に相談して見ますと、一月三千フラン頂きたいとのことで、そして御使用毎に特別二百フランと申しております。」

「まあ、なんということを」

由起ははッとして、忠長の顔を見上げた。彼の切れ長な瞳が残忍にきらきら光っているのを認めると、ふと、あの夜、庭の檻で忠長と自分の所業みてから、もう、彼女が近寄っただけで騒ぎたてる三匹の猿に思い到った。あれからはその神猿は全く彼女と舞うことを忘れてばかりか、逆に彼女を捕え押しふせようとしたのである。父や他の神官たちは不思議がつたが、あの夜、障子を開けはなされていたのを知る由起だけはひそかに顔を赧らめた。また、猿は手馴れているだけに、その習性もしつていた。神猿たちが、何を目的に自分に乱暴するかも。だから、彼女はあれいらい、別の猿をかいならしていたのである。忠長の許へ行く意思も失われ、逆に憎しみだけを覚えたのも、幼ない時から抱かされていた猿に対する神秘めいた思いが、そのために崩れたからである。いわば、彼女なりに幸福の心よりどころが消えたのでて。神猿はまぼろしに化し、畜生のあさましい劣情の権化として女である彼女と対決してしまった。そんな彼女にした忠長の許にどうして行けようか？ 彼女が忠長の瞳の色に激しいおののきを感じたのも、怖れていたことをみたからである。

狂い舞い

だが、忠長は憤怒だけである。こんな非情の女を、それほど愛する猿共なら、運命を共にさしてしまえと思つたにすぎない。それでどうなるかなどは考えてもいない。

「お許し遊ばしてッ！」

突然、由起が氣も顛倒したように叫んで、忠長の膝にすがりつい

た。忠長は驚いて、床机の倒れそうになるのをやつて堪えた。彼はむしろ、由起の態度の急変したことで何かしら、それまではばくぜんとしてあつたものの正体をみきわめた。彼はふと嫉妬めいたものを感じると叫んだ。

「ならぬわッ！」

「お願いです。由起は殿の許に参ります。乱暴遊ばさないで」

「うぬ、もう遅いわ」

「いや！ いやでございます。そんな、猿などと。ああ、あの猿の檻にはおいれにならないで」

「なにがこわかうぞッ！ そちの愛する神獣と共に棲まうが！」

忠長は由起のからだを引き寄せて、小袖の腰に結すんだそえ帯を掴んだ、由起が逃げ走ろうとすを力るひかれ、彼女の倒れた上にかぶさるようによろめいた。由起のからだは、そえ帯を釣り下げられて二つに折れそうになつた。忠長はやがて、手に残つた帯を捨てた。起き上つて逃げ走ろうとする由起の小袖のえり首を掴んで彼は引戻した。

「あれッ！」と、由起は懸命に身悶えながらも、帯がなくなつてばつと開いた小袖の前をかき合せた。だが、その掌が逆に後ろに引戻されるようになると、小袖は彼女の肩からずり落ちた。

忠長はもう由起の薄紫に鳥だすきの模様がはいつた小袖を捨てて、地面にかがみちこまつた由起のはだごろもに手をかけていた。薄絹のそれは、抗う由起と引きはぐ忠長の力でびりびりと破れたちまちぼろ布のようになつた。

「ううッ！」

と、由起は地面にうつぶせになり、足をちぢめて下腹を蔽つた。

だが、すぐに忠長に髪を掴まれひき起された。

忠長はその時、れいの神官の家での夜、庭でしたぎやおツキキッキツギやおツと、いつたへんに苛立つた危怪な声をきいた。ふと、真白な、由起のからだを抱き寄せて、猿共の檻をみた。すると、大半の猿がおびえて小さく動かなくなっているのとは逆に、正面の柵棒につかまつて、らんらんとまなこを光らし、大きな歯をむきだし、ている三匹の大猿をみた。

「おお、いたな猿め！　みるがよい、由起」

「ああ、恐いッ！　由起は、どんなことでも、殿の仰せに従います。もうお許しになつて。檻へだけは入れないで！」

「そうか、そちは、知つてゐるのだな。何を怖れてゐるのか申してみよ」

「猿が、猿が……」

「よし、それ、くるがよい」

必死に忠長の腕を逃れようとあがく由起を忠長はひきずるようにして、檻のほうへあゆみよつた。

「あれッ！　お願い……お許しに……」

「ならぬ」と忠長はいつて由起のからだを家臣たちのほうへ突きやつた。

「この女を、その中へ入れい！」

狭い檻の扉が開かれると、中から猿の飛出するのをふせぐために、すぐ冷めたい槍の穂尖が突出された。そして、四、五人がかりの足軽たちの腕の中で、なおも悶える由起のからだが入れられると、又、がしんと扉がしまつた。

「あッ、殿！　助けてッ！」

と、閉まつたばかりの扉の側へ、由起は恐怖に曲みきつた顔で駆けよつた。すると、その白いからだに、たまち三匹の大猿が飛びついた。彼女の髪の毛をもつた猿が、ずるずると地面をひきずると、別の奴が、彼女の片足もつて、逆に自分のほうへひきずろうとした。他の一匹はすばやく、彼女の腹の上に跳びのつた。

「あッ、あッ、痛い！」

由起は悲鳴をあげた。そして、三匹の大猿の名らしいことを呼びたてて、

「いけません。舞うのです。それ」

などといつてみたが、大猿はキッキツとそれぞれの意志に従つて行動しようとした。そして、彼女のからだから離れたとみるまに、激しく吠え、互いに三つ巴えになるとひつかきあい、歯を剥き出し、噛みあつた。他の猿共は、そのすさまじい喧嘩に、全くおびえたようにそれぞれ檻のすみにかたよつてちちこまつていた。

「忠長さまッ！　助けて！」

開放された彼女は、もはや羞恥も忘れ、白い裸身をまともに正直にむけ、柵棒の側にかかけようと、両腕を差しのぼした。からだを横にしたり、足だけを突き出したりして、柵のすきまから出ようとかいなくあがいた。

と、急に、争つていた大猿のうちの二匹がすみに退くと、残つた一匹が、ガッガッおといった勝ほこつた声を上げた。そして背後から由起のからだにに飛びついた。

「ひいッ！」

と、由起は懸命に柵棒にしがみついた。大猿の掌がなんだか彼女の肩や胸にまわつてきてはすべつた。するどいツメでもひつかか

れたのが、すべすべした由起の肩からも、乳房からも幾すじかの血が流れた。

そのうちに猿の背後から抱えこむようにのびた腕が、由起の細々とした胴にまわった。その指先がツメをたてたのが、由起にはたえられないところだったものか、ひいッ！ と、彼女は柵を離してかがみこんだ。

「くッきいッ！」

猿はさも感情のこもった声で命じるように鳴いて、由起の頭髪をひいた。由起のからだははずると檻の奥にひかれた。髪の毛を離されると起き上つてよろめきながら逃げた。だが、のびるように立上つて後脚をのばすと、大猿は小柄な由起の背丈より高く、それで彼女の正面にまわり、さもおどかすように歯を剥き出しこぶしをふつて、なにやら吠え鳴いた。

「いけません。ネンさまいけません！」

由起が必死になつて叫ぶ。どうやらそいつはネンという名をかつては由起につけられていた様子である。だがネンさまは相変らず威圧するように歯を剥いて、前肢はふりたてた。

由起の顔は懇願の表情をとつたり、すかすような和やかさにかわつたりしたが、徒労のようだった。

「ネンさま。踊りましょう。笛が、大鼓が鳴ります。ねえ、ほれ他のキンさまもテンさまも、あんなにおとなしいのに」

だが、そのキンさまもテンさまも好んですみつこにちぢまつていゝるのではない様子だった。喧嘩に勝つたネンさまが、彼等がかつてみた忠長のように、いやあの白猿と暮したように、まず目的の終えるのを待っているのである。その証拠に二匹共、くるくる跳んで空

中でまわつたり、四脚で地面を叩き、毛をさかだて、尾を反らしてしきりに興奮のさまを示しながら叫んでいた。

大猿は、ツンと空に盛りたつた乳首に噛みついた。

「きやッ！ 痛いッ！」

由起は両足を宙にはね、腹を波打たせて、逃げようとした。両腕で懸命に猿の顔を叩いた。だが、猿の大きなからだは、くると、由起のからだをうつぶせにかえして、その下半身にかぶさるようになった。四ツ這つて逃げようとする由起の腰から後ろのむつちりした白さが見えなくなつた。

きゅッと顔を曲め、突んのめつた由起は、今一度、叫んだ。

「あッあ、殿！ た、たすけてッ！」

その時まで、狂気したように突立つて、檻の柵近くで眼を光らしていた忠長は、思わずぶるッと身を震わせた。彼は、今の由起の叫びに、それまでとはちがつた響のあるのを感じた。激しい悔いと、檻の中の理不尽な畜生に対する忿満を同時に感じた。由起の叫びとも呻きともつかぬ悲鳴が、再びきこえた。

「檻を開け！」

忠長が叫んだ。彼は「露割り」を抜いていた。足輕が、扉を開けるのもどかしげに、続いて命じた。

「猿めを一匹残らず突き殺せ！ 斬れッ！ は、はやく由起を出してやれッ！」

「うわッ！」と勢よいの聲が上ると、檻の中は猿の悲鳴と吠え猛え声で混乱した。その中を、無数の槍先き刀身が光りきらめいた。そして地面に低く失心した由起の白いからだは動かない、それはやがて忠長の腕に抱え上げられた。



世界風流夜話

戸山一彦

スエーデン篇

美しいマラール湖見物でストックホルムを訪れた観光客の中に、いかにも好色そうな中年のアメリカ紳士がおりました。これに目をつけたのは、同市一流のホテルAのボーイズユールです。早速その紳士ウェルマン氏を同ホテルの上等な部屋へ案内して、行き届いたサービルのしをやりやります。勿論、チップが目当てなのは申すまでもありません。さてその夜のことマラール湖の見物もそこ〜に済ませたウェルマン氏は、妙齡の美女を連れてホテルへ戻つてきました。ジェール君の観察するところでは彼女はどうかやう高級な夜

の姫君に間違いありません『ここで巧く立ち立ち回つておけば、たんまりチップが貰えそう』とばかり、腹を決めたジェールは、頃合いを見計つてサービスをしようと二人の部屋へやってきましたと、どうしたことかドアが半分開いていて首を伸ばすと何となかの紳士電灯も消さずにこゝをせんとと合戦の真ッ最中でありませんか、ビックリして『これは失礼!』すると後ろに声あり『こらッ!』ついでに電気を消していけッ!』

日本篇

近頃話題になつてゐるのが「老人病」で、やれ「百四十才まで生きられる」とか「人生は

六十一から」とか、老人の若返り法研究が世人の関心のマトになつてゐます。ここに或る一老人、齢は取つてもアノ道だけとは、太いに老人向き強精法を実践したおかげで、本宅の老妻は別として、二号、三号と若い女の子を囲つて、毎夜「配給」に専念しておりました。ところが、やはり寄る年波というのでしうか、新しく世話した四号さんの別宅で、その最中に血圧が上がり、以来軽い中風症状で寝たきりになつてゐました。蛇の道はへびで、御同様の好色老紳士仲間が見舞いにやつてきて、「どうだね、病氣の方は?」いや、手と足が多少不自由な程度で、

まア、身の回りのことは彼女がやつてくれるから差支えはないよ」「でも、呉々も大切にしてほしいね。一同で赤坂あたりへ繰り込めるように元氣になつてくれ、だが喋るのが大儀らしいが舌の方はどうかね……」「いや、軽かつたおかげで、シタ(下)の方は、四日に一度ぐらいなら使えるよ」

イタリヤ篇

ナボリの仲良し連中が、細君同伴でヴェスピア火山地方の温泉へ旅行しました。お人好しのモリスの細君リタは、美貌でモチ肌で、その上チト浮氣のタイプの女性なので、一行の花形的存在になつておりましたが晩餐がすみと早くも相手を見つけ散歩に出かけてしまいました。これに気づいたおせつかいのロバルドはそのアトを尾行していききました。が、当の主人モリスは悠々たるもので、ロビーで煙

草をくゆらしながら夕刊をひろげております。『君イ、大変だぜ!』とロンバルド『どうしたんだい。まゝ落ちつけよ』『これ落着いていられるかい。君の細君が若い男と歩いていったぜ』『ふうん』と、モリスは平然たるものです。『暗いところで男はリタを抱きしめようとしたんだぜ』やつと興味の出てきた様子でモリスが、『それで』と膝を乗り出してきました『ところが若い男は失敗したよ』と、安心させるようにロンバルドがいゝますと、モリス氏首をかして、『ハテ、そんなヘマをやる女房じゃないんだが、そりや人違いじゃないかね』

デンマーク篇

詩聖アンデルセンの祖国デンマークは今もなお夢と童心のゆたかな伽喃の国といった感じで「シャ・ボテ」(長靴をはいた猫)という面白い童話があるよ

うに、夜も更けて家人一同寝しずまつた頃になると、猫たちは井戸端会議を開きます。今夜も三匹の飼猫が取つておきの話をし合つていましたが、話がだんぐ下つてくるのも人間世界ばかりではないようで、ドラちゃん

「おいらはこれから長椅子のクッションの上で寝るのだが、やつぱりお嬢さんの膝の上の方が気分がいゝな」といえば、三毛子さん

「あたしはやつぱり息子さんの脚の間へもぐつて寝るわ。だつてちようど良い枕があるんですもの」すると、お嬢さんにとても可愛がられている黒猫君が

「ボクはお嬢さんの床の中に入るよ。だけど三毛子さんみたいに脚の間に、入らないよ、何故つて、いつかもぐつていつたら、奥の方にボクみたいな毛並みのヤツがちやんとひかえてい

「たんだもの」

南アフリカ篇

十字軍の昔、戦場へ赴く騎士たちは従軍中の妻の身体をおもんばかつて『貞操帯』というものを発明しましたが、文明未開のアフリカでも、原始的な貞操帯を考案したようです。

というのは、十九世紀の末、



イギリスが仕掛けた、南阿戦争の際のこと、土着兵の一人ゴラは戦線へ赴くに当つて愛妻シルの大切なかくしどころを泥で塗りこめてから出発したのでありました。

ところが、このシルは、それほ好色という訳ではありませんが赤道直下情熱のおのずから発散するところ、おまけに性的無知も手伝つて、部落の誰彼となく仲好くしてしまいました。やがて戦局は土人側に利あらず、ついに大英帝国の前に屈し、戦士たちも刀折れ矢つきで故郷へ引揚げてくることになったので、シルも夫ゴラとの固い約束を思い出し『とにかく泥で元どおりふさいでおかなくても』と、そこいらの土で一応の手当? をして待つていますと、久しぶりで帰つてきたゴラが泥の貞操帯をあらためてみて『あゝ、よく辛抱して待つてくれた。ここの泥土に草まで生えている!』

☆

☆

☆

☆

時代人情明朗小説	水上準也著	一〇〇円
あかんべえ侍		二二四円
大江戸謎草紙	九鬼紫郎著	一〇〇円
稲妻左近捕物帖		二二四円
豪快明朗小説集	並木行夫著	一二〇円
風雪剣豪伝		二二四円
舶来小咄集	王川一郎著	一〇〇円
いいわけ夫人		二二三円
秘密情報	五島勉著	一二〇円
東京租界		二二四円
性犯罪の事例と研究	井上泰宏著	一二〇円
歪められた本能		二二四円
特飲店従業婦の手記	大河内昌子著	一三〇円
素顔	(すがお)	二二四円

裏窓

第一巻・第十二号

毎月一回一日発行

定価	八十円・送料八円
印刷所	昭和三十二年十月二五日
発行所	昭和三十一年十一月一日
編集人	須磨利之
印刷所	久保藤吉
発行所	日本印刷工業株式会社
	株式会社久保書店
	東京都中野区江古田一の二三〇二
	電話・中野(38)六九八〇・一三八八
	振替口座・東京 一〇七五六番

集募稿原

◎特種ニュース・ストーリー——三十枚以内——

新聞にも出ないでうすもれてしまった色々の特種を御存知でしたら公開して下さい。

◎実話 ——二十五枚以内——

あなたが知っている事件の裏話、体験、友人から聞いた話等をお寄せ下さい。

◎私の告白 ——二十枚以内——

誰にでも秘密はあるものです。人の知らないような特異な告白を綴つたものを希望します。採用の分には稿料をお送りします。

原稿送り先 東京都中野区江古田一ノ二三〇二

久保書店内裏窓編集部宛